
永き夜の大陸 ～ 光の姫 闇の王 ～

ゆずはらしの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永き夜の大陸　　く光の姫　闇の王く

【Nコード】

N5929F

【作者名】

ゆずはらしの

【あらすじ】

魔族により支配されるアリエンテス大陸。人は力なきものとして生きる他はなかった。力が全てである魔族は、癒しのわざを持つ者を迫害した。銀の闇王と呼ばれる月牙伯爵の領。廃村に住まう少女ユーラは、癒しの手を持っていた…。

第二部を準備中。気長にお待ち下さい。

序章（前書き）

ここでは読むの専門だったのですが、「書いてみようか？」で、載せてみました。楽しんでいただければ幸いです。

序章

アリエンテス大陸。

別名を、永き夜の大陸と言う。

かつて世界は一度、滅びに瀕した。その折、それまで『人』と呼ばれていた存在は、幾つかに分かれた。すなわち、

人知を超える力である魔力を高め、それにより肉体をも変質させた魔族、

肉体はあくまで人の範疇にあるが、守護精霊の力を借り、『気』を練るにより能力を発揮する 武族、

魔獣や妖獣と融合することにより、驚異的な能力を持つようになった 半獣族、

そしていずれの変化もおこさなかった者…… 人族 である。

人を除くどの種族も、元が同じであるとは思えぬほどに変異した。

クレア・ヴィーダの海に浮かぶアリエンテス大陸は、魔の民により支配される世界である。支配階級である彼らの頂点に立つのは、闇魔族、あるいは 夜を歩む者 と呼ばれる者たちだった。総じて長命で美しいが、陽光を嫌い、夜の闇の中で生きる者たちである。彼らは大陸の各地を分割して領土とし、そこに住む者たちを支配した。その支配は時に気まぐれで、残酷だった。

武族は、この大陸に住む事を許されなかった。彼らの寿命は人族並であったが、その能力は時として、魔族に匹敵した。己が優位を揺るがしかねないこの存在を、どの魔族も許しはしなかった。彼らは追放され、あるいは狩られて殺されていった。そうして武族と呼ばれる存在はやがて、大陸の表舞台から姿を消した。わずかに残った彼らの血を引く者もまた迫害され、各地に身をひそめ、あるいはさすらう道を選んだ。

こうして大陸には、明けぬ夜の時代が続く事となった。

1・蒼き月と闇の城

闇魔族はアリエンテス大陸において、最高位に位置する存在である。彼らは多くの種族と生命の上に君臨する。

その矜持は高く、戦を好む性質ゆえに、彼らはしばしば同族同志でも争う。多くの命を巻き添えにして。

闇魔族を止められる存在はいないとされている。だがただ一種のみ、彼らが無条件に従う存在がいる。

癒し手。

聖者とも呼ばれる、治癒の力を持つ種族である。破壊にしか魔力を使えぬ闇魔族にとって、彼らは対局に位置する。

魔族の一種であるとされるが詳細は不明であり、また数が少なく、百年に一人現れれば良い方で、数百年に渡り全く現れなかった時代もあった。

今、大陸では人族のほとんどがこの存在を知らず、半獣族も、そして魔族ですら、その存在を伝説のものだと思っている。

* * *

「少しばかり変わった人の子が、領内に住み着きました」

闇と月光に満たされた蒼月闇の城。山を穿って造られたそこは、月牙一族の当主が代々、居城としてきた場所である。

そこでそう言ったのは、白男爵紫忌だった。夕闇の字を持つ男である。

「変わった？」

城のあるじであり、一族の当主でもある月牙伯爵氷玉は、磨き抜かれた銀のチェス盤に並べていた水晶の駒を動かす手を止め、そちらを見やった。

豪華な椅子に腰かける伯爵は、二十代半ばの青年の姿をしていた。長身にして優美な痩身。闇魔族の特徴である青白い肌に真紅の瞳をし、冷たく輝く銀の髪をしている。銀月の字を持ち、闇王の尊称を贈られる、大陸でも屈指の実力を持つ魔族である。

その美貌はさええとして、見た者に畏怖の思いを抱かせる。わずか百歳で父である蒼牙を倒し、爵位を継いだ。現在は三百歳ほどになる。

対する紫忌は髪の色こそ白いものの、肌は褐色、目の色は紫だった。顔だけは整っているが粗削りな印象があり、体つきもがっしりとしている。

彼は氷玉の異母弟で、人族の血を引いていた。頑健な体と長寿を持つてはいるものの、魔力はほとんど使えない。本来ならば魔族と認められるはずもない存在だが、氷玉が父親に挑戦した際、彼は兄に助力した。その功績から男爵の地位を贈られたのである。

とは言え所領を持つわけでもなく、配下の者もほとんどいない。氷玉の城に半ば住み、普段は月牙の領内をふらついている。半分が人族である為か、陽光に耐性があるのも闇魔族らしくなかった。

「まだ若い娘ですが。三年ほど前に領内に入ったようです。灰魔榎の森の側にある廃村で、薬師をして暮らしています」

紫忌は言った。

「どこから来たかはわかりません。最近は人族の難民はみな、うちを目指します。兄上はあまり無体をしませんからね。」

人族の血を引く弟を重んじてもいる。少しはましな暮らしができるかと思うわけです。

その娘も兄上の評判を聞いて、こちらに来たのでしょう。」

「そなたを重んじた覚えはないが……」

「人は見たいものを見るものです。おれがこの城にいる、それだけで期待するのですよ。」

紫忌は氷玉の側に近寄ると、チェス盤をのぞきこんだ。

「これも領民からの献上品でしょう？」

「つまらぬ」

そう言うとき氷玉は職人が技術を尽くして作ったのだらう駒を、手でなで倒した。硬質な音を立てて水晶の駒が幾つも倒れ、盤からこぼれて床に転がり落ちる。

「良くできていたではありませんか」

「だが、つまらぬ。わたしには人を使って魔力の実験をする趣味はないがな。退屈が過ぎるとやってみても良いかと思えてくる」

「評判が台無しになりますよ」

「人ごときの思惑を、なにゆえわたしが気にかねばならぬ」

紫忌は困ったような顔で、顎をなでた。

「そうですね。おれは兄上には評判の良い領主でいて欲しいんですよ。」

ちよっとした快挙じゃないですか。恐怖で統治する闇魔族の中、

領民に慕われる変な貴族つてのは」

「そなたを楽しませる為に、領主をしているわけでもないぞ」

「銀の闇王^{やみおう}の伝説に箔^{はく}がつく。ではありませんか？」

闇王 とは、アリエンテス大陸の闇魔族の中で、最も強い力を持つ者に贈られる称号である。この称号が冠される者は現在、氷玉を含めて五名しかいない。

「兄上の統治は千年は続くはず。となれば、他と違った所が多少はあった方が」

「わが治世が続かねば、そなたにも先はないゆえな」

氷玉の言葉に紫忌は苦笑した。

「もちろんです。半分は人ですからね、おれは。

兄上ぐらいなものですよ、こんなのに爵位をくれる酔狂な魔の民は。

別に欲しくもなかったですけどね。じゃあ最後まで付き合ってやるうかなって気にはなりました」

「『付き合ってやる』とは不遜であろう。そなたを選んだのはわたしだ。だが……千年の統治か。

それはそれで、つまらぬ」

盤に残った駒を形の良い長い指でつまみ上げると、氷玉はためつすがめつした。

「闇魔族の貴族というのは退屈なものだ。長く生きるわれらにとって、目新しい事はほとんどない。

戦でも起こして領土を広げる他は、する事がなくなっただけ。だがもう、わたしに楯突く手頃な貴族はいなくなっただけ」

物憂げに言うと、彼は片手を握りしめた。微かな音を立て、水晶の駒が碎ける。

「雪華伯も彩子爵も不甲斐ない。もう少しねばれば良いものを、あつさりと倒されて」

指を開くと、先ほどまでは駒だったものが砂と化していた。それをさらさらと盤上にこぼすと、氷玉は自らの手で滅ぼした一族の当主の名を口にした。紫忌が眉を上げる。

「彼らに倒されたかったように聞こえますよ、兄上」

「己より弱い者に倒されるなど、わが矜持にかけてあり得ぬ。つまらぬ。誰かわたしに挑む者はおらぬのか」

「難しいと思いますが。この辺り一帯は、月牙の所領になりましたし。後は紅の闇王配下の貴族ぐらいしか」

「紅蓮一侯か。あれとは事を起こせぬ。まだ」

「まだ……という事は、いつかは戦をなさるおつもりで」

「二千年を生きる侯だ。それなりに楽しめる。さぞ心踊る戦運びをしてくれるだろう」

氷玉は微笑んだ。口調には、楽しい遊びについて語っているかのような響きがあった。紫忌は呆れた顔になった。

「つくづくおれは、半分人で良かったと思いますよ。趣味も暇つぶしも気晴らしも戦だなんて人生、耐えられない」

「己より強い相手と死力を尽くして戦うは、闇魔族のたしなみ。そなた、そのような事を言うから他の魔の民から見下げられるのだぞ」

「見下げられて結構。おれを魔族扱いする魔族なんてのは、兄上ぐらいなものですよ。気晴らしも他に、色々と見つけられますし」

「どんな気張らしだ」

「人族のふりをして、あちこちにもぐり込んでます。これが結構、面白くて。」

おれは見かけがこうでしょう。髪を染めれば十分、人間に見えるんですよ。

一度『闇魔族だ』と言ってみたんですが、大笑いされました。真つ昼間に外を歩く闇魔族がどこにいるって。色々やってますよ、それで。用心棒とか」

氷玉は妙な顔になった。そのどこが楽しいのか、わからなかったのだ。

「それが楽しいのか？」

「楽しいですよ。悪さをしていた半獣の民を成敗した事もあります。おかげで一部でおれは、『魔狩人^{まかりびと}』だと思われてます」

魔狩人とは魔獣や妖獣を退治する者たちの総称で、多くは武族の成れの果てだった。この大陸では、最も卑しいものとされている。氷玉はますます妙な顔になった。

「そんな扱いを受けて本当に楽しいのか？」

「もちろん。例の娘もそうやって見つけたわけですし」

最初の話題に戻ってきた紫忌は、氷玉が聞く気になっているのを見て取ると、続けた。

「十三、四の小娘です。食べるものも食べてなかったのか、がりがりで。顔だけは悪くなかったので、もう少し太れば花が開いたようになると思うのですがね。」

立ち居振る舞いは、農民のものとは違います。軽やかで、舞を舞

っているように動く。

武芸を学んだという風ではありませんから、渡り人の中でも、暮らしていたのかもしれない。あれらは歌や踊りを見せて町や村を渡り歩きますから。

だというのに、教養ある者の話し方をします。隠そうとはしているようですが、綺麗な発音でしたよ。

薬師としてはそこその腕があり、病人や怪我人を助けて食べ物をもらっています。それは良いのですが……」

紫忌は思わせぶりに言葉を切ると、続けた。

「側に同じ年ぐらいの少年がいましたね。人に似た姿をしているので一見わかりづらんですが、半獣です。そいつがこともあるうに、その小娘に従っています」

氷玉が眉を上げた。

「何かの間違いではないのか。半獣は己より強い者にしか膝を折らぬぞ」

「イリリアとアルシナに確認させたら、間違いなく同族だと。で、彼女たちがまた妙な事を言うんですよ」

二人は紫忌の護衛の半獣族で、魔力の使えない彼を補佐している。

「身が震える、と。その娘の前に出ると、ひざまずきなくなるんだそうで」

「人ごときに、半獣の精鋭が？」

「おかしいでしょう？ それでおれも、腹をくりましてね。娘に直接、会ってみました。が、よくわからない。

確かに、どうかすると気圧されるようなものはありますが……」

「気圧される？名だたる貴族を前にしても、恐れの色すら見せなかったそなたが？」

「恐れぐらいは感じてましたよ。その娘に感じるのは恐れと言うより……、得体の知れなさと言つか」

紫忌は自信なさそうな口調で言った。

「低位魔族辺り……ではそなたが圧されるはずもないな。貴族の血を引く者では」

「だとすると、薬師をしているのは妙です」

闇魔族の血を引く者は、例外なく好戦的になる。治療や修復に關した能力を持つ者はそして、皆無である。

自己修復能力の高い魔族にとつて、他者の手を借りての回復などは、あり得なかった。そんな事をすれば、能力が低いと見なされる。そこから転じて治療の技を持つ者をも、彼らは低く見る傾向にあった。半獣族が従うほど血が濃く、能力が高い存在なら、治療の技を身につけるはずがない。

「では、半獣か？」

「イリリアたちが、それはないと」

氷玉は口許を歪め、笑みを浮かべた。

「そなたはいつも、わたしの無聊を紛らわせてくれるな、紫忌」
「見に行かれますか」

「そのように興味深き者なれば。一時とはいえ、この氣鬱きうつも去ぬいるであろう。どこと言ったか」

「元は雪華伯爵の領土だった所です。灰魔榎の森の近くの。レサンの村、と」

「娘の名は」

「ユーラと名乗りました。村人からは、薬師^{くすりし}のミストレスと呼ばれています」

1 蒼き月と闇の城（後書き）

次回、やっと主人公登場。

2・魔村の少女 1（前書き）

…シリアスなはずなのに、何か変だ。

2・廃村の少女 1

アリエンテス大陸には、多くの種族が暮らしている。

頂点に立つものは闇魔族。貴族の位を持つ魔族である。

その下に、彼らに従う低位の魔族や半獣族の戦士たちがおり、魔獣や妖獣が後に続く。

人は、最も弱き者である。荒野には『魔狩人』^{まかりびと}と呼ばれる武族の血を引く者や、各地を放浪する『渡り人』^{わたるびと}がいるが、大抵の人族は集落を作り、彼らを支配する魔族に貢ぎ物をする事で生き延びている。

月牙伯爵領、灰魔檜の森近くの廃村。

かつてレサンの村と呼ばれていたこの場所は、七十年ほど前に打ち捨てられた。森が勢力を増して拡大した時に、人が住める場所ではなくなってしまったのである。

以来、土地は瘴氣^{しやうき}に侵され、作物は立ち枯れ、魔獣や妖獣が日中でも跋扈^{はつこ}する所となっていた。

少女がそこで暮らすようになったのは、三年ほど前からである。レサンの村に最も近いエニ村に、やせっぽちの少女が同じ年ぐらの少年と年老いた口バを連れてやって来た時は、物乞いの子どもにしか見えなかった。ぼろをまとった少女は泥とほこりにまみれており、性別すら判別しがたい状態だった。

少年も似たり寄ったりで、どこから流れてきた孤児だろうと皆思った。彼女たちが廃村に向かった時にはさすがに何人かが引き止めたが、あまり熱意は込めていなかった。自分たちの生活も苦しかったからだ。

少女は引き止めた村人に礼を述べると食料を少し分けてほしいと頼み、代金代わりに幾ばくかの薬草を置いていった。そうして彼女

たちはレサンの村に向かい、村の家屋の一つを居と定めると、そこで寝起きしながら畑仕事を始めた。

初めは誰も、気づかなかつた。森からやって来る瘴気が減り、魔獣の襲撃が減った事に。

一巡月が過ぎるころ、エ二村の人々は、日々が暮らしやすくなっている事に気づいた。そうして廃村の方へ歩いていった少女たちの事を思い出した。

もう死体になっているのではないか。

そう思いつつ様子を見に行ったエ二村の青年はそこで、驚くべき光景を目にした。

花が咲いている。

妖気漂う森の側、村の周辺にはいつも、いじけたような植物しか生えなかった。村が捨てられる前からここではしなびたような作物が育つのがやっとで、花はわずかに顔を見せては、すぐに枯れた。

土地は何百年もの間、耕しても耕しても荒れていた。

それなのに今、村には花が満ちていた。溢れんばかりの緑と共に、やわらかな色合いの花々は、野に良くあるものばかりだったが、ここに生えるはずのないものだった。

大気には、かぐわしい香りが満ちている。周囲を見回した青年は、畑を耕す少年と、ぼろをまとった少女を見た。以前見た時よりも、こざっぱりとしていた。

彼女たちがまだ生きていた事に驚きつつ安堵した青年は少女に近寄り、やせこけてはいるものの、その顔だちが整っている事に気がついた。泥や埃を落とした彼女は、着ているものこそ粗末だったが、その瞳は星のように輝いていた。何の用かと少女が尋ねるまで彼は、

ぼんやりと彼女を見つめていた。

我に返った青年はどもりつつ、村の様子を手で示し、これはどう
いう事かと尋ねた。

「水をまいて草が育つようにしただけです」

少女は答えた。その声がやわらかで言葉づかいも上品である事に、
青年は今さらながらに気づいた。彼女の答には満足しなかったが、
早々に退散した。恐ろしかったのである。

他の村人はこの話を聞いて驚き怪しみ、一人、また一人と様子を
うかがいにやって来た。

最初は男たちだった。花と緑に包まれた村に目を見張り、少女と
ふた言、三言言葉を交わした後、持参したパンやチーズのかけらを
渡して帰って行く。

女たちは最初気味悪がったが、男たちから話を聞くにつれ、好奇
心に負けてのぞきに来るようになった。その内に大胆になって食べ
物や古着を持参し、ちよくちよく訪れるようになった。その頃には、
森からの瘴気がほとんどやって来なくなっていたのだ。

村々では作物が良く実るようになり、魔獣や妖獣が人の血肉を求
めてうろつく事も減った。

また人々は村を何度か訪れる内に、少年と少女が対等の間柄では
ない事に気づいた。少年は少女に対して常にていねいな態度で接し、
彼女を守るかのように、いつもひっそりと側にいた。

その様子からこの少女は、高貴な身分の方々に重んじられていた
まじな呪い師ではないかとの噂が立った。尋ねられた少女は自分は呪い師
ではないと告げた。ただ怪我人や病人の手当てはできると言い、村
人の相談に乗るようになった。しかし自分の出自に関しては何も話
さなかった。

やがてレサンの村に腕の良い薬師くすりがいて、少女の事が近隣の村々で噂されるようになった。高貴な家の出らしい、とも。

怪我人や病人は少女の元を訪れるようになり、彼らは治療費代わりに食料や、ちよつとした品を置いてゆくようになった。

少女は運び込まれた人々を献身的に世話し、少年も手伝った。少年の少女を敬う様子から、村人も自然とそれにならうようになった。彼女はそうして『レサンのミストレス』、あるいは『薬師のミストレス』と呼ばれるようになった。

1

吹く風が何かささやいた気がして、少女は畑仕事の手を止めた。

『誇りを忘れるのではないよ』

どこからか懐かしい声がした。

『われらは 癒し手 の末裔すえ。治療のわざを持つ全ての者は 癒し手 につながる。心を開き、世界を愛し、人々を守護する。それがわれらの在り方……』

これはジーナの言葉だった。そう少女は思った。母をなくした自分を厳しく、そして愛情深く育ててくれた老女。なぜ今、風がこの言葉をささやくのだろう。

「ミストレスご主人さま！」

自分と呼ぶ声にはつとなり、少女はそちらを向いた。西に沈みつ
つある太陽が、世界をやわらかな色で染めている。少女の榛色はっしやみの瞳
も、夕日を浴びて金緑に輝いていた。

まだ浅い春の風が、栗色の髪を数本吹き上げる。

十三、四にしか見えない彼女ではあるが、手足はすんなりと伸び
ており、意識せずに行う仕種は舞のように美しい。顔だちも古典的
で優雅だった。

しかしひどくやせており、それが本来の美しさを人の目から隠し
ていた。

視線を巡らせた先で、少年が手を振っている。少女の側で護衛の
真似事をし、仕事を手伝ってくれている彼は、淡い金髪に金色がか
った褐色の目をし、なりに似合わぬ強い臂力りよくと素早さを持っていた。
その瞳孔は縦に長い。

彼は人族ではなく、半獣族だった。旅の途中で少女は傷ついて死
にかけている少年を見つけて介抱したのだが、傷が癒えた後、彼は
そのまま少女にくっついてきたのである。

「ガイリス」

名を呼ぶと、駆け寄ってきた少年は、うれしそうにっこりした。

「もう夕方ですよ。家に入りましょう。道具をこちらへ。片づけま
す」

「境界線の強化がまだなの。今日は村の人が来ていたから、昼間に
できなくて。ねえ、でもガイリス。わたしの事はユーラでかまわな
いと、いつも言っているでしょう?」

少年は首を振った。

「あなたはおれの、あるじです。呼び捨てにするなど許されません」
「わたしは確かに、あなたの命を助けたけれど。そこまで恩義に感じなくても良いのよ」

少年は悲痛な顔になった。

「おれみたいな出来損ないは、いりませんか？ でもお仕えしたいんです。お側に置いてほしい」

彼の姿はほとんど人と変わらなかった。違っているのは目だけである。その分能力は低いと彼は以前、少女に告げた。

人間からかけ離れた姿であればあるほど、半獣族は強いのだと言う。失敗作と見なされた彼は、傷を負って倒れた時、そのまま放置された。ユーラはその話を覚えていた。

「あなたには感謝しているわ。本当よ」

少女は静かに言った。少年が顔を上げる。

「いつも色々と手伝ってくれる。困った時には助けてくれる。あなたがいないければ、途方に暮れていた事が何度もあったわ……側にいてくれる事、うれしいの。本当よ」

少年はぱつと顔を輝かせた。

「おれ、役に立ってますか」

「ええ、とてもね」

「側にいても良いんですか」

「もちろんよ。他に行きたい所があるのなら別だけれど……」

「あなたの側以外に、行きたい所なんてありません」

「では、側にいてちょうだい」

「はい」

少年は誇らしげな顔でうなずいた。少女は続けた。

「ただね。あなたがわたしをミストレス（貴族ではない、自立した女性への敬称）と呼ぶもので、他の人もみんなそう呼ぶようになってしまったの。」

それならミストレス・ユーラと呼んでくれれば良いのに、あなたはそうしないでしょう。今ではだれもわたしを名前で呼ばないわ」「人ごときにあなたを呼び捨てさせるなど、おれがさせません」

きつとした顔になって言う少年に、少女は困った顔になった。

「人の場合、名前を呼び合うのは親しみの現れなんだけど」

「半獣の民でもそうです。ですが、あるじの名を呼び捨てる者はいません」

少年はきっぱりと言った。何を言っても撤回はしてもらえそうにないとわかり、少女は小さくため息をついた。

「灯をもらえるかしら？ 境界まで行くから……もう暗くなつてしまったわね」

話している内に辺りは薄暗くなっていた。空には星が瞬き出している。話題を変えてそう言うと、少年はすぐに松明を持ってきた。

「おれも一緒にしましょうか？」

「大丈夫よ。強化をするだけだから。家で待っていてちょうだい」

少年はそれでもついて行きたいという顔をしたが、少女が力を使う時、それを見られるのを嫌がる事を知っていた為、渋々ながらにうなずいた。

「夕食を作っておきます。何かあったらおれを呼んで下さい。すぐ行きますから」

「わかっているわ」

「本当に呼んで下さいね？」

そう念を押す。少女はうなずいてから、松明を受け取った。

少年と別れると、くすぶりながら燃える松明を持って、ユーラは歩き出した。村外れに向かつて。

森と村との境界線にあたる所には、石が置いてある。はるか昔のレサンの村の住人が置いたものだが、それは今も、森から村を隔てる目印となっていた。

『誇りを失うのではないよ』

ジーナの言葉を思い出す。

『われら『渡り人』は、癒し手すえの末裔。聖なるエリザの心とわざを継ぐ者』

懐かしい、幌馬車で移動する日々。愛する家族。女長老であるジーナは、少女に繰り返しそう語った。

町や村を旅して回る渡り人は、そのほとんどが、己を癒し手

の末裔だと名乗る。それが彼らを支える誇りなのだ。聖エリザが馬車に乗り、各地を移動したとの伝説がある為だろう。

今も偉業の数々が語られる、伝説の聖女。彼女には闇魔族の王ですら、膝を折ったと言う。

（最後の流れを汲む者は役立たずだけれど）

自嘲気味に、少女は思った。自分は何とか日々を生き延びている。だがそれだけだ。誇りなど、どこにもない。家族をなくした時に、全て失ってしまった……。

石の側まで来ると、ユーラは松明を地面に差した。目を閉じる。

力を、感じた。

耳に聞こえないやわらかな音律。目に見えない輝く鎖。音と言葉が刻まれた大気が、石を中心にして広がる。張り巡らされたそれは、森からやってくる魔獣や妖獣たちを、村に立ち入らせない為のものだった。

少女がこの村に着いた時にまず行つたのが、これだった。力の境界線を形作ること。森から吹きつける瘴気が土を毒し、ここでは植物がほとんど育たなかったのである。彼女はそれを見て取ると、瘴気を遮り、土をなだめ、時間をかけて力を取り戻させてやった。大地はそれで緑を芽吹かせ、花も咲きそろつたのである。

だが境界線が破られれば、これらは元に戻ってしまう。それがわかつていたので彼女は、定期的に力の鎖を強める作業を行っていた。石の前で胸に手を当てると、ユーラは一つの旋律を口ずさみ始めた。

大気に、音が刻まれる。

旋律は鎖を生み、鎖は輪を描いて空間をつなぎ、そこに不可視の壁を作りだした。きらめく光が歌から生まれ、はじける。少女の唇から音がこぼれ落ちるたびに、それは鎖となり、力となって村を護る壁となった。

影響はそれだけではなかった。少女の歌が始まると同時に、周辺の土から緑が現れ、花々が現れた。また森の方でも、異変が起きていた。ねじくれた木々の枝がゆるやかに揺れ、その形を変えてゆく。正常な形へと。

少女の周辺には、光が集まり始めていた。星の輝きにも似た静謐な光。透明に輝くそれは少女の周囲に集い、次第にその輝きを強めた。歌い続ける彼女の肌は光に染まってほのかに輝き、髪は金色に輝いた。

やがてユーラは歌を終えた。静寂が戻ると共に、光もゆつくりと引いていった。足元も見えないほどの闇が、一気に押し寄せる。けれども光を呼ぶ歌を歌った事で、彼女の心には平安があった。

薬師の少女は一つ息をつく、家に戻ろうとして松明の方を振り向いた。そして何かがいる事に気づいて、動きを止めた。

漆黒の闇が、炎の向こうに立っていた。

2

闇が人の形を取った。そう思った。黒いマントをまとう背の高い男がそこにいるのだとわかるまで、数瞬を要した。

銀の髪。青白い肌。赤い瞳。虚無を思わせる美しい顔。

（闇魔族……）

ユーラは震えた。かつて出会った闇魔族を、その男が行った非道な仕打ちを思い出したのだ。目の前にいる闇魔族はその男に似ていた。姿も、美しさも、かもし出す雰囲気も。

（これはあの男……？ いいえ違う。そのはずがない）

少女は手の震えを抑えようと拳をにぎると、男を見据えた。この男は自分の作業を見ていたのだ。無断で。誰であれ、そんな権利はない。そう思い、怒りをかき立てて脅えを払いのけると、少女は腹に力を入れて立った。

「何者なの。そんな所で人をのぞき見ているなんて、良い趣味ではないわよ」

厳しい表情で言うと、男は彼女を見返した。冷然としたその表情に変化はない。しかし彼の赤い瞳には、驚愕と困惑、歓喜と怒りの色があった。

少女は周囲の気温が急激に下がったのを感じた。体の芯を、氷のような手でつかまれた気がする。息ができない。大気がずしりと重みを増して、体中を押さえつける。逃げ出したいという衝動が沸き起こり、恐怖が体中を締め上げた。それでも負けずに睨み返し、少女は体中の力を振るい集めて言った。

「わたしは何者かと言ったのよ。名乗りなさい」

思ったよりも強い言い方になった。

長い沈黙があった。実の所は、一瞬だったのかもしれないが。彼はユーラを見つめ、何か葛藤かっとうしているようだった。赤い瞳が怒りに激しく燃え上がり……、そしてそれらが唐突に消える。

「失礼をした、薬師の姫。わたしの名は氷玉こりぎよと言う」

闇魔族の男はなめらかな動きで胸に手を当てると、礼儀正しく一礼した。聞いているだけで魂を奪われそうな、麗しい声だった。呼吸が楽になった事に、ユーラは気づいた。体にかかっていた重みが消える。思わずふらつきかけたが、何とか踏みとどまった。

「ヒギョク？」

その音をつぶやくと、男は顔を上げた。美しい顔に意外なほど優しい笑みが浮かんだ。

「然りしか。薬師の姫よ」

その笑みに面食らい、少女はまばたいた。闇魔族がこんな顔をするととは思わなかった。

「変わった音だけど……何か意味があるの」

「氷の宝石という意味だ」

「綺麗な名前ね」

何を意図するつもりもなくそう言うと、男の顔に驚いたような表情が浮かんだ。ついで彼は微笑んだ。とても嬉しそうに。

「感謝する、姫」

どこか子どものようなその笑みに、つい見入ってしまった少女は慌てて目をそらした。いけない。これは闇魔族。魔力を操り、人の命など土塊つちくれのように扱う存在だ。

「それで……氷玉。あなたはなぜここに」
「そなたに会いに来た」

簡潔な答に少女は視線を戻した。

「わたしに？」
「わが領土に薬師が住み着いたという話を聞いた。そなたの事であるう？」

少女は男の言葉に眉を上げた。

「わが領土？ あなた、一体何者なの」
「一族の当主にして伯爵げつがはくの位を持つ」
「伯爵？ まさか、月牙伯……領主さま？」
「いかにも」

少女は言葉をなくし、男を見上げた。領主が出てくるとは思わなかったのだ。

「わたしはユーラ」

ややしてから立ち直ると、少女は名乗った。まるで彼女と目の前の魔族が対等の存在であるかのように。毅然きぜんとして見えるように背筋を伸ばし、口調を改めて彼女は言った。

「この村に住まわせてもらっている者です。領主ともあろう方が、なぜこのような所に」

「そなたの噂を聞いた。腕の良い薬師であると。しかし薬師が魔術も使うとは、ついぞ知らなかった」

「いつから見ていたの」

やはり見られていたと思い、少女は動揺した。伯爵は彼女を見つめた。

「何か不都合でも？」

「見られたくないのよ。これは……」

少女は何かを言いかけ、首を振った。

「あなたに話しても仕方がないわ。わたしは見られなくなかった。そういうこと」

「美しかった。術も、そなたも」

伯爵が言うと、少女は顔を強張らせた。警戒の表情になった少女に、伯爵は不思議そうな顔になった。

「そなたは賛辞を好まぬのか？」

「闇魔族の賛辞は、後が怖いわ。何を言い出すかわからないから」

「純粹にそなたを称賛したかっただけだが」

「なお悪いわ。術と言ったけれど、あれは魔術ではありません。わたしは歌っただけ。それを聞いた大地や大気が、わたしに力を貸してくれた。それだけだわ」

少女はいらだたしげに言うと身をかがめ、松明を取り上げた。それからもう一度、伯爵を正面から見据える。

「それで、伯爵。何の用で来たの？ 見た所、健康そうだけれど「健康？」

「薬師を訪ねて来たのでしょうか。何か用があつたのではないの？」

闇の民を治療した事はないけれど、困っているのなら手を貸すわ」

氷玉は一瞬、沈黙した。

「わたしに問題はない」

やがて彼は、淡々とした口調で言った。思案げに少女を見つめる。

「気になっているのだが。そなた、いつもそのような態度で話すのか？」

少女は険しい顔になった。

「わたしの態度が何？」

「わたしをまるで、仇か何かのように見る」

伯爵の言葉にユーラは相手を睨んだ。松明をぐつと握りしめる。この男は、夜に闇魔族と一人で対面する羽目に陥った人族がどんな思いをするものか、想像できないのか？

「闇魔族なんかに、関わりたくないのよ」

やがて彼女はそう言った。

「あなたのせいではないわ、月牙伯爵。あなたの評判は聞いています。人族に対して寛容な方であると……でも駄目なの。闇魔族は嫌い。見ているだけでもぞつとする」

伯爵はなぜか、傷ついたような顔になった。

「嫌いなのに、手助けを申し出たのか？」

静かに問うと、少女は爆発したかのような激しさで言った。

「それがわたしの仕事だからよ。用がないのならそこをどいて！」

闇魔族にどけと命じる少女の激しさに、伯爵はまばたいた。常ならば誰であれ、自分に対するこんな無礼は許さない。その場で相手の命を絶っている。しかし彼は、素直に横に動いた。歩き出した少女に声をかける。

「どこへ行くのだ？」

「家に帰るのよ！」

怒鳴るように言うと、少女は松明を握りしめ、歩み去った。

残された伯爵は彼女の後ろ姿をしばらく眺めていたが、闇色のマントをひるがえすと後を追った。

少女は足音も荒く歩いていた。怒りでどうにかなりそうだ。いや、怒りではない。

これは、恐れだ。

(どうして闇魔族がこんな所に)

唇をかみしめ、少女は歩いた。心の内にあった平安は消え去っていた。今感じているのは、恐れと憎しみ。胃がよじれて吐き気がするほどの悔恨と、痛いほどの悲しみ。

悲しみ。

（あんなにも似た闇魔族がいるなんて……）

似すぎている。育ての親を、家族を気まぐれに殺した闇魔族の男に。

（あの男がここにいるはずはないのに）

（ああ、でも、あの顔！ 何もできなかった。わたしはあの時、何もできなかった……）

混沌とした感情が胸を焼いた。目が熱い。こぼれそうになった涙を片手でぐいとぬぐうと、少女は齒を食いしばって歩いた。

（関わらないのが一番だわ）

（闇魔族には。もう関わらないのがいい）

（じきに家につく。ほら……、）

家からは、灯が漏れていた。扉の前で立ち止まり、呼吸を整える。

（ガイリスが心配するわ。こんな顔してたら）

涙の跡を消そうともう一度、指で目のふちや頬を払っていると、中から扉が開かれた。

「ご主人さま。お帰りなさい。呼びに行こうかと思っていました。食事が煮えていますよ」

半獣の少年に常と変わらない微笑みを向けられ、ユーラはほっとした顔になった。

「ありがとう。遅くなってごめんなさいね」
「だいじょう……うわああっ？」

ガイリスが顔色を変えた。彼の視線の先をたどった少女は、振り向いて背後を見た。闇の中、先ほどの闇魔族が立っている。

「ついて来たの？」

眉をひそめてつぶやくと、少年がうるたえた様子で言った。

「高位の御方です。どうしてここに……」

少女はしばらく伯爵を見つめていたが、やがて彼に背を向けた。

「気にする事はないわ。用があるなら来るでしょうし、ないのなら帰るでしょう。わたしが進んで家に招待することはないけれど。最も闇魔族の貴族ともなれば、礼儀は無視して上がり込むかもしれないわね」

侮辱同然のこの言葉にガイリスは絶句し、青くなった。

「ご主人さま……」

「食事をもらうわ。松明をお願い」

「ででも、あの、あの方は」

「扉を閉めて」

そう言うと、ユーラは家に入った。伯爵の方を、一顧だにしなかった。

小さな家は一間しかない。ユーラの寝る場所がかるうじて、つりさげた布で仕切られているぐらいだ。

暖炉があつて、煮炊きは全てここです。足ががたがたしているテーブルが一つあり、これは食事にも薬草の調合にも使われた。

寒かったので、少女は暖炉の側で食事を取った。ガイリスはの間も外を気にしていた。

「どうしてそう、うろろろするの。何かあるのなら自分から来るわよ」

そう言いながら、ユーラも内心、気にしていた。彼を怒鳴りつけ、無視して家に入ってきたのだが、元々そう怒りっぽい性質でも、誰かを侮辱して悦に入る性格でもない。それに誇り高い闇魔族が、ここまで侮辱されて何も反応しないというのが不可解でもあった。人間でもこんな事をされれば普通、怒る。

（わたしのは、八つ当たりだし）

彼女は思った。あの男と似ているのは伯爵のせいではない。評判を聞く限り、月牙伯爵は人族を保護する珍しい闇魔族だ。なのに自分は何だか事を言ってしまった。

「もう帰ったのではない？」

「外に立っておいでです」

少女はどうしたものかという顔になった。食欲は失せていた。板戸をおろした窓の方へ行き、隙間から外をうかがってみる。しかし外は、闇が深さを増しており、彼女の目には何も映らなかった。

「何も見えないけど……」

「おれにはわかります。あんな高位の魔族を見たのは初めてだ。まだ体中がびりびりしてる。でも、どうしてあんな御方がここに？」
「わたしの方こそ知りたいわよ」

いらだたしげに言うと、少女は窓から離れた。意を決したように、扉の方へ歩き出す。

「ご主人さま？」

「気になって食事もできないわ。理由を聞いてみる」

そう言うと、ユーラは思い切り良く扉を開けた。

「月牙伯爵。いるの？」

外の闇に向かって呼びかけると、ゆらりと闇が揺れた。少女の前に黒いマントを羽織った背の高い男が現れる。

「ここに」

ユーラは相手を睨むとつけつけと言った。

「あなた一体、何がしたいの。人のあとをつけまわした挙げ句、家の前でずっと立っているなんて、気持ちが悪いじゃないの」

「そなたの気を害したのなら、謝罪する」

伯爵は困った顔で言った。本気で困っているようだったので、少女は喧嘩腰の自分の態度が少し恥ずかしくなった。

「だから、そういう事ではなくてね……どうしてこんな、辺境の村

の薬師を訪ねようなんて気を起こしたの？」

口調を和らげて言うと、伯爵は答えた。

「紫忌^{しき}がそなたの話をしていた」

「誰ですって？」

「弟だ。はくだんしゃく白男爵の称号を持つ」

「あ、あの、確か人族の血を引く方です」

後ろからガイリスが、おっかなびっくりという風に言った。少女はそちらを見やり、もう一度伯爵の方を見た。

「人の血を引く弟さんがいるの？」

「あれは寿命こそわれらと同じだが、人としての弱さを引き継いでいる。そなたの話を耳にして、わたしの所に来た」

少女はまばたいた。伯爵の話は要点のみに限られていたので、彼女は伯爵の弟が病弱であるのかと思った。

「弟さん、体が弱いのか？」

そう尋ねてみると、伯爵は少し考えた後に答えた。

「弱い」

彼の返事には、『自分と比べれば』という一言が抜けていた。紫忌は普通の人間よりはよほど、頑丈な体を持っている。

「そう」

しかし少女には、伯爵がばいした言葉などわからなかった。この魔族は病弱な弟の為にここまで来たのだろう。彼女はそう思った。

「それならそうと、最初から言えばいいのに……弟さん、幾つになられるの？」

態度を少し改める。治療を行う者の顔になって尋ねると、伯爵は答えた。

「二百と少しだが」

「ああ、魔の民は歳の取り方が遅いのよね。ええと……人族の年齢で言えば、幾つぐらいに見える方なの？」

「わたしは人族の事にはあまり詳しくない」

困ったように伯爵が言った。少女は少し考えてから自分を指さした。

「わたしが闇魔族なら、幾つぐらいに見えるのかしら」

伯爵は「百五十という所か」と答えた。

「そう。じゃあ……あなたの弟さんは人族で言うなら二十歳ぐらいかしらね。でも魔の民って、薬草が効くのかしら。適当な薬草は渡すけれど。一度本人にここへ来るよう、仰っていただけますか」

「あれに？ かまわぬが」

伯爵は不思議そうな顔で言った。

「しかしその薬草は、どうするのだ？」

「弟さんに渡して下さい。食事に混ぜるか、煎^{せん}じて飲むかしていた

「できれば」

「あれに渡す……なぜ」

「なぜって」

少女は何だか変だという顔になった。

「体の弱い方なのでしょう？　それでわたしを訪ねたのではないの？　弟さんを案じて」

伯爵は沈黙した。ユーラも沈黙して相手の言葉を待った。

「いや」

やがて彼はそう言った。少女は眉を上げた。

「いいえと言ったの？」

「そうだが」

「だったら何の為に……あなた何をしに来たの、一体」

「そなたの話を弟が聞き、わたしに話した」

もう一度、伯爵は繰り返した。

「それでわたしはそなたに興味を抱き、どのような存在なのか、確かめに来た」

ユーラはぼかんとした表情で彼を見上げた。その顔に、徐々に怒りの色が浮かぶ。

「つまり、珍しいものが来たから暇つぶしに見物しに来たというわけ？」

「最初はそのつもりだったけど……」
「帰って」

相手の言葉をさえぎってぴしりと言うと、少女は家の中に入り、思い切り扉を閉めた。伯爵は所在なげにその場に立ち尽くした。

「まずい、まずいですよう、ご主人さま！ あれだけ高い身分の魔族を怒らせたらどうなるか。ご主人さまの身が危険になります」

家の中ではガイリスがうろたえていた。

「わたしも怒ってるのよ！ 何なの、あの男」

「仕方ないですよ、闇魔族なんですから！ わけわからないのが当たり前なんです、闇魔族なんですから！ だからとにかく、相手を怒らせないで下さい！」

かんかんになっている少女をなだめようと、ガイリスは言葉を尽くした。あれこれと言った後、「この辺りの村人まで処罰の対象になったらどうするんです」という一言に、彼女はやっと反応した。

「わかったわ……とりあえず、話してみる。でもまだいる？ 外にいます」

「普通、帰るわよ。こんな事をされたら」

「いやだから、闇魔族ですから……」

「その説明、何の説明にもなっていないのに、すごく良くわかるわ」

げんなりした風に言うと、少女はもう一度扉を開けた。果してそこには伯爵が立っていた。

「どうしているのよ、ほんとに……」

「わたしも気の長い方ではないが……」

月牙伯爵はユーラを見つめて言った。

「そなたの行動にはもう少し、忍耐と一貫性が必要なのではないのか？」

薬師の少女はむっとした顔になった。

「人を珍獣扱いしておいて、忍耐が必要とは良く言ったわね。それであなたは何がしたいの。わたしにはもう会ったから、最初の目的は果たしたのでしょうか？」

そう言うのと、伯爵は困惑の表情を浮かべた。

「そうなのだが……」

「だったら早く帰りなさい。ここには魔族の興味を引きそうなものはないわ」

伯爵は本当に困った顔になった。

「招かれざる客である事は知っている。しかしわたしは、今しばらくそなたといたい」

ユーラは目をぱちくりとした。

「どうして」

「そなたは変わっている。普通、闇魔族と出会った人族は、恐れお

ののいて口もきけなくなる。命じられた事には従い、齒向かおうなどとは考えもしない」

「それはそうでしょうね」

思わずユーラはそう言った。闇魔族は通常、下の身分にある者が己に逆らう事を許さない。下手をすれば、一族郎党皆殺しになる。

「しかしそなたはわたしに悪態をつき、そこをどけと命じ、今は帰れと言う。非常に珍しい」

「そんな事したんですかあ、ご主人さま」

ガイリスは失神しそうになっている。

「それだけされて容認している、あなたも相当変わっているけれど」

列挙れっきょされた自分の行為の無謀むぼうさにさすがに居心地が悪くなったが、ユーラは咳払いをしてごまかし、そう言った。

「あなたはここにいたいわけね？」

「そうだな」

「でも人を訪ねる時刻ではないわよ。わたしは夕食を食べる所だし」
「われらは日中には動けぬゆえ、夜にしか訪おもなうことができぬ。したが、そなたの感覚ではそうであろうな。無断でそなたの歌を見聞きした事とあわせて、非礼を詫びよう」

そう言うと、伯爵は少女の前に膝をつき、頭を垂れた。ガイリスが奇妙にくぐもった声を上げる。高位の魔族が膝をつき、頭を下げるという驚倒うしろたえものの光景を見た為だ。

少女も目を丸くした。闇魔族がこのような態度を取るなど、聞いたことがない。しかも自分の言い分は、言いがかりに近いものだ。

「伯爵。顔を上げて……立ってちょうだい」

半ば慌て、半ば弱ってそう言っていると、伯爵は顔を上げた。

「許してもらえるのだろうか」

「許すも何も、わたしのは八つ当たりよ」

「許してはもらえぬのか？」

伯爵は寂しげな顔になり、ユーラは詰まった。自分がひどい事をしたような気になる。

「伯爵。わたしが言った事は、言いがかりなのよ。闇魔族が日中動けないことは、誰でも知っているわ。それがわかっていて……何て顔をするの。立ってちょうだい」

「そなたが許さぬのなら、立てぬ」

「許します。だから立って」

伯爵は微笑むと、少女に言われた通り立ち上がった。重さがあるとは思えないような、なめらかで優雅な動きだった。

「どうしてひざまずいたりなんか……闇魔族の貴族でこの領主でもある方が、そう簡単に頭を下げたりしないでちょうだい。一介の薬師なんかに」

ほっとして少女が言っていると、伯爵は真紅の目を少し細めた。

「そなたにひざまずくは、わが恥ではない」

「わたしは誰かをひざまずかせる事には慣れていないの。あまり良い気はしないわ」

伯爵は眉をくもらせた。

「そなたを不快にさせたか？」

「そうではなくて……あのね。わたしは、誰かをひざまずかせる行為が好きではないの。相手を大事にしていけないような気がして」

伯爵が驚いたような顔になった。

「そなたは、わたしを大事にしようと思ったのか？」

「そういう意味じゃ……あら？ そうなのかしら」

少女は自分の言葉の意味を考えた。

「そうね。そういう意味ね。わたし、魔族でも半獣族でも人族でもできるだけ相手を一人の存在として……大切に考えたいの」

「魔族でも半獣族でも人族でも？」

「どの種族の者でも特別扱いはいらないわ
「なるほど」

怒りもせずにそう言った伯爵を、少女は不思議そうな顔で見上げた。

「怒らないの？ 魔族は普通、こんな事を言われたら怒るわよ」

「われらは己を優れたものとするゆえ、そうであろうな。したがそなたには怒れぬ」

薬師の少女は複雑な顔になって伯爵を見つめた。

「似ていると思ったのに……、全然違うわ」

「似ている？」

「昔会った闇魔族とね。顔とか、とても」

伯爵は不快そうな顔になった。

「わたしが誰かに似ている事などあり得ぬぞ。わたしはこの世で唯一、わたしだけだ。似ていると言うのなら、その男の方がわたしに似ているのだ」

「そう？ でも似ていないと今は思っているから。印象が全然違っていて……」

「ならば良い。わたしはそなたには、どのように見えているのだ？」

「そうね。闇魔族らしく、偉そうは偉そうなのだけれど。なんだか……、」

ユーラは伯爵を見つめ、適当な言葉を探した。彼は妙に人間らしい。人族に詫びる闇魔族など初めて見た。だがそんな事を言うと、彼らには侮辱だろう。

「好ましいわ」

あれこれ考えたあげく、結局そう言った。言ってから少女は、相手の反応に驚いた。伯爵が実に、うれしげに微笑んだからだ。

（子どもがほめてもらった時みたいな顔に見えるんだけど……）

「そうか」

伯爵は微笑んだまま言った。

「わたしはそなたに、好ましく見えるか」

「ええ、まあ……伯爵、あの」

「氷玉だ」

「え？」

「わたしの事は、氷玉と呼んでほしい」

背後でがたんという音がした。振り返るとガイリスが床に座り込んでいた。転んだらしい。慌ててそちらに行こうとしたが、彼が必死で大丈夫だと合図しているので、少女は行きかけた足を止めた。伯爵の方を向く。

「そう名乗っていたわね。でも伯爵の地位にある方を、名前では呼べないわ」

そう言うつと、伯爵は悲しげな顔になった。

「わたしの名は、呼ぶ価値もないか？」

「あなたの名前は綺麗よ。でも身分が」

「最初は呼んでくれたではないか」

「そうだけど、でも……呼んでほしいの？」

伯爵が真面目な顔でうなずく。ユーラは思案した。自分の態度はほめられたものではなかったし、これぐらいは譲歩すべきだろう。

「では、氷玉。他に誰がいる時は伯爵と呼ぶけれど、それで良い？」

伯爵は笑みを浮かべた。どうしてこんなにうれしそうなんだろうと彼女は思った。

「そなたの唇で発音されると、まるで違う名のように聞こえる。心より感謝する、姫」

どういう意味かと少女は思ったが、相手が自分に使った呼称が気になった。

「どうしてわたしが姫なの？」

ユーラが尋ねると、伯爵は答えた。

「そなたは敬意を払われるべき存在だ」

「わたし、お姫さまなんてがらじゃないわよ、伯爵……」

「氷玉だ」

「氷玉。わたしは身分なんて、ないに等しい人間よ。あなたの領に住まわせてもらっている、ただの娘に過ぎないわ」

「そなたはわたしが自らひざまずいた者だ。わが姫よ。何をしてほしい。望みはあるか。かなう限り、そなたの望みをかなえよう」

伯爵は静かに立っていたが、その顔には喜びが踊り、言葉には力強さがあつた。名前で呼んでもらえた事がそんなにうれしかったのだろうか、少女は思った。

「そう言われても、闇魔族に頼む事なんて思いつかない……そうだ、あなた夜でも目が見えるのよね」

ふと思いついて彼女は言った。月牙伯爵はうなずいた。

「日が沈んでより後が、われらの世界ゆえ」

「やり残した作業があるの。暗いからあきらめたのだけど。手伝ってもらえる？」

後ろでガイリスが、ひいという声を上げた。

「ご主人さま、手伝えって言っんなら、おれがやります!」

しかし彼の申し出は、伯爵に蹴こされた。

「だまれ半獣の。姫はわたしに頼たのんでいる」

冷然と命じるその声に、ガイリスは身を強張こわばらせた。高位魔族は魔力の塊のような存在である。声音一つにも力が籠こもる。半獣族であるガイリスは伯爵がそこにいるだけで、立ってられないほどの圧迫感を感じていた。声音に含まれたいらだちを感じた今は、恐怖で動けない。

「あの子を怖がらせないでちょうだい。その姫って言っの、やっばり気になるのだけど」

ユーラが言った。伯爵の注意がそれ、少年はやっと呼吸ができるようになった。

「気に入らぬのか?」

「何だか気恥はずかしくて。名前でもらえないかしら」

伯爵は目を丸くした。

「いや、それは。そなたの願いではあるが」

「だめなの? ガイリスもあれこれ言ってわたしの事、名前では呼ばないけど」

「その半獣がそのような事をしたのなら、八つ裂きになっている」

伯爵の言葉に少年は震え上がった。

「怖がらせないでつてば。なに？ 魔族には名前に何か、禁忌があるの？ でもそうしたら、わたしがあなたの名を呼ぶのって……」
「そなたがわたしを名で呼ぶは、正しい。わたしは自ら、そなたに名を明かした。ゆえにそなたには、我が名を口にする権利がある」
「良くわからないわ」
「気にせずとも良い、そういうものだ。手伝う事とはなんだ」

伯爵が言い、少女は答えた。

「あ、そうね。簡単な畑仕事なんだけど」
「じ、ごしゅじんさま……」

少年が泣きそうな声で言った。やめて下さいという思いがその一言に込められていた。

「畑仕事か。興味深いな」

しかし伯爵は取り合わず、ユーラも同様だった。働き手が一人確保できたようだと、彼女はにっこりした。

「手順は説明するわ。ついでに畝を耕^{うね}してもらえると助かるわね」

少女は松明を持つてくると、彼と共に外へ出て行った。残されたガイリスは、この場で失神できたらどれだけ良いだろうと思った。闇魔族の貴族に畑仕事をさせる主人も主人だが、引き受ける伯爵も伯爵だ。後について行って止めるべきだろうか。だがしかし。

あれこれと悩んだ末に、彼は外に出た。そうして見なければ良か

ったという光景を目撃する。

鋤^{すき}を使って畑を耕している　銀の闇王、魔族の中の魔族との誉れも高い、月牙伯爵。

どうしよう、と彼は思った。目を閉じるべきか。視線をそらすと失礼だろうか。いやそれよりも。伯爵にこんな事をさせたと知ったら、配下の者たちが何をしてくるか。

自身も農具を手にとって働いていたユーラはこの時、立ち尽くすガイリスに気づいた。

「あら、ガイリス。ちょうど良かったわ。お茶の用意をしておいてくれる？」

「わかりました」

ガイリスは家に戻った。何も考えず、とにかく命じられた事をしよう。それが良い。

2・廃村の少女 1（後書き）

現代では「ミストレス」には、あまり良い意味はありませんが、もともとは、自立した女性への敬称みたいなものでした。

2・廃村の少女 2

3

月牙伯爵げつがはくしゃくは畑仕事をし終えた後（今までやった事もする必要もなかっただろうに、黙々と働いていた）、少女に家に招かれ、香草茶ティザンをふるまわれた。その後、「また来る」と言い残して去った。

翌日。夕方近くに、伯爵家の紋章のついた馬車がやって来た。馬車から降りたのは身形のきちんとした人族で、少女に一礼すると、非礼への詫びと馳走への礼の品を贈る、との伯爵の手紙と共に、保存のきく食料を一山と、美しい衣装と宝石をちりばめた装身具一式を置いていった。食料には感謝したが、衣装は薄い絹地で、普段の生活には着ようにも着られない。宝石も同様だった。ユーラは仕方なく、衣装箱代わりに使っている木箱にそれらを入れておいた。

紫忌むらが来たのは、それから数日してからだった。闇魔族の馬車が日中走っているのを見たという噂が、近隣ではささやかれていた。エニ村でも。人々は脅え、外出を控えた。闇魔族に関する事は何であれ、恐怖の対象となるのである。その間、レサンの村で少女は、いつも通りの暮らしを営んでいた。噂話を運んでくれる村人が来なかったので、外での騒ぎを知らなかったのである。

剣を背負い、革の鎧で武装したその男は、夕日を浴びながらレサンの村に入ってきた。渡りの傭兵然とした姿である。二十四、五に見える彼は褐色の肌をして、黒髪を短く刈り上げていた。長身なの

で細く見えるものの、良く鍛えられた体つきをしている。男は親しみやすい笑顔を持っており、女性だけではなく、男性からも好意を持たれやすかった。

「やあ、ミストレス」

畑仕事をしている少女を見つけると、彼は気さくな感じでそう言った。ユーラは顔を上げ、見覚えのある男に笑顔を向けた。

「ローク。怪我をしたお友だちはどう？」

「元気にやってる。あの時は助かったよ」

髪を染めて人族を装った闇魔族の一人、紫忌^{しき}はにつこりして言った。彼は以前、少女の調査の為にここへ来た。その時怪しまれぬよう、怪我人の治療を口実にしたのである。

たまたま知り合った人族の男が傷を負ったため、それを幸いとしてここに運び込み、治療を頼んだのだった。

ロークとはその時名乗った、彼の人族としての名である。

「今日はこれ持ってきたんだけど。足りない薬草の事を言ってる？ 種が手に入ったから、持ってきた。役に立つかな」

紫忌は小さな袋を出して見せた。

「まあ。なんの種？」

少女はぱつと顔を輝かせた。

「くれた奴が、小袋に名前と効果は書いておいたって。字、読めたよね？」

「ええ、育ててくれた人に教わったから。大丈夫、ちゃんと読めるわ。ありがとう」

種の袋を、ユーラは宝物を扱うかのように受け取った。

「何かご馳走してくれる気になる？」

紫忌の言葉にユーラはにっこりした。

「もちろんよ。食べ物は今、たくさんあるから。知り合った人からいただいたんだけど、エニ村の人におすそ分けしようと思っていたのに、こんな時に限って誰も来ないのよ」

「だろうね。色々あるし。噂聞いてない？」

「噂？」

「闇魔族の馬車が走ってたって。しかも日中。怖いでしょ、そんな事あったら。で、みんな家の中に閉じこもって外に出ないようにしてる。ミストレスにも気をつけるよう、よくよく伝えてくれってさ」

ユーラはああ、という顔をした。

「そう。そうね……怖いわね。闇魔族の馬車を見たりしたら」

「話では、こっちの方角に走ってたそうんだけど。何もなかった？」

ユーラは困った顔になった。

「あつたと言えばあつたけれど……ローク、あなた、闇魔族の事とか詳しい？ ここの伯爵さまの事、何か知っている？」

紫忌は眉を上げた。用心しつつ、しかし表面上は平静を装って、

「少しは」と答える。

「お怒りを買わないよう、うまく立ち回らないといけないからね。情報を頭に入れるようにはしてるよ。月牙伯爵がどうかしたの」「ここに来たのよ」

あっさりと告げた少女に、目を見張る。もう少し隠すのではないかと思っていたのだ。

「来たの？」

「ええ」

「何でまた」

「薬師なんて珍しいものが領内にいるものだから、暇潰しひまつぶに見に來たみたい。話もしたわ……食料をくれたのは彼なの」

紫忌は驚いた顔をしてみせた。

「じゃ、闇魔族の馬車は？」

「わたしとの話が楽しかったらしくて。お礼に馬車一台分の食料を贈ってよこしたの。思ったほど怖い人ではなかったわ。礼儀正しかったし。」

でもエニ村の人たちには、怖い思いをさせてしまったわね」

「おれエニ村の人じゃないし。えーっと、それ、おれに話していい話なのかな」

「別に隠す事はないもの。でも闇魔族が怖いっていう気持ちはわかるわ。まだうちに來て、何か食べる気はある？」

「もちろん。こういう商売していると、うまい料理にありつけそうな機会は逃せない」

ためらうように言った少女に、紫忌はにこりとして言った。少女

はどこか、ほっとしたような顔になった。

半獣族の少年が、畑で働く姿が見えた。

「伯爵閣下のくれたのは、食料だけ？」

鶏を小屋に入れるのを手伝いながら紫忌が尋ねると、「服と宝石ももらったのだけれど。しまつてあるわ」と少女が答えた。

「着たりしないの？」

「生地が薄くて。着たら凍えてしまつわ。綺麗だけれど。宝石もね。あんなものを身につけて、畑仕事はできないわ。でも食料は助かつたわ。保存のきくものばかりだったから」

それはおれが手配したからです、と紫忌は思った。彼女に何か贈りたいのだが、何が良いかと兄に相談された時、辺境の村でぎりぎりの暮らしをしている娘が必要としているものは、美しい衣装や装身具ではなく、毛布や保存のきく食料だと彼は兄に言ったのだ。

人と感覚の違う兄に選ばれるとうなるかわからない為、食料の手配は任せてもらい、兄には暖かい厚手の服を贈るよう助言した。

氷玉はその助言を考慮（こつりょ）したらしいのだが、やはり良くわかつていなかったらしい。

（帰ってきた様子からすると、相当気に入ったみたいだけど。妾妃（しやうひ）にするとかは言い出さなかったなあ）

山羊をつなぎ終えたユーラは紫忌をうながし、家に向かった。紫忌は彼女の後について歩き、家に入った。

（そう言えば兄上は、あまり妾妃を持たない人だったな。戦で忙しかったのもあるんだろうけど……兄上ぐらいの貴族になれば、何人いてもおかしくないのに）

おかげで自分を恋人にしているなどといった、うれしくない噂が流れた事もあった。会えば必ず厭味いやみや嫌がらせをよこす閻魔族の叔父や叔母は、今でも『妾あがり』だの『男娼』だのと言って下さる。

（まあ、妾にするには少し、歳が足りないか）

少女の体つきを見て紫忌は思った。今まで栄養が足りていなかった為か、気の毒なまでに細い。今は十三か十四か。小柄なのでそうは見えないが、ひょっとしたら十五かもしれない。もう少し肉付きを良くしてやりたい、と彼は思った。体つきが丸みを帯びてくれば、隠れている美しさも前に出てくるはずだ。

少女は家に入るときばきと動いて湯を沸かし、香草茶ティザンを入れた。渡された茶碗を受け取り、紫忌は礼を言って口をつけた。

「で、どんな話をしたの」

「月牙伯爵って少し変わっているわね」

「あの伯爵閣下は変わり者で通っているんだよ。何かあった？」

「何も言わずに家の外に立っているから、畑仕事を手伝ってくれないかって言ったのよ。そうしたら畑を耕してくれたわ」

紫忌は飲んでいた茶を吹き出した。気管に入ってしまった、むせる。慌てるユーラに心配ないと手を振り、ひとしきり咳き込んでから彼

は顔を上げた。

「畑を耕した？」

「ええ、してくれたわ。随分と人間味のある魔族なのね。子どもみたいな顔で笑うし」

「に、人間味？ 子どもみたいな顔？」

それは誰。と紫忌は思わず言いそうになった。戦以外に興味を持てず、何に対してもつまらなそうな顔をしていた兄が、『子どもみたいな顔で笑う』？

「ねえ、ローク。そう言えば魔族の事、少しは知っているって言うていたわね？」

「ああ、だが少しだけだよ」

紫忌はそう答えた。少女は特に不審には思わなかったらしい。うなずくと尋ねた。

「名前について何か知っているかしら？ 伯爵はわたしを名前で呼ばないの。『薬師^{くすし}の姫』と呼ばれたわ」

紫忌はまばたいた。兄は本当に、この娘が気に入ったらしい。

「閣下はあんに気に使ったんだよ。魔族は相手の名を呼ぶ事には慎重だから」

「慎重？」

「魔力を持つだろ、魔族つてのは。へたに名を呼ぶと影響が出るんだ。」

『名』というのはそのものを表すから、それだけで一つの魔術。名を呼ぶ事は、支配する事に等しい。

魔族の貴族が肩書や通称で呼ばれるのはその為だ。相手の名を呼ばないというのが、魔族の礼儀なんだよ。

それに魔力を持たない人族の場合、それだけで操られてしまいかねないし」

「それで？ まあ。気をつかってくれていたのね……知らなかったわ。だったらわたし、失礼な事をしたのかしら」

「何かしたの？」

「伯爵を名前で呼んでしまったの」

落ちつこうと思い茶をふくんだ紫忌は、彼女の言葉に中身をもう一度吹き出した。その場で身を丸め、またもや気管に入ってしまった香草茶に苦しみながら咳き込む。慌てた少女はぼろ布を差し出した。受け取って顔を拭くと、涙目になって紫忌は言った。

「呼んだの？ 名前？ 伯爵の？」

「そう呼んでくれて言われたのよ。でもそんな失礼な事だとは思わなかった……」

「呼んでくれて言った！？ 伯爵が！？」

「そう仰せになりました」

声がして、外から半獣族の少年が入ってきた。

「ご主人さま、水を汲み終わりました。外の水瓶に入れています。閣下は……あの。ご主人さまの前に……ひ、ひぎを、つかれて」

思い出すだけで心臓に悪いらしく、ガイリスは青ざめていた。紫忌は顎をがくりと落とした。膝をついた。あの兄が。天上天下唯我独尊、天井知らずの自尊心を誇る、あの兄が。

「ありがとう、ガイリス。疲れたでしょう。あなたもお茶を飲む？」

ユーラはしかし、紫忌の様子には気づかなかった。半獣族の少年に声をかける。彼は首を振った。

「おれはいいです。あの、それより……？」

紫忌の方を見る少年に、ユーラは答えた。

「ロークよ。以前、お友だちを治療して欲しいと連れてきたわ。覚えている？ 種をいただいたの。夕食を食べていつてほしいと招待をした所よ。かまわないでしょう？」

「あの……、はい。ご主人さまがそうお望みなら。では、食事の支度はおれが……」

「あなたはここにいて。仕事を一つ終わらせた所でしょう。わたしがするわ。待っていてね、ローク。すぐだから」

そう言うと、少女は外に出て行った。それを確認してから紫忌は、ガイリスを手招いた。少年は、恐る恐るという風に近寄ってきた。

「坊主。何があつたのか、詳しく話せ」

「は、はい、あの。白男爵さまでいらっしやいますか？」

確認してきた少年に、紫忌は舌打ちをした。

「なんでわかった？」

「最初はわかりませんでした。ただ、人にしては変な匂いが混じっていて。日中でも外を歩ける闇魔族は、男爵さまだけです」

「おかげで 夕闇の と呼ばれてるよ。闇になり切れぬ者という意味さ。あの娘には言うなよ？ まだしばらくは、気楽な身分でいたいんだ」

ガイリスは不安そうな、警戒するような眼差しを紫忌に向けた。

「ご主人さまに危害は加えませんか？」

「尊き兄君に保存のきく食料を贈ってやれって助言したの、誰だと思ってるんだ」

半獣族の少年はそれで納得したらしい。

「闇魔族の貴族さまが、良くこんな事を思いつかれたと思ったんです。道理で」

そう言ってから、「ありがとうございます」と頭を下げた。紫忌は言った。

「次には毛布と毛織の服を贈る言うつくよ。それより、本当なのか？ 兄上が名前を呼ばせたあげくにひざまずいたと言うのは」

ガイリスはうなずいた。思い出したのか、顔が青ざめる。

「本当です……おれ、失神しそうでした」

紫忌は思わずという風に独りごちた。

「闇王 たる兄上が人ごときに」

「ご主人さまは、ただの人ではありません！」

あるじを侮辱されたと思ったのか、ガイリスがきつとした顔になって言った。紫忌はそちらを見やった。

「確かに変だな。おれの護衛二人が、近づけないと抜かした。魔力も矜持^{きやうじ}の高さも、折り紙つきの半獣族がだ。

ひざまずきたくなるんだとき。

強さが全ての種族だろう、おまえたちは。自分より弱い者には決して膝を折らないはず。なのにそれだ。そうしておまえは闇魔族だとわかつているおれに、口答えをする。あるじの為に。

おれがおまえより強い事は、本能でわかるだろうに」

ガイリスは青ざめた。紫忌は少年を見据えた。偽りは許さぬと言う風に。

「おまえのあるじは、何者だ？」

少年は震えた。紫忌は隠していた魔族としての気配を、現していた。人の血を引くとは言え、目の前の男の強さは肌でわかった。彼が本気になったなら、自分などあつという間に殺されてしまうだろう。

「し……、知りません」

彼は怯えつつ、首を振った。

「おれは旅の途中のあの方に命を救われて、ついて行く事に決めた。他は……何も」

紫忌は低く唸った。

「何者なんだ、あの娘は。それに兄上。単に面白がっているだけかと思ったが、ひざまずいただと？ 致命的だぞ。他の貴族に知られれば……」

そこでガイリスをじろりと見やり、彼は言った。

「口外するなよ」

「し、しません」

「おまえのあるじにも、他に話すなと念を押しておけ。いや、おれから話した方がいいか。城に戻ったら、兄上から事の次第を聞き出さないと……」

厳しい顔でつぶやく紫忌だったが、不意にその表情を消した。魔族としての気配が消え、人族然とした印象に戻る。それと同時に少女が家の中に入ってきた。

「待っていてね、すぐできるわ」

野菜と香草、塩漬けの肉を持ってきたユーラは何も知らずに二人に笑いかけ、夕食の支度に取りかかった。

* * *

出された夕食を平らげて礼を述べた後、紫忌は当たり障りのない口調で『貴族の名前』と『ひざまずいて敬意を表した』辺りの話は、他にしない方が良く少女に言った。

「へたな噂が流れたら、伯爵の不利になる。伯爵の場合、人族に対して寛容すぎると配下から突き上げ食ってるところがあるから。何が原因で地位を追われるかわからないんだ」

ユーラはさつと顔を曇らせ、他には話さないと言った。それを確認すると彼は、泊まるようにという彼女の誘いを丁重に断り、急いでレサンの村を離れ、蒼月闇の城に戻った。

「兄上！」

紫忌は城の中を大股に歩きながら氷玉を呼んだ。

「兄上。どちらにおいでですか！」

『部屋だ。そう怒鳴らずとも聞こえている』

落ちついた声が脳裏に響いた。紫忌が氷玉の私室の扉を開けると、そこには紅玉の瞳の、新雪と銀で造り上げたような男が立っていた。当代月牙伯爵、氷玉。

「何用か」

紫忌は臣下の礼を取ると言った。

「今日、レサンの薬師の所へ行きました」

「姫の所へか」

氷玉はやわらかなまなざしになり、頬に微笑を浮かべた。紫忌は眉をひそめた。こんな顔をする兄上は初めてだ。

「そこで信じがたい話を聞きました。あの娘に名を口にする権利を与えたとは、まことですか」

「そっだ」

肯定されて紫忌は、息を飲んだ。

「何をお考えになつて……人ごときに」

「姫への侮辱は許さぬぞ」

厳しい顔になつた氷玉に紫忌は絶句し、ついで息をついた。

「そこまで気に入られたとは。しかし、いけません。このような話が広まれば、兄上の名誉に傷がつきます。支配者たるべき兄上が、はるか下の身分の者に膝を折つた事になる」

「その通りではないか。わたしは自ら姫に恭順きやうじゆんの意を示した」

事も無げに氷玉は言い、紫忌は青ざめた。

「兄上……」

「かの姫にひざまずくは、わが喜び」

「相手は人族です。戯たわむれが過ぎましょう！」

紫忌は怒鳴つた。

「欲しいのであれば、妾妃にすれば良いのです。ですが名を口にする権利を与えたあつては……身分の示しがつきません。謀叛むはんが起きます。」

人族に従う当主など、一族の者は認めません。人の血を引くおれを側に置く事でさえ、あれだけ騒いだのですよ。謀叛が起きなかつたのは、兄上がおれを配下の一人、手駒てこまの一つとして扱っているからです。

けれど人ごときに膝を折つたとなれば……そんな話が広まれば。

一族の者は一斉に反旗を翻すでしょう。当主が誰かに従えば、一族全てがその配下と見なされる。人ごときに従う、そんな屈辱を許せる魔族はいません！」

氷玉は何も言わない。紫忌は言葉を継いだ。

「青闇男爵も氷刃男爵も、表立って逆らいこそしてきませんでした。兄上が当主の座にある事を、内心不満に思っております。火影男爵などは、当主の資格なしと公然と口にはしているという話ではありませんか。」

このような話が漏れればどうなるか。みなここぞとばかり、兄上の首を狙います」

「親愛なる叔父上と叔母上か。あの二人にはわたしを殺すだけの力量はない。火影に至っては、相手をするのも馬鹿馬鹿しいほどだ」

氷玉は口許を歪めて笑った。

「あれらが行動を起こさぬのは、わたしが強いとわかっているからだ。今後が変わらぬ」

「兄上……！」

「それに姫を一目見れば、理由もわかるであろう。そなたにはわからなかったか」

「あの娘が何だと言うのです。おれにはただの娘にしか見えませんでした」

「そなたの半分は人ゆえな」

氷玉は言つと、豪華な椅子に腰かけた。

「紫忌。そなた、われらの事をどれだけ理解している？」

突然変わった話題に紫忌は、まばたいた。

「理解、ですか？」

「なにゆえ闇魔族は、一族当主に忠誠を誓うのだと思う」

物憂げものうつに言つと、月牙伯爵は異母弟を見やった。紫忌は困惑した表情になった。

「当主には、忠誠を誓うものでしょう。逆らえば滅ぼされる。一族当主は、最も強い者がなるのですから……」

「逆だ。己を滅ぼす可能性のある者ゆえに、忠誠を誓うのだ」

氷玉は薄く笑った。紫忌は眉をひそめた。

「同じではないのですか」

「いいや。そなたの魂は健全だな、人の血を引く弟よ。闇魔族としての呪縛に捕らわれぬそなたがわたしはうらやましくもあり、哀れでもある」

氷玉は紫忌を手招いた。紫忌はためらってから近づいた。兄の側に立つ。

「どういう意味ですか」

「そのままだ。紫忌。闇魔族が一族当主に忠誠を誓うのは、当主が己を滅ぼしてくれるやもしれぬという、誘惑に抗えぬからだ」

紫忌は眉を上げた。氷玉は異母弟を見上げると、ほの暗い笑みを浮かべた。

「われらは長く生きる種だ。放っておけばそれこそ、何千年と生き

るであろう。そんなわれらが数百年で命を落とすのは、なぜだと思う。地上がわれらであふれ返らぬのはなぜだ。

簡単な事だ。われらは本来、生命として在ってはならぬ、歪んだ種であるからだ」

「兄上！」

紫忌は驚きの声を上げた。氷玉は続けた。

「存在そのものが歪んでいるのだ、われらは。そうして生れ落ちたその時より、己を滅ぼしたいという願いに縛られ続ける。

いかに強大な力を有する者であろうと、逃れられぬ呪縛。滅びとはわれらにとって、甘美にして抗しがたい誘惑なのだ」

くつくと喉をならして月牙伯爵は笑った。楽しげに。

「ゆえにわれらは滅びをもたらす者に、理屈抜きに魅^ひかれる」

「ほろびを……もたらす者……？」

「かの姫を見た時に、一目でわかった。あれはわれらを滅ぼす力を持って生まれた者。この月牙伯でさえも」

「兄、うえ」

紫忌は息を飲み、力が抜けたようにその場に膝をついた。

「そのような存在とは、おれは知らず……」

「そなたにはわからぬであろう。したがわたしにはわかる。この身を形作る血肉、その一つ一つに刻印されし運命の糸が身を震わせて歡喜に呻^{うめ}いた。姫こそが、わたしを滅ぼす者であると」

「兄上！」

「長年、わたしは戦の場で果てるのだと思っていた」

氷玉は微笑みを顔に浮かべたまま、遠いまなざしで言った。

「わが父がわたしに倒され、祖父が父に倒されたように。わたしの血を引く子のいずれか、あるいはわたしより高位の魔族によって首をはねられるのだと。それも良いと思っていたが……」

月牙伯爵はうろたえた様子の異母弟を見やった。彼の頬に、自分の白い手を添える。

「紫忌。われらは滅ぶ為にこそ生きている」

「わかりません」

「そうであろう。そなたにはな。われらはこの呪縛を愛してさえいるのだから。」

滅びをもたらす者を求めてわれらは、生涯を過ごす。その相手を見つける為だけに生きる。

実に歪んだ種だ。愚かしいまでに。ではないか？」

「兄上は誰よりも強く、賢く、美しい闇魔族です。兄上ほどの方はどこにも……！」

「そなたの人としての血は、わたしには不可解だ。兄弟の絆、^{きずな}家族の絆。そのようなものをわれらは持たぬし、解^{かい}そうとも思わぬ。であるというのにそなたは、わたしにそれらを求め続ける」

氷玉は弟の喉に手を当てた。

「この場でそなたの首をはねる事もできる。そうされたいか？」

「……いいえ」

「わたしに殺されるのは嫌か」

「おれは、死ぬのが怖い。殺されるのが嫌なのです」

氷玉は弟を眺めると、手を引いた。

「人の血の強いことよ」

「以前にも兄上は、そう言われました」

悲しげな目で紫忌は言った。

「それがわかっていてなぜ、おれに貴族の身分を与えられましたか」
「そなたにも、わたしを滅ぼすなにがしかの力を感じたゆえ」

紫忌ははつと息を飲み、兄を見つめた。氷玉は興味を失ったように弟から視線を外すと、椅子に深く沈むようにして座った。

「したがそなたは、わたしを殺そうという気を持たぬ。わたしに挑む気配もない。望むのであれば、殺してやろうとも思ったが」

「兄上……」

「わたしがそなたを哀れと思うのは、この衝動ウレウレを知らぬゆえ」

氷玉は目を閉じて言った。

「己が滅びを狂おしいまでに求める、この衝動をな。それがどれほど甘美であるか、そなたは知らぬ。だがもうそれは言うまい。望むように生きるが良い、弟よ。呪縛に捕らわれぬ闇魔族が、一人ぐらいはいても良い」

紫忌は顔を伏せた。自分を既に亡き者という風に語る兄が信じられなかった。この兄が理解できない事がつらかった。

「おれがもつと闇魔族らしい存在であれば、兄上のお心は安んじていたのでしょうか」

氷玉は笑った。

「殺し合いを始めていたであろうよ。それはそれで、少しは心弾んだであろうが」

「許して下さい。兄上に滅びの運命を近づけた……」

「わたしは喜んでいなのだ、紫忌。これでもうわたしは、待たなくとも良い。他の閻王たちのように気の遠くなる歳月、何千何万という夜をただ、待ち続ける事はないのだから」

「兄上……」

「もう行け。わたしは姫に会う準備をしよう」

その言葉と共に氷玉は手を振って、話の終わりを告げた。紫忌はのろのろと身を起こすと、兄の部屋を退出した。胸が重かった。

（あんな兄上を見るのは初めてだ）

（兄上が滅びるなど……）

（滅びの運命を引き寄せてしまったのか……おれが）

廊下を歩む彼の胸は、後悔で焼かれていた。

（何かあるのではと思った……だが、閻魔族を滅ぼす力を持つとは）

（会わせるのではなかった。あんな娘に）

（千年も生きて大陸を統治するはずの兄上が）

（会わせるのではなかった……！）

「いや、まだ手はある」

足を止めると紫忌は顔を上げ、つぶやいた。

「兄上の身に何かある前に。あの娘を滅ぼしてしまえば良い」

2・廃村の少女 2（後書き）

ここで書くの、少し慣れてきました。最初は何が何だかわからず、かなりうるうる。こうか？ これでいいのか？ なんで空白消えるんだあ。ぐあ。ルビがルビじゃないってかぶつぶつ言いつつガンバッテマス。

3・夜の客人（まろうどん）

夜明けが近い。

蒼月闇そうげつやみの城の奥深く、日の光の届かぬ闇の底で、月牙伯爵げつがは眠りにつこうとしていた。思うのは、彼をとらえた少女の面影。

彫像のように整った美貌に笑みが浮かぶ。

あのような存在がいるとは思ってもいなかった。彼女を見に行つたのは、ただの暇潰ひまつぶしだった。夜から夜へと続く長い生。果てる事のない鬱屈うつくつ。滅びへの憧憬しょうけいは自身をじりじりと焼き続け、それでいて闇魔族としての誇りが劣つた者に倒される事を許さない。

この矛盾むじゆん。この苦しみ。

それをわずかに紛らわせるだけのただの気晴らし。そう思っていたのに。

供も連れず訪れた廃村で、少女は歌っていた。夜の闇をものともせず、自身が太陽のように輝いて。彼女の歌は、力だった。それは繊細せんさいでいて力強く、空間と時を縛り、同時に解放していた。光は彼女自身の内側から、泉のように沸き上がっていた。まるで底がないかのように。

目を奪われた。身動き一つできなかった。見たことのない太陽が、そこにあつた。あの歌。あの力。あの存在。この身を焼く呪わしい光、闇魔族が闇魔族である限り、決して手に入らないもの。それが、そこに。

すぐにわかった。これは自分に滅びをもたらす。滅ぼさねば、自身みづかみが滅びると。

恐怖を感じた。初めて知る感情だった。

殺意あしやが生まれた。自身を脅おごかすこのちっぽけな存在に。

憧れあこがが生じた。この小さな太陽に。

自身に終わりをくれるだろうこの存在にひざまずき、崇めたいと、彼は心の底から願っていた。激しい葛藤^{かつとう}が生じた。身を引き裂かれんばかりのものだった。その時、彼女が歌いやめてこちらを向いた。その瞳が彼を映した時。全てが吹き飛んだ。意地も誇りも、何もかもが。

それでも彼女を殺さねばという小さなささやきが残っていたが、彼女の面に厳しい表情が浮かび、断固とした態度で名乗れと命じられた時に、最後の抵抗も打ち碎かれた。彼は全面的に降伏した。そうして自ら名を捧げ、彼女を自身の支配者と認めたのである。

彼女に名を捧げた事が誇らしい。ひざまずく事に喜びを覚える。こんな自分が不思議だった。かつての自分であれば、あり得ぬと嘲笑^{わら}った事だろう。だが今の彼は、彼女に縛られる事を誇りに思っていた。相手に自ら名を捧げた魔族は、その相手に名を呼ばれるたびに縛られる。彼は数多の魔族たちから名を捧げられた闇魔族であり、決して誰にも縛られてはならぬ存在でもあった。

しかし彼は自ら彼女に名を捧げ、彼女に支配される事を選んだ。彼女に名を呼ばれるたびに、幸福に目の眩^{くら}む思いがする。その手が、自分に触れるのを感じたい。その声が、自分と呼ぶのを聞きたい。微笑んで欲しい。まなざしを、ただ向けて欲しい……。

陽が昇った。闇の中で伯爵は、その気配を感じた。目を閉じる。次に夜が来るまで、自分たちの世界は失せる。

力と長寿を得た代償は、世界の半分を失う事だった。昼の世界を自分たちは知らない。生まれてより滅びる時まで、知る事はない。世界は去ってゆく。意識も、力も、何もかもが。夜が、またやって来るまで。

体が強張り、硬く、重くなつてゆく。ちりちりとした苦痛。ここまでは届かぬはずの陽光を、それでも肌が感じているのだ。

闇魔族としての本能が、世界から意識を切り離す。伯爵は急速に、眠りの中へと落ちていった。

側に、いたい。最後に彼は、そう思った。

1

続く二巡月、闇魔族の馬車がレサンの村に向かうのを、近隣の村人たちは何度も目撃した。月牙伯爵がユーラの元をしばしば訪れ、少女に贈り物をした為だ。

エニ村を始めとする村々では、その事がひそやかに囁かれるようになった。人々は、レサンの薬師が闇魔族の愛人になったの噂（うわさ）した。しかし薬師本人が村にやって来るとみな口を閉ざし、知らぬふりをした。愛想良くふるまいはするものの、決して必要以上に近寄らない。彼女の不興（ふきよう）を買えば、自分たちにも被害が及ぶ。さりとて闇魔族とは関わりたくない。それゆえの対応だった。

闇魔族の愛人となった娘は通常、悲惨な末路をたどる。飽きられて忘れられるなら良い方で、大抵は処刑されるか、配下の半獣族の玩具にされた上で殺された。その際には娘の近親者や親しくしていた者も、一緒に殺される事が多い。

レサンの薬師は村々の間では禁忌（きんき）に似た存在となり、人々はあるべくそちらに目を向けぬよう、近づかぬようにしようとするようになった。

「人が来ないわね」

古びたスパイス挽きで乾いた薬草ハーブを砕きながら、ユーラは言った。小さなすりこぎを木の鉢に押し付けるとき、良い香りが広がる。

エニ村では春の祭りがついこの間、終わった。木々は芽吹き、新たな緑が大地のそこに顔を出す。月がもう二巡りもすれば、夏至しが来る。今使っているのは前の年に収穫した薬草だが、じきに新しいものを使えるようになるだろう。

寒さは日々、緩みつつある。

陽が落ちると冷え込むのは相変わらずだが、ここでは暖かな火が燃えていた。小さな家にはそこら中に薬効のある花や草木が並べられ、あるいは吊り下げられている。

壁には伯爵から贈られた綴れ織りタペストリがかけられ、すきま風を防ぐと共に、家の印象を華やいだものにしていた。分厚い三枚の綴れ織りタペストリは、それぞれが壁を一面覆ってしまうほどに大きく、やわらかな色合いで花や小鳥が織り込まれている。高価な品である事は見ただけでわかった。ちつばけなあばら家にそれは随分すいぶんな贅沢ぜいたくで、少女は今でも見るたびに少し、落ちつかなかった。すきま風は病人の体に障さわるので防ぎたいとは思っていたのだが、布の美しさと上等さが自分にはそぐわない気がする。

「雪で冬に来にくい分、いつもならもっと人が来ているわ。春ですもの。なのに来ない」

手を動かしながら少女は言った。ガイリスが「そうですね」と相づちを打った。

「どうして誰も来ないのだと思う？」

少年は微妙にうるたえた表情になった。

「村へ行くとみんな、愛想は良いのよ。でも影でひそひそ言っているの」

少年は「はあ」とつぶやいた。

「原因があるはずよね？」

「あの……おれ、薪取^{たきぎ}つて来ます」

ガイリスはそそくさとその場を離れた。残された少女は、椅子に腰かけ、悠然^{ゆうぜん}と彼女を眺めている月牙伯爵を睨んだ。

「何だってこう、たびたび来るわけ？ 特に用があるわけでもないのに」

少女にも、村人の態度が彼のせいだという事ぐらいはわかっていた。伯爵はこの所、三日おきぐらいに顔を見せる。そうして夜中過ぎまでここで過ごし、帰って行く。だが特に用があるわけでもない。ここへ来ては彼女の生活を興味深げに眺める。それだけだ。

最初の内こそユーラは訪ねてくる伯爵の為に茶を用意したり、話をしたりしていたのだが、睡眠^{すいみん}が削られる上に、予定している作業も遅れる。という事で、彼女は自分の予定を優先する事にした。彼にはできるだけ、取り合わないようにしている。

なのに彼は、それでも来る。

「用ならあるぞ。そなたに会うという。しかしそなたは、好みが難しいな。どのような品を贈れば喜んでもらえるのだろっ」

伯爵はユーラに山ほどの宝石と豪華な衣装を贈っていた。ここに
来た翌日には届けられるので、都合十回ぐらいは贈られている。だ
が少女はそれらを全て、使いの者に持って帰らせていた。村の薬師
には過ぎた品だと思ったからだ。

「受け取るいわれがないからよ。治療をしたわけでもないのに、報
酬はもらえないわ」

「報酬などではないぞ。似合うと思ったので贈ったのだ」

少女は思わず手を止めた。彼の方を向く。

「わたしを飾って何か楽しいの？」

月牙伯爵は首をかしげた。

「そなたに喜んで欲しかったのだが……」

「受け取れないわ」

「好みがわからぬゆえ、様々なものを贈ったのだが。不快にさせた
事をすまなく思う。より美しいものを探すゆえ、許してほしい」

会話がすれ違っていると少女は思った。

「そうではなくて……わたし、綺麗な衣装や宝石はいらないのよ。
あんなものを身につけて、畑仕事はできないもの」

はつきり言っておいた方が良さだろうと思って言う。

「綴れ織りもありがたかったけれど……もらって良かったのか、今
でも悩むの」

「気に入らなかったのか？」

「うっん、素敵よ。すきま風も防げるし」

そう言うところ伯爵は真面目な顔で、「欲しいのであれば、もっと持つて来る」と言った。少女は苦笑した。

「そんなにあっても、かける所がないわ。うち、狭いから。十分よ。でも気に入って」

「気に入る？ なぜ」

「この織物一枚で、人族の家族が二、三年は暮らせるわ。わたしにとっても高価な物なの。見るたびに何だか気がとがめて」

伯爵は不思議そうな顔になった。

「気に入ったのであれば、取れば良い。やはり気に入らなかったのではないのか」

「気に入っているわ。綺麗なもの」

「ならば……」

「わたしが気にしているのはね。あなたからの贈り物が高価なものだからなの」

伯爵は、わけがわからないという顔になった。

「高価？ これはさほど良い品ではないぞ。そなたには最高級の品を贈りたかったのだが、紫忌が反対したのだ。若い人族の娘には、金銀を織り込み宝石を飾ったものよりも、あつさりとした品の方が良いと」

「弟さんに感謝するわ」

自分の家に宝石のぶら下がった綴れ織りがずらりと並んでいる光

景を想像してしまい、ユーラは思わずそう言った。さぞ見るたびに落ちつかなかった事だろう。

「そなた、宝石が嫌いなのか？」

「見ている分には好きよ。ええと、でもね。どうしてもわたしに贈り物をするの？」

「贈りたいからだ」

「そうなの？ どうして？」

「そなたの喜ぶ顔が見たい」

真面目な顔でそう言った月牙伯爵に、少女はぱちくりとした後、顔を少し赤らめた。

「正直なのね、氷玉。でもそれ、言い方に気をつけないと誤解されるわよ」

「何を誤解するのだ？ わたしはそなたの喜ぶ事がしたい。喜ぶような品を贈りたい。はつきりしているではないか。誤解のしようがないと思うが」

不思議そうに彼は言い、ユーラはさらに顔を赤くした。

「ありがとう。でも人族と魔族とでは習慣が違うの。贈り物はうれしいのだけれど、」

「うれしいと思ってもらえたのか？」

伯爵は顔を輝かせた。ユーラはその顔に気を取られかけたが、慌てて気を引き締めた。

「ええ。あの、……あのね。人族の若い娘は、あまり高価な品物は受け取れないの」

「そうなのか？」

「若い娘は知り合って間もない人からは、高価な品を受け取ってはいけないの。小さなものや、花ならかまわないけれど」

「なぜだ？」

「人がすぐ、増長するからじゃない？」

くすつと笑って少女は言った。

「それに若い娘は、誘惑に弱いわ。綺麗なものや、素敵なものを与える人にはついて行きたくなってしまう。相手がひどい人でもね。それを防ぐ意味があるんじゃないかしら」

伯爵は眉根を寄せて、何か考え込んでいる。ユーラは続けた。

「親や兄弟からならいいの。結婚の約束をした人からもね。それ以外の男性からは、高価な品を受け取ってはいけないの。わかる？」

「良くわからぬ。では、わたしは宝石を贈ってはいけないかったのか？」

「最初に贈ってくれたものは、取ってあるわ。お詫びとお礼の品だと書いてあったから。」

でも後からのものは、受け取れないわ。もらう理由がないのですもの。

第一、あんな高価な品は、わたしには似合わない……」

「そなたは美しいぞ」

伯爵の言葉に少女は言葉を失った。月牙伯爵はごく真面目に、当たり前な事を言うような口調で言った。

「そなたの内には生命が炎のように明るく輝き、息づいている。わたしは見たことがないが、太陽というのはそなたのようであるのだ

ろう。美しいと思う」

ユーラは絶句した。こんな言葉を言われた事はなかったし、相手がすらすると口にした事にも驚いた。

「氷玉……それ、本気で言ってる……？」

「そうだが？」

不思議そうに言われ、ユーラは赤くなつた顔を手で覆つてうつむいた。こんな言葉を聞かされるとは思わなかった。家族を失つて放浪を始めてからは、ぼろをまとい、泥にまみれた姿の自分を好意的な目で見える者は少なかった。ガイリスにしても、好意は口にするが、『美しい』という言葉を使った事はない。

そう言つてくれたのは、もういない人々だけ。

『あんたの母さんは綺麗な人だった。きっとあんたも綺麗になるよ』

そう言つてくれた、ジーナおばば。

『おれたちの可愛いお姫さま』

父親代わりのサットンは、いつも自分をそう呼んだ。

『ユーラお姉ちゃんは、ぼくのお姫さまだよ』

『エミーもおひめさまになる。お姉ちゃんみたいに、おひめさまになる』

マーシュ、エミー。一緒に育つた子どもたち。彼らを失つて以来、そんな言葉は聞かなかった。誰も言つてくれなかった。なのにどうして今ここで、人ではない魔族から、そんな言葉を聞かされるのだ

ろう。

涙が出そうになった。

「どうした。何かあったのか？」

「聞き慣れない言葉を聞いたものだからびっくりして……」

涙をこらえて少女は言った。

「わたしは何か、まずいことを言ったのか」

「いいえ。うれしかったの。ありがとう。でもあなた、口がうまいって言われた事ある？」

「戦上手だと言われた事ならあるが……」

これは闇魔族だ、とユーラは思った。人間ではない。感覚が違うのだ。多分、彼には先ほどの言葉は、あまり意味がないのだろう。

「わたしはそんなに綺麗ではないわよ。綺麗な人なら、魔族にもたくさんいるでしょう」

何とか気持ちを落ちつかせてそう言うと、伯爵は真面目な顔で言った。

「いる事にはいる。だがわたしには、そなたの方が美しく見える」

ユーラはまた顔を赤らめた。うれしいとは思ったが、気恥ずかしさの方が先に立った。自分が綺麗でない事はわかつている。髪はばさばさだし、肌も荒れ放題。ぎすぎすとやせて、女らしい丸みのかけられない。

「やめてちょうだい。わたしなんかにお世辞を言わなくても……」

「世辞？ わたしが言ったのは事実だぞ」

伯爵は心外という顔になった。

「そなたは咲く前のつぼみだ。食べるものが足りておらなんだゆえ、今はやせているが。しかるべき食事をとり、身形みなりを整えれば、そなたが美しい事に誰であれ気づく。わたしは既に気づいているが」

伯爵は立ち上がると、少女の側に歩み寄った。

「ゆえに衣装や飾りを贈った。そなたが喜ぶと思ったのだが……」
「わたし、こういう作業をするから。動きやすい服の方がいいの。結構汚れるのよ」

ユーラは『美しい』云々の言葉は無視する事に決め、テーブルの上に広げられた薬草やスパイス挽きを手で示した。

「あの半獣に任せれば良いではないか」

「これはわたしの仕事よ？ 自分の手でやらなくてどうするの」

ユーラはきつとした顔で言った。伯爵はすまなそうな顔になった。

「すまぬ」

少女は息をついた。つきつい言い方になってしまったと反省する。声の調子をやわらかくして彼女は言った。

「良いのよ。ガイリスは良くやってくれているわ。でも繊細せんさいな作業では少し……、自分の目で確認しないと不安が残るの」

伯爵は肩を落としていたが、うなずいた。それから卓上の薬草を眺め、天井から吊り下げられた草や花を見上げた。

「そなたの仕事というのは、どのようなものなのだ？」

何度もここへ来ているのに、わからなかったのかと少女は思った。だが彼が来るのは夜に限られていたし、治療をしている所を見たわけでもない、思い直した。人族ではないのだし、わからなくても仕方がない。

「薬師の仕事は色々よ。基本は怪我人や、病人を助ける事。弱っている人をね。痛みを和らげる薬を作ったり、相談に乗ったり」

ユーラは答えた。伯爵は尋ねた。

「この草や花にも、何か意味があるのか？」

「乾かしているのよ」

「乾かして、どうするのだ」

「薬にするの。食事を使うものもあるわ」

ユーラは立ち上がると吊るしてある草の方へ行き、説明した。

「これは松や樅の木の樹脂。虫よけになるし、空気を綺麗にしてくれるわ。薄荷ミントは胃の働きを整える。アグリモニーは喉に良いの。傷薬の材料にもなるわ。金盞花マリーゴールドと、夏枯草セルフヒールもね」

月牙伯爵は珍しそうな顔をした。

「人族とは、面白い事をするものだな」

「あなたたちみたいに体が頑丈ではないからよ。ちょっとした事で

すぐ傷ついたり、動かなくなったりするのだもの。だから自然の中で助けてくれるものを探して、使わせてもらうの。感謝の心を持つてね」

少女は言った。

「人は弱いから、助け合わないと生きてゆけないのよ。こうした植物からも、わたしたちは助けてもらって……何をしているの？」

伯爵が干して間もない草の束をいじっているのを見て、ユーラは不審そうな顔になった。すると彼は、その束を差し出した。

「乾かすとは、これぐらいで良いのか？」

まだ瑞々《みずみず》しかったはずの植物の葉が、ぱりぱりに乾いていた。

「どうしたの？ これ」

「水分を抜いた」

驚いて言うと、伯爵が答えた。ユーラは植物に手で触れた。乾ききった植物はもろくも形を崩し、細かな塵ちりになって床に散った。

「乾かしすぎよ。塵になってしまったわ」

「すまぬ。加減が良くわからなかった」

すまなそうな顔になった伯爵に、彼女は苦笑して首を振った。

「いいのよ。どうして急に、こんな事を？」

「そなたの喜ぶ事をしたかったのだが……」

肩を落とした伯爵に、ユーラはすまないような気になった。悪い人（魔族だが）ではないのだ。何度も来るのは困りものだが、薬師という存在が珍しいのだろう。

色々な品物を贈るのも、何か好意を示したいという、単にそれだけの事のようなのだ。高価な品物ばかりだが、彼の身分からするとさしたる出費でもないのだろう。噂になるのは困るが……それだって彼の責任ではない。闇魔族が何かすればどうしたって噂になる。

「気にしないで。薬草はまだあるから」

元気づけるように微笑んで言うと、伯爵は顔を上げた。

「怒っておらぬのか？」

「怒っていないわ。手伝いたいと思ったのでしょうか？ そんな顔をしないで。こっちの薬草でもう一度、やってみてくれる？」

そう言うと、別の一束を渡す。

「形が残るぐらいに乾かせるかしら」

「これぐらいか？」

伯爵は、真剣な顔で薬草に触れた。し損じた分を挽回しようという意気込みが伝わってくる。少女はその様子に笑い出したくなったが、我慢した。伯爵が差し出した薬草に触れ、「もう少し」と言う。

「では、これぐらいか」

「そうね。これぐらいが理想かしら。良く乾いているわ。ありがとう、氷玉」

受け取って礼を言うと、伯爵はうれしそうに微笑んだ。

「他の薬草も、みんな乾かしてやろうか」

「いいえ、今はこれだけでいいわ。できれば自然な状態で乾かしたいから。でも急いで何かを乾かしたい時には、また頼むわね」

そう言うと、伯爵はどことなく誇らしげにっこりし、うなずいた。

（子どもと話をしているみたい……）

ユーラはそう思った。以前にも感じたが、彼の表情は時々、母親やお姉さんに手際をほめられ、得意になっている子どもに似ている。ついっつかり、可愛いと思ってしまいうだった。相手は闇魔族なのに。

「薬師の仕事に興味があるのね」

椅子に戻り、作業を再開する。乾いた薬草を砕き始めると、伯爵が側に来てじっと見つめた。そう言うと伯爵は、うなずいた。

「面白い。今まで気に留めた事もなかったのだが。それは何になるのだ」

「軟膏よ。これと他の材料を合わせて、葡萄酒と一緒に油に混ぜるの。沸騰させてから漉して、同じ事を何回かくり返して出来上がり。三日はかかるけれど、長持ちするわ。」

蒸留して成分を取り出す方法もあるけれど、わたしはそのやり方を知らないの。設備もないし」

手を止めて、ユーラは息をついた。

「学んでみたいけれど、この辺りでは知識を持っている人がいないし」

「なぜだ？」

「薬師自体、数が少ないのよ。魔族も半獣族も、治療師を嫌っているから」

少女は「あなたは違うみたいだけれど」と言ってから続けた。

「不興を買えば真先に殺されてしまう存在なのよ、治療師は。だからみんな、隠れてばらばらに暮らしている。

そんな状態だから、誰かが優れた技術を編み出しても、伝わらずに消えてしまう事が多いの。

どれだけの知識が消えてしまったのか、考えると悔しくなるわ。それがあれば、どれだけの人が助かったのかと思うと。薬師が表立って活動できる場所があれば。集まって知識を交換したり、教えられる場所が、一つでもあれば……」

少女はため息をつく、と、作業に戻った。ていねいに薬草を砕いてゆく。

「砕くのは、成分が良く溶け出すようによ」

手元を眺める伯爵に、彼女は説明した。

「わたしに教えてくれたジーナおばは、そう言っていたわ。感謝する心を込めて薬草を砕き、神聖なものを扱っていると思いな^{がちよう}がら鷺鳥や、牛の油を扱えって。

どれも自分の命をわたしたちに捧げてくれた。だから、粗末には決してするなと。

厳しかったけれど、本当の意味で優しい人だった。あの人がいなければ、わたしは今ここにこうしていないわ」

少女の手元を見つめていた伯爵は、「呪いまじなのようだな」と言った。

「まじない？ 何が」

「死んだ動物から取り出した油に、植物の残骸ざんがいを混ぜて煮る。呪いのようだ」

少女は妙な顔になった。

「その言い方だとわたし、すごく怪しいものを作っているみたいじゃない……ただの薬よ。指のひびわれに塗ったら楽になるわ」

そこで少女は言葉を止めた。伯爵が彼女の手を取り、指先を眺めたからだ。畑仕事や家事をする彼女の手は、爪がぎざぎざになって泥が入り込み、節も目立っている。指先には、治りきらないあかぎれ。その様を見、「荒れているな」と伯爵はつぶやいた。自分の手のありさまはわかっていたので、ユーラは少しきつい口調で言った。

「当たり前でしょう、働いているんだもの」

「痛むのか？」

「それは、痛むわ。でもこれぐらいは……」

伯爵がつらそうな顔になったので、ユーラは言葉を止めた。

「氷玉？ なんて顔をしてるの」

「わたしには、他者の傷を癒す力がない」

「知っているわ。闇魔族は魔力を持っているけれど、治癒に関する力は持たないって。それがどうか？」

「あれば良いのと思ったのだ」

「何が？」

「傷を癒す力が」

そう言うつと伯爵は身を屈め、少女の指先に口づけた。少女は驚いたが、あまりにも自然に行われたので止められなかった。ひんやりとした闇魔族特有の体温を、彼女は手首と指先に感じた。そこから伝わる、彼からの気づかいを。心配してくれているのだ、と彼女は思った。態度は少し、妙だが。

伯爵が何事もなかったかのように身を起こした後は、何か言うのも変な気がして、少女は手を引っ込めるのみにとどめた。伯爵は残念そうな顔をしたが、少女の手を放した。

「大丈夫よ。軟膏ができたら指に塗るから。そうしたらすぐに治るわ」

少し気恥ずかしかったが、少女は何でもない風を装って言った。

「癒すのはわたしの仕事よ。あなたが傷ついたなら、その時には薬を持って行くわ」

「薬？」

「ええ。闇魔族にも薬草は効くかしら？」

伯爵は、周囲の薬草をちらと見た。

「ここにある植物はどれも、われらに何の影響も与えない。だがあなたがその手で作り上げた物であれば、効果はあるやもしれぬ」

「どういう意味？」

「われらには大抵の毒は効かぬし、薬もおそらくは同様であろう。したがわれらは身の内に力を持つ者。ゆえにそなたがその手で選び、

作り上げた物には影響されよう。そなたの作る物には、そなたの思いがあるゆえ」

「心がこもっているから？ 闇魔族の薬を作る時には、腹を立ててちやいけないのね」

少女は伯爵の言葉を世辞の類と受け止めた。くすくす笑うと、スパイス挽きでの作業に戻る。

「何だか信じられないわ。闇魔族にも、あなたみたいな人がいるのね」

少女は言った。伯爵は眉を上げた。

「わたしがどうかしたか？」

「話していると、楽しいわ」

実際、そうだった。ユーラは彼との会話を楽しんでた。彼はまるで子どものように、何にでも興味を示す。その姿を見ているのも楽しかった。

伯爵は驚いた顔になり、ついで破顔^{はがん}した。

「そうか」

「不愉快な人ばかり見てきたから、闇魔族は。あんまり細かくなつてないわねえ……」

手を止めてそう言うと、伯爵が「代わろう」と言って手を出してきた。少女は椅子を譲ると彼の側に立った。

「ありがとう。細かくすり潰^{つぶ}してくれる？ ていねいにね」
「む？」

伯爵は慎重に薬草をすり潰し始めたが、ほどなくして妙な音がし、手の中で鉢とすりこぎが砕けた。壊れた道具を彼は、途方に暮れた顔で見つめた。力を入れすぎたらしい。

「……すまぬ」

少女もさすがに呆気にとられた。だがすぐに、意気消沈している伯爵に気づいた。悪気があってした事ではないのだ。息をついてから、なぐさめるように肩を叩く。

「良いのよ。力が強すぎるのも大変ね」

「つい力が入った。慣れぬもので……」

「やった事がないのだから。仕方がないわ。古かったから、弱くなっていたし」

「これと同じものを届けさせる」

「そうしてもらえるとありがたいわ」

少女の笑みに、伯爵は力強く言った。

「すぐに探させる」

うなずいたユーラだったが、闇魔族や半獣族たちのやり方を今まで見えてきているので、釘をさすのは忘れなかった。

「でも氷玉。誰かから取り上げるような真似はしないでね」

「取り上げる？」

「わたしと同じように薬を作っている人なら、こうした道具は持っているわ。料理が上手な主婦も持っていると思う。でもそういう人たちは、必要があつて使っているの。取り上げて持つて来るのは駄

目よ。その人たちが困るから」

「しかし、そなたも困るのではないか」

伯爵の言葉に、少女は厳しい顔になった。

「薬師の所には怪我人や病人が来るわ。薬が不足した時に追加が作れなかったら、その人たちが死んでしまうかもしれないでしょう。」

お料理をする人も、取り上げられたら家族全員が困るわよ。うちには今の所、訪れる人はほとんどいないし。すり潰す以外の作業なら問題なくできるわ。しばらくは大丈夫」

伯爵は思案した後、うなずいた。

「商われている物を探させよう。だがこれで、そなたは軟膏が作れなくなった」

「何とかするわ」

「すまぬ」

もう一度詫びて、伯爵は少女の手を取った。

「わたしは城を砕く事も、大地を割る事もできる。だがそなたの傷一つ、なおすことができぬ。力など、あっても何の意味もないな」
「あればあったで役には立つわよ。さっき薬草を乾かしてくれたでしょう？ 洗濯物がたくさんある時は、あなたを呼ぶわね」

微笑んでユーラは言った。伯爵は、どこかまぶしげにその笑みを見つめた。

「そなたは強いな」

「ないこと尽くしてやってきたからよ。工夫するしか仕方ないでし

よ
」

「あのう……、お茶が入りました」

そこでびくびくした感じでガイリスが言った。伯爵と少女は暖炉の方を振り向いた。少年はとうの昔に戻ってきており、今までお茶の支度をしていた。声をかける機会をずっと、待っていたらしい。

「ありがとう。今日は何のお茶？」

「干したイラクサネットルの葉に、詰め草クロハーと薄荷を刻み入れました」
「良さそうね。氷玉、お茶にしましょう」

伯爵に声をかけると、少女は暖炉の側へ行った。後に続いた伯爵に椅子を勧め、自分もガイリスが用意してくれた椅子に座る。

「これにも、何か効果があるのか？」

渡された香草茶ティザンを見て伯爵が尋ねる。

「嗜好品嗜好品みたいなものよ。イラクサの葉は体を強くすると言われるけれど。合わせる薬草ハーブや分量を、色々試しているの」

伯爵は香りを確かめるようにした。少女は渡された茶碗を、礼を言って受け取った。

「ありがとう、ガイリス。良い香りだね。氷玉。闇魔族にはお茶を飲む習慣はないの？」

「葡萄酒ワインならば、たまに」

彼女はどんな品を贈れば喜んでくれるのだろっ、と伯爵は思った。草や花の茶が嗜好品。宝石や絹は喜ばない。今まで知っていた女性

たちは豪華な衣装や宝石を喜んだので、そのつもりで贈っていたが、人族の若い娘にそうした品を贈ってはいけないのだとは知らなかった。小さなものとは何だろう、と彼女の言葉を思い返す。薬師は植物を扱う者のようだ。植物に関した品を贈った方が良いのだろうか……。

「先ほどそなたは知識の散逸さんいつを嘆いていたが……書を読む事は好きか？」

思いついて彼は尋ねた。

「好きよ。旅暮らしではそんな贅沢ぜいたくはできなかったけれど……何か本があるの？」

目を輝かせた少女に、間違っではいなかったと思い、伯爵はうなずいた。

「城に書籍を集めた部屋がある。薬草に関したものもあるはずだ。読みたいのであれば、持って来よう」

「まあ。うれしい。薬草に関したものでなくても良いわ。わたし、本が読みたいの。昔、物語の本を持っていたわ。母が良く読んでくれて。とても好きだった。表紙がぼろぼろになっても、ずっと持っていた……」

彼女は遠い目になった。

「その書物は、どうしたのだ」

伯爵の言葉にユーラは一瞬、苦しげな顔になった。だがすぐにその表情を消した。

「ずっと旅をしてきたでしょう。途中でなくしてしまったの」
「そうか……」

伯爵は彼女の表情が気になったが、言いたくないのだろうと思い、その事は問わず、代わりにこう言った。

「わたしの配下にアロンという、水の民の男がいる。過去の出来事や書籍に関し、情熱を注いでいる。そなたの助けになるだろう」

「ありがとう。本を貸してもらえるなんて思わなかった……」

「気に入ったものがあれば、取るが良い」

贈り物のつもりだったので、この言葉は彼にとっては当然のものだった。しかし彼女は、思いも寄らない事を言った。

「それは駄目よ。そのアロンという人も怒るわ。本は大切な物ですもの」

伯爵はまばたいた。どういう事だろう。大切な物は、欲しい物ではないのか？

「欲しくはないのか？」

「欲しいけれど」

「では、なぜ欲しがらぬ」

「大切だからよ」

「大切な物は、自分の物にしたいものではないのか？」

「そうだけれど……本は、書物は、そういう意味ではなくて大事だから。ええと」

少女は説明しようとして、首をかしげた。伯爵は、彼女の言葉を

待った。

「書物は時を越えるものよ」

彼女は考え考えという風に言った。

「わたしたちが生まれる以前からある書物は、わたしたちがいなくなった後にも残る。過去にあった事を未来につなげてゆく手がかりでもあるの。だから……持っている人は、次の世代にきちんと渡す義務があるの。そこにあるのは、単に文字というわけではないから」

少女はまっすぐに伯爵を見た。その視線に伯爵は、息が止まるのではないかと思った。とても真剣なまなざしだった。

「その時代の熱のかけら、名前も知られず消えていった人々の声が、書物には織り込まれている。書物を開く時、わたしたちは彼らの人生を受け取っているのよ。あなたの所に書物が集まっているのなら、それを大事に伝えてゆかなければならないわ」

少女はそこで顔を赤くし、「演説みたい。ちょっと恥ずかしいわね」と言った。

「とにかく、本を持っている人は少ないから。新しい本は、一文字一文字写さないといけないし。だから、一冊がとても貴重なの。簡単に人にあげたりしては駄目よ」

伯爵は彼女の言葉の意味を考えた。

「では……そなたが欲しいと思ったものを写させよう。新しく書物を作らせ、それを贈る事にする。それなら良いか？」

そう言うと、少女は目を丸くした。

「大変な手間よ。お金もかかるし」

書物を新たに作らせようとすると、壁にある綴れ織りどころではない。それ以上の金銭がかかる。彼女としては、持っている物を大切にしろと言いたかったただけだったのだ。

「わたしはそなたの喜ぶ物を、そなたに贈りたいのだ」

伯爵の言葉に少女は困惑の表情になった。

「でもわたし、……どうして？」

この言葉に伯爵は、人族と魔族の違いを思った。彼女が人族としても、とても若いのだという事も。魔族の娘なら、意味を取り違える事はない。名を捧げる意味もわかるはずだ。だが彼女は魔族ではなく、人族としてもごく若い。説明せねばならないらしい。

「姫。そなたはここで、わたしを迎えてくれる。声をかけてくれる。わたしにはそれが、何よりもうれしいのだ。ゆえにそなたに何かを贈りたいと思う」

そう言った彼だったが、そこで不安になった。彼女が自分から何も受け取ろうとしないのは、自分を嫌っているからではないか。人族は、魔族を嫌う。

「わたしには、それぐらいしかできぬのだ。それでも駄目か？ わたしからの品は……そなたには厭^{いと}わしいか？」

恐る恐る言う。

「受け取らぬのは、わたしを厭^{いと}うているからか？」

ユーラは伯爵の言葉にきよとした。なぜそんな言葉が出てくるのかわからない。

「嫌っている人と、お茶を飲もうなんて思わないわ」

そう言うのと彼がともうれしそうな顔になったので、逆に気がとがめた。贈り物を断った事で、不安にさせていたのだ。

（人族と関わる事なんか、あまりないでしょうし……。感謝とか好意とか、どう表したら良いのかわからなかったのね）

少女は思った。

「わたしの所に来るの、楽しいの？」

尋ねると、伯爵はうなずいた。

「あんまりかまってあげていないのに？　今も放っておいて、薬を作っていたけれど」

「そなたは好きに振る舞うが良い。わたしもそなたの邪魔をしたくはない。わたしがそなたに願う事は、ここに……そなたの側にいる事を許してもらいたい。それだけだ」

伯爵の言葉に少女は「そう」と言った。

（弟さんの面倒を見て、領地の事にも気を使って。息抜きがしたい時もあるわよね。闇魔族の日常とか、家族関係って見当もつかないけれど）

「贈り物を少し控えてくれるなら、良いわよ。この辺りで噂になっているの。闇魔族の馬車がうろろろしてるって。村の人が怖がってしまつて、ここまで来ないのよ。これでは仕事にならないわ」

「そうか」

「来る時に手土産てみやげを持ってきてくれるのなら、それは受け取るわ。一緒に飲む為のお茶とか、食材とか、花束とかね。手で持てるぐらいの物。」

本の事だけれど。わたし、本は好きよ。あなたがきちんと管理して、残してくれるのならうれしいわ。わたしに何か贈ってくれるのも。でもどれが良いのかわからないから、最初は何冊か貸してね。読んでみるから」

伯爵はうなずいた。

「では一度、わたしの城に来てはどうか。書物を見せよう。アロンとも話してみると良い。そなたが興味を持ちそうなものを探し出してくるはずだ。止めなければ書物について、一晩中でも熱弁を振るう男だが」

ユーラはふと、表情を曇らせた。

「どんな所なの？」

「月光と闇の満ちる、決して陽光が差し込む事のない城だ。蒼月闇そうげつやみの城と呼ばれている」

「蒼月闇……蒼い月の城なのね。薔薇ばらは咲いているのかしら」

「薔薇か？　あまりなかったように思う。望むのであれば、取り寄

せるが」

「いいえ、違うの。薔薇は……見たくない」

少女は青ざめていた。

「花に罪はないわ。昔は好きだった。でも今は、見ていたくないの。いつかは……平気になると思っただけねど……」

膝の上で組んだ手が、微かに震えている。握りしめた、指の関節が白い。伯爵はその様を眺めていたが、静かに言った。

「月光花は咲いている。月の光を宿す花だ。そなたの髪に挿せば、映えるであろうよ」

少女は顔を上げた。血の気が少し、戻っていた。

「女性にはいつも、そんな事を言うの？」

「そなたにだけだ」

伯爵はそう言って微笑んだ。

「城に来るのは気が進まぬか。闇魔族の居城では、無理もなかつた」
「そうではないの。いえ……多分、そう」

気まづげな顔になって、少女は言った。

「ごめんなさい。何だか怖くて」

「わたしはそなたを食しはせぬし、夜ごと城の床を血に染めているわけでもないぞ」

ユーラは妙な顔になった。

「なに？ それ」

「紫忌がな。人族の村人がそう話していたのを聞いたのだ。われらは人族を、生きたまま頭からかじるのだそうだ。どうすればそんな事ができるのかわからぬが」

それは多分、人族の母親が、子どもをしつける為に言ったのだらうと少女は思った。

「そんな事思っていない……シ……ええと、白男爵^{はく}、だったわね。弟さんは」

名前を呼ばないという闇魔族の習慣を思い出し、ユーラは発音する事を避けた。伯爵がうなずいたのを見て、言葉を継ぐ。

「彼は人族とは親しいの？」

「あれは人と交わる事を好んでいる」

「闇魔族にしては珍しいわ……」

「魔族としての力はほとんど振るえぬ。幼いころは人として過ごしていた」

「そう。だからなのね。そんな弟さんとあなたは暮らしている。あなたが変わっているのは、そのせいかしら」

「そうかもしれないな。おかげで一族の者からは、奇矯^{ききょう}な当主と言われている」

「人からも同族からも変だと言われるのなら、筋金入り^{すじがねい}というわけね」

ユーラは微笑んだ。表情が和らいでいた。

「でもわたしは、そんなあなたの方が良いわ」

その言葉を聞いた瞬間、伯爵は自身の心臓がおかしくなったかと思っただ。何かに貫かれた気がした。同時に、胸の奥で何かが弾けている、とも。熱のようなものが、今も泡のように弾けている。

これは、何だ。この熱さは。この衝撃は。

逆らえない。誰も逆らえはしない。これほどまでの力を持つ、この少女には。言葉一つ、微笑み一つで、闇王 たる自分の心臓をおかしくする。身が震える、と彼は思った。目の前の少女にひざまずいて、その服の裾に口づけたいとも。目の奥が熱い。何かが内からあふれだしそうだった。

ああ、だが、彼女は、誰かをひざまずかせるのは嫌だと言っていた……。

「氷玉？　どうかした？」

黙ってしまった伯爵に、ユーラは不思議そうな顔になった。伯爵は胸の奥から沸き上がる熱さに押されるようにして微笑み、彼女を不快にさせないよう、ひざまずきたい衝動を抑え、軽く頭を下げるに止めた。

「感謝する。その一言で、どのような非難も消え失せる」

本心からの言葉だった。

少女は伯爵の中で起きた変化に気づく風もなく微笑み、首を振った。

「思った事を言っただけよ。やっぱりあなた、女性に対して口がうまいと思うわ」

「そなたにだけだ」

伯爵はもう一度言った。

「このような事を言うのは。そなたにだけだ……」

* * *

伯爵は、真夜中を過ぎるころに帰って行った。ユーラはそれから軟膏^{なんこう}作りに取りかかった。手伝おうというガイリスに、一通りやったら終わりにするから寝るようにと告げると、彼女は作業にかかった。

すりこぎの壊れていない部分を手に取り、大きめの碗を使って荒く薬草を挽^ひく。だがどうかすると気が散って、手が止まりそうになる。こうした事を教えてくれたのは全て、ジーナおばだった。村から村、町から町へと移動する生活。彼女たちは定住しない、芸人の一座だった。歌や踊りを見せて彼らは生活していた。それほど大きな一座ではなかったが、出向いた先では歓迎されていた。ジーナは一座の薬師であり、賢女——指導者の一人でもあった。

『薬を作る時には、感謝の祈りを 癒し手 の神に捧げなさい。心を込めて作るんだよ』

彼女はそう言った。

『聖なるエリザの名において、おまえの手と心が治療のわざを正しく成すように。慈しみの心を忘れるんじゃないよ。その心がなければ』

ばどんな優れた治療のわざも、力をなくす』

『物語を覚えなさい。物語を語る者は、世界を制する事ができる。おまえが誰かを癒したいなら、このわざをも学ばねば』

『ユーラお姉ちゃん、お話、して』

子どもたちの声が耳の底によみがえる。

『おれの可愛いお姫さま！ 今日のご機嫌はいかがかね』

『ユーラ。もう少し、歌ったり踊ったりした方がいいぞ。引っ込んでばかりじゃ、なまっ白くなっちまう。ほら、外で遊んできな』

『リボンだよ。可愛くしないとね、女の子なんだから……』

『音楽だ！ 回ってごらん。そら、一、二』

『マーシュがあたしのパンを取った！』

『ちがうよ、ヒューイがやったんだよ』

いつも陽気に笑っていた人々。

少女は手を止めると、静かに涙した。忘れたふりをしてきた日々を、彼女は今、思い出していた。伯爵との会話がきつかけだった。彼が見せた気づかいは、かつての家族たちを彷彿とさせた。なぜかはわからない。だが彼との会話は、失った人々の思い出をよみがえらせた。

生きる為に、あえて記憶の底に沈めた。思い出せば失ったつらさに、一歩も進めなくなるだろうと。それでいて心の底ですつと自分を温めていた、宝物のような思い出。

これ以上は駄目だと彼女は思った。思い出してはいけない。生きてゆけなくなってしまう。

あふれ出ようとする思い出を胸の内に閉じ込めると、少女は作業を再開した。静かな夜は嫌いだと彼女は思った。こんなに静かだから、思い出してしまうのだ。彼らの優しさを。微笑みを。痛みを覚えるほど、鮮やかに。

3・夜の客人 2

2

数日して、伯爵はユーラの家を訪れた。少女はショールを羽織り、髪をきちんとこした姿で出迎えた。ただ顔色はすぐれなかった。目の下にくまができており、元気がない。伯爵はその様子に眉を寄せた。

「いらつしゃい、氷玉」

「スパイス挽きは届いたか？ 人族の商人に命じておいたのだが」

「受け取ったわ。ありがとう。でもあなた、随分怖がらせたみたいよ。可哀相なぐらいびくびくしていたもの。もう代金はもらったと言つて、品物を見せてくれたけれど……」

「高価な品は駄目だと言つたであろう？ 小さなものと言われても、良くわからなくてな。人族の商人ならわかるだろうと思つたのだ」

伯爵はそう言ってから、「壊した詫びだ」と付け加えた。

「このショールをもらつたわ。ありがとう。布と針も。糸も一巻き。それで十分と言つたのに、あの人、他にも色々置いていつたの」

伯爵は、少女の羽織っているショールに目をやった。太い毛糸で編まれたそれは野暮ったく、さほど美しくもなかった。だが少女はそれを、大切そうに扱っていた。

「もらいすぎの気がして、軟膏^{なんこう}を渡したの。ここまで来てくれたお礼に。他の予定を全部取りやめにして来てくれたのですもの」

「そなたの欲しかった物は、そのシヨールや、布や針なのか？」

「ええ、このシヨールは暖かいわ。布は二巻きももらってしまつて新しい服が仕立てられるわ。櫛くしもいただいたわ。指ぬきも」

「櫛と指ぬき……」

伯爵はそれが何か不思議な呪文であるかのようにつぶやきつつ、家に入った。

「これをそなたに」

家に入った伯爵は、二冊の本をテーブルの上に置いた。

「貸していただけるの？」

少女は本の側に近寄ると、表紙を眺めた。伯爵は少女の目に輝きが宿ったのを見て、自身の中に小さな熱が生まれたのを感じた。不思議な事ばかりだと彼は思った。彼女と共にいると、熱を感じる。泡が弾けるようなくすぐったさが、胸の内に生まれる。

「うむ。現代語で書かれているゆえ、そなたにも読めるのではとアロンが言っていた。民話のたぐいと植物についての解説だ。そなたの役に立ちそうか？」

「読んでみるわ」

少女のまなざしは本から離れない。読みたくてたまらないようだ。伯爵は彼女に見つめられる書物に、軽い嫉妬を覚えた。

「ありがとう、氷玉。アロンにも感謝していますと伝えてね。うれ

しいわ。ここに置いていては汚れてしまっわね。向こうに……」

ユーラはいとおしげに表紙を撫で、本を抱えようとした。しかし伯爵は背後に控えていたガイリスに目をやると言った。

「そのの。何をしている。これ運べ。姫の手を煩わせるでない」
「これぐらい平気よ」

本には重みがあつたが、持てないほどではない。そう思ったユーラだったが、伯爵は首を振った。

「あれはその為にいる。それにそなた、この所眠っておらぬだろう」
「眠っているわ。どうしてそんな事を？」

「そなたの生気に曇りがある。その輝きが陰っている。何かあつたのではないか」

少女は目を丸くした。

「闇魔族は、人を生気で見るの？」

「わたしは何かを見る時、そのものを見る。形ではなく。そなたには今、影がある」

伯爵の言葉に少女はため息をついた。

「魔族には、隠し事ができないのね。でも大した事ではないわ」

「失礼ながら、ご主人さま。その言葉はご自身の状態を、正確に把握しているとは言いかねます。ご主人さまはこの所、食事をほとんど召し上がらないではありませんか」

本を受け取っていたガイリスが、思わずという風に言った。少女

は「食べているわ」と言ったが、伯爵は少年に目をやって尋ねた。

「姫は食事をしておらぬのか」

少年は一礼してから答えた。

「量が半分に減っています。夜も閣下のおっしゃった通り、あまり眠っておられません」

「眠っているわよ」

「夜通し寝返りを打っておいでした。眠ったのは朝がたに、ほんの少し」

「どうして知っているのよ……」

「半獣の民は耳が良い。気配にも敏感だ。あるじの様子に注意を払わぬしもべはおらぬ。わからぬ方がどうかしている」

「本当に、大した事はないのよ。少し、思い出した事があって……何だか眠れなかったの。食欲も、その内に元に戻るわ」

そう言いつつも、少女の顔色はどこか冴えなかった。

半獣族の少年は湯を沸かし、さわやかな香りの茶を淹れた。少女はどうしても本が気になるらしく、ガイリスが本を置いた場所に行つてばらばらとページをめくっていた。やがて少年に呼ばれ、少女は伯爵の方に戻ってきた。

「ありがとう。とても良い香り」

ガイリスから渡された茶碗を、少女は礼を言って受け取った。伯爵も受け取る。

「氷玉。本の表紙の裏に、何かの書き付けがあるのだけれど。あれは何？」

ユーラの言葉に伯爵は眉を上げた。

「わたしは知らぬが。そのような物があつたのか」

「ガイリス、植物の本はわかる？ 持ってきてもらえるかしら」

少年はすぐに本を持ってきた。

「ありがとう。ええと……これ。とても綺麗な書体だけれど、わたしには読めないわ」

少女は本の表紙の裏に隠すようにして入れてあつた紙片を取り出し、伯爵に手渡した。月牙伯爵は内容に目を通すと言った。

「貴族の文字だな。古代語だ。古い時代の詩人の作を写したものだ。祖父の書いたものかもしれない。こうしたものを好んでいたゆえ」

「お祖父さま……どんな方だったの？」

「蒼禍そつかと言った。雪月せつげつの字あざなを持ち、深遠しんえんたる美の君 と称されていた。強い魔力を持つ美しい男であつたらしい。

ただ話を聞く限り、変わり者であつた。闇魔族らしからぬ振る舞いに耽ひたっていたと……わが一族にはそういう者が多く出るようだ」

苦笑めいたものを伯爵は頬に登らせた。

「きっと、あなたに似ていたのね」

少女が言い、伯爵は彼女を見やった。

「人族にもそういう事はあるわ。親に似ていなくても、祖父や祖母に似ているの。闇魔族はあまり知らないけれど、あなたの事は嫌いじゃないわ。魔族としては変わっている所が、わたしには何だか安心できるの。雪月の君にも一度、会ってみたかったわね」

伯爵は目を伏せると、頭を軽く下げる仕種をした。感謝すると言いたげに。

「この詩はどうする。良ければ訳すが」
「聞いてみたいわ」

少女の言葉に伯爵はうなずくと、書かれた詩を現代の言葉に訳しながら読み始めた。なめらかで良く響く低音の声は心地良く、少女は耳を傾けた。その目が次第に丸くなる。

恋の詩だったのだ。

言葉を尽くして恋人をほめたたえる詩は、伯爵の声で聞かされるとかなり気恥ずかしかった。まるで自分がそう言われているように聞こえる。

「氷玉……それ本当に、あなたのお祖父さまの書かれたものなの？」

朗読が終わったのでそう尋ねると、「そのようだ」との返事が返ってきた。

「こういうものを愛好したのは祖父だけだ。何度も取り出して眺めた跡もある。気に入っていたのだろう」

それは確かに、戦を好む闇魔族としては変わっている。

「どなたか、そういう方がいらしたのかしら」

「どうであろう。単に言葉の響きが気に入っていたのやもしれぬ…
最後にまだ続きがある。別の詩人の言葉のようだ」

伯爵はその部分を読み上げた。

「闇の中で耳をすます　いくたびも

優しき死神に恋焦がれ

うるわしき彼の名を、いくたりもの言葉で飾って呼んだ

そして願う　静寂の内にわが息を止めよ

夢か幻か

歌声は消えはてた

こは眠りの中か　それともわれは目覚めているのか」

読み終わると伯爵は、口許をわずかに歪めた。

「随分と感傷的だ。美しい死神に息の根を止められる夢とは」

「何かのたとえだと思っけれど……死を歌ったものではないと思う
わ」

「そなたにはそうであろう。だがわれらには、この言葉の意味は一
つだ」

伯爵は紙片を折りたたむと、ユーラにそれを差し出した。少女はどうしようという風に眺めてから、それを元通りに本にはさんだ。

「姫。われらには、眠りはあるが夢はない。夢というものをわたしは、見た事がないのだ。祖父はこの詩人の言葉に、手に入らぬものを重ねたのであろうよ」

まだ見ぬ己を滅ぼす者を。伯爵は胸の内でそうつぶやいた。

「夢が、ない……？」

少女は驚いた顔になった。伯爵はうなずいた。

「われらにあるのは現実の世界のみ。幻を操る事はあるが、夢は見ることができぬ。そのようにできている」

「魔族はみな、そうなの……？」

「闇魔族はそうだ。他の魔の民はどうかわからぬ。気にした事はなかったゆえ」

「つらいわね」

伯爵は驚いて少女を見た。少女は言った。

「夢は、心を傷つける事もあるけれど。傷ついた痛みを忘れさせてくれるものでもあるわ。前に進む力を与えてくれるものでもある」

「そうか」

「厳しい事もあるけれど、安らがせてもくれる。人族にとつては友のようなものよ。失ったら多分、生きてはゆけないわ」

「ではそなたに夢が訪れる事を、わたしは喜ばしく思おう。そなたはどのような夢を見るのだ？」

「色々よ。大抵はたわいのない事。昔あった出来事や、もう会えなくなった人を見る事もあるわ。そんな夢を見た後は、少しつらい」

少女は答えた。伯爵はそんな彼女を見つめていたが、静かに問う

た。

「そなたが夜、眠れないのはそうした夢が訪れるからか？」

この言葉に、少女は体を強張こわばらせた。だがすぐに力を抜き、目を伏せる。

「そうよ。この所、思い出すの。昔の思い出を。目覚めると、つらくて……これ以上は尋ねないで。話したくないの」

少女の言葉に、伯爵はうなずいた。しばらく沈黙が流れる。

「あなたの城は、……どこにあるの？」

やがてユーラが言った。話題を変えようと思ったのだろう。伯爵は答えた。

「月牙げつがの森、氷霧ひんつむの湖うみのほとりだ。黒竜こくりゅうの峰みねを越えた向こうになる」

この言葉に、少女は目を丸くした。

「黒竜山脈の事？　すごく遠いわよ。あれを越えてって……あなた今まで、そこからここまで来ていたの？　ずっと？」

遠方にある山々を思い浮かべ、少女は驚きを隠せない顔で言った。伯爵は微笑んだ。

「遠くはない。この村より少し離れた場所に、道を通してある」

「道を……通す？」

「空間をつなぐのだ。さすれば距離は、なきに等しいものとなる」

伯爵の言う事は良くわからなかったが、何かの術らしいという事はわかった。

「それ……大変じゃないの？」

「手間は少しばかりかかったが。ここまで駆けるよりは楽だ。夜毎にここまで駆ける事は、さすがにわたしにも大仕事だ」

「それはそうでしょうけど……夜毎？ 毎晩来るつもりだったの、うちに？」

この言葉は何の気なしに言ったものだった。本気でそう思っていたわけではなかったのだ。しかし伯爵は珍しく、迂闊な事を言ったという顔になって口をつぐんだ。少女は不審に思った。

「氷玉？ どうしてそんな顔をしているの。何か隠しているみたい」「いや……」

伯爵はうつろたえたような顔をしている。思いついて、少女は尋ねた。

「まさか、毎晩ここまで来ていた……とか言わないわよね」

月牙伯爵は視線をそらした。

「そうなの？」

ユーラが強い口調で言うと、伯爵は進退窮まったという顔になった。口をつぐんだまま、視線を泳がせている。

「ご主人さま。お代わりは……」

伯爵の苦境を少しでも救おうとしたのだろうか。ガイリスが遠慮がちに口をはさんだ。少女は「もう良いわ」と言ってから気がついたという顔になり、少年の方に向き直った。

「ガイリス。あなたならわかるでしょう。伯爵は毎晩来ていたの？
あの晩以来」

少年は傍目^{はため}にも、びくついた顔になった。

「答えて。来ていたの？」

彼は青ざめ、冷や汗を流し、口を開いたり閉じたりした。その後伯爵の方を見ないようにしながら蚊の鳴くような声で、「おいででした」と言った。

「どうしてわたしに教えなかったの！」

「か、閣下は、密やかにおいででしたので。おれごときが口をはさめるわけもなく」

少女は伯爵の方を向いた。伯爵は渋い顔で、空になった茶碗を指でもてあそんでいた。

「毎晩何をしていたの。うちの側で」

「ずばりと尋ねる。」

「来ていたのでしょうか？ なぜ扉を叩かなかったの。わたし、来た人を一晩中外に立たせておくほど情け知らずじゃないわよ」

伯爵が意外そうな顔になり、少女を見つめた。ユーラは自分の言葉が出会った時の態度とかみ合わない事に気づき、顔を赤らめた。

「最初に会った時には、そうね。ちょっと……ひどい事をしてしまったけれど。それにいつも歓迎はできないわ。わたしにも予定があるし。でもその時にはそう言うから。来た時は、扉を叩いて声をかけてちょうだい」

「そなたがそれで良いのなら」

伯爵は神妙な顔をして言った。

「ええ、そうして」

少女はうなずき、言葉を継いだ。

「それで、まだ返事をもらっていないのだけれど。毎晩外で何をしていたの？」

伯爵は詰まった。しばらく沈黙していたが、やがて重い口を開き、答えた。

「考えていた」

「なにを」

「そなたの事を。そなたはわたしを嫌がっていた。贈り物も気に入らぬようであつたし。それで……訪ねると、迷惑かと思つたのだ」

語られる言葉は多くはない。少女は辛抱強くそれを聞いた。

「迷惑な時はそう言うわ。それで？」

「嫌われるのではないかと……扉を叩くのがどうにも……決心がつ

かず」

ぼそぼそと伯爵が言い、ユーラは眉根を寄せた。自分はそんなに恐ろしげな印象を彼に与えてしまっていたのだろうか。

「決心がつかなくて、迷っていた？」

「うむ。それで、そなたの家を眺めていた。灯が消えて、静かになるのを見て、そなたは眠りについたのだと思い……、そうなる扉を叩くわけにもゆかず」

礼儀は一応心得ているのだと、少女は思った。

「そなたの安らぎを破るまいと。そのような真似をするものが寄りぬよう、周囲を見張った。しかしそなたが目を覚まし、外に出てくるのではないかという思いを捨てきる事もできず。そうこうしている内に夜明けが……」

「一晩中悩んでたの？ 外に立つたまま？」

この闇魔族は変だ。少女は思った。その思いが顔にも出たらしい。伯爵は何やら、居心地悪そうな顔になった。

「そなたを悩ませる気はなかった。すまぬ」

「この所、三日に一度は来ていたわよね。残り二日は外でずっと立っていたの？」

「うむ」

「夜通しずっと？ 大丈夫だったの？」

この言葉に、伯爵は表情を明るくした。

「わたしを案じてくれるのか？」

「当たり前でしょう。この辺りの夜は寒いよ。人間だったら体を悪くしているわ。ねえ、でも、扉を叩くのに二日も悩まないといけないぐらい勇気がいったの？ そんな怖い所なの、わたしの家は」

伯爵は慌てた様子で答えた。

「そうではない。わたしに意気地いけじがなかったただけだ。そなたに嫌われるのではないかと思うと……足が前に進まなかった」

最後の辺りは身を小さくし、元気がなかった。どこか情けない表情をしている。それを見ている内にユーラは、自分が相手をいじめたような気がしてきた。

（闇魔族なのだけれど……それはわかっているのだけれど……）

こんなにしよげた顔をされてしまうと、強い態度に出られない。最初に彼を門前払いにしようとしたのは確かだし、それで扉を叩くのに躊躇ちゅうしゆするようになったと言うのなら……自分にも責任がある。それにしても月牙伯爵げつがはくしゃくが、これほどまで人間じみているとは知らなかった。

「氷玉ひよこ。あのね」

少女は子どもに対するように穏やかな態度を心がけ、声をかけた。伯爵は顔を上げた。

「わたしは人族の時間に生きているから、昼間働いて夜には眠るの。だからあなたが来ても、疲れていて相手のできない時もあるわ。一晩中、相手もできない。眠らないといけないから。それはわかってもらえるかしら」

ゆつくりとかみ砕くように説明すると、彼はうなずいた。

「わかる」

「毎晩来られると確かにわたしも大変だわ。だからあなたが三日に一度にしてくれたのは、良かったと思う」

「……そうか」

「ただ、あなたに色々と気を使わせてしまったのは、わたしの最初の態度が原因だと思うから。それは悪かったと思っているの。ごめんなさいね」

「そなたは悪くない。姫。そなたはわたしに、どのような事でも命じる事ができる。わたしの名はそなたのもの。ゆえにそなたがわたしに何を言おうと、何をしようとそれは、正しくそなたの権利なのだ」

少女は困った顔になった。

「闇魔族にとつての名前がどういうものなのか、わたしは知らない。権利って？」

「わたしはそなたを尊重したい。ゆえに名を捧げた」

「捧げる？ でもそれは……、わたし、あなたの名を呼んではいけなかったの？」

すると伯爵は、ひどく悲しげな顔になった。

「捧げられた名を拒む事もできる。そなたはそうしたいか？」

何かあるような気がして、少女は慎重に尋ねた。

「拒んだら、どうなるの」

「どうもならない。そなたが拒むのであれば、それもそなたの権利だ」

少女は困惑の表情になり、ガイリスの方を見やった。部屋の隅で小さくなっていた少年は、視線を受けて少女の方に進み出た。

「魔族の方々にとって、自分の名を明かす事は、相手に自分の命を預けると宣言しているようなものなんです」

彼は気を使った風に、抑えた声で説明した。

「相手から明かされた名を拒むという事は、大変な失礼に当たります。人間風に言うなら、『顔も見たくない、おまえには生きている価値もない』と言ったのと同じです」

少女は啞然となった。彼の名を呼ぶ事に、そんな意味があるとは知らなかった。

「そんなに大変な事だったの？ わたし……ああ、もう。氷玉。あなた、わたしに命を預けるような真似をしていたの？」

少女が伯爵の方を向くと、伯爵はうなずいた。

「そなたは尊重されねばならぬ存在だ」

「どうしろって言うのよ。わたし、ただの薬師くすりなのに」

「何でも」

伯爵は言った。

「そなたには何であれ、わたしに命じる権限がある。そなたがそう

であるよう、わたしが望んでその権利をそなたに捧げた。そうではなければならなかったからだ」

「いらないわよ、そんな権利」

眉をひそめて少女は、伯爵の言葉をばつさりと切り捨てた。自分の知らない内に命を捧げるような誓約せいやくをされていた事に衝撃を受けていたし、そんな権利を行使しろと言い張る伯爵に腹を立てていたのだ。彼女は伯爵を、友人と感じるようになっていた。なのに、彼はそうではなかった。相手の命を行使する権利。自分を尊重する為にと彼は言ったが、友人関係にそんなものが必要なはずがない。

「お茶をちょうだい。喉が乾いたわ」

持っていた茶碗をガイリスの方に差し出すと、彼は「お待ちを」と言つて受け取り、あたふたしながら暖炉に向かった。伯爵は『いない』と言われた衝撃に固まっていたが、恐る恐るという風に尋ねた。

「名を、拒むという事か？」

「あなたの事は嫌いじゃないわ」

強い口調で少女はきつぱりと言つた。伯爵はまばたいた。胸の奥で何かが弾けた気がしたのだ。

「そうか」

「馬鹿みたいに不器用なんだもの。人族の薬師ごときに頭を下げて外ですつと立ちっぱなしで。名前まで明かしたりして。命を預けるですって？ 本当に馬鹿よ、あなたは！」

言つごとに、少女の語調は強くなった。自分の命を軽んじるよう

な真似をする伯爵に対して、とにかく腹が立っていた。命を預けるような真似を、なぜするのだ。自分ごときに。

伯爵は戸惑った顔になった。相手がなぜ怒るのかわからなかった。

「何を怒っているのだ」

「怒りたいからよ！ 権利ですって？」

少女は立ち上がると伯爵の顔を見据えた。怒りに頬を染めているその表情を、伯爵は美しいと思った。

「だったらわたしが死ぬと言ったら、あなたは死ぬの？」

「そなたの望みであれば」

半ば見とれながら伯爵が答えた。本心だった。しかしその言葉は少女の逆鱗に触れた。

「望むわけないでしょう！」

その声と共に音がした。伯爵はまばたいた。自分の頬が少女の平手で叩かれた事に、しばらくしてからようやく気づく。

「ご、ご主人さま……」

がしゃんという音がして、茶碗が床に落ちて割れた。ガイリスは震え上がっていた。闇魔族の貴族を少女が殴るという暴挙を、まともに見てしまった為だ。

「望まぬのか」

伯爵はひどく落ちついて見えた。実際には少くない衝撃を覚え

ていたのだが、どんな反応をすれば良いのかわからなかったのだ。少女にはしかし、その態度も怒りに火を注ぐ結果になったらしい。

「当たり前でしょう、わたしを何だと思っているの。わたしが何をしていると。わたしの仕事を何だと思っているのっ！」

拳を握りしめる。本気で怒っているのが見てとれた。その手が少し赤くなっているのを見て、傷めなかっただろうかと伯爵は場違いな心配をした。

「薬師、だな」

「傷ついた者を助けるのがわたしの仕事よ。人を生かすのが。助けられなかった人たちを、どんな思いで見送って来たと……命が消えてゆくのをみるのがどれほどつらいか……、そのわたしがどうして誰かの死を願ったりするのよ！ わたし、あなたのこと結構好きだと思ってたのよ。なのに、何なのよそれは！」

叫ぶように言うと少女は唇を噛んだ。不意に、ひどく疲れた顔になる。伯爵から離れ、彼女は背を向けた。月牙伯爵は椅子から立ち上がり、少女に手を伸ばした。

「姫」

困惑していたが、最後の言葉に彼は、幸福を感じていた。

「触らないで」

そう言われ、伸ばした手を宙で止める。少女は背を向けたまま、ため息をついた。

「馬鹿な事をしたわ。八つ当たりなの。ごめんなさい。疲れているのね。何だかかっとしてしまっ……」

「そなたは悪くない。わたしが不適當な事を言った」

「あなた、魔族ですもの。人や薬師の事、わからなくて当たり前だわ」

「姫。こちらを向いてくれ」

その言葉に自分を拒絶されたような気がした。背を向けられているのにも不安を覚え、伯爵は言った。少女はしかし首を振り、うつむいて手で顔を覆った。

「今、ひどい顔をしているから……」

激した感情が去った後は、自己嫌悪が彼女を襲っていた。自分が惨め^{みじ}で、涙が出る。彼の言葉は彼女の傷をえぐった。彼のせいではない。それはわかっていたのに……。

『ユーラ。あんたは生き延びろ』

『振り向くんじゃない、可愛い子。誰を犠牲にしても生きるんだ、いいね？ あんたは最後の癒し手^{すえ}の末裔。最後に残されたあたしたちの希望……』

今も耳に残る、彼らの声。そうまでされる価値が、自分のどこにあつたと言うのか。

こんな自分の、どこに。

伯爵は背を向けたままの少女に、どうすればという顔でガイリスを見やった。少年は二人を見比べると、後をお願いしますと言うように頭をぺこりと下げ、その場を離れた。残された伯爵は困った顔をしていたが、少女に近寄ると、恐る恐るという風に言った。

「なぜ泣く」

「泣いてなんかいないわ」

声音には嗚咽おえつが混じっており、明らかに嘘だった。だが伯爵は、
「そうか」と言っただけだった。

「自分が情けないのよ」

「自分が？」

「逃げてばかりで」

少女はつぶやくように言った。伯爵は今までの彼女の言動を思い
浮かべ、何をどう逃げたのだろうと訝しく思った。

「そなたは逃げたのか？」

「そうよ。あなたに腹を立てて」

それがどうして逃げる事になるのだろう、と伯爵は思った。

「腹が立ったのは本当よ。あなたが、あんまり馬鹿な事をするから
……」

「馬鹿な事？」

「わたしなんかに命を預けるなんて言うんですもの！ それに……、
死ぬ事をあんまり軽く言うものだから……」

薬師というのは命を大切にすること、伯爵にもおぼろに
わかりかけていた。なぜそんな事をする必要があるのかは理解でき
ないが、そういうものらしい。

この少女は自分の仕事に誇りを持っている。自分の言動に命を軽
んじていると感じ、それで憤りを覚えたのだろうと伯爵は思った。
誰であれ、自身の仕事を軽んじられるような言動を取る者を見れ

ば、それは腹が立つだろうとも。

「すまぬ」

詫びの言葉を口にする。それは少女の感情を傷つけてしまった事への詫びだった。不安だった。彼女が二度とこちらを見てくれないのではないかという気がして。

少女は背を向けたまま続けた。

「わたしなんか……。あなた、もう少し自分を大切にしないと駄目よ」

「自分を？」

伯爵は少女の言葉の意味を考え、目を丸くした。

「姫。そなたが怒ったのは……。その、違っていたらすまぬのだが。わたしの為を思ってたののか？」

少女は一瞬、沈黙してから答えた。

「そうよ。大事に思っている相手の命を、使い捨てるなんて、言われてもできないわ。あなたは闇魔族の貴族。ここの領主よ。なのに人族の薬師なんかに頭を下げて……。どうしてそんな、馬鹿な真似をするの」

伯爵は微笑んだ。不安と困惑は消えていた。代わって何かが胸の奥ではじけた。小さな何かがいくつもはじけ、体中に広がってゆく。それが何であるのか、彼にはわからなかった。だが不快ではなかった。抑えようとしても、笑みが自然と頬に浮かぶ。

「わたしは、何よりも正しい行いをしたと思っている」

そう言うと、少女の肩が揺れた。

「わたしはそなたに敬意を払いたいのだ。ゆえに名を捧げた。愚かな行為と誇る者^{そし}もいよう。だがわたしは、この愚かさを誇りに思っている。後悔はない」

不思議だと彼は思った。こんな事を自分が口にする時が来るなど、思ってもみなかった。誇り高い自分が、他者にひざまずく事を誇りに思う、などと。

だが彼は今、真実そう思っていた。

少女はゆるゆると首を振った。

「敬意を払われるような存在ではないわ、わたしは。あなたに怒る事で、自分の問題から逃げたのだから。見なければならぬ事から目をそらして……」

「そなたの問題？」

少女はうなだれた。話したくないようだった。そんな少女を見ている内に、伯爵の中でまた変化が起こった。何かが胸の奥を締めつけているような、不安。

彼女に悲しんでほしくない。その輝きを曇らせたくない。微笑んでいてほしい。苦しむ姿は見たくない……。胸が。痛む。

「逃げてても良いのではないか」

伯爵は、静かに言った。少女の肩が、ぴくりと揺れた。

「そんな時もあるう。ならばそれは、それで良いではないか」
「逃げての良い……？」

少女は振り向いて、伯爵の方を見た。頬には涙があり、目も鼻も赤くなっていた。それでもそんな少女を、伯爵は美しいと思った。彼女の中には命が輝いている。自分たち闇魔族が、はるか昔に失ってしまった輝き。

胸の奥で、また何かはじける。少女がこちらを見た事で、自分を見てくれた事で……何かがはじけて広がってゆく。

「闇魔族が……逃げると言うの？ あなた方は、どんな敵に出会っても決して退かないのを誇りにしているのではなかった？」

その通りだと伯爵は思った。闇魔族は戦いに生きる。敵を前にして逃げるなど、誇りが許さない。

だが自分は既に、愚かと言われる選択をした。戦にも、闇魔族としての名誉にも、もはや心は動かない。

そんな自分が不思議であり、哀れであり、誇らしくもあった。名誉が何だと言うのだらう。わたしの名誉など、塵のようなものだ。目の前にいるこの姫が存在する奇跡に比べれば。

「たまには良からう。逃げる事が最良の手段である事もある。そんなが逃げたいのであれば、逃げて良い。そう思う」

伯爵がそう言うと、少女はまばたいた。沈黙が流れる。彼女の不興を買ったかと、月牙伯爵は不安になった。だがそうではなかった。少女は伯爵の言葉にただ、驚いていた。

やがて少女は、口を開いた。

「あなた、本当に変だわ。事情も知らずに断言して、……わたしの

知っている闇魔族と、全、然ちが……」

そこで少女の目に涙があふれた。伯爵から顔をそむけ、背を向ける。

伯爵は立ち尽くしていた。どうすれば良いのかわからなかったのだ。何をして少女の目から、涙をぬぐい去る事はできそうになかった。自分の言動が、ひどく愚かで無骨なものに思えた。それで黙って少女の背を眺め、彼女が何か言うのを待った。

少女は静かに泣いた。声を立てる事を自分に許さぬかのように。細くはあったがいつもは弱さなど感じさせない背が、頼り無げに見える。やがて彼女は伯爵に背を向けたまま、小さな声で言った。

「薔薇が咲いていたわ」

伯爵は少女を見つめた。少女は続けた。

「わたしの家族が……死んだ時。薔薇が咲いていたの」

「そうか」

「ひどい……ありさまだった。みんな焼かれて……わたし、わたしは」

少女は腕で自分自身を抱きしめた。

「助けられなかった。誰も。誰ひとり」

彼女が震えているのに伯爵は気づいた。

「みんなわたしを信頼していたのに」

「姫」

「なのにわたしは、助けられなかった。誰ひとり！ 逃げたのよ」

「姫」

少女の震えは止まらない。自身の体を抱きしめ、絞り出すような声で彼女は続けた。

「逃げたの、わたしは。あれ以来逃げ続けている。こんな自分が嫌でたまらない。でも薔薇を見ると身がすくむ。わたしは……自分の義務からも逃げているの。こんなわたしは嫌い。卑怯で、臆病で、」
「誇り高く、美しい」

伯爵が静かに言った。

「そなたは得難い宝のような女性だ。その心は黄金に勝り、高潔で優しく勇気がある」

少女の体の震えが止まった。だが彼女は、のろのろと首を振った。

「わたしはそんな者ではないわ」

「間違いなくそなたはそういう存在だ。わたしにはそれがわかる」

伯爵は少女の側に歩み寄り、ためらいがちにそつと肩を抱いた。彼女の言葉に逆らう事になるが、必要な気がしたのだ。

「己を責めるでない。いかに腕の良い薬師でも、死者を甦らせる事はできぬ」

「わたしのせいなの」

「死は誰にも平等に訪れるもの。そなたのせいなどであるものか」

「いいえ。わたしのせいなの。わたしが、治療をする事を知られて

……」

少女はうなだれた。伯爵は得心した。治療を行う者は、迫害の対象とされる。

「狩られたのか」

「わたし以外はみんな」

力なく言うと、少女は手で顔を覆った。新たな涙があふれ落ちた。苦しい。胸が痛い。息ができない。思い出がよみがえる……よみがえってしまふ。

「ほんの小さな子どもすら、許されなかつ……」

伯爵は少女を自分の胸に抱き寄せた。少女は彼の胸にもたれ、低く嗚咽をもらした。脳裏にあの光景がよみがえる。焼け落ちた幌馬車しやんがいの残骸。燃やされた小さな体。見せしめに晒さらされた首……愛していた者たちの。

薔薇が咲いていた。真紅の薔薇が。くすぶる煙の匂いがまだ残る。その場所に、血のように赤い花びらが舞っていた。風の中に。

ガイリスが戻った時、伯爵は少女を腕に抱いて立っていた。あるじである少女は彼にもたれ、その胸に顔を伏せている。お邪魔かと少年は踵きびすを返そうとしたが、その前に伯爵に声をかけられた。

「待て、半獣の。姫の寝所はどこだ」

「え、あ？ 寝ていらっしやる……ので？」

声をひそめて尋ねると、伯爵はうなずいた。

「話している内に、眠ってしまった」

「すぐに用意いたします」

ガイリスは足音を立てぬよう、そっと歩いて家の奥の仕切りの方へ行った。布が一枚吊るしてあるだけのそこには、少女の寢床があった。藁わらを集めて敷布をかけ、毛布を広げただけの粗末なものだったが。

ガイリスは敷布や毛布を整えると、暖炉の方へ行き、火箸ひしを使って焼けた煉瓦れんがを取り出した。ぼろ布で手際てきわ良くくるむと、温かいそれを毛布と敷布の間に入れ、何度か行き来させた後、足が来るだろう辺りに置く。

「用意できました」

言われて伯爵は、少女を抱き上げた。起こさないよう気をつけながら、できるだけそっと歩いて少女を運ぶ。

「その煉瓦は、何の為だ」

「人族の体には、寒さがこたえます。とてももろい体をしていますから。今の時期でも、人族には寒いのです。少しでも暖かくお過ごし願えればと思って、覚えました」

ガイリスは答えた。

「おれは弱い半獣です。人族並だと良く言われました。ずっとそれが嫌でした。でも今では良かったと思っています。ご主人さまのつらさが少しはわかりますから……」

「そうか」

伯爵は少年をうらやましいと思った。彼女のつらさは自分には、わからない。

「毛布は今少し入り用か？」

「あと二枚ほどいただければ、ありがたく思います。ご主人さまは何もおっしゃいませんが、たまに寒そうにしておいでで」

ガイリスの言葉にうなずくと、伯爵は片膝をついて少女を寢床に寝かせ、靴をぬがせてやり、毛布をそっとかけた。その上に自分のマントをさらにかける。

「ないよりはましであろう」

つぶやくように言うと、眠る少女を見つめる。少女の頬には涙の跡が残っていた。伯爵は少女に手を伸ばした。頬に触れようとしてためらい、指を止める。結局触れずに彼は、手を引いた。そのまましばらく少女を見つめていたが、やがて小さく息をついた。

「薔薇が咲いていたと言っていた」

「は？」

「薔薇がな。そう言って泣いた」

月牙伯爵はガイリスの方を見た。

「そのほうは、姫の事情を知っているのか」

「い、いえ。おれは、ご主人さまが旅をされていた頃に拾っていたので。それより前に、どこで何があったのかは」

「そうか。姫を苦しめた輩は、一人残らず引き裂いてやろうと思っ

ただがな」

「ご主人さまを、苦しめた……？」

「そのほうのあるじは、重荷を負っているようだ。わたしにも詳しくはわからぬが。義務から逃げたと言っていたが。何の事だ」

ガイリスは首を振った。

「わかりません。ただこの方を誰かが苦しめたのであれば、おれはその誰かを許しません」

伯爵はこの言葉を聞いて微かに笑った。

「半獣ごときがこのわたしを差し置いて、良く言う。それはわたしのすべき事。そのほうは姫の側で、姫を守れ。姫が健やかにあれよう、心を配るが良い」

「は、はい」

ガイリスは背筋を伸ばした。伯爵はしかし、少年の方を見てもいなかった。眠る少女に視線を戻し、見つめている。

「荒野に咲く花のようだ。繊細で、もろくはかない。だと言うのに、吹く風に向かって顔を上げる。まだ、つぼみだが」

伯爵は微笑んだ。自分では気づいていなかったのだろうが、その笑みはひどく優しいものだった。

「良き夢がそなたを訪れるように。わたしはそなたを風からも嵐からも守ってみせよう。わが姫よ」

3・夜の客人 2（後書き）

……伯爵さま。それではス。ーカー……。

朗読していた詩は、ジョン・キーツ（John Keats）「夜
鳴鶯の賦（Ode to a Nightingale）」からの
引用です。ちょーっと、いや、かなり？ 意識きみ。

3・夜の客人 3

3

闇の中、レサンの村から少し離れた丘に、三つの人影があつた。一人は渡りの傭兵の姿をした男。闇魔族の血を引きながら、人族としての特徴を持つ紫忌である。

「兄上は、あの娘の側か」

レサンの村の方角を眺めながら、紫忌がいらだたしげに言った。彼の側には黒髪にぬめるような白い肌の妖艶な女性と、赤い髪に褐色の肌の猛々《ただけ》しい女戦士がいた。どちらも人族の姿だが、半獣族である。ただしガイリスとは違い、彼女たちは自身の持つ魔力で人族に擬態していた。本来の姿はいずれも、人とはかなり違っている。

「銀月の君は心を奪われておいでのよう。わたくしもどうかすると崇拜する事を許していただきたいと願い出たくなりますわ」

黒髪の女性が言い、赤髪の女戦士が続ける。

「わが君。われらのつとめはあなたを護る事です。なのにあの姫を見ていると、それが頭から飛びそうになる」

二人の名は、黒髪の方がイリリア、赤い髪の方がアルシナ。紫忌の護衛である。人の血を引く紫忌に忠誠を誓った為、半獣族の中でも変わり種扱いされている。

「あの娘はそれほどの魔力を持つのか」

紫忌の言葉にアルシナが答えた。

「魔力ではありません。それはわかる。ただ逆らえない」

「魔力でないのなら、何だ」

「わかりません。逆らえない力。そうとしか言えないのです」

「ではなぜおれは平気なんだ。兄上ですら影響されているのに……」

イリリアが、紫忌に目を向けた。

「推測すいそくですけれど、あの姫は向き合う者の魔力に何か、影響を与えるのでは」

「魔力？」

「わたくしもアルシナも、そこそこの魔力は持っております。無論、魔族の方々とは比べ物にはなりません。それでも魔力と呼べるものです。銀月の君はもちろん、魔族の中でも最強の御方……」。

それです。思ったのですが、強い魔力を持つ者ほど、あの方の前では無力になるのではないのでしょうか。

閣下が影響を受けないのは……お許し下さいませ。母君さまより受け継がれた血のせいではないかと。この近隣の卑しき人族は、あの方に敬意らしき敬意も払っておりません」

「人の血が？」

紫忌は顔をしかめた。イリリアは頭を垂れて「お許し下さいませ」ともう一度言った。アルシナも居心地悪そうな顔になっている。

「かまわん、イリリア。アルシナもそんな顔をするな。おれの中に人の血が混じっているのは事実だから。魔力もない」

「ないのではありません。閣下の内には魔力があります。ただ……、」

紫忌は皮肉な笑みを浮かべた。

「使えないだけ、か？ 人の血の混じった体では、闇魔族の魔力に耐えられん。使おうとすれば体が弾け飛ぶ。持っていても使えないなら、持たないのと同じだろう」

「違いますわ。わたくしたちは、閣下の力を感じて忠誠を誓ったのですもの」

イリリアは言った。アルシナが続ける。

「そうです。あなたこそが、わがあるじ。われらの才、われらの力、血肉の一片まであなたのものとしてお使い下さい」

紫忌は二人を見つめ、微笑した。

「つくづく貧乏籤びんぼうくじを引くのが好きだな、おまえたち。おれについて来たって、良い事はないぞ。だが……感謝する」

二人は頬を染めた。あるじにこうして声をかけてもらえる、これほどの幸運があるだろうか。闇魔族に忠誠を誓った半獣族は普通、駒扱いされて省みられる事もない。だが紫忌は、二人をきちんと見て声をかけてくれる。

「後悔はありません」

アルシナが言った。イリリアもうなずく。

「当然の事を言っただけですわ……あら。銀月の君と姫君が、抱き合ってますわ」

村の方に目を向けたイリリアが言った。紫忌の眉が上がる。彼は腕を伸ばしてイリリアをつかむと、自分の方へ引き寄せた。

「兄上は何をしている」

「今、お見せします」

イリリアが、白い指で紫忌の額に触れる。彼の脳裏に、レサン村の風景が浮かんだ。その一角にある小さな家。薬草の束が吊るされ、暖炉には火が燃えている。

兄の姿がある。薬師の少女の姿も。

二人は恋人同志のように抱き合っていた。

（兄上……）

紫忌は驚いた。少女を見下ろす兄の顔に、優しい微笑があつたからだ。まるで……、

ごく普通の男のような。

そこで映像は途切れ、イリリアの指が離れた。

「銀月の君があんな顔をされるなんて。あの姫を妾妃めかけに迎えらるのでしょうか」

紫忌はいらだたしげに眉をしかめた。

「妾妃なら良い。他の貴族も抑えられる。だが兄上はあの娘に、名を呼ぶ権利を与えた」

二人は顔を見合わせた。紫忌は続けた。

「人族の娘にだぞ。月牙当主^{げつが}が膝を折るような相手か。この話を聞けば、どの貴族もそう思うだろう」

「綺羅月^{きろつき}の君か氷魅^{ひょうみ}の御方あたりが、何か仕かけてくると？」

「青闇^{あおやみ}も氷刃^{ひょうじん}も、乱^{らん}を起こす理由をずっと探していた。兄上は既に、おれという異分子^{ふいふしん}を懷^{いだ}に抱え込んでいる。ここでまた、人の娘に名を呼ぶ権利を与えたと知れてみる。どうしても戦を起こす方向へ持つて行かれる。それは止めねばならん。いざとなればあの娘を殺しても」

「わが君！」

「閣下、なんという事を！」

二人は衝撃を受けた顔になった。

「あの姫に危害を加える事は許されません。それだけは、なりません」

「秩序が崩れます！」

「何の秩序だ。人族ごときが死んだ所で、何が崩れる。おまえたちは、おれの配下ではなかったのか。おれの言葉になぜ逆らう？」

「そうです。われらはあなたのもの。ですがそれだけはなりません！」

アルシナが必死の形相で言った。イリリアが続ける。

「あの姫は人族です。ですが……人族ではありません。おそらくは何か、違うものです。それはわれらも、魔族の方々すら手を出してはならぬもの」

紫忌は「ほう」とつぶやいた。

「人であり、人でない。何なのだ？」

「わかりません。ですが、あの姫に手出しをする事はありません……！」

二人の配下がこれほど強硬に反対するのは、初めての事だった。紫忌は二人を見つめていたが、やがて肩をすくめた。

「とりあえずは様子を見よう。今夜は戻る。おまえたちは他の貴族の動向を探れ」

二人はほっとした顔になり、頭を垂れた。紫忌に従って歩き出す。紫忌は歩きながら心の中で思った。いざとなればおれ一人でも、あの娘は殺せる、と。

* * *

日差し of 気配を感じて、少女は目を開けた。久しぶりに良く眠った気がする。身を起こすと、黒い布がすべり落ちた。紅玉と金剛石^{ルビーダイヤモンド}が縫い止めてあるそれは、月牙伯爵のマントだった。

頭が重い、と少女は思った。目の奥が痛い。泣いたせいだ。マントに触れ、なぜここにこんな物がと思う。そうして自分はいつ寢床に入ったのだろうかと不思議に思った。昨夜は確か、伯爵と話していた……。

少女の顔が赤くなった。伯爵の前で泣いた事を思い出したのだ。それだけでも恥ずかしいのに、その後の記憶がない。という事は。

「いやだ。わたし、眠ってしまったの？」

赤くなつた顔を手で覆う。

「人前で泣いただけでも恥ずかしいのに。八つ当たりしたあげくに何をしているのよ、わたしったら。ああもう、恥ずかしい」

真つ赤になつてぶつぶつ言っていると、ガイリスの声がした。

「ご主人さま。お目覚めですか」

少女は声のした方を見た。仕切りの布ごしに、誰かのいる気配が伝わってくる。

「よろしければ、スープをお持ちします」

常と変わらない彼の声に、少女はなぜか、ほっとした。

「いえ、起きるわ。随分寝てしまったの？」

「そうですねえ、太陽は真上に来てます」

「そんなに？」

少女は慌てて服のしわを伸ばし、髪を一つにくくり、靴をはいて布を引いた。暖炉の火の熱が伝わってきた。鍋の中のスープをかきまわしていたガイリスが、こちらを向いた。

「ゆつくりお休みになれましたか」

「こんなに眠るつもりじゃなかったのに」

半獣族の少年は、うろたえた様子の少女に微笑みかけた。

「お疲れだったのでしょうか。ご主人さまのお体は、人族と同じで強くはありません。おれも気をつけてはいるのですが、わからない所もあります。休みたい時には、気にせず休んで下さい」

少女は落ちてきた髪をかきあげた。そこでまぶたや頬のはれぼったさに、改めて気づく。

「顔を洗ってくるわ」

そう言うと、少女は家の外に出た。

太陽は、真上にあつた。鶏がこつこつと鳴く声が聞こえ、山羊やロバが草を食んでいるのが見えた。畑の側には桶とひしゃくが置いてあり、抜かれた雑草が集められていた。日差しが暖かい。こんな風に明るい日差しの中にと、全てが夢のような気がする。こんな夜の静寂も、暗さも。ここにいる自分自身すら。

（でもわたしは存在しているし、夜も在る）

夜を体現したかのような美しい闇魔族の容貌を思い出し、少女は居心地悪げな顔になった。昨夜何があつたのか、ガイリスに尋ねてみなければならぬ。

家に戻ると、ガイリスは暖炉の火を小さくし、スープを碗にしていた。

「仕事を全部やらせてしまったのね」

少女が言つと、彼は笑みを見せた。

「平気ですよ。鶏や山羊の世話も覚えまし。こういう仕事はおれに任せて下さい。ご主人さまはもう少し、楽をしないとダメです」
「十分、楽をさせてもらっているわ。あなた良く働いてくれるし……ありがとう」

差し出された碗を受け取った少女に、彼は言った。

「そんな指をしているの？ おれ、これでも半獣の民なんです。だから人族よりは頑丈で。気がつかなかった。ご主人さまの指が痛んでいたなんて」

少女は指を隠そうとしたが、碗を持っていたのでできなかった。それで「大した事はないわ」と言った。

「村の女たちは、みんなこんな指よ」

「あなたはおれのご主人さまです。他の人族とは比べ物になりません。体を休めて下さい。でないと、おれが銀月の君にしかられます。主人に苦勞をさせるとは何事だつて」

突然出てきた伯爵の呼び名に、不意をつかれて少女は赤くなった。

「ガイリス。あの。わたし昨夜……」
「はい？」

「ひ、氷玉の前で、寝ちゃった……の？」

否定してほしいと思いつつ恐る恐る言うと、少年はにっこりしてうなずいた。

「ああ、はい。良くお休みでしたので、閣下が寢所まで運ばれました」

「あなたが運んだんじゃないの!？」

「ご主人さまを運んだのは伯爵閣下です」

少女は真っ赤になった。なんて醜態しゅうたいを晒さらしたのだろう。

「お客さまの前で泣きわめいて眠り込んだあげく、寢台まで運ばせるなんて……」

「スープがこぼれますよ。閣下は嫌がつてはいませんでした。むしろうれしそうで」

「うれしいって、何で!」

「ご主人さまが、……ご自分を頼られたように思えたのでしょ」

ガイリスは答え、少女の手からスープの碗を取り上げると、テーブルまで運んだ。

「それがどうしてうれしいの？」

ぽかんとした顔になった少女に、半獣族の少年は苦笑した。

「そういうものです。ご主人さまは、銀月の君の姫君でもあられます。それも、閣下おん自らが名を明かしている。信頼されているように思えて、うれしいですよ」

少女は首をかしげた。良くわからない。

「おれだって、ご主人さまから命令されるとうれしいですよ。頼って下さってるんだなあと思って。さ、どうぞ。さめちやいます」

ガイリスはそう言うと、少女をテーブルの方に向がした。

「あ、ありがとう………いただくわ」

席につくと少女は、手を組んで頭を垂れた。治療を行う者の神と聖なる手の持ち主たちに祈りを捧げると、木の匙さじを取り上げ、スプを口に運ぶ。

「おいしいわ」

そう言うと、ガイリスはにっこりした。

「ご主人さまにそう言って、ほめてもらえるのもうれしいです」
「わたし、命令って………苦手なのよ」

少女が言うと、ガイリスは「知ってます」と答えた。

「でもおれは半獣の民で、あなたはおれのご主人さまです。おれたちは、序列じょれつをつけないと生きてゆけない種族です。あなたはおれより上の立場でいなければ。

そうでないとおれは多分、どこかがおかしくなります」

この言葉に少女は顔を上げ、彼を見た。

「初めて聞いたわ」

「話す必要があるとは思っていなかったの。でもご主人さまにはおれたちや魔族の方々の事について、ご存じない事が多いのではと…… 出すぎた真似でしたらお許し下さい」

「いいえ。話してくれてうれしいわ。序列…… がいるの？」

「はい。でなければ混乱します。おれたちは群れで暮らす種族ですから、命令系統がはつきりしないと不安になるんです。魔族の方々にも、似たような所があります」

「魔族にも？」

「はい。魔族の方々は一族の当主に忠誠を誓い、当主は群れを率いるように一族を統率します。おれたちの感覚とは少し違いますが。おれたちには序列が、とても大切です。名誉や命がかかっていると言ってもおかしくありません。

人族にはそれがわかりません。おれは、そっちの方が不思議です」
「そう」

「閣下が名を明かされたのは、本気で敬意を表したかったからです。魔族の方々は当主に名を捧げ、忠誠の証とする。閣下はご主人さまに最大限の敬意を払われました」

少女は碗の中身を匙でかきまわした。

「名を明かす事は命を預ける事、だから？ わたし、ただの薬師なのよ。敬意だなんて」

「閣下がお嫌いですか？」

少女の手が止まった。匙をにぎりしめる。ガイリスは続けた。

「それなら、来るなどおっしゃえばそれですみます。閣下はそのお言葉に従って……」

「嫌いじゃないわよ」

ユーラはそう答えてから、うなるようにつけ加えた。

「だから困るんじゃない……」

「なぜお困りに？」

「人族は、好意を持つ相手を召使にしようとは思わないからよ。わたしがどうしてもあなたに、名前で呼ぶよう頼んでいたと思うの」

ガイリスの顔に、血が登った。

「閣下を差し置いてそんな事は」

「友だち同志は名前で呼び合うのでしょうか？」

妙な顔になった少女に、ガイリスは耳まで赤くなった。

「ご主人さまには、わかっておいででない。あなたがおれを名で呼ぶのは正常です。でもおれが呼ぶのは……お許し下さい」

「どうして？」

本気でわかっていない様子の少女に少年はうろたえ、「この説明はおれじゃ役不足です」とぼやいた後、咳払いをした。

「少し質問をさせて下さい。人族の女の方は、あの。誰か男なり女なりを床に、えー、共寝に誘う時には、どんな風に誘うんですか」

少女は横面を叩かれたような顔になった。

「何て事言つのー！」

「ごめんなさい。でもそれに近い事言われたんですよ、ご主人さまは」

少女は言葉をなくした。

「言った？ わたしが？ 近い事？」

沈黙した後、彼女はそう言った。ガイリスは小さくなっている。

「名前で呼ぶよう頼んだら、そういう意味になるの？ だとすると……待つて。だったら氷玉は、わたしにそういう誘いをしてたって事？」

少年は首をぶんぶんと振った。

「違います違います！ 閣下の場合は違います！ こういう説明慣れてないんですよ、おれ。でも閣下の場合は全然違いますから！」
「わからないわよ、わたしも全然。風習が違うっていうのはわかったけれど。わたしがあなたに名前で呼べって言ったら、……その、そついう意味になるの？」

赤くなつた少女の前で、少年も赤くなつた。

「光栄だとは思いますが……」

「そついう意味で言ったわけじゃないわよ！」

「は、はい。わかつています」

断言され、少年はちよつぴり傷ついたような顔をした。それに気づかず少女は言った。

「半獣族の人に名前で呼んでつて頼んだら、そついう事になるのね？ とにかく」

「ご主人さまの場合はそうです。でも相手に伽をお命じになりたい

のなら……」

少女は匙を投げ出すと、手で顔を覆った。

「お命じにならないわよ。ああやだ、もう、恥ずかしい……ちょっと待つて」

顔を上げると少女は真面目な顔で尋ねた。

「わたし氷玉に名前で呼んでって言った？」

「はあ。その」

「言ったわよね。最初の夜に。じゃ、それは……魔族の場合は何か違う？ 違っていたりする？ それともわたし、氷玉と一緒に寝ましょって誘ってたの？」

頼むから違うと言ってくれ。そんな思いのこもった視線を浴びせられ、ガイリスは居心地悪げに身じろぎをした。

「魔族の方々の場合は、意味合いが違ってくると……あの、おれ、そんなに詳しくないんですが。ただあの方々は普通、名前を呼び合う事はしません。圧倒的に地位の高い方が、下の身分の方を呼び捨てる事は許されますが」

「風習がないのね？ そう言えば、名前は魔術の一つって……ロークが」

「ああ、はい。そうです。自分から相手に名を明かすのは、殺されても文句は言わないという信頼の意味があるんだそうで。確か」

少女は息をついた。

「命を預けるって、そういう意味なの……今度氷玉が来たら尋ねて

みるわ。お礼も言わないといけないし」

彼女は藁布団の方を見やった。マントは一応、たたんでおいた。あれも返さなければ。」

「マントなしで寒くなかったかしら」

「閣下は闇魔族ですから……」

「こういう些細な事を心配したくなるのよ、人族は。さめてしまつたわね……」

スープを口にし、少女はそう言った。

「温め直しましょうか？」

「さめてもおいしいわよ、これ。薪も無限ではないのだし」

「いくらでも採ってきますよ」

「どこから？」

少女は顔を上げて少年を見た。

「使うのは、必要な分だけで良いの。他は残さなくては。それは大地の取り分よ」

「ご主人さまを温める薪が、必要でない事などありません」

「ガイリス」

強い調子で名を呼ばれ、少年は不満そうな顔をしつつ黙った。少女は言った。

「駄目よ。わたしはここで暮らそうと思っているの」

「はい……」

「食べるものを作って、木や草を育てて。長い間、ここにしよう」と

思っている。必要以上に切ったり燃やしたりしていたら、ここには何もなくなってしまう。

わたしは土地を育ててもいるのよ。奪い尽くすのではなく」

「土地を……ですか」

「助けてもらっているのですもの。住まわせてもらって、食べ物を与えてもらっているわ。土地にもお礼をしなくてはね」

「良くわかりません。必要な物は奪うのが、おれたちのやり方です」

ガイリスは言い、少女は首をかしげた。

「奪ってばかりでは、なくなってしまうのではない？」

「ある所にはあります。奪われるのは弱いからで、それはその者が悪い」

「わたしは非力だわ。誰かに何かを奪われたなら、わたしが悪い事になるの？」

「とんでもない！」

きつぱりとガイリスは言った。

「ご主人さまのものは、ご主人さまのものです。誰にも奪わせたりはしません。そんな悪辣な事をする奴がいたら、絶対許しません」

「言っている事が矛盾していない？」

「どこがですか？」

「さっきは奪われた者が悪いと言ったわ」

「そうです」

「なのになんかわたしに関しては違うの？」

「当然です」

「どうして？」

「あなたはおれのご主人さまだからです！」

少女は困った顔になった。彼の言葉がなぜこうつながるのか、わからなかったのだ。

「おれ、何かまずい事言いましたか？」

その表情にガイリスが尋ねる。少女は迷ったような顔をしてから答えた。

「異種族間で意思の疎通をはかるのは、難しいものだと思っていたの」

「ああ、魔族の方々は理解するのが難しいですからね」

わかったと言いたげに少年が言った。少女は「そうね」とだけ答えた。

「でも銀月の君は、戯れで名を明かしたわけじゃないですよ。心配なさなくても大丈夫です。心変わりはないありません」

「別に心配しているわけじゃ……心変わりする魔族もいるの？ 名前を明かしておいて」

「普通はしない。そんな事をする魔族は狩られる。一応、建前ではね。でもそれなりの大義名分が成り立てば、別」

声がして、二人は振り向いた。戸口に剣を背負った男が立っていた。少女は笑みを浮かべ、半獣族の少年は頬を強張らせた。

「ローク。いらつしゃい」

「久しぶり。歓迎してもらえてうれしいよ」

男は精悍な顔に人懐こい笑みを浮かべた。そこにいたのは人族を

装った紫忌だった。

「で、歓迎ついでに。腕のたつ傭兵を雇うご予定はありませんか？ 力仕事全般、何でも引き受けます。

ちよーつとドジ踏んじゃって、雇い主から逃げてる所なんです。食事さえもらえれば働きますんで、しばらくここに住まわせてもらえませんかね」

3・夜の客人 3（後書き）

ねねね眠い……。今日、睡眠、二時間半しか取ってないですよ……。もうちよつと進めたかったけど、妙なミス連発しそうな今の私。寝る事にします。

行かねばなるまい。まくらと布団が私を呼んでいる。（笑

4・錯綜する思惑

「氷玉ひぎょくが人族の娘に執心していると？」

闇と月光に満たされた青瑤あおめのうの城で、青闇男爵蒼炎あおやみ そうえんは言った。綺羅月きろつきの君と呼ばれる彼は、先代伯爵蒼牙そうがの弟であり、氷玉の叔父にあたる。

華やかな美しさを持つ男は、白蠟のごとき肌に銀灰の髪、真朱しんしゅの瞳をしていた。純白の衣装に悪趣味と紙一重の豪華な装身具をいくつもつけているが、それが不思議に似合っている。冷酷さと魔力の強さは先代と比べても遜色そんしよくがないと評される男である。

「妾妃しやうひにするなら半獣でも、下位の魔族でも良からうに。人族など」

「一族当主を名乗っていても、下賤な血の混じる者。その出自に相応しく、愚かなふるまいをするのでしょ」

彼の前にある青白い炎から声がした。巨大な炎はその中心にない場所があり、鏡のように澄み渡っている。

そこに女性の姿があった。

二十代半ばの姿をした美しい女性は、雪のような白い髪に白い肌、薄紅うすべにの瞳をしていた。黒珊瑚くろさんごの城の城主、氷刃男爵蒼華ひょうじん そうか。氷魅ひょうみの姫と呼ばれる氷玉の叔母である。

漆黒の地に無数の真珠と珊瑚玉を縫い止め、金銀の飾りをつけた衣装をまとい、結い上げた髪にも黄金の飾りをきらめかせている。

どちらも五百歳を越える、闇魔族の貴族だった。彼らは今、遠く離れた城同志の空間の一部をつなぎ、話し合っていた。

「闇魔族の力は血によって伝わる。われらは血統を重んじねばなら

ぬのです。

あれは系統も定かならぬ魔族を母に持つ身。しかも『名無し』の忌み子。

当主に相応しき者は、今となつては綺羅月の兄上だけ』

蒼炎は皮肉げな笑みを浮かべた。

「もしくはそなただけと言いたいのであろう、氷魅の。

麗^{うらわ}しの父、蒼禍^{そうか}は闇魔族の貴族には珍しく、妻と子の少ない方であられた。七名いた子の内、己が名より一字を与えし者は五名。

蒼の文字を許されしは、われら三名のみ。

禍^{まが}月の君と呼ばれた苛烈なる兄、蒼牙^{そうが}は他の兄弟姉妹を討ち果たし、父上を討ち取って爵位を継いだ。つまりは蒼の文字を与えられたわれらこそが、月牙において最も血の濃い闇魔族だと証明されたのだ」

蒼炎は息をついた。

「兄上は百名以上の子を作られた。したが……よもや『氷玉』などと名付けられた者が当主となろうとは」

『名を一字も継がぬ者が成り上がるなど、本来ならばあり得ぬこと。しかもあれが用いたのは、下賤^{げせん}な奇策。

当主に挑戦するのであれば、己が血と力の限りをを用いて倒すのが礼儀。であるのあれば、己が稚児^{ちし}を用いて尊き血を持つ兄上を弱らせ、その隙をついたのです。当主を名乗るのもおこがましい』

「紫忌^{まが}か。紛^{まが}い物に爵位をくれてやった所を見ると、そなたの言い分が正しいのであろうよ。

したがあれは、当主として認められてしまった。われらが乱を起こしても正当とは認められぬ。当主への挑戦をしようにも……」

『われらは一度、禍^{まが}月の兄上に挑み、敗れた身。ゆえに兄上を討つ

たあれに挑む事はできぬ。これは闇魔族の掟ゆえ、覆せぬ』
くつがえ

「だが……人族の娘か」

『夜毎に娘の元へ忍び行くとか。大した執心ぶりではありませぬか』

蒼華は冷笑を浮かべた。

『子が、できるやもしれませぬな？』

「あの紛い物のようにか」

蒼炎も笑みを浮かべた。

「それは大変だな。人の血の混じる者を側に置き、白い目で見られている月牙当主としては。その上さらに、己が血を引く子を人族に産ませたとあつては、闇魔族の誇りを持たぬ者と大陸中の魔族より諍られよう。おお、何という事だ。わが一族の名誉が危うい」

喉の奥で笑うと蒼炎は言った。

「一族の誇りを守る為にも、われらは立たねばならぬな？ 氷魅の」

『その通りです、綺羅月の兄上』

「しかしさすがにそのような事になれば、あれもその娘を処分するのではないか？」

『その時は、われらで娘と子をかくまってやれば良いのです。その上で、人族ごときと子をなした愚かなる当主を責めれば良い。』

己が不始末を消す事もできぬ情弱な男を、当主と認める者などおりましようか』

「子ができる前に、飽きるやもしれぬぞ」

『配下に命じて娘を孕ませれば良いだけの事。人族など、放っておいても次々と孕み、子を産む種。誰が疑いましょう』

「その通りだ。見張りが必要な。その娘の動向を探る者がいる。」

日中でも動ける者、その娘が気を許すような者……擬態ぎたいのできる半獣を行かせるか」

『それはどうでしょう。あの氷玉の事です。妙な手を打っていないとも限らない。ここは人族を使うのが良いでしょう』

蒼華は微笑んだ。冷たい笑みだった。

『誇りを持たず、金銭がからめば仲間も売る種族。適当な者がすぐに見つかります。下賤な女の相手には、同じ下賤な者がよろしい』

1

紫忌は少女たちの家の隣にある、空き家に寝泊まりする事になった。彼は雇い主の怒りに触れたのでしばらく隠れたいのだと、まことしやかな話をした。それにより少女の同情を得た彼は、レサンの村でしばらく生活する事となったのである。

ガイリスは彼が白男爵である事を知っていたので、落ちつかないが、はくだんしゃく紫忌は少女が席を外した隙に彼を呼び、声をひそめてこう言った。

「ちょっと妙な動きがあつてな、上の方で。兄上に敵対しそうな貴族がいるんだが、そいつらがここに目をつけたみたいなんだ」

事実だった。イリリアとアルシナは、紫忌に命じられたその夜の内に、青闇男爵と氷刃男爵の周辺で動きがあつた事、二人が薬師の少女に対して何やら企んでいるらしいという情報をつかんで持ち帰

っていた。

半獣族の少年は、この話に顔色を変えた。

「念の為、しばらくここにいます。お嬢ちゃんには言うなよ？ 怖がらせちゃ悪い。村からは離れないようにさせてくれ」

「わかりました。あの、それで銀月の君はこの事を……？」

「一応報告したさ。しばらく来るなと釘をさしておいた。兄上の動きがあちこちを刺激してるのは確かだろう。ごねてたけどな」

実際はごねるなどという可愛らしい状態ではなかったのだが、それは言わないでおく。

「守りがおれ程度で悪いが、兄上にも立場があつてな」

「いえ、閣下。閣下が来られた事で、銀月の君のお心は良くわかりました。最も信頼されている弟君をよこされたのですから」

ガイリスの言葉に紫忌は一瞬、痛みをこらえるような顔になった。だがすぐにその表情を消す。

「ま、気張って嬢ちゃん守ってくれよ。おれはとりあえず、無害な人族のフリしてるし」

「はい。ご身分の事、ご主人さまには……」

「言わんでいい。おれがここにいる事、どう説明するのよ。ここにいるおれは、人族のローク君なの。雇い主から逃げてる最中の、食い詰めた傭兵。わかった？ 名前も呼び捨てにするんだぞ。ロークって」

「そ、それは。おれごときが呼び捨てるなど……あの、閣下」

「人族用の名前なんぞ、魔族として何の意味があるよ。それとも何か、おれを延々と『閣下』って呼ぶ気か？」

紫忌は半ば脅すようにして、ガイリスに名を呼び捨てるよう約束させた。

日々は穏やかに過ぎていった。紫忌はレサンの村で暮らし、畑仕事や雑事を手伝った。彼は気がついた事は、言われなくてもやった壊れた柵が一つ一つ直されてゆき、井戸のつるべが動かしやすくなった事に気づいた少女は、彼に感謝した。

食事時には、三人で食卓を囲んだ。彼と顔を合わせるとガイリスは、どうしても構えてしまうのだが、それでも紫忌を人族として扱うよう努力していた。

少女は妙だとは思っていたが、日中堂々と外を歩く紫忌の姿に、闇魔族だとは思いつかなかったらしい。少年のぎこちなさは、人族の傭兵に慣れていない為だろうと解釈した。

一巡月もするころには、紫忌がいる事は当たり前だと彼女たちは思うようになっていた。気候は日ごとに暖くなり、花々が競って咲き、木いちごが茂みに顔を見せ、鳥や獣は婚姻の支度に忙しくなる。

夏至が近づいていた。

「最近、来ないわね」

ある夜、ユーラはぽつりとそう言った。一日の仕事を終えて少女

と共に食卓を囲んでいた紫忌とガイリスは、顔を見合わせた。

「伯爵閣下かい。来ないと寂しい？」

紫忌がからかうような口調で言うと、少女は特に照れる風でもなく、「そうね」と答えた。男は当てがはずれたような顔をした。

「良く顔を見せてくれた人が来なくなると、寂しく感じるわ。それに、彼には借りているものがあるの。次に来た時に返そうと思っていただけねど」

あの後一度、馬車が来て質の良い毛布を数枚と、新たな本を三冊置いていった。しかし伯爵はやって来ず、マントを直接手渡したいと思っていたユーラはそれを、ずっと手元に置いていた。

「ところで最近、訪ねて来る人がいないね。仕事、成り立ってるの？」

紫忌の言葉に少女は答えた。

「わたしに用がないのは、平和な証拠よ」

「でもこうまで誰も来ないのは変じゃないか？ 伯爵閣下が来ていたのは『病弱な弟君』について相談する為だったんでしょ」

紫忌は言った。初めてその話を聞いた時には、何の冗談かと思っ
たものだったが。

巷に流布している話では、『病弱な伯爵閣下の弟君』ははかなげな美少年で、体が弱いがゆえに表に出る事をせず、城で兄を支えているのだそう。

「行商の人が来た時、あんまり怖がっていたから伯爵の事を話したの。その人が大げさに広めたみたい。白男爵が、嫌な気にならなければ良いのだけれど」

「大丈夫でしょう、多分。それにしても、白男爵って体が弱いのか？」

「伯爵がそう言ったのよ。半分が人族だからでしょうね。お気の毒だわ」

「一体俺の事を何と言って説明したんだ、兄上。と、紫忌は思った。

「仲はおよろしいみたい。男爵の事を良く話されていたわ。信頼しているのね」

「……へー。話すって、どんな事を？」

「特に男爵の事を話題にするわけではないのだけれど。何かの折に、口にされるの。助言をもらったとか、こう言われたとか。それが何となく、信頼しているんだなあっていう風に聞こえるの」

「そう」

紫忌は微笑んだ。兄が自分の事をそう話していると聞き、それが単純にうれしかった。

「ところでおれ、明日エニ村まで行って来たいんだけど。村で何かする事あるなら、ついでにやって来るよ」

「そうなの？　じゃあ、品物を何かと交換してもらえるかしら。ポタンを作ったし、毛糸で靴下も編んだわ。あと薬草の束。ジムの酒場に持って行ってほしいの」

「いいよ。どんな物が欲しいの」

「できれば小麦粉を。あと、村で何か噂を聞いたら、教えてね。わたしが必要な人がいたら、出向くから」

翌朝、紫忌は渡された品物を袋に入れて背負い、家を出た。武器は目立たぬよう布で包んで袋の中に入れ、ごく普通の村人のような姿で彼は、エ二村に入った。

ジムの酒場は、酒樽をいくつか置いてあるだけの、酒場と言うのもおこがましいような小さな場所だった。しかしそこは村人の寄り合い場所となっており、雑貨屋も兼ねていた。紫忌が中に入ると、薄暗い中、椅子に腰かけて何か話していた主人のジムと、村の男がこちらを見た。目つきに何か気に食わないものを感じたが、それを無視して紫忌は明るい調子で言った。

「やあ、ジム。ボタンや靴下を持って来たんだが。交換できそうなものはあるかい」

「何もないね」

ジムはむっつりとした顔で言った。紫忌は愛想の良い笑みを顔に浮かべた。

「見もしない内から断らないでくれよ。薬草もあるんだよ？」

「何もない。それ持って、とっとと帰んな」

「何だよ。おれが何かしたか？　ちよいと前には一緒に一杯やったじゃないか」

「あんたには関わりたくないんだ。おれには女房も子どももいるんでね」

そう言うってからジムは、少し気がとがめたらしい。小声で言った。

「あんた。あの薬師くすりのとこからさっさと出た方が身のためだぜ」
「なに？」

どういふ事かと紫忌は尋ねようとしたが、ジムはそれ以上、何も言おうとはしなかった。手を振って向こうへ行けという仕種をする。何が何だか良くわからなかったが、歓迎されていない事だけはわかった。

「邪魔したな」

そう言つと、彼は酒場から出た。

外に出ると、村人がこちらを見ていた。だが視線の合つのを避けて、そそくさと家の中に入ってしまう。外で遊んでいた子どもを母親が呼ぶ声がし、通りにはあつと言つ間に誰もいなくなってしまう。

「どういふ事だよ、こりゃあ」

つぶやいた時、物陰から手招く者がいた。そちらに行くと、ジムの女房のエイミが赤ん坊を抱いて、身を縮めるようにしていた。

「やあ、奥さん」

挨拶あいさつすると、エイミは苦しげな顔になった。

「うちの人がすまないね」

「何があつたんだ？ みんなおれを見るのも嫌みたいなんだけど」

「噂が立ってるんだよ。ミストレスは伯爵閣下のご不興を買ったから、半獣族の兵士が攻めてくるって」

紫忌は目を丸くした。そんな噂が流れていたのか。

「みんな、関わり合いになるのが怖いんだ。まきぞえで殺されたりしたら……」

「エイミ！」

酒場からジムの呼ぶ声がした。エイミはびくりと身をすくめると、「今行くよ！」と怒鳴り返した。

「手が放せないんだ、待つとくれ！」

それから紫忌の方を向いて、早口で言う。

「ミストレスには、お世話になった。この子が無事に産まれたのは、あの人のおかげだもの。でもジムは、とにかく関わるなって」

「誰が言い出したんだい、そんな噂」

「わからないよ。気がついたらみんな、話してた。行商人のサムも来た時、この話をしてたし。とにかく村の者は怖がつてる。それに、もつとひどい噂もあって……」

「エイミ！ さっさと来ないか！」

再びジムの声がし、エイミは慌ててそちらを向いた。赤ん坊がむずかりだす。

「今行くって！ ごめんよ、それじゃ。ミストレスによろしく伝え

とくれ。あんな噂、あたしは信じてないから。じゃあ……」

エイミは赤ん坊を抱え、走って紫忌の前から去った。紫忌はその後ろ姿を見送ってからもう一度、人けのない村の中を見やった。皮肉な笑みを浮かべてつぶやく。

「すまないと言いながら、何もする気はないんだろう、奥さん？ 命を助けてもらった村人もいるだろうに、それでもあっさり切り捨てるか。これだから人族というのは……」

村の入り口に、見覚えのある姿があった。赤髪の大柄な女性。アルシナだ。物陰から出ると、閉ざされた窓や戸の隙間から、視線を感じた。村人たちがこちらを見ているらしい。紫忌はこれ見よがしに荷をかつぎ直すと、彼女の方に向かって大股に歩いて行った。

「この近隣で、妙な噂が流れています。確認しただけで三つの村に」
村の外に出た紫忌に、アルシナは言った。紫忌は口許を少し歪めた。

「薬師のミストレスがご不興を買ったんで、半獣族の兵士が攻めてくるってやつ？」

「それだけではありません。姫君が諸悪の根源であり、災いの元だと」

「ああ？」

「人族の呪い師が、そう言いふらしているのです。姫君の事を、闇魔族に関わった穢れた女だと。いずれ神の罰がくだると言って回っ

ています。不遜^{ふそん}も甚^{はなは}だしい」

アルシナは吐き捨てるように言った。エイミの言っていた『もつとひどい噂』とはそれかと紫忌は思った。

「誰か後ろにいそう？」

「イリリアが探っています。放っておけばあの男、口から毒を吐き散らし続けます。お許しただければ首を取って来ますが」

「いやあ……泳がせとけ。おれの勘だと、氷魅の叔母君あたりが関わってる」

「なぜそうお思いに？」

「綺羅月の叔父君は、何にでも真っ正面から突っ込んで行く、猪のような御方だからさ。後ろからネチネチ企むのは、叔母君の方。しかし何が目的かね？ 噂流して孤立させて」

「貴族の方々の考える事は、わたしにはわかりません。ただ、姫君の事が心配です」

アルシナは真面目な顔で言った。紫忌は「むう」とうなった。

「なるべく離れないようにはするよ。お前たちも無理のない程度に探ってくれ。それと」

「はい」

「小麦粉が手に入る所、この近くにある？」

ユーラは畑仕事をガイリスに任せると、森の方に歩いて行った。紫忌がいない間に、境界線の強化を行おうと思ったのだ。彼がいる間は見られたくなくて、控えていた。

（気のせいだと思うけど……わたしが何かしようとするたび、ロークが側に来るような）

彼の働きには感謝している。だがユーラは時折、監視されているような気がしていた。そんな風を感じる方がおかしいと思うのだが、彼女はそれでこの一巡月、境界線に近づかなかったのである。

（ほころびもないわ。大丈夫ね）

石の前に着くと、彼女は思った。繰り返して強化してきた境界線は、すっかりしていた。普通の土地なら、数年はもつはずだ。だがここは灰魔^{はいまがし}榎の森に接している。森からの瘴^{しょうまき}気は常に村を侵そうとし、境界線を壊そうとしていた。

（わたしがいなくなったら、ここはまた、元通りの土地になってしまうのかしら）

もう三年、と彼女は思った。ここへ来てから三年になる。エニ村を始めとする近隣の村々では作物が良く実るようになり、妖獣の出没が減った。人々の暮らしは楽になり、子どもたちも栄養のある物を食べられるようになった。だがこの境界線を維持する者がいなくなれば……。

（わたしも永遠ではない。いつまでも生きられるわけではない。誰か、ここを維持できる者を探さなければ）

強化の歌を紡ぎながら、少女は思った。輝きが彼女を包み、不可視の鎖を強くする。

（歌よ、輪を描いておくれ。わたしは愛する）

（人々の、小さな幸福。日々の暮らし）

（平和と、喜び。ごく当たり前の、大切な風景を）

（わたしは愛する。わたしは守る。力よ。わたしを目指して集い、ここに現れておくれ）

歌は、彼女の祈りだった。自身が家族を失っているがゆえに、彼女はエニ村や、近隣の村の人々を、心から大切に思うようになっていた。人々が自分を、家族のように考えなどしない事は知っていた。会えば礼儀正しく接してくれる。だが心の底では、自分をよそ者だと思っている。

暮らしが違うから。言葉づかいが違うから。立ち居振る舞いが違うから。存在がどこか……、根本的に違っているから。

（それは仕方のないこと）

その事実を受け止めて、彼女は思った。それは仕方のないこと。だからこそ、村人のさりげない優しさを大切にしたい。日々を大事にしたい。子どもたちの笑顔を。

（わたしは愛する。最も小さくされた者を）

（わたしは守る……）

ふと、彼女は幌馬車ほろばしやを思った。ずっとそれで移動していた。彼女の家族は『渡り人』だったから。

幼い頃から踊っていた彼女の所作は、農作業をしてきた人々のそれとはどうしても違ってしまう。言葉にしても、彼女は随分と碎けた言葉づかいを身につけたつもりだった。だが、違う。それでも違ってしまう。

母、サーリアが厳しく仕込んだ言葉づかいは上流の人々の発音で、彼女がかつてそこに属していた事を示していた。彼女はしかし、何も話さぬままに死んだ。ジーナおばはもまた。サットンは、ユーラが大きくなれば詳しい事を話すと言っていた。だが。

真紅しんくの薔薇ばい。くすぶる煙。物言わぬ彼らの……。

「……っ！」

音を外し、ユーラは喉の奥で息をひゅつと吸った。淡く輝いていた光が失せる。少女は片手で口を抑え、もう片方の手で胸を抑えてうつむいた。心臓がときどきと跳ねていた。

「こんな時に気が散るなんて……」

境界線の方を見る。今の失敗は特に何の影響もなかったようだ。彼らの死の光景を思い出し、動揺してしまった。強化の作業中にこんな事を考えるなど、今まではなかったのに。心がとりとめもなくさまよいだし、止められなかった。

息が苦しい。いいや、違う。苦しいのは……。

苦いものがこみ上げ、少女はその場にへたり込むようにして膝をついた。あの光景を、忘れる事ができない。

（克服したと思ったのに……）

涙があふれる。胸の奥から思い出があふれて止まらない。あまりのつらさに吐き気がする。目の前に見えるものは、あの風景。赤い薔薇が咲いていた、あの……。

歌えない、と少女は思った。歌えない。このままでは。

わたしは、また、歌えなくなってしまった……。

* * *

夕暮れの街道を、紫忌は急ぎ足で歩いていた。足取りに迷いはない。松明をとまなくとも、彼には闇を見通す事ができた。

エ二村で交換に応じてもらえなかった為、彼は四つ先のティンダル村まで足を伸ばした。よそ者に対する冷やかな対応はされたものの、小麦を分けてもらう事はできた。わずかな量だったが。

例の噂はその村でも流れていた。人々はひそひそとレサンの薬師の事を話し、あんな穀潰しこくつぶは、さつさとどこかへ行ってくれた方が良くと結論づけていた。薬草なんか、そこらじゅうに生えているじゃないか。あんな娘がいなくなった所で、困る事など何もない。気取った言葉づかいをして、あの娘はおれたちを見下している。闇魔族と関わるなんて。ろくなものじゃないと、最初からわかっていた。人々は口々にそう言った。

（その薬草が、土地に生えるようにしたのはあの娘なんだけどね）

三年前には、荒れた地に薬効のある植物はほとんど生えなかった。灰魔榿しょうきの森からやってくる瘴気しょうきが土地を枯らしていたから。三年た

つと、人々はそれが当たり前だと言つようになつた。たった三年で土地がよみがえつたのは、彼女が来てから。あの娘が何かをしたのだ。イリリアが証言している。レサンの村と森の接する辺りに、壁があると。それが瘴気を遮っている、と。

『魔術ではありません。何かわからない。でも壁がある。それが瘴気を遮っています。土地に花が咲くのはその為です。それにしてもあれほど緑と花があふれるのは、不思議な気がします』

『あの娘は呪い師まじなだったのか』

『人族の呪い師は大半が妖獣を手なづけ、その力を振るっている、それだけの者にすぎません。姫君の力はそれとは違います』

何なのかわからない、ともう一度彼女は言つた。あまりにも特異で、自然すぎる力だと。

他の者を媒介ばいかいとしなければ、魔力を感じる事もできない自分が齒がゆいと紫忌は思った。注意して彼女を見張っていたが、それらしい力を使う場面には遭遇そつぐうしなかった。それが兄を滅ぼす力なのだろうかと彼は思い、続いてそんなものが本当にあるのかと訝つた。彼には少女は、ごく普通の人族の娘にしか見えなかった。穏やかに過ごす事を望み、そうした日々が続くようにと願う、ただの娘にしか西の方で赤く光っていた色が消えた。闇が深くなる。紫忌は舌打ちをした。もつと早く戻るつもりだったのに。

そこで彼は全身を緊張させ、立ち止まった。素早く武器を取り出す。いつでも抜ける姿勢で彼は、闇に向かって言つた。

「何か用か。用事があるなら早く言え。ないのなら、おれの行く手の邪魔をするな」

闇が揺らぎ、人影が分離する。白銀の髪、白蠟はくろうの如き肌、紅玉の

瞳。

「お久しぶりにございます、白男爵閣下」

礼儀正しく腰を折ると、彼は言った。

3

現れた相手は、簡素な黒絹の衣装をまとう少年だった。腰まで伸ばした白銀の髪を、無造作に一つにまとめている。身を飾る物は一つもなく、背筋を伸ばして立つ彼の態度にも甘さはない。それでいてなお、彼の美貌には華があり、男装の少女めいた印象を見る者に与える。彼には会った事があった。以前、青闇男爵あおやまんしゃくの従者として蒼月闇の城に来たのだ。

その顔だちはそして、氷玉に酷似している。

「青闇の騎士の方でいらしたな」

礼を失しないように言うと、彼は微笑んだ。

「青雅せいがにございます」

どの闇魔族も紫忌の事を紛い物まがものと見なし、同胞とは認めていない。公式の間ではもちろん、私的な場で出会った場合、無視するか侮辱の言葉を投げてくるのが常だ。だと言うのに青雅は自ら名乗った。最大限の礼を尽くしたのである。紫忌はだが、相手の名を呼ぶ事を

用心深く避けて言った。

「先代当主に縁ある者と見受けるが」

「はい。しかしわたくしの名は『牙』ではありません。『雅』を与えられし先代の娘に連なる者にございます。わずかなりと血は受け継いでございますが、それだけにて」

「先の牙子爵……、血酔の姫か」

紫忌はつぶやいた。先代伯爵の娘、彩雅は氷玉の、そして紫忌の異母姉だった。紅蓮侯爵に嫁いだが、先代が斃れた折に氷玉の爵位継承に異を唱え、逆に討たれた。

「紅蓮侯との間に娘が一人おられたが……」

「火影男爵さまですね。あの方はわたくしの大叔母君に当たります。わたくしは先の牙子爵が廃棄した娘たち、その一人から生まれた者を母と持ちますので。ですがあちらは、わたくしの事などご存じないでしょう」

紫忌は思い出した。彩雅は嫁ぐ際、後腐れのないように娘たちを殺して行ったのだ。

「しかし、闇魔族である事には変わらない」

「はい、閣下」

青雅は微笑んだ。その笑みが妙に嬉しそうに見え、紫忌は訝しく思った。

「なぜおれを『閣下』と呼ぶ」

何かの罨か。そう思い、気を引き締めて、強い口調で問いかける。

青雅は答えた。

「己より位高き方を、名では呼べませぬ。閣下は男爵であります」
礼儀正しい態度に、紫忌は眉を上げた。

「それでおれの気分が良くなるとでも？ 茶番はよしてくれ、騎士……、」

そこで彼は言葉を止めた。息をつく。

「駄目だ。どうも苦手だな、あんたの顔は。兄上に似すぎてる。兄上を女にしてちよいと年齢を下げれば……いや、あんた男だっけ」
「恐れ入ります。綺羅月^{きりづき}の君にも良くそう言われております」

青雅は言った。どこか苦々しげなものが口調には混じっていた。
引っかけりを覚え、紫忌は眉をひそめた。

「あの叔父君なら、あんたみたいなのは飾り立てると思うが……」
「わたくしは、能力で位を得たと自負しております」

硬い調子で彼は言い、紫忌は納得した。この闇魔族は、容貌で取り入ったと言われ続けて来たのだろう。身につけているものに飾りが少ないのもこれでわかる。

「気に障ったのならすまん。おれはどうも、ずけずけ言う癖があるらしくてな」

そう言うと、青雅は慌てた様子で「いえ、」と言った。その反応がどこか幼く見えて、紫忌は苦笑した。

「叔父君も、実力のない者に位を与えるほど酔狂ではない。あなたには実力がある。それはおれにもわかるよ」

青雅は微笑み、軽く頭を下げた。嬉しそうだ。何だろう、この反応はと紫忌は思った。

「で、何の用だ。何か用があつたんだろ？」

すぐに敵対してくる事はなさそうだ。そう判断して武器を下ろすと、青雅は居住まいを正した。

「はい。綺羅月の君より命を受けました」

そう言うつと、真面目な顔で彼は続けた。

「わたくしはあなたを誘惑しに参りました」
「何だとう？」

目を剥いた紫忌に、青雅は繰り返した。

「あなたを誘惑しに。綺羅月の君はそうするよう命じられたのです。必要ならば抱かれて来いとも。わたくしは銀月の君に顔が似ています。それゆえ籠絡（ろうらく）できるだろうと」

紫忌は口をぽかんと開け、相手を見つめた。青雅は真面目な顔でそんな彼を見つめている。

ややしてから口を閉じた紫忌は言った。

「仕える相手は選んだ方がいいぞ、おまえ」

「ご忠告、いたみいます」

「綺羅月の叔父君には顔を合わせるたびに、兄上の稚児だ稚児だと言われてたが。マジにそう思われてたのか、おれ。

おまえもな。ひでえ扱いなんだぞ、これは。おまえのあるじは人の血の混じった紛い物に抱かれて来いって言いやがったんだ。大体、何の為に」

「あなたを足止めする為に」

青雅は答えた。

「かの君はこの一巡月、じりじりしておいででした。あの方は、銀月の君のお手のついた娘を手中にしたい。それには閣下は邪魔だったのです。閣下が娘の側を離れた事、すでにお二方ともご存知です」

青雅の言葉に紫忌は真顔になった。

「お二方、とは。叔母君もか」

「わたくしは元々、氷魅ひょうみの御方おかたから綺羅月の君の元へ送られた密偵にございますゆえ」

「あつさり言いやがる。で？ 何か仕かけて来るのか、今夜」

青雅はそこで、衝撃的な事を口にした。

「銀月の君が己が名を人族の娘に明かされた事、知られる所となりました」

紫忌はさつと青ざめた。青雅は続けた。

「今宵こんしやう、われらの時が始まってすぐにこの知らせはもたらされ、今では領内の貴族全てが聞き知っております。ご承知のように、これ

は銀月の君には致命的です。綺羅月の君はこれを理由に、当主に戦を挑まれると。

口上は既に伝えられたでしょう。また彼の君はこれを銀月の君の弱みと見て、娘の命を盾に取り、力の封じに使うおつもりです。当主がわずかなりと反撃すれば、ただちに娘の命を奪うと。今この時にも人族の群れが、娘の元を目指しているはず……お待ちを」

顔色を変えて走り出そうとした紫忌を、青雅は止めた。

「閣下の配下には既に、娘の元に行かせました。間に合えば救えるはずです」

そう言った青雅を紫忌は、妙な顔で見た。

「何でそんな事を。大体おまえ、どうしておれにそんな事を教える？」

「わたくしにはわたくしの思惑がございます。閣下。わたくしを貴方の配下として、受け入れていただけませんかでしょうか」

紫忌は啞然とした。青雅は続けた。

「わたくしを貴方の騎士として、そつげつやみ蒼月闇の城に迎えていただきたいよろしければ、ここで忠誠を誓わせていただきます」

「何の冗談だ。おれは爵位こそ持つが、人族との混ざりものだぞ。闇魔族としては不完全な代物だ。おまえは生粋の闇魔族だろう」

青雅は自嘲めいた笑みを頬に浮かべた。

「さあ、それは。わたくしの曾祖母にあたる方には、妙な実験にこだわる所がありました。あの方の娘の何人かには、闇魔族以外の

血が入っていたと言われております。

わたくしは外見こそこのようであり、資質にも恵まれました。しかしこの身にそれ以外の種族の血が流れていないとは、断言できません」

彼はそれから静かに続けた。

「信じられぬのであれば、こうお考え下さい。当主に逆らうは大罪。綺羅月の君も氷魅の御方もその罪を犯そうとしている。わたくしは同じ船には乗りたくない。ゆえに閣下におすがりし、当主へのとりなしを願っている」

「それでおれに忠誠を誓うか。大陸中の魔族に嘲られるぞ。おれなんぞに膝をついたと」

紫忌は逡巡しながら言った。畏だという意識がどうしても抜けない。忠誠を誓ったとしても今回の叔父たちのように、名誉を著しく損なったとの判断が生じた場合、配下の者でもあるじを討てるのだ。だが彼の忠誠を受け入れないとすれば、この相手は青閭男爵、あるいは氷刃男爵の子飼いの部下のままとなる。それは危険すぎる。

「青閭、氷刃、両男爵はどうする」

「当主への謀叛を企てた時点で、忠誠を尽くすに値しませぬ」

「心変わりか？ 嘲られる上に裏切り者とも呼ばれるぞ。だが……他に手はないな。時も惜しい。受け入れよう」

決断した紫忌の言葉に、青雅は片膝をつこうとした。だが紫忌は、それを止めた。

「やめろ。おれは兄上の為におまえを利用する。おまえが大陸中の魔族に謗られると知っていながら。この上辱めは与えたくない」

「あるじに利用されるは、配下の者には喜びでございます」

「そういうのは嫌いなんだよ。そうするしかないのはわかってるんだけどな……」

「では、略式で」

そう言つと、青雅は誓いの言葉を述べた。

「我、夜を歩く者をその命の祖と持つ青雅はここに、忠誠を君に捧げる。わが名と命は君のもの。君はわが上に君臨する者なり」

そう言つてから頭を垂れる。紫忌は答えた。

「我、月牙当主の弟にして白男爵^{はく}たる紫忌は、その誓いを受け入れる」

青雅の額に指を触れる。青雅はその指を押しただくようにすると、指先に口づけた。

「わが君」

「やめてくんない？ おまえのその顔でそう言われると、なんか背筋が寒くなるから」

どこか情けない顔で紫忌は言った。

「おれの事は閣下でいい。道を開いてくれ」

「はい、閣下。どちらに行かれますか」

あの娘の命を盾に取られるとまずい、と紫忌は思った。まずは娘を確保しよう。そう判断した彼は、「レサン村へ」と告げた。

青雅の腕が紫忌の体に回され、白銀の髪がふわりと舞い上がった。

空間が歪む。

一瞬の後、街道から二人の姿は消えていた。

4・錯綜する思惑（後書き）

…慣れたと言いつつ何ですが…長いですが、私の文章。もうちよつと区切った方が良いでしょうか。どうも、他の方の作品と比べると、一話ごとの分量が多いような。この章も三つに区切ろうかとは思ったんですが…どうなんだろう。

5 上がる火の手 1（前書き）

区切ってみました。少しは、読者さまに優しい小説になったでしょうか。

5・上がる火の手 1

闇魔族の城には通常、彼ら以外にも、多くの者が詰めている。低位の魔族。半獣族の兵士。魔獣。そして城で生き、城で死ぬ、子飼いの人族などである。彼らは城主に仕え、城の警護と管理を行う。専任の仕事を持つ者もあり、そうした者は城主が代替わりしてもそのまま据え置かれた。新たな城主が誕生すると、彼らはその城主に忠誠を誓う。

しかし中には、他の貴族に通じて情報を漏らす者もいる。

図書室の管理を一任されているアロンは、水の民出身だった。低位魔族と呼ばれる種族である。彼らは水に関する魔力に長け、三、四百年ほどで老いて死ぬ。三百を過ぎて老いた男は、ゆつくりと図書室に入った。先代のころから書物の管理を任されている彼にとつて、図書室はわが家同然の場所だった。中に入った彼は、やはり水の民である、助手のサネンの姿が見当たらないのに気づいた。

「サネン？」

名を呼ぶが、返事はない。彼には軽薄な所があり、野心も多かった。図書室で一生を過ごすのは嫌だと、一度ならず口にした。アロンはそれを案じていた。野心のある者は、貴族の方々の遊戯の駒にされやすい。妙な事に巻き込まれたのでなければ良いが。

「サネン。どこにいる？」

もう一度呼ぶが、若者は現れなかった。室内の灯が、書物をただ照らしていた。

* * *

その知らせを受けた時、青闇男爵蒼炎は狂喜した。

「まことか、蒼華！」

青白く燃える炎の鏡に映った女性は、朱唇をつり上げて笑った。

『まことです。氷玉もこれで終わり。あの『名無し』はついに馬脚を現しました』

「一族への裏切りだ。人ごときに礼を取り、名を呼ぶ権利を与えたとなれば。愚かなるわが甥は、肅清の理由を自ら渡してくれた。こうしてはおられぬ。配下全てに号令をかけ、蒼月闇の城へ向かわねば」

『お待ちを、綺羅月の兄上。あの者はそれでも相当なる力を持っております。勝利は確実にしておかねば』

冷静ともいえる蒼華の言葉に、蒼炎は眉を上げた。

「わたしがあれに劣ると思うてか」

『兄上は尊き血を引く闇魔族。劣るわけがございません。しかしあれは、どのような策を弄するかわかりませぬ。品性を持たぬ者は、戦の崇高さも理解せぬのですから』

「では、どうする」

『あれの力を封じれば良いのです』

蒼華はうつすらと笑った。

『名を呼ぶ権利を与えたほどの娘であれば、質に取る価値はありません。しょう。娘を捕らえ、その苦しむ様を見せつけてやるのです。そうして娘の命が惜しくば、反撃せずにいよと言えば良い。後はいかようにもなぶれましょう』

「しかし所詮は人族であろう。聞き分けずにあれが反撃すればどうするのだ」

『その時には娘の首を落とし、誓い一つ守れぬ魔族として弾劾してやればよろしい。ひざまずいたという事は、娘を守る誓いを立てたに等しいのですから。それにたとえ反撃を受けたとしても、兄上にはあれを上回る魔力があります。ではありませぬか？』

「うむ。あれごときに遅れは取らぬ。それでそなたはどうする？」

『娘を捕らえに参ります。配下の者では心もとなく思いますので。あれをなぶれぬのは、いかにも口惜しい。ですがその役目は、正なる月牙当主にお任せいたします』

「正なる月牙当主か」

まんざらではなさそうに蒼炎は言った。

「そちらの手配はそなたに任せよう。わたしはあの甥の首を取りに行く」

氷刃男爵蒼華は兄との会話を終えると、手を振って魔力の鏡を消した。振り向くと、そこには若い男が立っていた。青白い肌に緑の髪と目。水の民である。彼は彼女の前にひざまずいた。

「良く知らせた」

蒼華は艶冶な笑みを浮かべ、彼に言った。若者の頬が染まる。

「お役に立てましたでしょうか」

「そなたからの知らせで勝機が見えた。今一度確認するが、まことに氷玉はそう言ったのか」

「は、はい。わたくしが勤めます図書室に、伯爵閣下の信任厚い水の民の者がおります。アロンと言いますが。その者に話されているのを漏れ聞きました。閣下は人族の娘に与える本をお探すで。何冊かお選びになった後、薬草に関する書籍を現代語に訳し、新たな本を作れとお命じになりました。その際に、『名を捧げた』と」

若者はサネンだった。彼はかなり以前から、蒼華と通じて情報を流していた。

「アロンが驚いて尋ね返しましたから、確かです。本は、下働きの人族が、馬車を使ってその娘の所に運びました。閣下が名を捧げた相手は、人族の娘です」

「良くやった」

蒼華はサネンの側に歩み寄った。

「褒美をやらねばな」

そう言つと身を屈め、若者の顎に手をかけた。仰向かせ、その唇

に自身のそれを重ねる。唇を離すと彼女は、夢見心地の若者に微笑みかけた。そのまま彼の首を折る。

若者は、悲鳴を上げる間もなく絶命した。ぐたりとなった彼の体を床に落とすと、蒼華はふふ、と笑った。

「最後に良い夢が見れたであろう？ この氷魅ひょうみの口づけを得たのだから。褒美はやった。われらは約束は違えぬ。良くやってくれた。それは言っておくよ」

美しく冷酷な女性はそうして、その場を去った。後には野心を持ったがゆえに貴族の思惑に巻き込まれ、命を失った若者が残された。

1

紫忌むらしきの帰りが遅い事をユーラが心配しだしたのは、太陽が西に傾き、空が赤く染まり出した頃だった。夕食の支度が終わっても、紫忌は戻って来なかった。

「今日中には帰ると言っていたのに。何かあったのかしら……」
ゆでたじゃが芋をつつきながら、ユーラは言った。ガイリスがなだめるように言う。

「友だちと話がはずんで泊まる事にしたんですよ。明日には帰ってきますって」

「それなら良いのだけれど」

「ロ、ロークさんは、腕の良い剣士ですよ。何もありませんよ」

「そうね……ねえ、ガイリス。どうしていつもロークの名前を言う時につつかえるの？」

少女に言われ、ガイリスは詰まった。

「い、言いにくくて。人族の名前って、言いづらいのが多いんですよ、その、おれには」

「半獣族の名前って、どんな風なの」

「あー、えー、子どもの頃は特にないんですよ。何番目に生まれたとか、髪や目の色で呼ばれます。成人すると名前がついて」

「では、あなたはもう成人しているのね」

「え、はい。でも役立たずでしたから」

汗をかきつつ説明していたガイリスだったが、そこでふと言葉を止め、緊張した顔になった。立ち上がり、戸口の方を見やる。

「どうしたの？」

「ご主人さま。外套がいうを着て下さい。いつでも逃げられるように」

「気づくのが遅いよ、小僧」

その声と共に、扉が開いた。褐色の肌に赤い髪、大柄な女戦士が入って来る。ガイリスは少女をかばう位置に立った。女はしかし彼を無視すると、少女の前に膝をついた。

「失礼いたします、姫。わたくしは白男爵はくだんしゃくの配下、アルシナ。半獣

の民にございます。閣下めいの命を受け、陰ながらお見守りして参りましたが、危急の時ゆえ姿を現しました。お許しを」

少女は女戦士を驚いたように見ていたが、この言葉にまばたいた。「男爵がなぜわたしを……いえ、それは良いわ。アルシナと言ったわね。立つてもらえるかしら」

言われてアルシナは、立ち上がった。背の高い、たくましい女をユーラは見上げた。

「危急の時とは何？ 何が起きているの」

「不遜ふそんにも姫君に害を与えんとする輩やからが、ここを目指しております。姫君には、しばらくここを動かれませんように」

アルシナの言葉にユーラは息を飲んだ。そこでガイリスが緊張した口ぶりと言った。

「人がたくさんこつちに来る。それに、この気配。仲間？ いや違う……」

アルシナは軽蔑のまなざしでガイリスを見やると、ぞんざいな口調で言った。

「人族の呪まじない師だ。妖獣を使っているつもりだが、実際は乗っ取ら

れ、操られている。あんなものと我々の気配を混同するな」

ガイリスはしゅんとなった。ユーラは二人を見比べた。

「たくさんの人って、この辺りの村人？」

「おそらく。ひどく興奮しています」

アルシナが答える。

「ラストイたちを隠した方が良いかしら」

ユーラは口バの名を口にした。山羊も鶏も、外にある小屋の中だ。多くの村人が興奮してやって来るのだとしたら、動物に危害が加えられるかもしれない。

「家畜が心配ですか？」

アルシナの言葉にユーラはうなずいた。アルシナは顔を上げると「イリリア！」と呼びかけた。

「聞こえているわよ、アルシナ。声だけで失礼いたします、姫君。わたくしはイリリア。その粗忽者そつものと共に、御身おんみをお守りしに参りました。ご安心を。姫君の動物たちのいる辺りには、今、結界を張りました」

不意に女性の声が響き、ユーラは驚いて周囲を見回した。声は甘くかすれて艶があり、持ち主はさぞ美しい女性だろうと思わせた。

「どこにいるの？」

「わたくしは、外に。声をそちらに飛ばしております。申し訳ありませんが、姿はお見せできません。本性ほんしょうに戻っておりますので」

「本性？」

「わたくしたち半獣の民は、魔獣まじゅうや妖獣ようじゅうに近い資質さくを持ちます。普段は抑えておりますが、戦闘の際にはその性さがが露あらわになります。ですがそれを戦闘でもない日常の場で人目に晒さらす事は、はしたないとされております」

「あのう……人族の感覚からしたら、服を脱いで裸になってるみたいな感じです」

ガイリスがそつと言い、ユーラは慌てた。

「あ、あの、ごめんなさい」

『よろしいですよ。姫君にはご存知ない事でしたから。それより、その場所から動かれませんかように。姫君のお住まいにも結界を張っております』

その時ユーラの耳にも、何かがかすかに聞こえた。人々の声のようだ。声を合わせて何か歌っている。

「不遜^{ふそん}もはなはだしいッ」

アルシナが歯噛^{はが}みした。彼女にははっきりと聞こえているらしい。その唇から尖った牙がのぞき、彼女の髪がざわざわと逆立つのをユーラは驚いて見つめた。

『牙が見えているわよ、アルシナ。姫君が驚いておられるじゃない』
アルシナは牙を収めた。髪が元に戻る。

「失礼を。つい、我を忘れました」

「彼らは何を言っているの」

ユーラの言葉にアルシナは困った顔になり、口をつぐんだ。少女は重ねて問うた。

「わたしに關した事でしよう。教えて。村人たちと言ったわね。エニ村の人もいるの」

そう言つと、ため息が聞こえた。イリリアのものらしい。

『アルシナ。送るから受けてちょうだい』

そついう声がし、唐突に多くの人々の姿が少女の目の前に現れた。

彼らは声をそろえて歌っていた。土をふみしめて歩く足音。ぱちぱちと、松明が炎を上げる音がする。荷車が押され、積まれた薪^{たきぎ}や藁^{わら}が見える。ごく当たり前の服装の、ごく当たり前の農民たちが、炎に照らされ、目をぎらぎらとさせつつ足並みをそろえて歩き、声をそろえて歌っていた。ほとんどが男だが、女や子どももいる。その内の何人かには、見覚えがあった。ユーラが怪我^{いや}や病を癒し、時には笑って冗談を言い合い、親しくつきあつた事もある人々だ。しかし彼らは今、多くの人々と共に憑^つかれたような顔で歌っていた。歌はこの辺りの者なら誰でも知っている民謡だった。少なくとも旋

律は。しかし歌詞は違っていた。『魔女をつかまえる』『ひきずりだせ』『火あぶりにしろ』『燃やせ』という言葉を彼らはくり返している。

「魔女をつかまえる！」

しわがれた男の声がした。先頭に立つ老人が叫んだのだ。破れた衣をまとう彼は、蛙のような異相をしていた。異様に大きく迫り出した目に、とがった口。その目はいずれも、ぎよろぎよると動いて別の方を向いている。枯れ木のようにやせ細った腕を振ると、全員が「オオ！」と声をそろえ、拳を突き上げた。

「穢^{けが}れを焼き尽くせ！」

「あの女は闇魔族に関わった、世の穢^{けが}れ！ 正義は下されなければならん！」

「災いは全て、あの女のせいだ！」

「火あぶりにしろ！」

「火あぶりだ！」

人々の声は興奮で割れ、正しい事を行うのだと信じきった愉悦に満ちていた。

そうして唐突に、その光景は消える。暖炉で薪^{たきぎ}の爆^はぜる音がした。

「今のは」

少女が呆然としてつぶやくと、『姿と声をそちらに届けました』というイリリアの声がした。彼女の魔術だったらしい。

「魔女って……わたしのこと？」

「不埒^{ふらちもの}者^{そうげん}らの造言です」

吐き捨てるようにアルシナが言い、気づかわしげにユーラを見た。「火の側へ。震えておいでだ」

「ご主人さま、こちらへ」

ガイリスが少女をうながし、暖炉の側へ連れて行く。ユーラは自分の体が冷たくなっているのに気づいた。少年は彼女を椅子に座らせると、シヨールで体を包んだ。自分は衝撃を受けているらしい。

そう彼女は思った。

「わたし……、あの人たちに何かした？」

「ご主人さまがなさった事は、いつも善きわざばかりでした」

つぶやくように言った少女に、ガイリスが答える。外から人々の声が聞こえた。さつきより近い。村の中に入ったのだ。

「ジムがいたわ。マイラやケリも。三巡月前に来たばかりだったのに。ケイもいた。破傷風を治してあげた事があるわ。アディは、子どもが熱が出た時に薬草を渡して……」

先ほど見た光景を思い起こし、ユーラはつぶやいた。無意識のしぐさでシヨールをかきよせる。手が震えていた。

「わたし火あぶりにされるほど、あの人たちに悪い事をしたの……？」

ガイリスは少女の前にひざまずいた。

「ご主人さまは彼らの為に力を尽くしておいででした。傷を手当てし、病を癒した。感謝されこそすれ、侮辱を受けるいわれはどこにもありません」

外で怒鳴り声が上がった。何か怒りに満ちた言葉が叫ばれている。人々が走り回る気配がし、うるたえたような叫びが上がる。

「何の騒ぎ？」

少女がつぶやくと、『ここを探しているようです』とイリリアの声がした。

『見つからないのでいらだっています。確かに家があったはずだと言っている』

「イリリアの術は確かです。ここにいる限り、あの愚か者どもに姫を見つける事はできません。では、そろそろ行って参ります」

アルシナが言い、少女はそちらを見た。

「何をするの」

「あの不遜な輩を蹴散らして参ります」

「蹴散らす？ 傷つけるの？ 駄目よ」

驚いてそう言った少女に、アルシナは眉をひそめた。

「御身に逆らう者どもですぞ。受けた恩すら仇にする、見下げ果てた輩」

「それでも駄目よ。人族は弱い。傷つけばすぐに死んでしまう。殺さないで」

「見せしめを一人二人見せねば、つけあがって同じ事をくり返します」

「あれは、村の人たちなのよ。親しく話した事もあるわ。今は確かに、わたしを殺そうとしているけれど……、困っていた時に古着やチーズを持って来てくれたのも、同じあの人たちなのよ。傷つけては駄目。殺さないで」

外で歓声が上がった。笑い声も聞こえる。

「人族め」

アルシナが怒ったように言う。

「何があつたの？」

『手当たり次第に家を打ち壊し、火を放っています。ここが見つからない腹いせでしょう。村を完全に廃墟はいきょにするつもりでしょうか』

イリリアの声が静かに言った。

『花を踏みにじり、姫君の畑を荒しています。倉庫から、食料を運び出している者も……』

また歓声が上がる。がらがらと何かが崩れる音がした。どこかで家が崩れたのだろうか。村人たちは本気で自分を殺そうとしているのだと、少女は改めて思った。彼女が守り、平和であれと願い、愛してきた村の人々が。

「あなたは良くして下さっているわ、イリリア。食料は欲しい人にあげましょう。燃えてしまうよりは良いもの」

体の芯が冷えている感じはなくならない。自分が傷ついているのがわかったが、少女は震えを必死でこらえた。無様は見せられない。見せたくない。

「起きている事を教えて。薬草畑は無事？」

『まだ無事ですが、わたくしの能力ではそこまで覆えません。動物

の小屋を離れれば』

「いいえ、動物たちの方を守って。あの子たちは大丈夫？　怯えているのではない？」

『今の所は大丈夫です。不安は感じているようですが、おとなしくしています』

「では、そのまま守って。薬草は惜しいけれど……あきらめましよう」

「わたしがあります。姫のお心を傷つけるような輩、八つ裂きにしても飽き足らぬ」

そこでアルシナがもう一度言った。ユーラは強い口調で言った。

「駄目よ」

アルシナはいらだった顔になった。

「略奪されるに任せるといふ事ですか。一言お命じ下されば、わたしはいかようにも動ける。あれらを何百人と殺すに足る力を持っている。なぜお命じ下されない！」

「命は失われれば、取り戻せないからよ。わたしにも、誰にもできない。あの人たちは、自分が何をしているのかわかっていないの。お願い、アルシナ。殺さないで」

アルシナは困惑した顔つきになった。

「わたしにはわかりません」

『わたくしにもわからないわ。でも命令は下ったのよ、アルシナ。姫君が殺すなと仰せなら、わたくしたち、従わねばならないわ』

イリリアの声が言った。アルシナがいらだったように言う。

「しかしそれでは、ここに籠もっているだけか。人族ごときに良いようにされるなど！」

「わたしも人族よ」

ユーラの言葉にアルシナは、少女の方を向いた。少女はうなだれていた。

「ごめんなさい」

「姫君は違います。あのような輩とはまるで違う」

「同じよ。どこも変わらないわ」

外で大きく歓声が上がった。『柱を立てろ』『火あぶりに』という声が聞こえた。

「何があつたの、イリリア？」

『女を一人、焼き殺すようです』

ユーラは顔色を変えた。

「どういう事？」

『ご覧になりますか』

「お願い」

ユーラがそう言った途端、目の前の風景が変わった。人々が歌いながら杭を立てる。柴や薪が積まれ、そこへやつれた女が引きずられてゆく。見覚えがある、と少女は思った。アデイ。夫をなくして子どもと暮らす、エ二村の女性だ。子どもは側にいない。まだ小さいので置いてきたのだらう。

「この女は、裏切り者だ！」

蛙のような風体の老人が叫んだ。

「闇魔族に通じた女の治療を受け、穢^{けが}れたのだ！ 穢^{けが}れは焼かれねばならん！」

「そうだ！ 焼いてしまえ」

「火あぶりだ！」

狂気めいて人々が叫ぶ。老人は言った。

「この女は魔女を逃がした。その罪をつぐなわせるのだ！ くくりつける！」

女は悲鳴を上げて逃げようとするが、誰もそれを許さなかった。

男たちは髪を振り乱して足を踏^ふん張^ばろうとする女を殴ると、腕をつかみ、乱暴に引きずり始めた。

その光景はまた、不意に消えた。

イリリアの声がした。

「あの男、呪い師まじなです。群衆を煽動せんどうしているのはあの男……権威けんいを保たもとうとしているのでしょうか。姫が見つからなかったので、代わりの者を殺す。良くある策略です」

「わたしの代わりに、アディが？」

少女は立ち上がった。青ざめていたが、その目には強い光があった。

「させたりしないわ、そんな事は……」

「ご主人さま、いけません！」

扉に向かつて歩きだしたユーラに気づき、ガイリスが慌てて言った。アルシナはわけがわからないという顔をした。

「姫君。一体どう、」

「結界を解いて、イリリア。外に出ます」

ユーラの言葉にアルシナは絶句し、イリリアが息を飲む気配がした。ガイリスは扉に向かつて走ると、腕を広げてその前に立った。

「いけません。ご自分でも言われたではありませんか。あいつらは、何をしているのか自分でもわかっていない。危険すぎます！」

「このままでは身代わりにされた人が死ぬわ」

「自業自得じうごうじとくです。ここへ来た時点であの女は、ご主人さまを殺す事に同意していたんですから。放っておけばいいんだ」

「そこをどきなさい、ガイリス！」

そう命じたユーラに少年は、はっと身をすくませた。少年だけではない。アルシナもびくりと身を震わせた。おそらくは、イリリアも。厳しい顔をして立つ少女には威厳があつた。その細い体の奥から、何かの力が光のようにあふれ出ている。それは闇魔族の圧倒的な存在感とはまるで違っていたが、それでも彼らはひざまずき、その言葉に従いたいという衝動にかられた。

しかし少年は、その言葉に歯向かった。何年も共に暮らしていた彼には、少女の気質がわかっていた。誰かが自分の身代わりに死のうとしているのなら、危険を承知でこの少女は身を晒ひたす。あの暴徒の前に。そんな真似をさせるわけにはいかない。

「いやです……、動きません……」

「ガイリス」

「嫌です！」

彼は青ざめ、震えながらも首を振った。

「追放されてもかまいません。おれをどこへでもやって下さい。でもここは譲れません。あなたは、自分がどれだけ傷ついてもかまわないと思っておられる。でもおれは嫌です。あの女には、あなたにかばってもらえるだけの価値なんてない。あそこにいるやつらの誰一人、あなたにかばわれる価値のある奴なんていない！ あんなやつらに、好きにさせたりなんかさせるものか。あなたを見せるのだから嫌だ。ここは動きません！」

真っ青になりつつそう言った少年を、ユーラは不思議なものを見る目で見た。

「わたしにも、あなたがたにかばわれる価値はないわ。外にいる人たちとわたしは、どこも何も変わらないのよ」

静かにそう言つと、「ついていらっしやい」と言った。

「ご主人さま……」

「無茶はしないわ。側にいて。アルシナ。イリリアも。あなたたちはわたしを助ける為に来ているのね？」

「はい」

『ええ、姫君』

二人の言葉を聞いて、ユーラは言った。

「では、二人に頼みます。この家の結界を解いて、わたしと一緒に来て」

「仰せの通りに」

『お供を仰せつかり、光栄にございます』

外から驚きの声が上がった。群衆に、この家が見えるようになってしまった。

「さつきも言つたように、人は傷つけないで。二人には不本意な事を頼む事になるわ。彼らの前で、半獣の民としてのあなたがたの姿を現して欲しいの。あの人たちを脅かして。そうすれば彼らも頭が冷えるわ。あなたがたには……申し訳ないけれど」

先ほどの会話から、半獣族としての本性を見せる事は、彼女たちにとつては恥ずかしい事なのだとユーラは理解していた。それでもあえてそう頼んだ。それが一番、この状況を乗り切るのに良い方法に思えたから。アルシナが酢を飲んだような顔になる。イリリアの笑い声が響いた。

『存分に脅おどしてやりますわ。きつと人族の間で、何代にも渡つて語り継つがれる事になりますわね。ほほほ！』

アルシナは、さらに嫌そうな顔になった。

「人を傷つけてはならないのですね？」

「ええ」

「わかりました。開ける、小僧」

八つ当たり気味の口調で彼女は、ガイリスを睨むと言った。少年は扉に手をかけ、ユーラの方を見た。少女はうなずいて見せた。

蝶番ちょうつがいがきしんだ音を立てる。夜の闇と炎、そして狂気に満ちた群衆に向かい、扉が開かれた。

5・上がる火の手 2

2

グーヴェニクは闇の中で赤々と燃える火を睨んだ。廃屋はいおくが燃えて
いる。村人たちはそれを見て喜んでるが、彼は不満だった。せつ
かく呪まじない師として力を振るい、権力を手にする機会に恵まれたと言
うのに。闇魔族と関わった穢けがれた女は、その姿を隠してしまった。

女ヲ殺シタイ。

身の内にぞろりと沸き上がった憎しみに、彼は口を歪めた。闇魔
族と関わった女。自分を差し置いて、権力を与えられようとした女。

殺シタイ。

この憎しみを鎮める何かが欲しい。廃屋など、いくら燃やしても
足りない。

殺シタイ。

げろり、と腹が鳴り、左右で違う方を向く目玉が動いた。よたよ
たと歩くと彼は、周囲を見回した。何でも良い。生贄いけにえがいる。見回
した先に、やつれた女がいた。確か、穢れた女に治療を受けた事が
あると言っていた。

「裏切り者だ！ この女は、裏切り者だ！」

ゲクゲク、と喉の奥で笑うと彼は、声を張り上げて女の腕をつか
んだ。女の顔に、驚愕の色が走る。「そんな事はしていない」と言

う彼女の頬を張り飛ばし、彼は女を人々の前に突き飛ばした。

「こいつが穢れた女を逃がした！ 治療を受けたからだ。こいつも穢れているんだ！」

げろり、とまた腹が鳴った。彼は叫んだ。

「連れていけ！ 火あぶりにしろ！」

燃え上がる炎に興奮していた群衆は、彼の言葉にたやすく乗った。声を上げて女につかみかかると、殴ったり蹴ったりしてから引きずり始めた。女は悲鳴を上げ、逃げようとしたが果たせなかった。火刑台の準備が整えられ、薪が積まれる。

「火あぶりだ！」

グーヴェニクは満足だった。人々は彼の言葉通りに動いている。おれは支配者だと彼は思った。おれこそが、支配者なのだ。

* * *

城の自室で氷玉は椅子に腰かけ、物思いに沈んでいた。日が沈んでより一刻。闇魔族の世界が再び始まってより一刻だ、と彼は思った。昼の間は否応なしに、われらは世界を失っているのだから。

紫忌の言う通り、貴族の間に妙な動きがある。しかし氷玉は動きが取れなかった。一族当主は配下の貴族を統率すると同時に、庇護する立場にある。無闇に討伐を行えば、他領の当主が難癖をつけてくるのは必至だった。それを口実に、戦を仕かけられる可能性もある。己の地位にさして執着はなかったが、ユーラを守る為にも自身の立場は磐石でなければならぬ。となると、今は相手の出方を見るしかない。

もう一巡月、彼女に会えない日々が続いている。

「早く何か仕かけてくれぬものか。返り討ちにし、心置きなく姫の

元に向かうものを」

伯爵はつぶやくと、ため息をついた。少女の面影を胸の内にたどる。『眠りの中か、目覚めているのか』という言葉の意味が、わかった気がした。会ったびに目のくらむ心地がする。感じた事のない衝動に襲われ、それを幸福だと感じる自分がいる。彼女を見ると、胸の奥で泡が弾ける。そうして自分自身も泡になって沸き立っているような心地になる。彼女は、不思議だった。奇跡のような、あり得ざる存在だった。ただ存在しているだけで氷玉をもろくし、不安を覚えさせ、愚か者にし、彼の名誉を意味のないものにした。それでいて、彼は幸福なのだった。彼女の微笑みを見る事ができるだけで。

「夢とはこのようなものだろうか」

そうつぶやいた時、家令がやって来た。

「わが君。青闇男爵さまより、開戦の口上役が参りました」

氷玉は立ち上がった。これでやっと事態が動く。

謁見えっけんの場に氷玉が入ると、闇魔族の貴族が一人、広間の中央に立っていた。二、三百歳とおぼしき青年の姿をしている。彼は氷玉の姿を見て一礼した。柔らかく波うつ白髪に、銀朱の瞳。繊細な造りの美しい顔には今、緊張と懸念の色がある。

「口上くわじょうを述べよ」

氷玉が言つと、彼は進み出てもう一度、当主に対して礼を取った。「わが君にはご機嫌麗しく。わたくしは雪雅せつが。准男爵じゆなんしゃくの位を持ち、青瑠瑠あおめのうの城に居を定めし者。盟友たる青闇男爵の依頼を受け、ここに開戦の口上を述べに参りました」

氷玉は何も言わない。雪雅は続けた。

「男爵におきましてはこのたび、伯爵閣下には当主の振る舞いに自覚に欠ける所ありとの見解より、闇魔族の貴族、また一族の者として、閣下に挑まれるお覚悟に至りました。不幸な巡り合わせとは言

え、これも貴族の高貴なるつとめ。男爵はその責を、喜んで担うつもりであるとの事にございます。謹んで、その言葉をここにお贈りいたします」

「しかと聞いた。当主たるわれに挑むとは、愚かなる振る舞い。謀反を起こさんとする愚か者、青闇男爵をわれは討伐する。男爵に与する者も同罪に連ねる。逆心なくば離れよと、配下の者に告げよ」

「承りました」

「では行かれよ。そなたも己が道を選び、存分に戦われるが良い」
この言葉と共に、雪雅は退出するはずだった。しかし彼は動かずに氷玉を見上げた。

「閣下。わたくしは未だ信じかねております。あなたほど当主に相応しい方は、他におりませぬ。そのあなたが、愚かな振る舞いをなさったなど」

氷玉は口許に微苦笑を浮かべた。

「そなた、何を聞いた」

「あなたが……事もあろうに、人族の娘に膝を折ったと」

雪雅は口にするのも汚らわしいという口調で言った。氷玉はほう、という顔になった。

「蒼炎はそれを耳にしたのか。しかし存外と遅かったな。あまり良い細作を使っておらぬのではないか？ わたしは今少し、早く動く思っていた」

「わが君。戯れ言はそこまでに。まことではありませぬでしょう、人族など」

「事実だ」

雪雅は衝撃を受けた顔になった。

「それは一族への裏切りです」

「なさねばならぬ事をしただけだ。そなたも、かの姫を見れば理解できよう」

静かに言う氷玉に、雪雅は首を振った。

「わかりませぬ。わたくしには。理想の当主であられたものを……」

せめて否定なさって下されば、わたくしはあなたの側に立てたのに」
「そなた、蒼炎の城の者ではないのか」

怪訝な顔で氷玉が言くと、雪雅は悲しげに目を伏せた。

「あの方の城に居を定めはいたしましたが、わたくしにとっての主君はあなたでした。しかしこうなれば貴族の誇りと名誉の為、刃を向けねばなりません」

氷玉は息をついた。

「そうか。つらい所ではあるな。したがこれも貴族のさだめ。そなたはそなたの正義をなすが良い、准男爵」

反逆の意思を示した蒼炎は呼び捨てるが、自分の名を呼び捨てない事で尊重してくれた当主を、雪雅は見上げた。彼と戦いたくはなかった。しかし雪雅は青闇男爵の使者であり、最後に確認した事で道は決まってしまった。

「当主にも、気高き戦をなさいますよう」

ただ敬意だけは払いたかった。このような場合、品位さえ保てれば、相手を侮蔑する言葉を述べても良い事になっている。互いの立場が明確になるからだ。だが彼はあえてそうせず、こう言った。その思いは氷玉にも伝わったらしい。

「字は何と言う」

そう問われ、雪雅は答えた。

「未だ持ちませぬ」

「ではこれより先は、六花と名乗るが良い。そなたの名の一字を意味する」

当主自らが配下の者に字を授ける事は、滅多にない。それはよほどの功績を上げた者か、気に入られた者の特権だった。雪雅は驚いた顔になり、ついで深く頭を下げた。

「ご厚情を賜り、感謝の極みにございます。このちは、そう名乗らせていただきます」

この方と戦いたくはない。その思いが強くなった。だが去らねばならない。

今一度礼を取ると、彼はその場を去った。

＊ ＊ ＊

蒼月闇そうげつやみの城に向けて、青闇男爵あおやみの手勢が進軍を開始したのは、それから半刻もしない内だった。旗印となったのは、青闇男爵蒼炎そうえん。彼を支援する貴族に、華乱男爵雪綺からん、緋雨男爵蘭火せつき、准男爵煌牙ひさめ、そして准男爵雪雅せつが。配下の者として、騎士位の闇魔族が数名。後方の支援を氷刃男爵蒼華ひょうじんが約束しており、各々の貴族が連れて来た半獣の兵士と魔獣たちが、続々と彼らに従う。

対する氷玉には、味方につく闇魔族はいなかった。氷玉の戦力はそれゆえに、彼自身と城詰めの水の民、側仕えの半獣の兵士、そして警護の魔獣のみだった。

城の最初の扉の前で、攻防が開始される。

空には少し太った半月がかかっていた。

6・乱 1

城内は慌ただしくなった。

「グウエン。何をしている」

アロンがいつもより雑然としている図書室に入ると、そこには一族の若者がいた。八十になる彼はアロンの孫で、緑の髪と藍色の瞳をしている。驚いた事に彼は、帷子かたひらと兜かぶとを身につけていた。

「挨拶に参りました、祖父さま。同族の者たちと、三の扉に詰めます。城内に騎士の方がおられませんので、その代わりに」

「水の民は城の運営を任される種族。戦闘は免除めんじょされている」

「ですが閣下の手勢はあまりに少ない。お見捨てするわけには参りません」

アロンは孫の言葉に首を振った。

「われらは低位の魔族。貴族の方々とは比べ物にならん。三の扉には騎士が攻め寄せる。おまえなぞ、ひとたまりもない」

「わが一族は、閣下に恩義を受けております。先代さまはわれらを半端者とお呼びになり、半獣の兵士と同様か、それ以下の扱いしかして下さいませんでした。低位ではあっても魔族であると言われ、そのように扱って下さったのは銀月の君ではありませんか」

「グウエン！」

「祖父さま。わたしはうれしいのです。少しでも閣下のお役に立てる事が」

若者は微笑んでそう言うのと、アロンに一礼した。死を覚悟しているのが見て取れた。

「力の限り、城の護りをいたします。祖父さまにはどうか、お健すこやかに」

「待て、グウエン」

アロンは呼び止めようとしたが、若者は踵かかとを返し、部屋を出て行

った。後を追おうとしたものの、彼を止める手だてを持たないとアロンは気づき、その場に立ち尽くした。

「愚か者が。戦は貴族の遊戯ゆうぎに過ぎぬ。あの方々は死に興きようじているだけ。われらの忠義立てなど、あの方々には何の意味もない」

水の民の老人はつぶやいた。

「われらの忠義も、愛情も。あの方々には何の意味もないのだ。だというのにグウェン、愚か者が……」

1

銀魔狼が天に向かって吠える。月牙当主に従う魔獣は、一の扉の警護を任されていた。彼らは今、青闇の魔獣である青炎蛇に苦戦していた。貴族の戦は、位の低い者同志の戦いから始まる。

銀の毛並みの魔獣は奮戦していたが、如何いかんせん、蛇の数が多すぎた。青く炎を上げる蛇は大地を埋めつくすかのように、次から次へと押し寄せる。蛇は己の保身をまるで考えぬ様子で、食いちぎられても、蹴散けちらされても、後から後から押し寄せて、魔狼に絡みついた。そこかしこで狼が悲鳴を上げ、絶命する姿が見受けられた。しかし彼らは一歩もひかず、押し寄せる蛇に向かって突撃を繰り返した。

「叔父上には良くもここまで、己が魔獣を無様に造った」

蒼月闇の城の広間。玉座に座して頬杖をつきつつ、氷玉はつぶやいた。彼の前には巨大な炎の鏡があった。青白く燃えるそこには、戦の様子が克明に映し出されている。

蛇の大半は、形が崩れていた。作戦らしき作戦もなく、ただ闇雲に押し寄せ、相手を喰らおうとする。戦に備えて青闇男爵は魔獣の数を充実させたいが、大量に増産させた為、知能の低い、形の粗雑なものばかりとなってしまうのだ。しかし彼はあえてそれを

使う事に決めたらしい。数だけはあるそれを、次々と陣営から送り出している。

「捨て駒として、大量に投機ちけいするか。あまりと言えはあまりな有り様。わが方の魔獣も良く戦ってくれてはいるが、このままでは全滅の憂うれき目に合うな」

ため息をつくと彼は、側に控えていた半獣族の男に目をやった。

「グロフ。銀魔狼を退かせ、エメラダの隊を出せ。一の扉は捨てる」
「は」

側に控えていた褐色の肌、こわい黒髪の半獣族の男は一礼すると、顔を上げ、高く吠えた。髪がざわざわと逆立ち、男の筋肉がみしみしと音を立てて膨れ上がる。狼の遠吠えに似たその声は、待機していた半獣族の兵士たちと、一の扉の前で奮戦していた魔狼たちの耳に届いた。扉が開き、銀魔狼たちは一斉に退却を始めた。後を青い蛇が追う。

蛇たちは扉の中に入った所で、半獣兵の放った凍気こけいに包まれ、凍りついて砕けた。

青瑪瑙あおめのうの城では蒼炎を中心にして闇魔族の貴族が集まり、戦の趨勢せいを見ていた。彼らは城の広間にいた。玉座に蒼炎が一人座し、他の者は立っている。力関係を如実に現す配置だった。玉座の後方に彼の近習きんじゆが一人立ち、一段下がった左右に二人の男爵が立っている。雪雅と他の騎士たちは離れた所に立って城同志の間に道を通し、空間をつなぐ作業を続けていた。そこから蒼炎は、魔獣や兵士たちを送り出したのだ。

今、彼らの前には青白く燃える炎の鏡が浮かんでいる。騎士の一人が力を使って維持しているものだ。そこには氷玉の城のそれと同じく、戦の様子が映し出されていた。

「この魔獣はもはや、魔獣とは言えませぬな。完全に性しょうを失っている」

戦いを眺めていた華乱男爵雪綺が言った。紅真珠の字を持つ、白髪に朱鷺色の瞳、青白い肌の男である。彼は氷玉に滅ぼされた雪華一族の血を引いていた。

この言葉に事もなげに、蒼炎が答える。

「早急に数を必要としたゆえ、手持ちの魔獣を割って増やした。知能はなかったが、この戦で役に立ちさえすれば良い。たかが魔獣、滅びた所で惜しくもない。あるじであるわたしの役に立つのだ。あれらも本望であろうよ」

「とは言え、趣味の良い戦とは言いかねますな、綺羅月の？」

緋雨男爵蘭火が言った。淡雪の姫と呼ばれる彼女は少女の姿をしており、白い肌に白髪、薄紅色の瞳をしていた。彼女は彩一族の血を引いていた。これもやはり、氷玉に滅ぼされた一族である。彼女の言葉に蒼炎は口の端を歪めた。

「青闇の魔獣は青炎蛇。悪くはないが、銀魔狼には劣る。であれば、数を増やす他はなかるう、淡雪の？ それともそなたらの魔獣、この戦に投入するか」

「これはそなたの戦でありましょう、綺羅月の。われらはそれぞれの一族の再興を願うがゆえに、こちら側についた。しかし当主に挑む者の戦を汚すつもりはありません」

蘭火が答え、雪綺が後を続けた。

「当主の座を望むのであれば、現当主の前に出るまでは、自身の配下でしのぐべき。当主どのが先代に挑まれた際は、見事な戦いぶりであつたと聞き及んでいる」

蒼炎はいらだたしげな顔をした。

「あれは当主を僭称した者にすぎぬ、紅真珠の。しかもこたびは月牙の誇りを地に落とした。当主などであるものか。血筋のわからぬはぐれ者が。だがわたしが当主の座につけば、全ては本来の姿に戻る。そなたらの一族の再興も認めよう。ゆえにわたしの前である『名無し』、血筋の正しくない甥を、『当主どの』などと呼ぶな。虫酸が走る」

闌火と雪綺は視線を交わしあつた。闌火が物柔らかな口調で言う。
「そのようにいたしましょう、綺羅月の。ところで氷魅の御方はいかがしておられます」

「蒼華には他にすべき事がある。案ずるな。われらが氷玉の前に出る時には、あれも参じよう」

蒼炎がそう言った時、配下である騎士の一人が声をかけた。

「わが君。戦況に変化がありました」

彼らは炎の鏡を見やった。そこでは一の扉が開かれ、そこを守つて戦つていた銀魔狼が撤退を始める様が映し出されていた。退却する銀魔狼を追つて、青い蛇の群れが城に突入した。血と炎が流れ、さらに攻防が繰り返された。やがて扉の前には蛇の残骸と、魔狼の死骸が残された。死に切れぬものもいくらかはいたが、それらは取り残される。

「わが方の魔獣が、一の扉を落としました」

騎士の言葉に、蒼炎は微笑んだ。

「半獣兵に突入の用意をさせろ。魔獣を気にする事はない。どうせ知能がないのだから。氷玉の兵が魔獣と戦い、疲れた所を叩くが良^い。まずは、一つ」

「存外もろいものでしたね。もう少し粘^{ねば}ると思いましたが」

蒼炎の近習、准男爵煌牙が言った。白銀の髪に真紅の瞳の彼は二百歳になる青年で、蒼炎の孫であり、氷玉には甥にあたつた。彼の容貌はどことなく、氷玉に似ていた。もつと線が細く、酷薄な印象を漂わせていたが。

「あの僭主も今ごろは、齒噛みをして悔しがっております。わが君にはお喜びを申し上げます。正しき血筋の方に、次の扉もすぐに開かれましょう」

「当然だ」

蒼炎は喉の奥で笑つた。

「半獣兵、準備整いました」

騎士の一人が告げる。「突入させろ」と蒼炎は命じた。

* * *

炎がそこで上がっていた。打ち壊された家屋が燃えている。

グーヴェニクは得意の絶頂だった。即席に作られた火刑台の周りに、柴や薪が積み上げられてゆく。男たちに腕をつかまれた女は泣き叫び、助けてくれと懇願こんがんしていた。それすらも彼には己を讃える声に聞こえた。

「この女は、裏切り者だ！ 闇魔族と通じた女の治療を受け、穢れたのだ！ 穢れは焼かれねばならん！」

げろり、と腹が鳴る。目玉が左右にぐりぐりと動く。おれは支配者だ。そう思いながら彼は叫んだ。おれは支配者だ。

「そうだ！ 焼いてしまえ」

「火あぶりだ！」

人々が叫ぶ。彼は女を指さした。

「この女は魔女を逃がした。その罪をつぐなわせるのだ！ くくりつける！」

男たちが女を引きずり、杭にくくりつける。残酷な見せ物の始まる予感に、人々は歓声を上げた。

殺シタイ。

笑いが腹の底からあふれそうになった。その時、叫び声が上がった。

「見ろ！」

「ああ、見て！ 家が！」

今にも火を放てと命じようとしていたグーヴェニクは、何が起き

たのかと目玉を動かした。そして見た。あちこちで上がる炎に照らされて、小さな家が突然、現れたのだ。

「さっきまで何もなかったのに」

「魔術だ。あの女、やっぱり魔女だ！」

人々は恐れ、怯えてその家からできるだけ遠ざかろうと、押し合いへし合いし始めた。怒りがグーヴェニクの中に起こった。おれが支配者だ。おれこそが支配者なのだ。なのに。

「おまえたち、恐れるな！」

グーヴェニクはわめいた。

「まやかした！ われらは正しき神に従う者。魔女に負けることがあろうか！」

叫ぶ。おれは支配者だ。群衆は再び、おれの思い通りにならなければ。

「魔女を引きずり出して火あぶりにしろ！ われらを恐れて隠れていたのだ！ さしたる力は持つておらん！」

人々はグーヴェニクの言葉にざわめいた。

「そ、そうだ、魔女は恐れてたんだ」

「隠れてたんだ、力なんか持つてないぞ」

「でも、魔女だ。何かされたら……」

「家に火をかけてしまえば」

それでもまだ支配しきれていないと、グーヴェニクは齒噛みをした。もう一度村人たちを鼓舞しようとして彼が口を開いた時。

「魔女だ！」

不意に誰かが叫び、ざわめきが消えた。その場がしんとなる。

何が起きたのかと呪い師は思った。首を伸ばして見ようとするが、背の低い彼には村人たちが邪魔で、何も見えない。ぴょんぴょんとはねてみたが、駄目だった。すると、人垣が割れた。彼はせりだした腹を手で抑え、ぎろぎろとした目玉を前に向けた。

割れた人垣の間を、少女が歩いてくる。現れた家の扉から、こち

らに向かつてまっすぐに。栗色の髪に榛なはみの瞳。粗末そまつな衣服にシヨールを羽織る少女は、小柄な上にやせっぽちだった。彼女はしかし顔を上げ、威厳いげんを持って歩いていた。まるでそこが王宮であり、自分が女王でもあるかのように。側には少年と、赤い髪の女戦士。そして黒髪の女性。

「その人を放しなさい」

グーヴェニクの前に来ると少女は、厳しい顔で命じた。

「わたしは薬師くすりし。人の命を救うのが仕事。そのわたしの前で罪もなく、裁かれるいわれもない者を殺すなど、許しません。あなたがたは何をしているのですか。そこにいるのはあなたがたの隣人であり、家族である、良く知る女性ではないのですか」

ゲク、とグーヴェニクの喉が鳴った。若い娘。輝いて見える。誘うように甘い香りがする。

「ジム！ この人はアディではないの。あなたの妻、エイミの親戚でしょう。ジェイ。この人にあなたは、子守をしてもらった事があるはずよ。そのお礼がこれなの？ シーラ。ミアも。この人を見捨てて平気なの？ エニ村の人たち。彼女が誰か、みんな子どものころから知っているでしょう。他の村にも知り合いや、親戚の人がいるはずだわ。あなたたちは、何をしているの！」

少女は周囲を見回すと、見知った顔を見つけては叱りつけた。名を呼ばれた男や女たちは居心地悪そうな顔になり、おどおどとした風に顔を見合わせた。さっきまでの興奮が去り、頭が冷えてきたのだ。しかし何をどうすれば良いのかわからない様子で、松明を持たまうろたえている。

「アルシナ。お願い」

少女に言われ、女戦士は堂々と歩いて行くと、杭にくくられたアディの綱を切った。泣きながら女は礼を述べ、転がるように薪の山から降りた。地面にへたり込む。

その間、グーヴェニクは少女を見つめていた。これは、綺麗だ。

殺シタイ。

おれは支配者だ。

殺シタイ。喰ッテシマイタイ。

支配者だ。

「脅すまでもありませんでしたわね、姫君」

黒髪の女性が微笑んで言った。悩ましい彼女の声と姿に、周囲の男たちは赤くなった。

「魔女め」

グーヴェニクは言った。体が震えていた。怒りと歓喜と食欲で、
脳が爆発しそうだ。

「魔女め魔女め魔女め！ 穢れた女の分際でも出て来れたな！ 捕らえろ！ こいつを火あぶりにするんだ！ さもないと閻魔族が攻めてくるぞ！」

村人が少女たちから後ずさった。呪い師の言葉に衝撃を受けたのだ。その様を見てグーヴェニクは叫んだ。

「そうだ、閻魔族だ！　こいつも仲間だ、殺さないで災いを呼ぶ！　火あぶりだ、火あぶりに、にににに、」

げろり、と腹が鳴った。体の内側で何かが膨れ上がる。ぎちぎちと音を立てて肉や骨が引つ張られる。飛び出てくる。何かが。

「ににイイイアアアッ」

悲鳴が上がった。呪い師の体が膨れ上がったかと思うと、血と肉をまき散らしてはじけたからだ。彼の腹からは触手が何本も現れ、勢いよく四方八方に伸び、周囲のものを手当たり次第に貫こうとした。

「うざりたい！」

しかしそれは果たせなかった。その一言と共に、アルシナが触手を断ち切ったからだ。彼女は呪い師の変化が始まったと同時に跳躍し、腕を一閃^{いっせん}させていた。風が目に見えない刃となって触手を斬った。彼女が地面に降り立つと、ばらばらと落ちた触手が、地面の上でのたうった。

「憑いた妖獣も制御できぬ、成り損ないが。姫の御前^{おんまえ}に醜^{みにく}き姿を晒^{さら}すでないわ」

吐き捨てるように言う彼女の髪は逆立ち、唇からは牙がのぞいていた。瞳が獣のように光っている。

「は、半獣……」

「半獣族だ！」

村人は呪い師の変貌よりも、アルシナの姿に衝撃を受けたようだった。怯えて逃げ出そうとする。

「あの触手に貫かれれば命はなかったものを。助けた者に対する態度がこれとは」

イリリアが言った。彼女の腕の中にいたユーラは、いつの間にかんな事になったのかという顔をした。イリリアは微笑みかけた。

「今しばらく、このままで。あの呪い師、御身を狙っているようです」

ユーラははつとなり、男の方を見た。触手を斬られた呪い師が、こちらを見ていた。いや、もう呪い師ではなかった。人ではない何かに男は変貌していた。ねとねとした体液に全身を覆われ、緑色になった皮膚をぶるぶると蠕動^{ぜんどう}させている。ぎよろりとした目玉がこちらを向き、長い舌が裂けた口から出た。前かがみの姿勢で四つんばいになると、それはニイ、と笑った。

「き、きれい、キレイ、ホシイ、欲しい、喰いたい、喰イタイ、」
そう言つとグーヴェニクであったものは、ユーラに向かって飛びかかった。

「で、ここはどこなんだ」

紫忌しきが言った。レサンの村に移動するはずだった彼と青雅せいがは今、違う場所にいた。

「向こうに見えるのは黒竜の峰だな。方向が全然違うじゃないか」

「申し訳ありません。途中で道をねじ曲げられました」

緊張した面持ちで、青雅が言った。紫忌は武器を手にした。

「あれをどうにかしないと駄目って事か」

「おそらくは」

二人の視線の先で闇がゆるやかに分離し、過剰かじょうなまでに装飾品を身につけた闇魔族の少年が現れる。青みを帯びた白髪に真紅の瞳を持つ、美しい少年である。彼の顔だちもまた、氷玉に似ていた。青雅ほどではなかったが。

「役立たずにも程がある。足止め一つできぬのか、青雅？ わが君のご寵愛ちゆうあい深きこのわたしが見張っておらねば、取り返しのかぬ事になる所であつたわ」

少年は紫忌を無視し、青雅に向かって尊大な口調で言った。傲慢ごうまんな表情には嘲りの色があつた。

「役立たずは役立たずなりに、その体を使ってでもお役に立てば良かったものを。それとももう、その紛い物まがとは寝たのか。それでいてなお役目を果たせぬとあらば、目も当てられぬ」

態度にも言葉にも、青雅を貶めようとの悪意があふれていた。青雅の方は黙ってその言葉を受け止めている。特に何かを言うつもりはないらしかつた。

「なんだこのちゃらちゃらした、いけ好かない小僧は。知り合いか、青雅」

しかし紫忌は違った。装飾品だらけの少年を呆れたように見てい

たが、あっさりと言った。少年の頬がぴくりと動く。けれども人の血を引く紫忌を相手にするつもりはないらしく、彼は無視する態度を取った。仕方なく、青雅は答えた。

「この者は^{りんか}燐華。綺羅月の君の騎士の一人です」

紫忌は「ふうん」と言くと、燐華に向かって尋ねた。

「ご寵愛深きつて事は、あんた、叔父君の稚児^{ちじ}かい？」

あからさまな言葉に、二人の闇魔族は凍りついた。

「前から思ってたんだが、綺羅月の叔父君ってミョーに兄上に執着してないか？ 取り巻き連中がみんな、兄上に似てるんだよな」

構わず紫忌は、ずけずけと言った。青雅は慌てて止めようとした。

「閣下」

「叔父君がおれのこと、稚児だ稚児だって言い続けるのってさ。あれ結局、嫉妬？」

「閣下……あの」

「要は兄上にフラれたって事だよな。それで似たようなの側に置いて、心の慰めにしてるとか？ うわ、ありそうで怖い」

「閣下！」

「この小僧も顔だけは、ちょっと似てるわ。品格や威厳がないから、全然違って見えるけど」

「こ、この、無礼者が……！ わが君はなぶる程度で良いと言われたが。おまえなど、八つ裂きにしてくれる！」

あくまで紫忌を無視するつもりで黙っていた燐華だったが、この言葉の数々に、ついにそう怒鳴った。怒りに身を震わせている。青雅は肩を落としてため息をついた。

「状況を悪くしてどうするのです」

「ごめん、おれって正直だから」

にやりとして紫忌は武器を構えたが、青雅は紫忌の前に出ると、彼をかばって立った。

「おさがり下さい。ここはわたくしが」

自分より華奢^{きゃしゃ}な相手にかばわれた男は、武器を構えたまま情けな

い顔になった。

「おれの方が守られる乙女役なの？」

燐華は嘲るような顔になった。

「抱かれて情を移したか。見下げ果てた奴だな、青雅」

「いや、おれ抱いてないし。ってか、そんな時間がどこにあったよ？」

紫忌が困った顔で言う。無視して燐華は続けた。

「おまえなど、わが君のご寵愛を受ける資格もないわ。この燐華がここで成敗してくれる。紛い者と寝た裏切り者」

「だからそんな時間がどこに……ご寵愛を受ける資格？ 叔父君の稚児だったの、青雅」

「戦いの前に気を散らすような事を言わないで下さい、閣下。第一、面と向かって尋ねるような事ですか」

迷惑そうな顔で青雅が言った。

「すまん。ちよつと気になったものだから。いや、叔父君の趣味って無茶苦茶悪いと思ってたんだよ、この小僧見て。よくこんな出来の悪い紛い物、側に置いとけるなってさ」

「な……」

燐華はこの言葉にまなじりをつり上げた。

「だってそうだろう、その小僧は兄上の複製だよ。なつちやいないがね。こんなの眺めて喜んでるようじゃ、綺羅月の君も大した事はない、そう思ったのさ。その態度。喋り口調も。兄上の真似だろう、燐華とやら？」

紫忌はにやりとして燐華に言った。

「板についてないぜ。ひでえもんだ。青雅を少し見習うんだな。少し話しただけでわかった。こいつは自分で自分を作ってきた。自分と呼べるものを持つてる。だが燐華、おまえにはない。どう見ても空っぽだ。おれはさ、青雅。おまえが叔父君の愛人だったとしたら、叔父君の趣味もそこまでひどくなかったんだと思ったのさ」

青雅の頬がうつすらと染まった。

「ありがたきお言葉なれど、閣下」

頬を染めたまま、彼は言った。

「相手をますます怒らせて、どうするのです」

燐華は激怒していた。怒りのあまり、呼吸が困難になっているようだ。今にも泡を吹くのではないかと紫忌は思った。

「わが君を侮辱しただけでは飽き足らず、わが名を呼び捨て、あげく、この、無礼の数々ッ。ただでは済まさぬ。生まれてきたのを後悔するような目に合わせてくれる！」

ようやく息がつけるようになると、燐華は宣言した。

「じゃ、後は任せるし」

青雅の肩をぽんと叩くと紫忌は言った。思わず青雅は非難のまなざしを彼に注いだ。

「相手をやる気満々にしていただいて、お礼を言うべきでしょうか、閣下？」

「だっておまえ、あんなのに負けたりしないだろ」

「は？」

紫忌はにっと笑った。

「それぐらいの実力はあるだろう。それとも自信がないか？」

からかうような口調で言われ、青雅は紫忌を睨んだ。こう言われては引き下がれない。

「わかりました。さがっていて下さい」

そう言つと紫忌は、気楽な調子で言った。

「期待してる。なるべく早くな。危なそうなら加勢してやるから存分にやってくれ」

「お手をわずらわせるほどの事ありません。わたくし一人で十分です」

そう言つと、青雅は燐華に視線をやった。

「この程度の者をあしらえずに、騎士は名乗れませぬゆえ」

「言つたな、この出来損ないが！」

燐華が叫び、宙から炎を呼び出した。両腕にまといつかせたそれ

を、青雅に向かって放つ。

戦闘が始まった。

6 乱 1 (後書き)

青雅、この先苦労しそう…。

6・乱 2

2

蒼月闇の城。二の扉前では、半獣族の兵士同志の攻防が繰り返されていった。

「押し返せ！」

鋭い爪と牙を持ち、全身を氷の刃でかためた猫に似た容貌の女が、緑の髪を逆立てて叫んだ。獣の特徴を持つ男や女たちが、その声に従って敵に向かう。一の扉から退却してきた銀魔狼もその声に従い、連携を組んで敵をほふった。氷の礫が宙を舞い、女の腕が一閃されるたび、敵方の兵士の首が飛ぶ。血が飛び散り、怒号と悲鳴がその場を包む。

「『氷のエメラダ』だ！ 『炎のロチェフ』に続く第三の手練だぞ！」

青闇の半獣兵が叫んだ。

「取り囲め！ エメラダを討ったとなれば名が上がる……」

男は最後まで言う事ができなかった。そこで首を飛ばされたからだ。エメラダは金の目を光らせると、はね飛ばした男の首をつかみ、その顔に向かって怒鳴った。

「誰が三番目だいッ。ロチェフなんかの下についた覚えはないよッ！」

首を放り出して足げにすると、彼女は周囲をぐるりと見回し、牙を剥いた。

「あたしがここの守備してるのは、あいつより閣下の信任が厚いからさ。ここから先に行く奴はいない。おまえらの暴挙もここまで。ロチェフの出る幕はない。わかったらまとめてかかっておいで！」

同僚のロチエフが自分より伯爵に近い三の扉の守護を任された事を、よっぽど気にしていたんだなと彼女の部下たちは思った。

「良く戦う」

思わずという風に華乱男爵雪綺が言った。二の扉前で奮戦する工メラダと彼女の部下、銀魔狼の戦いぶりを見ての言葉だった。青瑯あおめの城、蒼炎そうえんの陣営では、炎の鏡に刻々と変化する戦況が映し出されている。

「こちらの手勢は押し戻されそうです。いかがしますか？」

「もつと送り込め」

騎士の一人の言葉に、不機嫌に蒼炎が言った。雪雅は彼を見上げた。

「もう、かなりの数を送り込んでいます。このままでは、半獣兵が底を尽きます」

「それをあの女一人に阻まれたと？ 速やかに城を制圧したかったものを。これでは氷玉の戦ぶり、評判を上げてしまうではないか。

出せる騎士はいるか」

「未だ二の扉いまですぞ、綺羅月きりげつの。ここは半獣兵が相当。騎士を出せば、情弱者たじやくものよと大陸中の魔族に笑い物にされましよう」

柔らかな口調で緋雨男爵蘭火が言う。蒼炎はそちらを睨んだ。

「あの者の評判を上げるなど、我慢ののしならん。罵られた方がまだましというもの」

「見事なお覚悟ですが、共に戦う我らの名誉にも関わります。控えていただきたい」

そこへ煌牙こうがが静かに進み出る。

「お任せを、わが君」

そう言つと彼は炎の鏡の前に立ち、片手を上げた。その手に魔力が集まる。彼はそのまま、鏡に向かって力を放った。

突如として宙を走った光に、エメラダは胸を貫かれた。がっとうて倒れる。そこへ敵兵が殺到した。部下たちがかばおうとしたが果たせず、彼女の体に次々と刃や槍が突き立てられた。エメラダは獣のような吠え声を上げると立ち上がり、全身から氷の刃を繰り出した。吹雪が吹き荒れ、鋭い礫が槍を折り、突撃してきた敵兵を切り裂く。だがそこまでだった。再び膝をついた彼女を部下がかばい、別の部下が彼女をつかんでひきずり、激しさを増した戦闘から連れ出そうとする。

「まだ戦えるッ！」

血にまみれ、深い傷を負いながらもまだ、彼女の闘志は健在だった。暴れ出そうとする彼女を、部下たちは必死で押さえつけた。

「なりません！　ここは退くのが」

「閣下のお顔に泥を塗れるかいっ！　ここは護り通すッ！」

体に刺さった槍を引き抜き、投げ捨てるとエメラダはなおも戦闘に戻ろうとする。部下数名がそれに取りすがった。

「『氷のエメラダ』がこんな所で討たれたとあつては、それこそが閣下の恥となります！」

「誰が討たれるか！　ぐ、」

胸に走った痛みには女は顔をしかめた。撃ち抜かれた所はまだ傷が塞がらず、焼け焦げたようになっていた。そこからじわじわと自身の魔力が流れだし、失われてゆくのを彼女は感じた。これは半獣族の魔力ではない。そう直感した。貴族の仕業だ。

半獣兵の戦いの場で、なぜ。

「隊長ッ！」

彼女を討とうと、敵が殺到する。それを防いだのは、彼女の副官を長年つとめてきた半獣兵、ダレスだった。

「第一部隊、前へ！　第二部隊、こちらを援護しろ！」

生き残った部下に命じると、彼はその場にいた数名に「扉を開け」と命じた。

「隊長にはさがっていただく。ロチェフどのの所へお連れしろ」

エメラダはきつとした顔を彼に向けた。

「ダレス！ 何を勝手な」

「その傷ではもはや戦えますまい。その。隊長が退くと同時に扉を閉める」

ダレスはふ、と笑みを浮かべた。

「ここは聞いていただきますぞ。指揮官として采配をふるう、こんな好機は逃せませんのでな。敵兵はできる限り減らしますので、後はよろしく頼みます。連れて行け！」

エメラダはなおも暴れようとしたが、部下たちがそれを許さなかった。扉が開かれ、引きずり出されるように彼女は連れ出された。それを確認してから、扉は再び閉じられた。

「ここを開ける！ あたしは隊長だぞ……」

体に力が入らない。めまいがする。もたれた扉の向こう側では、突撃を命じるダレスの声がした。

兵士たちの鬨ときの声。

「ダレスどのが時間を稼ぎます。ロチェフどのの所へ参りましょう」部下が彼女に肩を貸そうと進み出る。エメラダは齒はか噛みをしてそれを断った。

「自分で歩ける。ダレスめ。無様な死に方をしてみろ、許さんぞ！」

「何の真似だ、煌牙。半獣の戦いに介入するなど。わたしの顔に泥を塗るつもりか」

蒼炎は力を放った闇魔族の若者を見やった。口調はしかし、楽しげだ。煌牙は一礼した。

「失礼を致しました。しかしわが君のお顔に泥を塗る事にはなりません。介人などは、なかったのですから」

煌牙は微笑んだ。

「僭せんしょうしや称者の配下など、裏切りを働いたも同然。皆殺しにするのが順

当でしょう。何か言い立てる者がいたとしても、所詮は負け犬の言う事。誰が耳を貸しましょうか。勝利するのはわが君に違いないのですから」

「言いおる。介入はなかったと言うのだな」

楽しげに蒼炎は言い、煌牙は「はい」と答えた。

「あれらも死ねば黙ります」

「なるほど。これが貴族同志の戦いであれば、さすがにわたしも一言はあるが。しかし所詮は半獣。消耗品に過ぎぬ。そう、介入は確かになかった……そうであつたな、方々」

視線を向けられた二人の男爵、雪綺と闌火は苦笑した。

「われらに尋ねられても困りますな」

「何もなかった事を言われても。しかし」

闌火は煌牙にちら、と目をやった。

「若い者にあまり、勝手をさせるのもどうかとは思いますが」

「それもそうだ。煌牙。そなたの位を騎士に下げる」

蒼炎の言葉に闇魔族の若者は、一礼した。蒼炎は続けた。

「次の戦闘には、他の者を率いて出るが良い。働き如何に関しては、爵位を考慮しよう」

「ありがたき幸せにございます」

微笑んで、煌牙は言った。

雪雅は眉をひそめ、その様子を見ていた。

「震えていますか」

三の扉前で、ロチエフは水の民の若者に言った。尖った耳と金色の瞳を持つ男はのっぺりとした顔をして、表情に乏しい。しかし彼はこの城でも一、二を争う剛の者だった。

「慣れないからね。この鎧も実は、重くて」

帷子を着込んだグウェンは、気弱な笑みを見せた。彼は矢のない弓を携えていた。水の民の武器である。彼以外にも十数名の水の民

の若者が、戦闘の始まる時を待っていた。

蒼月闇の城には現在、騎士がいない。月牙一族自体に若者が少ない為だ。氷玉が爵位を継いだ際、著名な貴族のほとんどが討ち果たされた。その際には多くの騎士も滅ぼされ、月牙は一時、若者がほとんどいない状態になった。子を作る権利を持つのは男爵以上の身分の貴族に限られる。その為月牙領では、どここの城でも騎士が不足する状態が続いていた。今回の戦で采配さいはいを任された半獣兵の長グロフが最も頭を痛めた問題は何かと言うと、三の扉の警護を誰に任せるか、だった。三の扉の警護は騎士と、伝統的に決まっている。しかし城に騎士はいない。結果、低位の魔族をその代わりにし、周囲を半獣族で固めるという苦肉の策が取られたのだった。

「方々には、御礼おんれい申し上げます。わが君の城主としての体面はこれで、保たれます」

ロチエフは軽く頭を下げると言った。

「しかし戦闘に不慣れなのは明らか。前には出ず、合図があれば退いて下さりませ」

「ここには貴族の騎士たちが来ると聞いた。君たちには刃を向けられない相手だろう」

グウエンが言うつと、ロチエフは答えた。

「貴族の戦いは、まずは配下の者同志で潰しつぶ合いをさせる。戦闘があらかた終わつた頃に、騎士の方々は来られます。確かにわれらは、闇魔族の方々に歯向かう事はできません。そのようにできている。騎士の方々が来られたなら、お通しするより他はない」

「最初から、敵方の貴族がここを通る事は決まっているのだね。そうであるなら、なぜ、何の為に君たちは戦うのだ」

「わが君の名譽の為に」

ロチエフは金の目を光らせた。

「抵抗もせず城を明け渡したなどという、風評を立てられるわけには参りませぬ。結果は決まっております。しかしそこに至るまでにどのように戦ったか。それが重要なのです」

「そこに至るまでにどのように戦ったか……」

「その為にわれらは命をかけるのです」

グウエンは息をつくと首を振った。

「わたしにはわからない。それに何の意味があるのか。だが責務は果たす。向かって来る者がいれば、力の限り弓を引くよ」

「十分です」

そこへ伝令役の半獣族が駆けて来る。

「申し上げます！ エメラダさま、負傷！ 配下の者がもたせておりますが、じきに二の扉も破られます！」

ロチエフの額から頭にかけて、真紅の鶏冠とさかが立ち上がる。体のあちこちから炎に似た羽毛が生じ、腕や足に鱗うろこが生じる。

「出番が来たぞ。加勢に行つて、エメラダの悔しがる顔を見てやろう！」

彼が言つと、部下たちは拳を上げて「おお！」と叫んだ。

「わが君。図書の長が、目通りを願っております」

グロフが氷玉に向かって言つた。

「会おう」

氷玉は炎の鏡を眺めながら言つた。そこには奮戦ふんせんするエメラダの姿が映し出されていた。グロフは一礼すると、部下に「通せ」と命じた。了解した半獣兵が扉に向かって走る。

やがてやつて来たアロンは氷玉の前に出ると、一礼した。月牙伯爵はそちらを見もしなかった。側についているグロフが、「用向きを話すが良い」と声をかける。

「このような時に御身おんみをわずらわせ、申し訳ありません。お願いの儀がございまして」

アロンは視線を向けようともしない伯爵を見つめ、少しためらつてから言つた。

「三の扉に、騎士の代わりに水の民の者が詰めています。何とぞ、

彼らの命を散らす事、ご容赦願いたく」

「図書の長。閣下に戦の采配を指示するおつもりか」

グロフが目を光らせた。アロンは答えた。

「滅相もない。闇魔族は全ての頂点に立つ方々。指示できる者が、この世におりましようか。わしは、ただ、……惜しむのです。あそこにはわが孫がいる。血族の若者たちが。わしは老いた。先は短いけれどあれらには未来があります。その未来をわしは、惜しむ。愚かな事を言っている、それはわかつているのですが……」

「三の扉を警護する者は騎士。それがしきたりだ。城に騎士の方々はおられぬゆえ、水の民の方々に任せた。それを取りやめよ？あの場合を開放し、閣下に敵対する方々の、好きに振る舞うに任せよと言われるのか」

「やめよ、グロフ」

それまで黙っていた氷玉がそこで、口をはさんだ。半獣族の兵士は「は」と言うと言立不動になった。月牙伯爵は炎の鏡を眺めながら、物憂げに言った。

「未来を惜しむ。それはあの者たちの命を惜しむという事か。したが、警備を裸にするわけにはゆかぬぞ」

「わかつております。それゆえお願いに上がりました。わしをお使い下さい」

アロンは言った。

「貴族の方々がやって来られれば、いずれにせよ水の民は倒されません。であるならば、わが君。若者ではなく、わしをお使い下さい」

氷玉の目が、初めてアロンの方を見た。何の感情も秘めてはいない紅玉の瞳に、水の民の老人は背筋が寒くなるのを覚えた。

「なにゆえに」

静かに月牙伯爵は尋ねた。老人は何を尋ねられたのかわからず、まばたいた。

「な、何がでございますか」

「なにゆえ、そなたは若者の身代わりを望む。死に急ぎたいのか」

「いいえ、閣下。死は、……恐ろしゅうございます。魔族とは言え、われら水の民には寿命があり、老いがある。閣下たち闇魔族とは違います。そうしてわれらは、家族との絆を愛する。そういう種族です。人族の感覚に近いのではと、そう思う事もございます」

アロンは答えた。

「わしは、孫がかわいい。あれを大切に思っております。水の民の若者たちをと先ほど言いましたが、……わしは、孫の為だけにここに来たのです。あれを助けたいと願って。浅はかな事です。愚かでもあります。お許しを、閣下。けれどもどうか、お聞き届け下さい。この老いばれを哀れとおぼしめして、なにとぞ孫の代わりにわしを三の扉に」

氷玉は珍しいものを見るような目で老人を見た。

「人族に近い、とは。魔族の言う事ではないぞ、アロン」

アロンは頭を垂れた。氷玉は続けた。

「が、面白い。闇魔族での血族は、殺し合いの相手という意味しかないゆえな。水の民はみな、そなたのような考え方をするのか」

「わかりませぬ。様々な者がおりますゆえ」

「そうか」

そこで氷玉は炎の鏡に目をやり、眉をしかめた。グローブが低くうめく。

「エメラダが……」

「介入した者がいるな。半獣兵の戦いに」

視線を鋭くして氷玉は炎の鏡を見つめていたが、またアロンの方を見た。

「そなたの蔵書ぞうしょに関する知識と情熱、他に代わる者はおらぬ。その意味ではわたしは、そなたを惜しむ。三の扉に行く事、まかりならぬ」

老人は絶望のまなざしを向けた。

「わが君……」

「したが、気に入らぬ展開になった。エメラダは良くやっていた。

その戦いに水を差すとは、いささか無粋……」

玉座から立ち上がると、彼は段を降りた。グロフが慌てて後に続く。アロンは呆気に取り立て立ち尽くした。

「わが君！ いずれに行かれます」

グロフの言葉に氷玉は答えた。

「待つにも飽きた。三の扉まで出向き、戦う者たちをねぎらつて来よう。その際にあちらの騎士と出会えば、それも一興」

「しきたりにはございません。当主はこの場にて、やって来る者を待つのが古来よりの」

氷玉は立ち止まると、冷然としたまなざしを半獣族の男に注いだ。
「グロフ。わたしは何者か」

グロフはその場に膝をつき、頭を垂れた。

「誇り高き月牙の当主にして伯爵。この大陸に君臨する闇王の一人、銀の闇王にございます」

「その通りだ。わたしは闇王の一人。何をなすかはわたしが決める」
そう言い放ってから彼は、立ち尽くすアロンに目をやった。

「さがっておれ。確約はできぬが、無駄に命を散らしはせぬ」

「は……、あ、ありがたき事にて……」

氷玉は皮肉な笑みを浮かべた。

「礼ならばわが姫に言うが良い」

「姫君、に」

「命が散る事を嘆かれるのだ、姫は。わたしには未だに良くわからぬがな。救った所で何の益にもならぬ命を、何ゆえに惜しむのか」

そう言うつと伯爵はマントをひるがえし、扉に向かった。グロフが後に従う。

残されたアロンはその後ろ姿に向かって、深々と頭を下げた。

「らしからぬ失態だな、エメラダ」

傷だらけの女兵士を見てロチェフが言った。エメラダは青ざめた

顔で膝をつき、胸を抑えている。先ほどより状態は悪くなっていた。もはや立つ事もできない。胸の傷がふさがらず、それが彼女を弱らせていた。

閉ざされた二の扉の向こうでは、まだ戦いの音が響いている。

「あたしはちゃんとやってたさ」

「傷がふさがらんか」

「魔力が漏れる。多分、貴族だ」

この言葉にロチエフは状況を理解した。貴族が半獣兵の戦いに介入し、エメラダを討たせようとしたのだ。こうした正式な戦の場で、低位の者の戦いに高位の者が介入する事は、してはならないとされているのに。

「さすがは閣下^{たてつ}に楯突く方々」

それに対しては何も言わず、この言葉で終わらせたロチエフは、うずくまるエメラダを見下ろして言った。

「で、戦えるか」

「石にかじりついてでも、戦ってみせる」

蒼白な顔の中、目だけをぎらつかせてエメラダは言った。

「虚仮^{こけ}にされて黙ってるほど、おとなしい女じゃないよ、あたしは」
「それは知っている。足手まといにさえならなければ、おれは別に構わない。だが立てるのか。立てねば戦えんぞ」

ロチエフの言葉にエメラダはぎりぎりど歯噛みをした。そこにグウェンが近づく。

「貴族に何かされたのか」

「水の民の坊ちゃんかい。悪いがあんたの機嫌を取れる状態じゃないんだ」

エメラダはうなるようにそう言った。彼が手を差し伸べて来たので身をそらす。

「何だい！」

「傷を癒す事はできないけど、ましにはできる。水の民の持つ能力の一つに、そういうものがあってね。良ければ」

「お情けをかけてくれるってわけかい？ 馬鹿にするんじゃないよ！」

「どうして馬鹿にできるんだい、エメラダ。君のような兵士を」
グウエンは穏やかに言った。

「わたしたち水の民は戦闘には不慣れだ。君の方がよほど戦い慣れしている。情けをかけているわけでも、馬鹿にしているわけでもないよ。君が元気に戦ってくれる方が、わたしたちは助かるんだ」

エメラダは眉をしかめたが、黙った。グウエンは手を差し伸べた。
「触れても構わないかな」

「何をするんだい」

「わたしの魔力を君の中に注ぐ。立てるぐらいには回復すると思うよ。ただし、一時的なものだ。この傷が癒えない限り、君の中から力は流れ出て行くだろう……相手をじわじわと弱らせ続けるなんて、嫌な感じの術だ」

「闇魔族の貴族さまで性格のよろしい方がどこにいるよ。やっとくれ」
エメラダは言った。

「お情けでもなんでももらう。戦えるようにしてくれるのなら」
グウエンは手を、彼女の傷口にかざした。

* * *

絶叫が上がった。少年の体を青雅せいがの腕が貫き、熐華りんかは血を吐いた。飾りが砕け、破片が涼やかな音を立てて地面に落ちる。

「お……まえ、ごと、きに」

引き裂かんばかりの力で青雅の肩をつかむと、熐華はうなるように言った。

「おまえ、ごときに、この、わたしが……」

言えたのはそこまでだった。がくりとうなだれたかと思うと、彼の体は黒い粒子になり、崩れ去った。中身を失った衣服がはらりと落ち、金銀の鎖や宝石が地面を転がる。

青雅は腕にまとわりつく布地を眺めると、それを地面に落とした。息をつく。疲れた様子だった。そのまましばらく動かない。

「危なくなったら手を出そうと思ってたんだけどな」
ゆっくりと近づくと、紫忌は言った。

「出番がなかった」

青雅が振り向く。どことなく頼りなげな顔をしていた。紫忌は足を止めた。

「大丈夫か」

「何がですか」

「つらそうだ」

青雅は目を伏せた。首を振る。

「色々、考えてしまっただけです。われらは屍を残さない。何なのでしょね、閻魔族という存在は。戦いに憑かれ、ひたすら敵を屠り続け、最後には何も残さず消滅する」

「それだけ潔いって事なんじゃないか。けどおれの屍は残るかもな。半分人だし」

「わたくしの体も……残るかもしれません」

地面に転がる装身具の残骸に目をやって、青雅は言った。紫忌は肩をすくめた。

「どうせその時には死んでるんだから、気にする事もないさ」

「ぞっとします」

吐き捨てるように言った青雅を紫忌はしばらく見つめていたが、やがて尋ねた。

「おまえ、叔父君に何をされた。そこまで自分を……自分の体を嫌がるのは、何かされたからじゃないのか」

青雅は何も答えない。紫忌はしかし、彼の表情で何となく、見当をつけた。あの叔父の事だ。兄に似たこの少年を、虐待して悦に入

つていたのだろう。何を言つべきかわからず、紫忌はしばらく青雅を見つめた。言えたのは結局、「なら、燃やしてやるよ」という言葉だった。

「おまえがおれより先に死んで、おれが生き残ってたら」

青雅は顔を上げると、紫忌の方を見た。紫忌は繰り返した。

「おまえの体がもし残ってたら、燃やしてやる。何も残らないように。それでいいか？」

「なぜ……」

「気まぐれ。一人で戦わせちゃったしね」

紫忌は武器を背負うと、青雅に近づいた。

「で、疲れてる所悪いんだけど。移動できる？」

「はい。妨害はもうありませんので、すぐに。閣下……」
「なに」

「ありがとうございます」

紫忌は肩をすくめた。

「礼を言われるほどの事じゃないさ。気まぐれって言ったろ。おれの方が先に死ぬって事もあり得るし……」

「それはあり得ません」

青雅が言い、紫忌は眉を上げた。

「なんで」

「わたくしより先には死なせません。死ぬ時にはたとえ一瞬でも、閣下より先にわたくしが死にます」

思い詰めたような表情の青雅を、紫忌は見つめた。

「おまえ、真面目すぎ。もう少し力抜け」

小さく笑うと彼は言った。

「そんな風に言われるほどの事、おれはしてないぞ」

「閣下は覚えておいででない」

「なに？」

「わたくしは以前、閣下に恩を受けました」

紫忌は眉を上げた。青雅を見つめる。

「いつの話よ」

「百年ほど前の事になります」

眉をしかめて紫忌は考え込んだが、思い出せないようだった。

「何やったんだ、おれ？　それでおれの配下になろうなんて気を起こしたのか、ひよつとして？」

首をひねってぶつぶつ言ってから、彼は青雅に目をやった。

「まあいいや。あのさ。何やったか覚えてないけど、あんま気にしなくていいから……だからと言って、いきなり裏切られたりしたら困るんだけどな」

「裏切ったりは……」

「ああ、うん。おまえが真面目なのは良くわかったし、覚悟も見せてもらった。でな。おれの希望を言ってもいいかな」

紫忌の言葉に青雅は居住まいを正した。紫忌は彼に顔をよせると、内緒話のように声をひそめて言った。

「おれさ。大陸中の魔族から、ごうごうと非難されるぐらいの長生きがしたいんだよ。毎日をそれで、明るく楽しく生きるの。どうよ、これ」

「閣下がそれをお望みなら、わたくしはいかようにも尽力する所存にございます」

「だから堅いつて、おまえ。付き合う気、あるのね？」

「もちろんです」

「だったら」

紫忌は手を伸ばすと、青雅の肩をぽんぽんと叩いた。

「おまえも肩の力抜いて、明るく楽しく生きる練習しとけ。で、とりあえず」

「はい」

「最初の目的地に急ごうや」

魔力による道が開かれる。二人の姿はその場から消えた。風が吹

いた。持ち主を失った衣服は風にあおられて、どことも知れぬ所へ
飛ばされてゆく。かつて闇魔族であった塵もまた。

6・乱 3

3

「ぐるるるるをををうつをるるっ」

ぱつくりと開いたままの腹から、触手の切り株がうねうねと蠢^{うごめ}いている。ぬらぬらとした緑の皮膚を持つそれは、不可解な声を上げると跳躍^{へっぴり}した。ユーラ目がけて。長い舌が伸びて、少女を捕らえようとする。

「しつこいっ」

アルシナは叫ぶと、腕を一閃した。硬化して刃のようになった腕が、舌をすぱりと断ち切る。呪い師であつたものはもんどりうつて倒れた。体液が大地に振りまかれる。周囲で村人たちの悲鳴が上がった。逃げ出したいのだが、どこへ逃げれば良いのかわからない様子だ。遠巻きにしながら震えている。

「えをるるるををををっ」

それは四つんばいになると、大地を蹴った。今一度、少女に向けて。

「姫君。お顔を伏せて」

イリリアはユーラを胸に抱き込むと、赤い唇をにいと笑いの形に変えた。黒髪が鞭のようにしなり、うねって伸びる。髪は鋭い槍となり、飛びかかるうとしたそれを貫いた。

「げをくくあはがあっ」

それは赤黒い血を吐き、続いて緑の体液を吐いた。うねる髪で地面にぬいとめると、イリリアはため息をついた。

「見事な成^なり損^{そこ}ないだこと」

「人の範疇^{はんちゆう}にはもはやないと思うが……姫。これも殺してはならな

いのか」

アルシナが問う。少女はイリリアの黒髪で封じられている呪い師を見つめた。変わり果てたその姿を。

「どうしてこんな事に……」

彼女の言葉に「成り損なつたのです」とイリリアが答えた。

「これは妖獣を飼っていたのです。体の中で。それに自分自身を喰い尽くされた。己に見合わない力を望んだ者の、これが結末ですわ」

「元には戻らないの……？」

「無理ですわ。これにはもう、人としての意識はありません。殺してやるのが慈悲です。これもわかつていたはず。人ごときが妖獣に手出しをすれば、どうなるか」

「をつるるるるるあああ！」

呪い師はわめいた。地面に落ちた彼の触手と舌が、びちびちと蠢く。そこでそれまで黙っていたガイリスがつぶやいた。

「人が融合した成り損ないにしては、変だ」

「何だ、小僧」

アルシナが目をやる。ガイリスは呪い師を見ていた。

「おれたちでさえ、融合は苦痛だ。人にはもつと耐えられない。弱い妖獣ならともかく、こんな強いものとの融合は考えられない」

「強いだと？ おまえにはそうだろうが」

馬鹿にしたようにアルシナが言ったが、イリリアは顔を強張らせた。その肌に鱗が生じ、冷気をまとう水晶の蔦がしげり始める。

「ここからお離れ下さい、姫君」

イリリアはユーラをガイリスの方に押しやった。少年は彼女を腕に抱えるようにした。

「その子の言う事は正しいわ。人ごときの融合した妖獣がこれほど長く、わたくしの髪に貫かれて平気でいられるわけが」

彼女の言えたのはそこまでだった。地面に落ちてなおものたうつていた肉片が突如として芽吹き、爆発するかのような勢いで無数の蔦が生じたからだ。粘液に包まれたそれは槍のように伸び、ユーラ

を目指した。とつさに少女をかばったイリリアは、鳶に貫かれた。血が飛び散る。

「イリリア！」

みしみしと音を立てて鳶は蠢き、イリリアの血肉を食った。少女が悲鳴のような声で名を呼ぶと、彼女は微かに笑みを浮かべた。

「ご無事で、何より……そんなお顔、なさら……。坊……しつかりお護り、」

「さつさと行け！」

アルシナが怒鳴り、イリリアを貫く緑の槍を切り裂いた。膨れた鳶が地面に落ち、蓄えた血を振りまいた。イリリアが地面に膝をつく。その間にも他の肉片から鳶は次々と発芽し、伸びて温かい血を求め、人々に襲いかかった。そこで悲鳴が上がった。恐慌を起こした村人が、慌てふためいて逃げまどう。

「こちらへ！ 早く」

ガイリスはユーラを引きずるようにして走り出した。だが闇雲に走り回る村人に遮られ、距離がかせげない。

「この、成り損ないが……っ」

アルシナの筋肉が、みしみしと音を立てて膨れ上がった。鼻が突き出し、顔が獣じみた形になる。髪の色が銀に変わり、全身に銀色の毛が生じる。咆哮を上げると彼女は、腕の一振りで呪い師の体を二つに断ち切った。げらげらと笑いながら体の上半分が落ち、下半分も倒れた。ごろりと転がった上半分は、地面の上でまだ笑い続けている。

「さつさと立て、イリリア！」

地面に片膝をついた黒髪の女性は、血にまみれた頬に凄絶な笑みを浮かべた。

「せかさないで、アルシナ。わたくしも頭にきてるのよ」

体にささる茎が黒く萎れ、崩れ落ちる。凍気が彼女を中心にゆらゆらと立ちのぼった。髪の色が青くなつてうねり、体を包むと大地に潜る。次の瞬間、地面のあらゆる所からイリリアの髪が現れて、

緑の鳶を貫き始めた。

「われらの本性、とくと見るが良いわ」

イリリアの周辺が凍りつき、緑の鳶は瞬時に凍結して砕けた。地面に倒れていた呪い師の下半分と、笑い続けていた上半分もまた。

「邪魔だ！ とつと逃げろ、人族ども！」

アルシナがわめく。腰を抜かし、泣き叫んでいた村人が慌てて逃げ出した。その間も鳶は飛び散った肉片から次々と発芽する。

「きりがない！」

「どこかに核があるはず」

イリリアが言い、視線を巡らせた。その時、砕けた呪い師の肉片が、びきびきと音を立てて飛び跳ねた。

「イリリア、抑えろ！」

アルシナが炎を放ってそれらを焼いたが、いくつかは逃れた。イリリアの髪が大地から伸びて貫き、凍気で焼く。しかし一つだけ、逃れた破片がユーラの前に飛び出した。

ガイリスの腕が、ユーラを突き飛ばす。

「ガイリス！」

半獣族の少年は彼女をかばい、破片から生じた緑の鳶に貫かれた。

* * *

彼方から、狼のそれに似た咆哮うごうごうが響く。

「グロフだ。二の扉も捨てると言っている」

激しい物音が続く二の扉の前で、ロチエフが言った。配下の者に命じる。

「扉を開く準備をしろ。味方を迎え入れる。おまえの部下は良く戦ったぞ、エメラダ」

「当然だ。さもなきゃあたしが殺してる」

立てるようになったエメラダが言った。顔色はまだ良くないが、闘志に衰えはない。

「合図をしる」

ロチェフの命に従って、半獣族の男が高く吠えた。水の民の若者たちが、弓を構える。二の扉が開かれた。戦っていた味方の半獣族と魔狼たちがなだれ込んでくる。

「急げ！　すぐに閉めるぞ」

「早く入れ！」

叫ぶ声に押されるようにして、彼らは退却してきた。その後を追って、敵兵が続こうとする。そこへ、きらめく矢が飛んだ。水の民の若者たちが大気から水を集め、自身の魔力を練り込んだ矢を放ったのだ。青く輝く矢が次々と飛ぶ。魔力による矢を受けて、敵兵が何人か倒れた。ひるんだその隙に、味方の兵士が扉の内側に転がり込む。

「閉ませ！」

扉の両側に張りついてロチェフの命を待っていた部下が、命令に従って扉を閉ざす。重い金属の扉の向こうで敵兵のわめく声が上がリ、体当たりをする音が響いた。

エメラダが進み出ると、傷ついてへたり込んでいた兵士の一人が顔を上げた。

「隊長。また会えて、うれしいですよ」

「あたしもだ。少ないな」

「すいません。おれらも頑張ったんですけど……副長は、最後の突撃でやられました」

「そうか」

エメラダはわずかに目を伏せた。

「怪我人は後方に下がれ。二の扉は捨てよとの、わが君のご命令だ」
ロチェフの言葉にエメラダはそちらを睨んだ。

「あたしは戦える」

「わかつている。おまえには出てもらう。だがこいつらにも休息は

必要だ。最後には、全員戦ってもらうがな」

ロチェフの口許に歪んだ笑みが浮かんだ。

「水の民の方々も、良い腕でした。次にもお願いいたします。じきに扉も破られる」

ロチェフは顔を前に向けた。部下の抑える扉の継ぎ目が、振動で外れそうになっている。

「魔狼ども。配置につけ」

彼の言葉に銀魔狼たちが動いた。半獣の兵士に交じり、やってくる敵に備えて扉に向かい、前傾の姿勢を取る。

「……戦えぬ者はさがれと言った」

苛立たしげにロチェフが言い、グウェンはそちらを見た。体の大きな銀魔狼が、ひよこひよここと不自然な動きをしながら、仲間の元に戻るうとしている。良く見ると、その魔狼は前足を一本失っていた。鼻の上に皺を寄せ、銀魔狼は低くうなった。ロチェフは魔狼を睨みつけた。

「そのさまで貴様、走れると思うのか。邪魔だ。どうしても仲間の足を引っ張りたいと言っのなら、おれが今ここで引導を渡してやつても良いぞ」

仲間の魔狼は誰も、彼の方を見ない。三本足の魔狼は一転して、哀れっぽい声を上げた。

『戦ワセ、テ、ホシイ』

聞きづらい声で、魔狼が言った。

『オレ、ハ、走り、噛ミ裂ク、モノ。アルジノ、タメ、戦ウ。群レニ、戻ラセ、テ、クレ』

「足手まといになった上、上位にある者の言葉に逆らうか。使い物にならん」

冷やかに言うロチェフは、近くにいた半獣兵に「始末しろ」と命じた。命じられた兵士が槍を手にして魔狼に近づく。魔狼は黙ってうなだれた。抵抗する気はないようだ。兵士は槍を持ち直すと、無造作に振り上げた。

「ま、待て！」

見ていられず、グウエンは叫んだ。

「味方の魔獣をなぜ殺す！」

「走れない魔狼は戦力にならん。しかもこれは、上の者の指示に逆らった」

ロチエフが淡々とした口調で言った。

「それにしたって……少しでも戦力の欲しい時に、味方を減らすこととはないだろう！」

「どのみちこれは使い物にならん」

珍しげにグウエンを見てから、ロチエフは言った。

「こいつらは群れで動く。こいつが一匹でいるのは、戦力にならんと判断され、群れから出されたからだ。こいつにもそれはわかってる。殺してやるのはある意味、慈悲だ」

「そんな事が……！」

「あんたホントに甘いね、水の民の坊ちゃん」

エメラダが言った。

「魔狼は走り、噛み裂くもの。戦うことでしか己を証明できない生き物さ。あたしらと同じでね。戦うのをやめろって言われるのは、無駄に死ねって言われてるのと同じさ。優しい事だね、ロチエフ。あんたにしちゃ」

半獣の男はふんと鼻を鳴らした。

言葉をなくしたグウエンの側に、静かに立つ者がいた。

「われらは違う。水の民は仲間が目の前で殺される事に痛みを覚える。悪いが、われらの士気を削ぐ事はひかえてもらえないか」

そう言ったのは、彼より百年ほど年長の従兄だった。

「カリステル」

穏やかな容貌の彼は、年下の従兄に労わるようなまなざしを向けると、ロチエフに言った。

「その魔狼は、われらの側に置いてもらえるか。盾の一つぐらいにはなるだろう」

「酔狂な事をなさる」

ロチエフは言ったが、「良いでしょう」と言った。

「魔獣。おまえのようなものでも、役に立つ事があるかもしれん。水の民の方々の側に行け」

そう言うつと、あっさりと関心をなくし、扉の方に注意を向ける。

ひよこひよここと歩いてきた魔狼に、グウエンはまばいた。大きい。銀魔狼はグウエンの前まで来ると、立ち止まってこちらを見上げた。

「このグウエンは、われらのまとめ役だ。彼を守ってもらえるか？」

カリステルが言い、魔狼は彼とグウエンを見比べた。

『オレハ、戦ッテ、死ネルノカ』

「戦って死にたいのか？」

グウエンの言葉に、銀魔狼はざらりと目を光らせた。

『走り、噛ミ裂ク。ソレガ、オレタチダ』

「戦いの中にこそ、彼らの生きる道がある。そういう事だよ、グウエン」

カリステルが言い、「頼むと言っておやりよ」と言った。

「君を守り戦う事が、彼の生きる道になる。そうでなければ生きる意味を失う。彼はそういう生き物なんだ。助けたいのなら、君が目的を与えてやらねば」

グウエンは魔狼を見下ろした。

「わたしはあまりにも知らないな……半獣の事も、魔狼の事も。だが、君が来てくれた事をうれしく思う。われらは本来、戦闘は得意ではないのだ。警護を頼む。君の名は？」

『カツテハ、銀耳ノ、三ノ牙ト呼バレテイタ。今ハモウナイ』

「銀耳？」

「群れの頭の名だろう。彼らは小さな群れを作り、狩りをする。名を持つのは頭のみで、後は役目に従って呼ばれると聞いた事がある」カリステルの言葉にグウエンはそうなのかと思った。

「この場合、おまえの新たな群れはわたしたちだな。では、わたし

の盾と名乗るか？」

魔狼は、真面目な顔をした。

『ワカッタ。オレハ、オマエノ盾ダ』

しかつめらしくうなずくと、魔狼はひよこひよこと動いてグウェンの横に並んだ。半ば冗談のつもりだったのでグウェンはとまどったが、半獣たちは何も言わない。カリストルも自分の位置に戻っていた。

「ええと……良いのか？ 盾なんて言ってしまったが」

『オレハ、盾ダ。オマエ守ッテ戦ウ』

「そうか。その……、よろしく頼む」

あくまで真面目に返されたグウェンは、取り消すのも何だという気がしてそう言った。

その間も、扉は攻撃され続けている。

「来るぞ！」

そういう声がし、その場に緊張が走った。激しい音が響き、ちゅうが蝶番が、はじけて落ちた。

「おまえたち、準備は良いか。お楽しみが始まりだ！」

ロチエフの言葉と共に扉が開かれ、敵兵がなだれ込んできた。

6 乱 3 (後書き)

体調崩してました。今も喉が痛いです。大根 + 蜂蜜とか、レンコン + 黒砂糖とか、いろいろいろいろ試しました。喉に良さそうなのを。

6・乱 4

「そろそろ参りたく存じます」

煌牙こうがが言った。蒼炎そうえんはそちらに目をやると、歪んだ笑みを浮かべた。

「早くはないか」

「あちらは水の民が出てきました。騎士がいけないとは無様なもの。ふつりあのような低位の者を使うしかないとは。とは言え、あれも魔族。われらが出て、何の障りがありませんよう」

「よかるう。許す」

蒼炎が言い、煌牙は頭を下げた。

三の扉前では、凄絶せいぜつな戦いが続いていた。ロチエフとエメラダが敵兵をなぎ倒す。部下の半獣兵たちが後に続き、銀魔狼が宙を踊って敵をほふる。

「ぬるすぎるわ、おまえら！」

叫ぶとロチエフは、炎の刃で敵兵を焼いた。

「これが青闇の兵士の実力か。骨がなさすぎる！」

「偉そうに言うんじゃないよ、あたしらが頑張ったおかげだろうっ」
エメラダがわめき、氷の刃で敵兵を切り裂いた。二人が駆け抜けた後には累々と死体が転がっている。

「すごいですね、あの二人。彼らだけでここを守れそうだ」

水の民の一人が言った。グウエンは敵兵の背後を見つめ、眉をかめた。

「そうでもなさそうだ。弓を構えろ。騎士が来るぞ！」

力の渦がその場に生じた。風が吹き荒れ、魔力が重く体を押さえつける。兵士たちは敵も味方も力の圧力に負け、その場に膝をついた。魔獣たちも。

「力を練^ねれ。相手ができるのはわれらだけだ」

グウエンは気圧されそうになる自分を叱咤^{しった}しつつ、同族の者に言った。騎士に通用するとは思っていなかったが、これが自分たちに与えられた役割だという事はわかっていた。

「放て！」

彼の声と共に、きらめく矢が走った。

煌牙は二名の騎士を引き連れ、つながれた空間を通って蒼月闇の城、三の扉前に出た。現れた途端に水の矢が向かってくるのを見、口許を歪める。片手を上げると放たれた矢はことごとくその手に集中し、消滅した。

「第二射、つがえ……放て！」

グウエンが叫んだ。号令に従って矢が放たれる。煌牙は眉一つ動かさず、それをも片手で受け止めると言った。

「返すぞ」

彼の手から、黒く染まった矢が飛び出した。何が起きたのか、グウエンには理解できなかった。衝撃が体を走り、彼は倒れた。

重みに顔を上げると、巨大な銀魔狼がのしかかるようにして倒れていた。ささっていた黒い矢が揺れ、水になって消滅する。そこでようやく、反撃されたのだと気づく。彼がかばってくれたのだ。魔狼に手をやると、うつすらと目を開けた。

『盾。ナレタカ』

低く魔狼が言った。

『オレ、ハ。戦エタ、カ』

「ああ。君はわたしを守った」

グウエンが言くと、魔狼はちら、と笑みのようなものを見せた。その目から光が消える。体から力が抜け、魔狼はこと切れた。周囲からはうめき声が聞こえる。起き上がるうとグウエンがもがくと、隣で弓を構えていた水の民の若者の腕にぶつかった。その目は見開

かれたまま、虚空を見つめていた。

「アリウス……」

グウエンは魔狼の体の下から這い出した。

「ルウィリ……カリストル。生きている者は。誰か、いるか」

「いたとしても、終わりだ」

彼の言葉に答える者がいた。ゆつくりと歩いてくる闇魔族の若者を、グウエンは見上げた。味方の兵士たちの惨状が目映る。闇魔族の騎士はグウエンたちだけではなく、半獣族の兵士や銀魔狼に対しても力を放つたらしい。さっきまで戦っていた者たちが、みな倒れていた。エメラダも。ロチェフでさえ。

煌牙は水の民を指揮していた若者の前に立つと、見下ろした。つまらぬ羽虫を見るかのような表情だった。

「低位魔族の分際で、われらに齒向かおうとは」

グウエンは彼を見上げた。

「銀月の君に恩義ある身、なれば。騎士にも忠義はあるはず。当主に逆らうとはそれこそが忘恩の、」

「忠義や忠節という言葉は、われらが言ってこそ意味がある。下らぬ虫が口にしても、何の意味もない」

煌牙はそう言つと、片手を上げた。その手に漆黒の刃が現れる。

「だがその気概は買おう。わが手で首をはねてやる。喜ぶが良い」

漆黒の剣を振り上げた煌牙だったが、そこで手を止めた。背後から氷の礫が飛んできて、腕を凍りつかせたからだ。彼は首をわずかに動かし、視線を背後に流した。

「あんたかい。半獣兵の戦いに手を出した馬鹿貴族は」

片膝をつき、身を起こしたエメラダが言った。青ざめた顔には脂汗が流れている。大した胆力と言えた。貴族に逆らう事は半獣族にとって、本能に逆らう事に等しいのだ。

「横やりを入れたのはあんただ。あたしを撃つたあの力、この矢と同じ……っ」

「獣風情が、よくもわが身に魔力を撃ち込んだ」

煌牙が言った。音を立てて腕の氷が砕け、彼はエメラダの方に向き直った。

「その罪、万死に値する。影すら残らぬほどに滅めつしてくれよう」

エメラダが身を強張らせた。煌牙の体から力が陽炎かげろうのように沸き上がり、それは宙で無数の漆黒の刃となった。刃の切っ先が全て、エメラダの方を向く。

エメラダが死を覚悟した、その時。

きしむ音を立て、三の扉が開いた。

「そこまでにしてもらおう、青闇の騎士」

背後からの声に煌牙は動きを止めた。彼と共に来た騎士たちが顔を強張らせる。

「しきたりにない登場の仕方だな、僭称者せんしょうしや」

煌牙は振り向かぬままに言った。そこにいたのは、月牙伯爵だった。ゆっくりと歩いて来ると、彼は足を止めた。

「僭称とは、何をもって」

「当主に相応しからぬ者が当主を名乗る。これを僭称と言わずして何と言う」

嘲りの色を声音にまぶし、煌牙は言った。氷玉は静かに問うた。

「半獣兵の戦いに介入する貴族ならば相応しいと？」

「そのような事実はない。よしんばあったとしても」

煌牙は口許を笑みの形につり上げた。

「語る者もおらぬのに、誰が耳を貸すのだ、氷玉」

その言葉と共に、宙に浮いていた漆黒の刃がエメラダを襲った。圧倒的な魔力に全身を切り刻まれる事を、彼女は覚悟した。

しかし、刃は届かなかった。寸前で引きずり倒され、かばわれた彼女はまばたいた。

「ロチエフ。何の真似だい」

「今忙しい。後にしてくれ」

彼女の前に立った男が、うなるように言った。彼は自身の魔力を前面に押し出し、炎で壁を作っていた。それで煌牙の力の刃を防いだのだ。しかし防ぎきれなかったらしく、彼の体はあちこちがずたになっっていた。

「あんたにかばれるほど落ちぶれちゃいないよ」

よろめきながら立ち上がると、ロチェフは炎の壁を維持しながら言った。

「閣下のご意志だ。おれもおまえなぞ、かばいたくもないわ」

その間も、炎の壁を押して黒い刃がこちらに来ようとしている。ロチェフの額に汗が浮かんだ。競り負ければ、二人そろって串刺しだ。だが、強い。強すぎる。力そのものの闇魔族。その圧倒的な存在感と恐怖。

それらが唐突に途切れる。

「随分な挨拶あいさつだな」

煌牙は頬を切った風に目線を動かした。風を刃に変えて甥に放った月牙伯爵は言った。

「そのほうにわが名を呼ぶ権利を与えた覚えはない」

「おまえの名にどれほどの価値がある。人ごときに膝を折ったその時に、全て消失しておるわ」

そう言つと煌牙は、氷玉の方に向き直った。

「おまえはわが一族の名誉を傷つけ、辱めた。そのような者の名が、尊重されるはずがなかるう。そもそも」

煌牙は口の端をつり上げた。

「当主の座にある事が間違いだつたのだ。『氷玉』などという名を持つおまえが！」

「蒼炎の受け売りか。同じ事ばかりを良くも繰り返すものだ」

氷玉は冷やかに相手を見ると言った。

「当主に相応しきは『蒼』の名を継ぐあの男であると言いたいのか。それとも『牙』の名を継ぐそのほうだとも？ 煌牙」

「わが名を呼びすてるとは不遜であるぞ、『名無し』めが！」

嘲るように煌牙は言った。

「おまえは父の名を継がなかった。それだけではない。おまえの名には母親の名すらない。氷玉。はは！ 氷玉だと？ そんな名を持つ貴族がこの千年、どこにいた。おまえは淘汰とうたされるべくして生まれ、誰からも目を向けられる事なく、捨て去られて終わるはずだった。そのおまえが当主だなどと。それがそもその間違いだったのよ！」

「言いたい事はそれだけか」

氷玉は静かに言った。

「われは月牙当主の座につき、今もある者ぞ。その意味を解そうともせぬ痴れ者が」

その言葉と共に、氷玉から力が放たれた。

氷玉は特に目立つ事はしなかった。微動だにせず立ち、目線を煌牙とその後ろにいる騎士たちに向けた、それだけだった。それだけで、煌牙はその場に膝をついた。力に圧され、全身を締め上げられて。体があり得ぬ方向に曲がってゆく。仲間の騎士に助けを求めようとしたが、彼らもまた同じ状態にあった。びきびきと音を立てて筋がちぎれ、肉がはじけ、骨の折れる音がした。

「ぐが、……っ」

背後で肉の潰れる音つぶがし、仲間の騎士たちが絶命したのがわかった。煌牙はしかし、あらがった。

「ぬ……、」

「ほう。潰れぬか。さすが牙の名を継ぐ者」

穏やかと言える口調で氷玉が言った。それと同時に圧力がさらに強まった。

「したがこれまで」

悲鳴を上げる事もできなかった。全身の骨をねじ曲げられ、煌牙は絶命した。

三人の体が輪郭を崩し、塵となる。屍を残さない闇魔族の、それが終焉だった。

彼らの終焉をまばたきもせずに見届けた後、月牙伯爵は周囲に目をやった。

「青闇の者ども。生きている者があれば、連れ帰るが良い。わが方の兵士、魔獣も退け。この場にての騎士の戦いは終わった」

貴族同志の戦いに息を詰めるようにしていた半獣兵たちは、慌てたように立ち上がるとその言葉に従った。敵も味方も同様だった。理屈ではない。彼らは高位魔族の言葉には、従うようにできている。力を使い果たして膝をつき、荒い息をついているロチェフに近くと、エメラダはその腕を自分の肩に回した。

「一人で歩ける」

うなるように言う男に、皮肉げに返す。

「気にするな。貸しにしておいてやる」

「おれにかばわれていたのは誰だ」

「あれは数に入らないさ。閣下の命に従っただけなんだろう？」

ふんと鼻をならすとエメラダは、ふらつく足を踏みしめて歩き出した。力が抜けてゆく感覚があった。砂時計の砂が落ちてゆくように。あの水の民の若者がくれた力が、失せつつあるのだ。

急がねば、この場でへたり込んでしまう。

「とつとつこの場を離れるよ。騎士が出てきたんなら、あたしらの出番はもうない」

「いま少し、お力になりたかった……」

悔しげにロチェフが言う。そこに近づいて来る者がいた。グロフだ。半獣兵の長である男は二人に、「よくやった」と声をかけた。

「おまえたちの働きで、閣下の体面は保たれた。急げ。貴族が来る」
エメラダは周囲を見回した。倒れた者は多く、その中には水の民もいる。自分に力を分けてくれた若者の事が気になって、彼女は尋

ねた。

「水の民の坊ちゃんたちは。どれくらい生き残った」

「生きている者はもう退避させた。あの方々も良くやったよ。騎士を相手に」

グロフはどこかしみじみとした口調で言うと、二人分の体を抱え、引きずるようにして歩きだした。開かれた三の扉に向かって。

「みな、良く戦った」

三の扉の中へ急ぐ兵士たちに、氷玉は声をかけた。

「水の民も半獣族も。銀魔狼も、良く戦った。感謝する」

兵士たちは声もなく、深々と頭を下げた。こんな言葉をもらえるとは思わなかったのだ。魔狼が甘えるような声を出して尾を振る。

「エメラダ。煌牙に力を撃ち込まれながら、よくぞあれだけの働きをした」

伯爵が、グロフに抱えられるようにして歩く二人に目をやって言った。声をかけられ、エメラダはその場に膝をつきそうになった。

「ありがたき……お言葉にて。わが君」

「ロチエフもよくぞ、わが意を汲んだ。今は休むが良い。この先は貴族の戦いゆえ」

「は、」

二人は何か見苦しくない礼を取ると、三の扉をくぐった。そこには傷ついた者がそこに運び込まれ、横たわっていた。そこでグロフとロチエフとも別れ、エメラダは部下の姿を探した。だが誰も見つけれなかった。彼女の部下は全滅したらしい。

（良い戦いだったかい？）

胸の内で彼女はつぶやいた。

（おまえたち。向こうでも良い戦いをしろよ……）

歩いている内に、体が重くなった。それに何だか、やたらと寒い。どこかで休みたいと思ったが、まだやる事が残っていた。横たわる兵士たちの間を歩く。見覚えのある姿を見つけ、エメラダはそちらに向かった。進むごとに疲労感が増す。そこには水の民の若者が座

り込んでいた。

「無事だったのかい、水の民の坊ちゃん」

エメラダが声をかけると、グウエンは顔を上げた。彼の前には水の民の若者が一人横たわり、目を閉じていた。エメラダは彼の目に涙があるのを見て、少しひるんだ。

「そっちは、駄目なのかい」

「もう感覚がないようだ。それがせめてもの救いだな」

グウエンは答えると、目を横たわる若者に戻した。

「幼い時より共にいた。何をするにも一緒だった。わたしを弟のように思ってくれていた」

「そうかい」

何と言えば良いのかわからず、エメラダは言った。横たわる若者が苦しげに息をし、死期が近い事を彼も彼女も悟った。

「カリステル。おまえの魂に祝福を。その旅路が平和であるように」

グウエンがそうさやくと、若者の体から力が抜けた。その体から何かが飛び去ってゆくのをエメラダは、見た気がした。

「水の民は、屍しかばねを残すんだね」

動かなくなつた若者を見てエメラダはつぶやいた。

「三百を過ぎれば屍も残らない。だが彼はまだ、二百にもなっていない」

「あんた、幾つなんだい」

「わたしは今年で八十になる。魔族としても若い。カリステルはそんなわたしを、いつも危なっかしいと思っていた……わたしが彼を死なせたようなものだ」

「闇魔族の騎士と戦って死んだんだ。悪い死に方じゃないさ」

エメラダはその場に座り込んだ。体がひどく重く、立っているのがつらかった。寒い、と彼女はまた思った。

砂時計の砂が、落ちる……。

「坊ちゃん。あたしら半獣は、戦う事が全てだ。あたしらにとって死に方には二種類しかない。いい死に方と、悪い死に方だ。何もで

きないまま、弱って死んでゆくのは最低だ。力の出せる内に出し切って、出し尽くして戦って、そうして死ぬのがあたしらには理想だよ。あんたの友だちは、うらやましいぐらいの死に方をした」

グウエンが目を上げる。エメラダは言った。

「負けるとわかっていても退かなかった。自分にできる最善をした。信頼できる相手と肩を並べて戦い、最後には、その相手であるあなたに看取ってさえもらえた。これ以上の死に方があるかい？ あたしなら満足して、行く所へ行く」

「そうか」

「そうだよ」

「ありがとう。あなたは優しいね」

「馬鹿言わないでくれ。氷のエメラダが優しかったりしたら、世界が引つ繰り返るよ。あんたには借りがあるからね……」

視界が暗くなるのをエメラダは感じた。最後に残っていた力が流れ出る。ああ、と彼女は思った。もう立てないな。

「あんたに、礼を言いたかった。力を貸してくれて、ありがとうよ。閣下にはほめてもらえたんだ。いい働きだ……」

口許に笑みが浮かんだ。

「ロチエフより先に。閣下がお言葉をくれ……た」

「エメラダ？」

グウエンが名を呼んだ。その声が遠くに聞こえる。

「部下どもに、会いに……行かなきゃ」

彼女はつぶやいた。もう寒さは感じなかった。気分が良い、と彼女は思った。とても気分が良い。あたしはやり遂げたんだろうか。力は尽くせたか。最高の戦いができたか。

閣下はほめてくれた。

不意にとてつもない疲れを感じ、エメラダは目を閉じた。何だか疲れた。だがもう良い。今は気分がとても良いから……。

それを最後に彼女の意識は途切れた。

＊ ＊ ＊

三の扉が閉ざされる。戻ってきたグロフは一人、氷玉の側に立った。

「そのほうも行け」

「それがしの場所はあるじの側にて」

何があってもひかぬという顔で答えると、伯爵は「好きにせよ」と言った。それに頭を下げるとグロフは言った。

「閣下は……少し、変わられましたな」

「そうか？」

「はい。みなへのお言葉、ありがとうございます」

「良く戦っていた」

「どの兵士もおほめの言葉をいただけた事、黄泉路^{よみじ}でまでも自慢するでしょう。楽園に向かった者も報われます」

グロフは言った。以前の氷玉なら、あんな事は言わなかった。闇魔族の貴族にとって、配下や僕^{しもへ}は遊戯^{ゆぎ}の駒^{こま}。壊れて役に立たなくなれば捨てられる、それだけの存在だ。廃棄^{はいき}する駒^{こま}にける言葉などない。それが闇魔族というもの。以前の彼ならば、ただ打ち捨てるだけであつたろうに。

「楽園とは何だ」

氷玉の言葉に、グロフは答えた。

「われらが良く戦い、力尽きて死んだ時に、魂が迎えられるとされる場所です」

「どのような所だ」

「行った事ありませんので、わかりませんな。話によれば、美しい所だとか」

「行った事もないのに、なぜ話がある」

「行きかけた者が夢で見た、その話が伝わっているのです」
「夢か」

氷玉はどこか遠いまなざしになった。

「半獣族ですら夢を見る。であるのにわれらはなぜ、それを持たぬのか。われらはただ、生きる。そうして戦い続ける……滅びに焦がれながら。なんと歪ゆがんだ存在である事か」

彼は小さく息をついた。

「ではありませぬか、叔父上」

グロフははつと息を飲んだ。目の前の空間が歪み、そこから人影が、いくたりか現れる。美しい面差しの貴族たち。その背後から、ゆつたりと現れた真朱の瞳の美しい男が頬をゆがめ、笑みながら答えた。

「それはわれらがこの世で頂点に立つがゆえ。それこそがわれらの強さ。気弱な言葉を吐くとは、闇魔族としての資質も疑うぞ、氷玉」

6・乱 5

4

「わが名は蒼炎^{そうえん}。先々代の月牙当主より『蒼』の一字を受け継ぎ、先代当主と並び、血統正しき者。膝を折るが良い、僭称者^{せんしょうしゃ}」
蒼炎は甥を傲然と見据えて言った。

「そのほうがこの場にて戦うは、実に相応しい。騎士の戦いに介入し、その真似事をするが分に応じている。おとなしく恭順^{きょうじゆん}の意を示し、当主の座を明け渡すが良い」

「叔父上には何か勘違いをされておられる」
氷玉^{ひぎよく}は進み出ると、答えて言った。

「わたしが来たのは兵士をねぎらう為。その折にそちらの騎士が不遜な言葉を吐いたゆえ、罰を与えた。それをこのように言われるとは。さもない心根が見えると言うものは」

蒼炎は眉を上げた。

「さもないだと。名を一字も継がなんだ者が何を言うか。そのほうは『名無し』。父よりも母よりも名を得る事ができなんだ者。このわたしに何か言える立場ではないわ!」

吐き捨てるような口調だった。その場にいる貴族たちも、冷たいまなざしを彼に注ぐ。その中で一人、ためらうような顔をした者がいた。グロフは彼に目を止めた。戦の口上を述べに来た貴族だ。確か、雪雅^{せつが}とか言った。

「叔父上らの言う事は、いつも同じ。わたしの名について。ゆえにわたしが当主の座に相応しくないと……聞き飽きた」

氷玉の気配が変わった事にグロフは気づき、はっとなった。貴族たちに緊張が走る。

「名を得られなかった者。淘汰^{とうた}されるべき存在。生き延びるはずも

なかつた益体やくたいもない者よと、誰もがわたしを呼ぶ。そのわたしに倒された父、蒼牙そうがは何者か。牙子きは爵は。雪華せつが伯と彩子さい爵は何ゆえに倒れた。簡単な事だ。あれらはわたしより劣っていた」

この言葉に彩子爵を父に持つ淡雪の姫、緋雨ひさめ男爵らんか蘭火りゅうびは柳眉を逆立てた。

「わが父に対する非礼、許しがたい。そのほうごときに遅れを取る父ではなかつた。おのれはわが父を謀はかにかけて倒したのであらう」
「わが同胞を討ったそのほうが『牙』や『蒼』の名を持ちさえすれば、心安らかでいられた。先代当主の認めた者であるならば」

雪華伯爵を叔父に持つ紅真珠の君、華乱からん男爵雪綺せつきは淡々とした口調で言つた。

「だがそのほうは『名無し』……名を持たぬ者。これではわれらの誇りに傷がつく」

「淡雪の。紅真珠も。わたしが名を得られなんだ事が、それほどまでに許せぬか」

穏やかと言える口調で氷玉は言つた。雪綺が視線を尖らせた。

「それだけであれば、わたしも齒向かいはしなかつた。しかしそなたは雪華の伝統ある白男爵はくの位を、閻魔族とも呼べぬ輩やかいにくれてやつた。臣下に下つた一族とは言え、この扱い……屈辱と言わずして、何と言おう」

「華乱子爵の名は残した。爵位は下げざるを得なかつたが、名は残したのだ。であるのに白の名がそれほどに恋しいか、紅真珠の。服従した一族の爵位を抹消するは当主の権利。それを残した事でこうも責められるとは」

「あの半端者に爵位を与えた事自体が間違いなのだ。あれは閻魔族ですらない。これこそが、そのほうが当主の資格に欠ける証」

蒼炎が言つた。

「どの貴族も子を作る時には細心の注意を払う。より優秀な子孫を作る為に。そうして最も多く血と力を受け継いだ者に、己が名より一字を取つて与えるのだ。『名無し』とは劣つた者。淘汰されるべ

き者だ。氷玉。そのほうは兄上の子の内で最も卑しく、力なき者」
「わたしはそうは思わぬ、蒼炎」

はつきりと叔父を名指して呼び捨てると、氷玉は微笑んだ。

「父、蒼牙はわたしより劣っていた。ゆえにわたしに敗れたのだ」
蒼炎の顔に怒気が登った。

「よくぞ言った。『名無し』の忌み子が！」

その言葉と共に、戦いの火蓋^{ひふた}が切って落とされた。

* * *

「お逃げくだ、」

ガイリスが言った。その体を貫く緑の触手は彼の血を吸い、見る間に成長する。

「こつちだ！」

ガイリスの方へ駆け寄ろうとしたユーラを、誰かの手が捕らえた。半ば引きずられるようにして、その場から離される。

「放して、ガイリスが！」

「もう助からん、放っておけ！」

怒鳴られてなおも引きずられる。ユーラはしかし、その手を振りほどこうとした。すると手で顔を殴られた。

「おとなしくしな。あんたには大金がかかってるんだ」

言われた事にユーラは愕然とした。炎に照らされ、自分を捕らえる者の姿が赤く染まる。頭が痺れるような香りがした。村人にしては、崩れた雰囲気^{くす}の男。武器を持つ者の気配がした。

「村の人じゃないわ。あなた……渡りの戦士か、傭兵？」

「良くわかったな」

そう言つと男はユーラの腕をねじり上げ、悲鳴を上げようとした

口を片手でふさいだ。

「半獣どもに助けを求めても無駄だぜ。ちょっとしたしかけがあつて、おれの気配はわからねえ。一緒にいるあんたのもな」

楽しげに男は言った。ユーラはもがいたが、男の腕を振りほどけない。イリリアたちもなぜか、こちらにまるで気づかなかつた。

「豪勢な焚き火じゃねえか。いいはなむけになるぜ。依頼をくれたのは貴族さまさ。あんたがどうしても欲しいんだとよ。良かったじゃねえか、出世だぜ。連れてかれた先で何をされるかは知らねえがよ」

そう言つと男は、ユーラを引きずつて村の入り口に向かつた。

村の入り口近くには、なぜか人の姿がなかつた。膜を押すような妙な感覚の中を通り抜けると、そこに荷車があつた。別の男が待機していて、ユーラを見ると縄を取り出した。さるぐつわをかまされ、手足をしばられる。荷車には柩ひつぎが積まれており、少女はその中に放り込まれた。蓋を釘で打ちつける音。がたごとと音を立てて荷車が動きだす。

(ガイリス……、イリリア、アルシナ)

柩の中でユーラはうめいた。

(ガイリス……！)

「急げ。礼金が待つてるぜ」

そんな声が聞こえた。

「にしても何なんだ、この娘。呪い師か？」

「知らねえし、知る必要もないさ。貴族さまが欲しいと言や、差し出すのが利口だ」

「ちがいいえ」

低い笑い声。

「この匂い袋は大したもんだ。あいつら、全然気づかなかつた」

「あの呪い師も役に立ってくれた。腹ん中のあれには驚いたけどな」

「手駒の一人だったんだろうに、惜しげもなく潰すよな。さすが貴族……」

きしむ車輪の音と振動。揺れ動く柩。

（誰か……！　ここから出して）

縄をゆるめようと必死で身をよじりながら、ユーラは思った。

（誰か……！）

* * *

グロフは眼前で行われている貴族の戦いを、声もなく見つめた。

蒼炎は炎を操り、闌火は氷を操った。雪綺は重力を、そして雪雅は

風の刃を氷玉に向けた。四人はほぼ同時に氷玉に力を放ったが、月

牙伯爵はそれを目線一つで封じた。

「相手をする気にもなれぬ」

氷玉は物憂げに言った。彼の眼前に四人の術が固まるようにして

止まっていた。炎と、氷と、風の刃。床が一直線にえぐれているの

は、雪綺の重力による攻撃がそこで止まった為だ。力はその場で消

滅した。

「蒼炎、闌火、雪綺。わたしより己が優れていると証明したいのであれば、全力を尽くせ。雪雅。そのほうも遠慮はするでない」

名を呼び捨てられた三人の貴族は怒気を露にしたが、雪雅だけは楽しげな顔をした。

「この程度では失礼でしたね。では」

そう言うと、彼の周囲を風が取り巻いた。風は白刃となり、音を立てて渦巻き始める。白い剣を手にした彼は、渦巻くかまいたちをまといつつ、氷玉に向かって走った。

激しい音と共に、爆風が生じた。氷玉を突き斬ろうとした雪雅だったが、逆に反撃されて床に転がった。重く硬い力の塊が、自分め

がけて放たれたのだ。とつさに刃を盾に変えて防いだものの、衝撃は少なくなかった。氷玉は指一本動かしてはいない。全力で向かうとした自分を、意思の力一つで退けたのだ。

「次はわたくしが」

闇火が言つと、全身に凍気をまとつた。瞬時に床が凍りつき、青白く輝く氷の礫つぶてと雪が周囲を舞う。華奢きゃしゃな少女の姿から『淡雪の』と呼ばれる彼女だが、氷雪を従えた今は、氷の姫と呼ぶに相応しく見えた。片手を上げた彼女は青白い刃を宙に生じさせると、それを氷玉に投げつけた。

一瞬、氷玉の周辺が凍りついたように見えた。しかしそれは彼の寸前で凍気が遮さへぎられた為に、氷の壁が出来上がった事による錯覚だった。氷玉はふつと息を吐いた。氷の壁は砕け、数百、数千の炎の刃となって闇火に跳ね返った。予期していた闇火だったが、やはり彼女も防ぎ切れなかった。背後の壁に叩きつけられ、崩れ落ちる。

「『名無し』の小童こわらなが、このわたくしに膝をつかせるとは」

もうもうと上がる水蒸気の中、闇火は微笑んだ。よけきれなかった炎の刃が、彼女の頬や手足を切り裂いていた。ひどく楽しげだ。

雪綺と蒼炎が同時に仕かける。蒼炎の周囲に火柱が上がり、雪綺の周囲に黒い球体がいくつも浮いた。二人はそれらの力を氷玉に向かって放ち、彼に向かって駆け出した。火柱は縋より集まって竜となり、氷玉を襲った。黒い球体の触れた壁や床がべこりとへこむ。それらは月牙伯爵を押しつぶし、燃やし尽くそうとした。しかし力に彼に触れる事もできず、攻撃しようとした二人も同様だった。目に見えぬ壁に弾かれた火の竜が爆散し、襲いかかろうとした球体が火花を上げてはじけ飛ぶ。氷玉の首を狙った二人は、かまいたちと雷撃をともに受けた。吹き飛ばされ、もんどりうって倒れる。

「まるで歯がたたぬ……」

雪綺がつぶやいた。その顔は喜びに輝いていた。命をかけた戦いが楽しくてたまらないのだ。対して蒼炎の顔は怒りに歪んでいた。

「僭称者が……このわたしに対して!」

氷玉は腕を動かしさえしていない。何かないのか、と蒼炎は思った。この腹立たしい甥の力を削ぐ、決定的な何か。

闌火と雪綺が三たび仕かける。ぎらつく氷で全身を鎧よろった闌火と腕全体を重力の渦で籠手のように覆った雪綺は、体術でもって氷玉に迫ろうとした。肉薄する二人の前に、火柱が上がる。それは氷玉を守る壁となり、二人を阻んだ。闌火の腕が折れ、彼女は吹き飛ばされた。雪綺はしかし、炎の壁に逆らって拳を突き入れた。だがそこまでだった。彼もまた、床に叩きつけられる。

炎が消えた。氷玉は端然たんぜんと立っていた。その頬に、わずかな赤みがある。雪綺の拳が打ち込まれた際、拳圧がかすったのだ。月牙伯爵の口許に笑みが浮かんだ。頬の傷は見る間に修復されてゆく。彼は手を上げると、傷をつけられた辺りに触れた。

「よくぞ傷をつけた。したがここまでであろ、雪綺。闌火も」

倒れ伏す闌火の腕が塵と化す。雪綺の腕もまた。淡雪の姫は顔を上げ、微笑した。

「このように心はずむ戦ができるとは」

「まこと楽しい」

雪綺も笑った。二人は立ち上がると、氷玉に向かって走り出した。それぞれの魔力を最大限に身にまとうて。

氷玉は目を細めると、片手を上げた。白熱する光が彼の手から生まれ、それはまっすぐ二人に向かった。二人は笑った。声を上げて笑いながらその光に突っ込み、体を塵に変えながらも突き進み、そして氷玉の手前まで来て消え去った。

ぼろ布と化した衣服が床に落ちる。グローブは息を詰めてそれらを見ていた。貴族の戦は常軌を逸しているものだが、二人の行動は狂っていると思えなかった。明らかに実力が違つとわかる相手に、無防備に突っ込んでいった。後の者に攻撃を託すわけでもなく。あの行動には一体、何の意味があつたのだ。

気がつく、伯爵がこちらを見ていた。自分でも気づかない内に、疑問を口にしていたらしい。彼は頬に笑みを浮かべた。酷薄こくはくなようにも、慈愛じあいの表情のようにも見えた。

「あれらは何百年もの間、己を滅ぼす者を求めていたのだ」

氷玉は視線を蒼炎に向けた。

「生まれ落ちたその時より、己が滅びを願う種族。それがわれらだ。この冥ひくい熱情。われらをわれらたらしめるものは、この熱情のみ。これを歪みと言わずして何と言う」

「雪華一族と彩一族はこれで完全に滅びた」

蒼炎は目をぎらつかせて言った。氷玉の言葉は聞いてもいないようだった。

「これほどの力を『名無し』が持つはずもない。どこで手に入れた」
「どこで、とは。おかしい事を言う。われらはどのようにして力を手に入れる。どのようにして力を自覚し、振るう事を覚える。われらは生まれ落ちたその時より闇魔族なのだ、蒼炎。その血の中に、全て記憶として刻まれている。全てな」

「だからこそ、古き一族の血は貴重なのだ。そのほうは今、その内の二つの歴史を終わらせたのだぞ。記憶は血によって継承されるが、その血が途絶えれば……、」

「途絶えた所で何だと言うのだ。われらの全ては一人の闇魔族より始まったのではないか。あまたあるどの闇魔族も、その一人の不出来な複製に過ぎぬ。われらは始祖の記憶を封印し、その上に築いたものを『己』と呼んでいるのだ。逆を言えば」

氷玉は叔父を見据えた。

「己を失うほどに血の記憶を喚よび起こせば、力は自ずから手に入る」
蒼炎は目を見開いた。

「そなた……、まさか。それはわれらの禁忌きんぎだぞ。始祖の力を手に入れるなど！」

「禁忌ではない」

氷玉は口許を歪めた。

「記憶を掘り起こす勇氣を持つ者がいなかったただけだ。知ってしまったえば己が崩れる。その恐怖からこの記憶は封印された。ゆえに」

氷玉は片手を上げた。その手のひらに力が集まる。雷撃と重力の塊が、縊り集められ、大きさを増してゆく。

「記憶を得たわたしの滅びへの渴望は、そのほうらの比ではない。そうしてそのほうが、わたしに勝てぬのもまた事実なのだ、蒼炎」

蒼炎の顔に恐怖の表情が瞬時、よぎった。

「狂っている」

「狂気に侵されておらぬ闇魔族が、この世にいると思うのか」

「兄上が『名無し』に倒されたのは、そのせいだ。禁忌のわざに手を出すとは、誇りを知らぬ忌み子が！」

「そのほうに当主の資格はないな」

氷玉は淡々とした口調で言った。

「大陸で 闇王 と呼ばれる者が何者か。何ゆえ 王 の称号を得ているのか。記憶を持つ者であれば、誰であれ知っている。蒼牙は知っていた。ゆえに当主たりえた。そうしてわたしに討たれる事を選んだ」

「なに……」

「 闇王 とは、始祖の記憶を保つ者。己が崩れる危険を冒しても記憶を求め、力を得た者への尊称だ。己のそれよりわたしの記憶の方が鮮明であると知った時、あの男は自ら討たれる事を望んだのだ」

蒼炎は愕然とした顔になった。

「兄上がそのような真似をするわけが……誰よりも強く、美しかった兄上が！」

「綺羅月の君、防御を！」

雪雅が叫んだ。蒼炎ははつとなり、己の周囲に炎の壁を立てた。

氷玉が力の塊を投げつけ、炎の壁が爆散する。蒼炎は吹き飛ばされ、床に叩きつけられた。衣服がちぎれ、はじけ飛んだ装身具が床に散らばる。

側に雪雅が倒れていた。蒼炎をかばったらしい。彼はひどいあり

さまだった。体の半分が焼けただれ、腕や足は炭化している。蒼炎はしかし、さしたる感慨も持たずに立ち上がった。己をかばった配下を無視し、氷玉の前に進み出る。

「そのほうの暴言、許しがたい」

氷玉は無言で叔父を見ている。蒼炎は続けた。

「卑怯愚劣な手段で力を得たそのほうに、わが兄を倒す資格などない。あるわけがない！」

「己が手で倒したかったか、蒼炎？」

月牙伯爵は言った。

「最愛の者に滅ぼされる。あるいはその手にかけて滅ぼす。それが闇魔族の宿命。そのほうにとつては兄が、その対象であったのか。あの男はそのほうの事など、齒牙しかにもかけていなかったと言つに「黙れ」

「蒼牙が生涯かけて執着したのは、己が父。あの男は蒼禍そうかに執着した。他の誰にも渡したくはないほどに。ゆえに滅ぼした。その後は、己を倒せる者を育てる事に執心した。あの男は笑っていたぞ、わたしに倒されると悟った時」

「黙れ」

「そのほうは蒼牙を倒したかったのか。それとも倒されたかったのか。どちらでも良いが。どちらでも同じ事ゆえ」

「黙れ、『名無し』が！ そのほうの言葉など、聞くだけで耳の穢けがれ。悪辣あくらつな策略でわたしを葬ほうむろうとは、誇りを知らぬ行い。これこそが、血筋の正しくない事の証」

「悪辣な策略、とな」

苦笑めいたものを氷玉は頬に浮かべた。

「これを策略と呼ぶか。まこと愚かしい男よ、蒼炎」

「人族ごときに膝を折るうぬが何を言う！」

吐き捨てるように言った蒼炎だったが、そこでふと、眉を上げた。輝く光が不意に現れたのだ。手のひらほどの大きさの光はくるくると回った後に、蒼炎の顔の側で止まった。

「おお、待ちかねたぞ。そのほうの策略もこれで終わりだ」

勝ち誇った笑みを浮かべると蒼炎は光をつかみ、宙に放った。光は宙でくるくると回って鏡になり、ある光景を映し出した。人族の男たちが荷車を中心にして馬に乗り、走っている。荷車には、縄でくくりつけられた柩。

「見るが良い。これはそのほうも良く知る場所からの映像だ。レサ
ンとかいう村のな」

それまで泰然としていた氷玉の顔に、初めて焦りのようなものが浮かんだ。蒼炎はそれを見て小気味よさげに笑うと言った。

「そのほうの執心しておる小娘は、わが手に落ちた。この人族の者らは、同族を殺す事で生きる者たちだ。わたしが一言命じれば、この者たちは即座に娘の首を落とす。氷玉。月牙当主を僭称した者よ。娘の命が惜しくば、わが前にひざまずくが良い」

6・乱 5（後書き）

いまさらですが、読んで下さっている方々、ありがとうございます。
今日読者数を確認した所、五百名の方が読んで下さっていました。
読んでくれる人いたんだ…なんだか不思議な感じです。

ナゾなのは話によって、読者数に偏りが見られる事です。廃村の少女1、だけ、やたら読者数が突出しているのですが…なんで???

7・終わらない夜の終わり 1（前書き）

長くなってしまいました…すみません。ついでにピンチの人がピンチのままです。

7・終わらない夜の終わり 1

かつて聖エリザは永き夜^{なが}の大陸に、夜明けをもたらそうとした。その頃、大陸には 癒し手 が数多くいた。中でも卓越^{たくえつ}した能力を持っていたのが彼女だった。金の髪と緑の瞳の 癒し手 。彼女には、闇王ですらひざまずいたと言う。

しかし彼女の死により、全ては水泡^{すいほう}に帰した。

その時以来 癒し手 の数は減り、滅多に現れなくなった。長い時が過ぎて、迫害を受け続ける治療師たちは、彼女を自らの守護者と仰ぐようになった。人ではなく魔でもないと言われた 癒し手 はしかし、傷ついた者を救う点で、治療師たちには己が同類のように思えたのだ。彼女の子孫と称する流れの民たちも、彼女の物語を伝え続けた。そうしていつしか 癒し手 は聖者であるとの信仰が人族の間に生まれた。彼らはまた、夜明けを呼ぶ者 と呼ばれるようにもなっていた。

彼女がなぜ死んだのかは伝わっていない。

それは今より、二千年ほど昔の事だと言われている。

1

荷車の振動が止まった。うるたえ騒ぐ^{ふた}男たちの声がし、突然それが消える。しばらくしてめきめきと蓋^{ふた}をこじ開ける音がし、ユーラは外気が入ってくるのに気づいた。

「おいたわしい。ご無事ですか」

優しい声がして、ユーラはまばたいた。しかし暗くて何も見えない。良くわからない内に柩ひつぎから出され、さるぐつわが外され、縄が切られた。殴られた頬に、冷たい指が触れるのを感じる。

「何があつたわけ？」

聞き覚えのある声と、松明の明かり。

「ローク」

炎に照らされた彼を見上げ、ユーラはつぶやいた。続いて自分が誰かの腕に抱えられている事に気づく。銀の髪、白い肌、赤い瞳。月牙伯爵に良く似た美しい少年。

「闇魔族……？」

「立てますか」

穏やかに問われ、ユーラはうなずいた。これは誰だろうという疑問が沸いたが、すぐにはつとなつて周囲を見回す。

「わたしをさらった人たちは？」

紫忌むらじが答えた。

「闇魔族がいきなり出て来たんで、逃げた。妙な気配させてたけどな」

「あれは半獣封じの香です。感覚を鈍らせる」

青雅せいがの言葉に紫忌は「ふん」と言った。

「香ね。道理で鼻がむずむずしたわけだ。で？ 何でさらわれたりしたの」

「わたしを、誰かに渡すと言っていたわ。貴族に頼まれたって……

あの、ありがとうございました。どなたかは存じませんが」

ユーラは青雅にそう言ってから、紫忌の方を向いた。

「村に戻らないと。妖獣が暴れて」

「イリリアたちはどうした？ あの二人が妖獣ごときに遅れを取るはずはないんだが」

気がせいっていた彼女は、彼がイリリアの名を知っている事を疑問に思わず答えた。

「戦っているわ。イリリアが傷を負って……それにガイリスが……わたしをかばって」

顔を歪め、泣きそうな顔になった少女に青雅が言った。

「おかawaiiそうに。すぐに参りましょう。わたしがお運びいたします。そのようなお顔をなさらないで」

「おまえ、尻尾があつたら振ってそうだぞ。とりあえず、村に行ってみましょうか」

彼は青雅に合図した。うなずくと青雅は魔力で道を開き、二人を連れ、レサンの村へと一気に 転移 した。

三人が空間を飛び越えて現れた先は、正しくレサンの村の入り口だった。炎はまだ、あちこちで上がっている。均衡きんこうを崩したユーラはよろめいたが、青雅が手を伸ばして支えてくれたので倒れずにすんだ。

「なんだあ？ 妙なモンが……何でみんな、こっちに逃げて来ないんだ」

蠢蠢いている緑の鳶と、右往左往している村人を見て、紫忌が言った。

「封じの結界が張ってあります」

青雅が言い、手を伸ばした。ぱしん、という音と共に、何かがはじけた。同時にそれまであった、見えない壁に似た圧力が霧散した。「そりゃ逃げられないわな。にしても二人とも、えらくぬるい戦い方してるな」

紫忌は半獣族の二人が、村人を避けて戦っているのを見てつぶやいた。村人が邪魔でアルシナは頭にきているようだが、イリリアは襲われそうになった村人をていねいに助けている。恐慌きんかうに陥おとっている村人の方は、助けられたとも思わずに悲鳴を上げているのだが。

「お嬢ちゃん、あの二人に何か言った？」

「人は傷つけないでって……」

「なるほど。律儀に命令を守ってるわけだ。ここは加勢してやるべきかね」

つぶやくと紫忌は、青雅に目をやった。「頼める？」と言うと、青雅は一礼し、手のひらを村に向けた。そこから光が生じ、いくつもの筋となって撃ち出される。それは正確に全ての触手をとらえ、一気に焼き尽くした。

ユーラは二人にはほとんど注意を払っていなかった。村の中に駆け込むと、ガイリスを探して周囲を見回す。

村人たちは、突然現れた光が化け物を一掃した事が信じられず、呆然としていた。すると誰かが「闇魔族だ！」と叫んだ。

紫忌と青雅はユーラの後を追ってゆつくりと進んでいたが、この言葉に足を止めた。煤にまみれた村人たちを見回す。人々は疲れ果ててへたり込み、もはや逃げ出す元気もない。しかし現れた闇魔族に、恐怖にかられているのは見て取れた。そこへイリリアとアルシナがやって来て、膝をつく。

「申し訳ありません、閣下。お手をわずらわせてしまいました」

イリリアの言葉に村人は慌てふためいた。「まさか、伯爵さま？という声上がる。」

「あー、違う違う。伯爵じゃなくて、弟の方。何ではらすかなー、イリリアは」

紫忌はため息まじりに言った。村人がどよめき、「白男爵閣下」や「伯爵さまの弟君の」という声が上がった。紫忌は手を上げて彼らを静めると、声を高くして言った。

「そういう訳だから、おまえら、お家に帰んなさい。罰を下したりはしないから。なんか派手に壊したみたいだけどー……」

そこで彼は言葉を止めた。村人が自分を見ていない事に気づいたのだ。彼らの視線は青雅の方に向かっていた。

はかなげな美少年。

あー、そっか。という顔になった紫忌は、にやりすると青雅の方を手で示した。

「……ここにおいで。の白男爵閣下が、不問に処すと言っておられるから！」

いきなり身代わりにされた青雅は、この言葉を聞いて目を剥いた^む。

倒れているガイリスを見つけたユーラは、そちらに駆け寄った。

彼はひどい有り様だった。顔には血の気がなく、腹には穴が開いている。腕も足もずたずただ。

ひざまずき、そつと頬に触れると、少年はうつすらと目を開いた。
「ぶじで……」

「わたしは平気。しつかりして」

「すみませ……、おれ、よわくて」

「わたしを守ってくれたじゃない」

ユーラは彼の髪をなでた。

「あなたはわたしを守ってくれたわ。だからわたしは無事よ。ありがとう、ガイリス」

「おれ、やくに、たちました……？」

「ええ。とっても」

そう言う少年は微笑んだ。

「火は、もう消えたんですか。暗くて……」

彼は何かを探すかのように、ずたずたになった腕を動かした。ユーラはその手を握った。少年はほっとしたような顔になった。

「家に……帰りましょう、ご主人さま」

「そうね」

ユーラの目から、涙があふれて落ちた。熱い雫がガイリスの頬にかかる。

「泣いておられるのですか……？」

「大丈夫よ」

声が震えそうになるのをこらえ、ユーラは答えた。

「わたしは大丈夫、だから」

* * *

蒼炎は光の鏡を再び小さな球にすると、それを消した。勝ち誇った顔で言う。

「娘の命が惜しくば、甘んじて制裁を受けよ。そのほうには攻撃も防御も許さぬ」

氷玉は何も言わない。蒼炎を見据えている。その目には、静かに怒りが燃えていた。

「閣下……それは。当主に挑むにしては、あまりに卑怯」

ようやく声帯が復活した雪雅は、崩れかけた体を何とか起こして言った。

「卑怯？ 何がだ。この者は、始祖の力を手に入れたと豪語したのだぞ。ならば耐えるであろうよ。よしんば耐えられなかったとしても。この者の最後には相応しかろう。新たな当主に成敗されるのだからな！」

蒼炎はそう言うのと、炎を放った。氷玉は防御もせず、その炎を受けた。衝撃で二、三步後ずさる。マントや服が焦げ、肌と髪が焼けた。しかし闇魔族としての再生能力がすぐに働き、焼け焦げた肌は青白さを取り戻す。髪も銀に戻る。

蒼炎は次々と炎を放った。それは氷玉を痛めつけたが、彼は反撃も防御もしなかった。眉をひそめ、黙ってそれらの力を受ける。

「まこと腑抜けたか。人族ごときの為に」

蒼炎は炎を放つ手を止めると、青白く燃える刃を宙からつかみとった。力を固めた刃を片手に氷玉に近寄ると、無造作に刃を振るう。

氷玉の表情が歪んだ。

右腕が、切り落とされて床に転がる。

「声も上げぬか」

床に落ちた腕が塵と化して消える。それと同時に血の流れる体から、新たな肉や骨が現れて腕の形を取り始める。蒼炎は刃を振るつた。今度は左腕が切り落とされた。

「ここまでされても反撃せぬか」

再生中の氷玉の両腕を、蒼炎は切り落とした。次に両足を切る。ごとりと、と音を立てて氷玉の胴が床に落ちる。まどつていた衣服はこの頃には全て焼け焦げ、跡形もなかった。手足を失った体はしかし、またもや再生を始めていた。

「苦しかろう。われらはこの程度では死ねぬ種族。肉体は際限なく再生を続けるが、苦痛がないわけではないゆえな」

蒼炎は氷玉を足蹴にして仰向かせると、髪をつかんで顔を上げさせ、首筋に刃を当てた。煙が上がり、青い炎が肌を焼く。

「この世に生まれ出た事自体が間違いだったのだ、おまえなぞ」

勝ち誇ったように言った蒼炎に、氷玉は侮蔑のまなざしを向けた。質を取り、手足をもがねば戦う事もできぬ臆病者。そのほつきが何を罵ろうと、何の傷にもならぬわ」

蒼炎はあざ笑った。

「『名無し』ごときが何を言う」

「わたしの名には価値がある。姫が、ほめてくれたのだから」

氷玉は口の端を上げて笑った。

「姫は、わたしの名を聞いてこう言った。綺麗な名だと。そのほうに認められずとも、父にも母にも認められずとも。それが何だ。姫の言葉こそがわたしに価値を与える」

蒼炎は刃を閃かせると、再生を終えようとした氷玉の両腕を切り落とし、足を切り落とした。それから改めて、刃を構える。

「一族の名誉を貶める痴れ者が。こうまで腑抜けておるとは思わなんだ。その首、今落としてやるゆえ感謝するが良い」

そう言つと蒼炎は、刃を振り上げた。

* * *

歌が、その場に響いた。

村人たちが顔を上げる。どこから聞こえてくるのだろうかと言いたげに。イリリアとアルシナが、息を飲む。

紫忌は聞こえてきた声に、肌が泡立つ感覚を覚えた。魅了されると共に反感を覚え、恐怖や畏怖と共に安らぎを感じる。これは人の声だ。魔術ではない。そのはずなのに……何なのだ、これは？

大気が淡く、金色に輝く。光が集まって、一人の少女の元に集う。少女は横たわる少年の上に屈み込み、額と胸に手を置いていた。栗色の髪が集まる光に触れて輝き、淡く金色に染まる。彼女が唇を動かすたびに、喉から漏れる音が輝きと、力呼び寄せる。

「夜明けを呼ぶ者……姫君は癒し手だったのか」

呆然と青雅がつぶやく。紫忌は尋ねた。

「癒し手？ 何だそれは」

「人に似て人に非ず、魔族に似て魔族に非ず。しかしあらゆる魔族はこの存在に従い、半獣族もまた逆らう事ができない……銀月の君がひざまずいたわけがわかりました」

そう言つと、青雅は地面に片膝をついた。少女に向かって頭を垂れる。

紫忌はユーラの方を見た。その目が見開かれる。彼女が触れている少年の傷が、見る間に塞がってゆく。少女が歌うたび、金色の光を集めるたびに。少年の頬には今や、赤みがさしていた。

やがて唐突に、少女は歌いやめた。輝きが薄れ、髪が栗色に戻る。

同時に彼女は青ざめて、少年の上に首を垂れた。

村人たちは声もなく見つめている。

皮膚の泡立つ感覚がまだ残っていたものの、紫忌は意を決すると少女の側に歩み寄った。膝について少年を見ると、手足の傷は赤い線になり、腹の傷はまだあったものの、致命傷ではなくなっていた。少年には意識はないようだが、彼の胸は規則正しく上下していた。

「坊主は生きているようだな……お嬢ちゃんは、癒し手 とやらないのかい」

ユーラはゆっくりと首を振った。

「わたしは資格を失ってしまった」

細い声で言うと、顔を上げる。その瞳が緑の光を放つのを、紫忌は見た気がした。もう一度見直すと、彼女の瞳はいつも通りの榛色^{はしなみ}だった。疲れ果て、苦しい顔をしている。

「こいつは助かるみたいじゃない」

「ここまでが……精一杯」

青ざめた顔でそう言うと、ユーラは目を閉じてうつむいた。

「この子を運んでくれる、ローク？ 家に帰りたいと言っていたの」

紫忌は答えず、ユーラを見つめた。

「癒し手 というのは何なんだい。お嬢ちゃん的能力は、一体何なんだ？」

「わたしはただの薬師^{くすり}よ」

つぶやくように言う。代わって答えたのは青雅だった。

「全てのものを、本来あるべき姿に戻す。癒し手 とは、そうした力の持ち主です」

「……なぜひざまずいているの」

ユーラは彼が膝をついているのに初めて気づいた。青雅は頭を垂れると答えた。

「敬意を表するべき方に、相応の礼を取っております」

村人たちはざわめいた。闇魔族が少女に対して礼を取る、その姿に驚愕^{きょうがく}していた。この少女は何者なのだという顔になる。視線には

怯えが込められていた。やはり人間ではなく魔の類たぐいのものだったのかと。

「立って下さい……闇魔族の方。わたしはただの娘に過ぎません」
そこでユーラは目まいを覚え、額に手を当てた。紫忌が支えようと言つように手を伸ばしかけ、それを途中でやめて言った。

「具合悪そうだな。家に戻った方が良くないか」

「平気よ。少し、疲れただけ……」

「どうぞ家にお戻り下さい。その少年も運ばせましょう」

ユーラに言われた通り、立ち上がった青雅が気づかわしげに言った。

「姫君を家にお連れしなさい」

紫忌に向かって言うと、彼は笑みらしきものを浮かべてから、青雅に向かって礼を取って見せた。青雅は眉をしかめたが、村人の手前、平静を装った。次にイリリアに向かって「あの少年を」と言う。了解したイリリアが、ガイリスを抱えてユーラの家運び込む。

「人族の者は去りなさい。姫君に負担をかけるのではない。みな家に戻るように」

青雅がそう言うと、村人たちはみな、泡を食った表情で頭を下げた。

「その前に。姫君の物を盗んだ奴は返せ」

アルシナが言う。この言葉に村人たちは、地面に放り出した食料を慌てて探し始めた。

紫忌に支えられて家に戻ったユーラは、イリリアが抱えてきたガイリスに顔を向けた。

「呼吸はしっかりしていますわ」

イリリアが安心させるように言う。ユーラは彼が寝床わらふしんにしている藁布団わらふしんを示した。

「暖炉の側に寝かせてあげて。暖かくしてやりたいの」

イリリアはすぐに言われた通りにした。

「癒し手 ってのは、傷を治す魔力を持つてるのか？ あの歌が呪文か何かなのか」

紫忌の言葉にユーラは息をついた。

「わたしは 癒し手 ではないわ……もう」

少女は足を引きずるようにして歩き、椅子に腰かけた。

「かつては 癒し手 と呼ばれた。 癒し手 だったのだと思うわ。でも今は……」

「資格を失った？ さっきそう言ったけど」

「歌えないの」

ユーラはささやくように言った。

「歌えないのよ。家族を亡くしてから」

「家族？」

「……わたしは、憎んでしまったから。わたしの家族を殺すように命じた者を」

「それは普通、当然の反応じゃないの？」

「そうね。でも 癒し手 には致命的。憎しみに囚^{とら}われた 癒し手

は、資格を失う。わたしの歌は閉じてしまったわ」

「閉じる？」

「力を使えなくなったの。ガイリスには必死だったから、何とか使えたけれど。他の人には多分、無理……」

良くわからなかった。紫忌は眉をひそめた。魔力に関する事は得意ではない。イリリアに目をやって「そういうもの？」と尋ねると、彼女は困った顔になった。

「わたくしにはわかりかねます。力の系統自体がまるで違っております」

「系統って、どんな」

紫忌の言葉に答えたのは、外から入ってきた青雅だった。

「われらの力は 歪める 事から生まれますが、姫君のお力は 正しく在らせる 事から生まれるのです。それゆえに自然で、強力な

のですよ。失礼いたします、姫君」

青雅はユーラに一礼した。

「村人は戻りました。よろしければ御前おんまえを辞したいのですが」

「あなたは……」

ユーラの言葉に紫忌が答えた。

「伯爵の弟君の白男爵閣下。似てるでしょ」

青雅は非難めいた視線を紫忌に送った。ユーラの表情が和らぎ、

「ああ」と言った。

「そうね。良く似ている……お礼の言葉が遅れてしまつてごめんなさい。助けてくれてありがとうございます、白男爵。よろしければまたおいで下さい。歓迎いたします」

椅子から立ち上がると、少女は言った。青雅は複雑な顔をしたが、すぐに頭を下げた。

「その『兄』の事で、急ぎ行かねばなりません。姫君が無事であった事を伝えねば」

「おれは残るよ。早く行つてくれ」

紫忌が言うのに青雅はうなずいた。

「それでは失礼を」

そう言つと、一礼してから外に出る。

「氷玉に、何かあったのかしら」

青雅を見送つたユーラは言った。アルシナが扉を閉める。紫忌は持っている自分の武器を、確認するかのように手に取った。

「戦になつてゐる」

少女の顔が強張った。

「戦？」

「反乱が起きた。月牙伯爵は配下の貴族に、当主たる資格がないと非難をされた。反乱を起こした貴族はその上に、お嬢ちゃんを人質にして戦を有利に運ぼうと考えた」

「それで……わたしをさらおうと」

「だが取り返した。これで閣下も心置きなく反撃できるだろう。後

は……兄上の治世を脅かすものを、取り除くだけだ」

彼の口調に不穏なものを感^{ふあん}じたとしても、ユーラにはそれと気づくだけの時間はなかった。ひゅっと何かが風を切る音がし、次の瞬間、衝撃と共に視界が回った。

「……なぜ」

押し殺した声で紫忌が言う。ユーラは自分が床に倒れている事に気づいた。誰かに突き飛ばされたのだと、遅まきながら気づく。顔を上げると、目の前にイリリアがいた。こちらに背を向け、両手を広げている。彼女の前には紫忌が立ち、抜き身の剣を手にしていた。「閣下に、罪をおかさせるわけには」

イリリアが言った。

「なぜ反撃^{はんげき}しなかった。おまえの実力なら」

「……あなたに牙をむく事など、できません、わが君」

彼女の声音は優^{こわね}しかった。愛を告げるかのように。言い終わると共に体がかしぎ、どうと倒れる。

「イリリア！」

少女は叫んで立ち上がり、そちらに駆け寄ろうとした。しかし背後から伸びてきた手が、その動きを止めた。

「こちらへ」

意識を取り戻したガイリスが、そこにいた。ふらつきながらも少女を自分の背後にかばおうとする。青ざめた顔の中、目に敵意の光があった。視線の先には紫忌がいる。

「どういう事です、白男爵」

この言葉にユーラは驚き、紫忌の方を見た。

「白男爵？ だって男爵はさっき……、ローク？ どういう事なの」
剣から血が滴^{したた}って床に落ちる。誰の血だろうと少女は思い、はっとなった。倒れたイリリアの姿は、ガイリスの影になって見えない。だが彼女の周囲に、赤いものが広がってゆくのが見えた。

紫忌はイリリアを見下ろした後、表情を消した顔で二人に目をやった。

「人の血を引く闇魔族が、あんな純粋な貴族の姿をしていると思うか？」

そう言うと、彼は剣を振って血を落とした。ユーラは呆然と紫忌を見つめた。

「わたしを斬ろうとしたの……どうして」

「おまえは兄上を破滅させる。反乱が起きたのは兄上がおまえに膝を折った為だ。人族ごときに従う当主を、闇魔族は誰も認めない。それだけではない。おまえは兄上の弱みとなった。兄上の首を取ろうとする者は、おまえをまず狙うだろう。兄上は、この大陸を千年も統治するはずだった……おまえごときに滅ぼされるなど、あつて良いはずがない」

良く知っていると置いていた男が、別人に見えた。冷静に語る紫忌は、ユーラが知る気の良い男ではなかった。重さを感じるほどの威圧感。明白な殺意。単なる人族の傭兵ではあり得ない、その気配。魔族の持つ、力の。

「邪魔が入ったが、今度こそ仕留めさせてもらう。どけ、小僧」
「いやです」

ガイリスは体を震わせた。彼にとって、魔族に逆らう事は本能に背く事である。当然、苦痛も恐怖もある。しかし彼は、動こうとしなかった。そこにアルシナが割って入る。

「おまえもおれに逆らうか、アルシナ」

彼女は膝をつくと頭を垂れた。

「閣下に逆らう事などできない。ですがこのまま見ている事もできません。お斬り下さい。さもなければわたしは姫君をかばいます……

……イリリアのように」

紫忌の顔が歪み、怒りの表情になった。

「おれがイリリアを斬りたくて斬ったと思うのか。この五十年、従ってくれた者を。この上……おまえを斬れと？」

アルシナは何も言わない。黙って頭を垂れている。紫忌の手に力が籠もり、彼は剣を振り上げた。力任せに床に突き立てる。彼はそ

のまま剣の柄に体を預けるようにすると、首を垂れ、動かなくな
た。

ユーラはそこで、ガイリスの腕に手をかけた。

「どいて、ガイリス」

「ご主人さま？」

「どきなさい。患者がいるわ。イリリアはまだ生きているの？」

紫忌はのろりと首を動かしてユーラを見た。返事を待たずにユーラは倒れる女性の側に行くといざまずいた。彼女の体は大きく斜めに斬られていたが、触手のようなものが骨や肉をつなごうとして、血の中で蠢うごめいていた。しかしその動きは、次第に緩慢かんまんになってゆく。「助かりません。心臓をやられています」

アルシナが言った。ユーラは手を差し伸べようとした。その手をガイリスがつかむ。

「危険です。共生せいせいしている妖獣が」

「共生？」

「おれたちは妖獣や魔獣と共生するんです。そいつらは今、本能に戻っている。戦いの中で納得して死んだならともかく、この状況では触れると危険です」

「助けられるか」

紫忌は床から剣を引き抜くと、ユーラに突きつけた。

「その小僧にしたように。イリリアを救えるか。できるのならやってくれ」

「剣をひきなさい、白男爵。言われなくても助けるつもりよ。邪魔だからさがっていて」

厳しい表情で少女が言った。アルシナに目を向ける。

「心臓が無事なら、回復できる？」

「わかりません。ですが、多分……」

「では、心臓を元に戻してみるわ」

少女は自分の胸に手を当てた。疲れているのはわかっていたが、できる限りの事をするつもりだった。

「慈悲深き 癒し手 の神よ、聖なる手のエリザよ……力をお貸し下さい」

つぶやくと目を閉じ、息を整える。喉の奥から旋律を紡ぎ出し、音で力を形作り、光を呼び寄せ始めた。

器になる。

力の器に。そうして光の通る道になる。やってくる光に魂を委ね、祝福をもたらす道具となる。

歌は、そこへ至る道。

輝く光が彼方から来るのが見えた。それはユーラを目指してやって来ると、少女の内にとどまった。髪がほのかに金色に輝き、瞳の色が淡くなる。唇は歌を紡ぎ続け、少女は光を傷ついたイリリアに向けて放とうとした。

そこで、苦痛が響く。突然黒い歪みが胸の内より噴き出し、少女は音を外した。

「……っ」

どろどろとした憎しみが、胸の内から噴き上がってくる。それが歌を、光を追い払う。

（……だめ。呼ばないと。イリリアを助けないと……）

赤い薔薇。焼け焦げた体。愛していた者たちの無残な姿。

心臓が引き裂かれる。悲しみに。痛みに。眼の前に現れる、あの光景。

（……いや。見たくない）

歌うたびに現れる記憶。

（歌わなければ）

手を伸ばしてくる闇魔族。わきあがる真っ黒な憎悪。あの男さえいなければ。

（……いや！）

歌が途切れた。光は失せ、体の奥から噴き出す憎しみを外に出すまいと、少女は歯を食いしばった。髪と瞳の色が元に戻る。彼女はよろめいた。倒れる所をガイリスが支える。

「ご主人さま！」

震えながら、ユーラは目を閉じ、ガイリスにしがみついた。苦しい。怖い。苦しい。

……苦しい……。

荒い呼吸がようやく収まると、少女は目を開けた。自分を支える少年に問う。

「ガイリス」

「はい」

「イリリアは……？ どうなったの」

少年は何か言いかけ、ためらうような顔になってそれをやめた。不安を覚えたユーラは何とか一人で立つと、彼女の方を向いた。

そこには薄く光る繭まゆがあった。半ば透けているので中が見える。体を丸め、目を閉じたイリリアがいる。意識はないようだ。彼女の体からは水晶のきらめきを放つ蔦つたがしげり、猫に似た白い魔獣と巨大な蛇の魔獣が寄り添っていた。彼らの体の半分は、イリリアの中に溶け込んでいる。

「これは……、」

「イリリアと融合ふごうした妖獣と魔獣たちです。分離ぶんりしかけている」

アルシナが答えた。ユーラはうなだれた。

「わたし……、うまくやれなかったのね」

「命は助かりました。心臓は再生した」

「イリリアが元の状態に戻るように、歌ったつもりだった……でも途中で途切れて」

疲労が重くのしかかり、彼女はよろめいた。ガイリスが少女を支える。

「ご主人さま。彼女は繭の中で眠っているだけです。意識を取り戻せば元に戻ります」

「それは本当か」

ガイリスの言葉にそれまで黙っていた紫忌が問う。アルシナがそれに答えた。

「おそらく。姫君は『元に戻る』ようにされたとおっしゃいました。融合がそれで、ほどけてしまったのでしょうか。意識が戻れば、再融合は可能です」

「戻らなかつたら？」

「このままです。『成り損ない』になる。それでも閣下、彼女には生き残る機会が与えられました」

アルシナの言葉に紫忌は、息をついた。

「そうだな……」

ユーラはうなだれた。彼女は歌いきる事ができなかった自分を責めていた。歌は途切れた。光は途中で押しやられた。己の内から生じた憎しみが、イリリアを助ける力を阻んでしまった。

歌えない。歌い続ける事ができない。

（どうしたら、良いの）

あの男を思い出す。力を使おうとするたびに。恐怖と悲しみ、恐ろしいまでの憎悪おうごが噴き出して、力の器になる事ができない。こんな自分には、癒し手としての資格はもはやない……。

その時、突然扉が開いた。闇が疾風のように駆け込み、青雅の姿に変わる。

「闇下！　すぐにいらして下さい。銀月の君が危うくおなりです！」

7・終わらない夜の終わり 2（前書き）

風邪ひきました。熱はないのですが、軽い吐き気が延々続いています。キモチワルイ。。。。

7・終わらない夜の終わり 2

2

背後から放たれた力に、蒼炎は手元を狂わせた。氷玉の首を狙ったはずの刃は、大きく宙をないだ。

「何の真似だ、雪雅」

何とか再生を終えた雪雅は立ち上がった。

「無様に過ぎる。これが当主に挑む者の振る舞いか。何という卑怯な戦いをする」

「そのほうごときに指図される覚えはない」

蒼炎は片手を上げて炎を放った。まともに受けた雪雅は、もんどりうって倒れた。片腕が塵に変わる。

「力なき者が賢しに何を言うか。そこで寝ているが良い。氷玉を滅ぼした後に成敗してくれる」

嘲笑を頬に浮かべると氷玉に向き直る。

「おのが愚かさを悔いるが良いわ、氷玉。そのほうの薄汚い情婦は、わが配下にくれてやる。喜ぶが良い」

氷玉の目に、怒りがともった。蒼炎が刃をふりかぶる。その時空間が揺らぎ、青雅がその場に現れて叫んだ。

「姫君は白の閣下が取り戻されました。遠慮はなさいますな、銀月の君！」

「裏切ったか、青雅！」

怒りの表情になった蒼炎が、青雅に炎を放つ。これを真空の盾で消滅させると青雅は空間を渡り、雪雅の側に現れた。

「土壇場での心変わりか、准男爵」

「信念に従ったまでだ、騎士の」

その時、重い音が響いた。体の底に響く音だった。はっとなった二人がそちらを見やる。蒼炎もまた。

音が続く。次第に大きさを増してゆく。重みに負けて崩れ、砕けるような音と共に。グロフは本能的に危険を察知し、全身の毛を立てながら後ずさった。

床がえぐれ、亀裂が走った。三人の貴族は慌てて身を守ろうとした。堅牢な岩でできた城の床が、見る影もなくひび割れ、へこみ、えぐれてゆく……手足をなくして横たわる、一人の男を中心にして衣服はとうにぼろ屑と化しており、彼は何も身にまもってはいなかった。今、芸術品のように美しい体には、新たな手足が作られつつあった。凄まじい速さで骨が生まれ、肉が生じ、神経が、血管がつながってゆく。新たな皮膚がそれらを覆い、完全な手足を手に入れた男はゆっくりと立ち上がった。

月牙伯爵は何もしなかった。

ただ、蒼炎を見つめた。その真紅の瞳で。それだけで五百を過ぎた闇魔族の貴族は、内からはじけた。悲鳴を上げる暇もなく骨が粉々になり、首や手足がちぎれ飛び、……そして全てが塵に変わった。

青雅と雪雅は声もなく、この幕切れを見つめた。蒼炎の最後はあまりにもあっけなかった。圧倒的な力の差。

伯爵は黙ってたたずんでいる。

「お見事です、銀月の君。やはり、あなた以上に当主に相応しい方はいない……」

雪雅が立ち上がった。氷玉の前に進み出ようとする。青雅はしかし、彼の腕をつかんでそれを止めた。まだだ。まだ、何か起こる。

彼の危惧は正しかった。轟音と共に床が砕け、凄まじい圧力が放たれたからだ。二人は膝をついた。氷玉の力が無差別に周囲を攻撃しているのだと気づくまでには、少しかかった。

「わが、きみ……っ」

グロフは全身にかかる重みに耐えかねて膝をつき、うめくように言った。

「おしずまり、くださ……っ」

氷玉の体の内から、力が熱のように放射されている。大気が渦巻き、荒れ狂う。青白い光に包まれる彼が笑うのを、青雅たちは聞いた。床が崩れる。いや、違う。溶けている。氷玉の力に耐えかねて、岩が泥のように形を崩し、溶けてゆく。

「我を忘れておられる。男爵は何をされたのだ？」

青雅が言った。雪雅が答える。

「あの戦いでは無理もない。誇り高い閣下には、いかほどの怒りであつた事か」

「閣下をお止め下さい、貴族のかたっ」
グロフが向こうから叫んだ。

「このままでは、閣下のお命が……っ」

「これを止めると？ 無茶を言う」

そう言った雪雅は顔を強張らせた。光と熱に包まれる氷玉の腕が、指から塵に変わってゆくを見た為だ。氷玉はしかし、それでも笑っていた。放たれる力が衰える気配はなく、周囲の床や壁、天井が次々と溶けてゆく。

「閣下の指が、塵に……」

「力に酔って制御がきかぬのだ。このままでは月牙は当主を失う」
青雅は雪雅の腕をつかむと引っ張って立たせた。グロフが床に倒れながら叫ぶ。

「白、男爵をお呼び下さい、あの方ならば、以前にもっ」

「前にも同じ事が？」

「先代、さまに、挑まれた時に……っ」

青雅は厳しい顔になり、雪雅の方を見た。

「わたしが呼んで来る。ここを頼めるか」

「長くはもたんど」

「魔力のある者を駆り出して使え。その半獣！扉を開いて力のある者を呼び集める。わたしが戻るまでもたせろ！」

青雅はそう言つと、道を開いて空間を移動した。残された雪雅は自身の魔力を練り上げると、決死の覚悟で月牙伯爵の力を押さえ込みにかかった。

* * *

ユーラの家に駆け込んだ青雅は、礼を取るのもどかしい様子で叫んだ。

「閣下！すぐにいらして下さい。銀月の君が危つくおなりです！」
紫忌が顔色を変えた。

「兄上に何があつた？」

「力の暴走です。我を忘れておいでで、止まりません。半獣の者が、閣下には以前、銀月の君を止めた事があると……」

「あれと同じ状態に？ 叔父君は」

「すでに滅びました。お急ぎ下さい、このままでは当主は滅びてしまわれます！」

「氷玉に、何があつたの」

ガイリスに支えられていたユーラがこの時、声をかけた。青雅は答えた。

「力を使いすぎたのです。われらには力に酔う所がございます。大抵は熱がさめれば止まるのですが、強い力をお持ちの方には、自身が滅びる事になっても止まらない事がございます。閣下にはよほどお腹立ちの事があつたらしく……、我を忘れておいで。このまま

ではお体が崩壊します」

「おれが行っても止まるかどうか。前は運が良かったが。下手をすると兄上と心中……そうしたらやっぱりおれが稚児ちごだったって、叔母君辺りが吹聴して回るんだろっなあ」

嫌そうに紫忌が言った。

「で、お嬢ちゃんはどうするよ」

「わたし？」

「来るか？　すごい危険だけど。戦の原因になったのはあんただし、兄上が今死にかけてるのもあんたのせいなんだから」

厭味いやみな口調で紫忌は言った。半ば八つ当たりだった。制御を失った闇魔族に近づきたがる者はいない。彼としても、少女が来ると言うはずがないと見越しての言葉だった。

「ま、断つてもそれはそれで……」

「行くわ」

即座にそう言った少女に、紫忌は逆に驚いた。

「ご主人さま、危険です」

顔色を変えたガイルスが止める。紫忌も言った。

「すぐ危険だって、わかってる？」

「氷玉とは約束をしているの」

少女の言葉に紫忌が眉を上げる。

「何の約束か尋ねていい？」

「具合が悪くなったら、薬を持っていくと言ったのよ。わたしは薬師ですもの」

きっぱりと言うと、少女は軟膏を入れた容器を袋に入れ、肩から下げた。伯爵の置いていったマントを抱え、青雅の所へ行くと「連れて行って」と言う。

紫忌は呆れた顔で彼女の行動を見ていたが、肩をすくめると言った。

「そうしてやれ、青雅。アルシナ、おまえは坊主と残れ。心配するな、坊主。お嬢ちゃんはちゃんと返すよ。おれの命がなくなつて

も、他の魔族が世話を焼きたがるはずだ」

それから彼は、眠るイリリアの方を見た。

「イリリアを頼むぞ、アルシナ」

そう言うと、青雅にうなずいて見せる。

一瞬の後、彼らの姿はその場から消えた。ガイリスはあるじの立っていた辺りを見つめ、立ち尽くした。

7・終わらない夜の終わり 3

3

彼は白熱する力の渦の中にいた。ひどく自由な気分だった。己を己として止めていた何かが壊れ、凶暴なまでの破壊の衝動に突き動かされていた。力を使う事が、楽しくてたまらなかった。

指が崩れ、腕が内から崩壊する。足の肉がはじけ飛び、骨がむき出しになる。その間も力は彼の内からあふれ続けた。知らずして笑いながら、彼は力を放ち続けた。

高揚した気分で周囲を破壊し続け、己をも破壊していた彼の前に、何かが現れる。

栗色の髪と榛の瞳の少女。

心臓が、はねた。

雪雅は力を最大限にまで使い、暴走する月牙伯爵の力を止めようとしていた。駆り出された水の民や半獣族たちも必死で対応しているが、ほとんど何の役にも立っていない。伯爵を封じる為に張っている結界がゆらぎ、数名の半獣族が力尽きてはじき飛ばされた。待機していた別の者がすぐに入るが、あいた穴から力が走り、周囲の壁を撃つて溶かした。何人か、巻き込まれて焼かれたかもしれない。その時、空間が揺れて三人の人影が現れた。青雅と白男爵、そして……、

雪雅は目を見張った。人族の少女の姿を取るその者は、魂を奪われるような存在だった。際立って美しいわけではない。強い魔力が内在するわけでもない。だと言うのに、なぜか頭を垂れ、ひざまずかねばならないという思いにかられる。

「気を抜くな！」

青雅がそう言うなり、結界を補強した。少女に気を取られていた

雪雅は慌てて、元の作業に戻る。

「氷玉はどこに」

少女が言った。紫忌は眉をしかめた。

「多分、この底。前よりすごいな」

床の一部が液化化している。どろりとして沼のようになった床は、すり鉢状にへこんでいた。底には火花を散らしつつ、白熱する炎が燃え上がっている。炎の中に人影がある事にユーラは気づいた。黒つぶく見えるその人影には腕がなかった。足も骨だけになり、体のあちこちの臓器が剥き出しになっている。その様に彼女は、息を飲んだ。

「前はおれが最初から側にいた。頭の隅にそれがあつたから止まっただろうが……」

紫忌は頭をがりがり搔くと、「兄上！ お元気ですか！」といささか間の抜けた問いを發した。声に反応したのか炎が勢いを増し、彼の方に向かう。しかし紫忌を焼き尽くす寸前でそれは、結界に阻まれて爆散した。

「元氣は元氣みたいだ」

紫忌は感想を述べた。青雅が眉間みけんに皺しわを寄せる。

「遊んでおられないで、何とかして下さい」

「遊んでたわけじゃないんだが。これじゃ近寄れないし」

月牙伯爵のひどい状態に衝撃を受けていたユーラは、そこで顔を上げた。

「わたしを行かせて……彼の側に」

「危険すぎます！」

「あ、そりゃいいかも」

青雅が即座に反対し、紫忌がうなずいた。自分を睨む配下の騎士に、紫忌は肩をすくめて見せた。

「さっきのでわかつたろう。今の兄上にはおれがわからない。でもお嬢ちゃんはお兄上が自ら名を明かし、膝をついた相手だ……少しは可能性がある」

「我を忘れている閣下に、判別がつくと思いますか！」

「だから『少しは』と言ったろう。お嬢ちゃんでも駄目なら兄上は終わりだ」

紫忌は炎の中に立つ月牙伯爵を見やった。

「おれは兄上の方がお嬢ちゃんより大事なんでね。可能性があるなら賭けてみたい」

「家族なら、それは当たり前よ」

少女は言っと、紫忌の腕に手を置いた。彼の瞳の奥に、隠しきれない不安があるのに気づいたからだ。

伯爵の側までには、青雅が共に行く事になった。

「閣下の周囲は炎熱の渦。人族のお体ではひとたまりもない。わたくしが結界を張りながら近づきます。姫君には決して、わたくしから離れませんよう。よろしいですね」

「ええ。お願い」

少女の言葉に青雅は、「力の限りお守りいたします」と答えた。それから彼は、紫忌の方を向いた。

「閣下には、この場をお離れ下さい」

紫忌は眉を上げた。

「おれに逃げろって？」

「准男爵も半獣族の者たちも、限界が近い。わたくしは姫君を守る為、全力を出さねばなりません。閣下に何かあった時、そちらに戻る余力はないでしょう。どうぞ、安全な所にいらして下さい」

「兄上が減じるのであれば、おれにも未来はないがな」

そう言った紫忌に、青雅は眉をくもらせた。

「閣下……」

「心配するな。危なそうならちゃんと逃げる。だができる限り、ここで見ていたいんだ」

口調をやわらげて紫忌は言った。青雅は不安げな顔をしつつ、「

はい」と言って頭を下げた。

青雅はユーラを抱き上げると、熱と炎の中心に向かって歩きだした。

（熱い……）

ユーラの体から、汗が吹き出した。呼吸が苦しい。常ならば、一瞬で炭化するほどの熱と炎。恐ろしいほどの力の乱舞。押し寄せてきた炎が、寸前ではじかれた。目には見えないが、青雅の言った結界は確かに張られている。しかし、全てを遮断できているわけではない。遮り切れなかった熱が、少女の元まで伝わってくる。

「姫君？ 大丈夫ですか」

「だい、じょうぶ……」

焼けた空気を吸い込んでしまい、咳き込んだユーラに青雅が歩みを止めた。彼の胸に顔を伏せて、少女は言った。

「急いで。お願い」

「はい」

青雅は歩きだした。声音は穏やかだが、その顔は緊張に歪んでいた。一歩進むごとに伯爵の力は重くなる。それでも腕の中のこの少女を、守り抜かねばならないと彼は思っていた。

伯爵の力がぐんと押し寄せ、抗いきれずに青雅はよろめいた。少女がはつとなつて顔を上げる。彼は安心させるかのように彼女を胸に抱え込んだ。

「失礼を。足場が思わしくなく」

ささやくように言う彼に、「わたしは平気」とささやき返す。下を見た少女は、唇をかった。青雅の足が、泥のようになった床に沈んでいる。溶けて渦巻く、灼熱の泥に。

「騎士のかた。あなたの足が」

「これぐらいは大丈夫です。それよりわたくしの事は、名で呼び捨てて下さい。青雅と」

「名を呼ぶ事は、失礼にあたるのでしよう」

「本人が許可した場合は別です。それにわたくしは、伯爵閣下よりはるかに格下の存在です。貴女には呼び捨てられる事が正しいのですよ、姫君」

炎がまた襲ってきた。身を縮めたユーラを青雅が全身でかばう。

「姫君。お怪我は」

彼の服の一部が燃えて消し炭となる。焦げた服の合間からのぞく肌は、火膨れを起こしている。

「青雅。あなた火傷……」

「闇魔族なら、大した事はありません。われらは何度でも再生します……っ」

巨大な炎が襲いかかるのに気づき、青雅は片手一本でユーラを支え、もう片方の手を差し出した。魔力の壁を展開すると、すさまじい音がして火花が散った。

「姫……、こ、ここまでのようです。閣下は……、わたくしが近づく事を、望んで、おられない」

炎を遮り、燃える大気を遮断しながら青雅が言った。何とかして伯爵の力を押し返そうとするのだが、相手の力が強すぎて、立っているのがやっとだ。その腕が膨れ上がり、血管が破裂し、指先から燃え上がって炭化してゆくのをユーラは見た。彼の指がじわじわと塵に変わってゆくのを。

「氷玉！」

少女は声を張り上げた。熱された大気が喉を焼く。息を吸い込むだけで涙が出るほどつらい。

「氷玉、やめて！　お願いだから！」

炎は止まらない。黒く焦げた青雅の腕の、指先が崩れて落ちた。むきだしになった手の骨が、少し遅れて塵となる。

「氷玉！」

叫んでから少女は、咳き込んだ。涙があふれる。だが頬をつたうそれは、すぐに蒸発して消えてしまう。

「わたしが、わからないの……」

「姫君……顔を、伏せて。喉をやられます」

ついに手首までが崩れ落ちた青雅が、やや青ざめた顔で言った。

「閣下は、わたくしの魔力に反応しておられるのです。同族は、敵だと認識しておられるのでしょうか。決してあなたへの心が消えたわけ、では」

苦痛はすさまじいはずなのに、少女を気づかっている。彼女が心に打撃を受けたのではと。

「ありがとうございます、青雅。ごめんなさい。あなたの腕……、」

言われた通りに彼の胸に顔を伏せて言うと、青雅の穏やかな声が聞こえた。

「わたくしは、闇魔族ですから。どうという事はございません」

叩きつけられる炎をはじく音。飛び散る火花。

「しかし、閣下の力はさすがに……、再生が追いつかない。これ以上は近づけません」

「わたし一人で、何とか近づけないかしら」

少女が意を決して言うと、青雅の体がわずかに揺れた。

「危険すぎます」

「できないとは言わないのね」

「御身おんみに害が及びかねません」

「このままでは、氷玉が死んでしまう。あなたも力が尽きてしまうわ」

「わたくしの事など、お気にかかれずともよろしいのです。優しき癒し手じゅんとつの姫よ。わたくしは騎士に過ぎません。駒として扱われるのが順当」

「そんな真似は、できないわ」

少女は顔を上げた。やや青ざめた頬の青雅は、前を向いたまま尋ねた。

「なぜですか」

「助けてくれる人に感謝をするのは、おかしい事？ あなたはわた

しを助けてくれた。今も守ってくれている。わたし、あなたが傷つくのを見ているのも、嫌なのよ」

「わたくしが……」

青雅は前を向いたまま、とまどったような顔をした。何か、不思議な言葉を聞いたというような。

「なぜ、わたくしが傷つくのを見るのがお嫌なのでしょう」

「なぜって、」

「わたくしが、銀月の君に似ているからですか？」

火花が飛び散り、ユーラは首をすくめた。

「それは最初は、似ていると思ったけれど。あなたと氷玉は全然違うわ」

「違う……」

「違っているから大事なのよ。あなたも氷玉も、この世にただ一人しかないのだもの。みんな違っていて、だからみんなが大切で大事だわ。そうでしょう？ あなたに無理をさせているわたしが言っても、説得力はないのだけれど……」

青雅は前を向いたまま、少女の言葉を考えているようだったが、やがて静かに言った。

「姫君。闇魔族の騎士とは、いくらでも替えのきく、使い潰されるのが身上の者。わたくしの血統の大元は保存されておりますので、斃れた所で問題はないですよ。それにわたくしは今、主君の前で力を振るっている。無様は晒せない……ただそれだけ。意地を張っているだけの事です。姫君が、わたくしごときにお気を使われる必要は、本当にはないのです。ですが」

青雅は崩れかけた腕を戻し、そっと少女を胸に抱き寄せた。

「お心には感謝いたします」

「青雅……？」

「けれど、姫君。今ここで、あなたさまが優先すべきは銀月の君。わたくしではない。それをお忘れなきよう」

彼は何かを決意したような声で言った。

「さあ。お命じ下さい。なさりたい事を。遠慮えんりょされる事はない。わたくしには、闇魔族としての力があります」

彼の態度はどこかが、前とは違っていた。それがどこことなく、不安な気がした。それでも自分が何を言わねばならないか、ユーラにはわかっていた。

「彼に近づきたい。近くで呼びかけたいの。お願い。力を貸して」
「それがあなたの望みならば、わたくしは、何としてもかなえましょう」

青雅は静かに言った。

「御身おんみをわたくしの力で包みます。それならば少しの間なら、耐えられるでしょう。その代わりあなたさまはその足で、一歩ずつ歩まねばなりません。床は溶けております。大気が燃えだすほどの熱さも、全ては遮りおさえ切れぬでしょう。つらい道のりになります。それでも……？」

「行くわ」

「ではそういたしましたでしょう。ですが、一つ約束をして下さい。決してわたくしの方を振り向かぬと」

「あなたの、方を？」

「振り向けば、心がくじけます。閣下の方だけを向いて、閣下の事だけを考えて下さい。よろしいですね」

ユーラは微笑んだ。

「約束するわ。青雅……感謝します。心より」

青雅の頬にも、笑みが浮かんだ。

「そのお言葉で、全て報われます。では、床に下ろします。よろしいですか」

雪雅せつがはもはや立つ事もできず、それでも結界を維持いじしようと力を使い続けていた。その横に紫忌しきが立つ。

「おれに魔力が扱えれば良かったんだが。すまん」

「気が散ります、夕闇の君。話しかけないで、いただきたい……っ」
荒い息をつきながら彼が言くと、紫忌は手を伸ばして彼の首筋に触れた。

「なに、」

指先から、何かが伝わってくる。雪雅は目を見開いた。

「人族の混じった力ですまんが。何かの足しにはなるか？」

触れていた指を離して紫忌が言う。尽きかけていた力が戻っている事に雪雅は気づいた。全身に重くのしかかっていた疲れが消えている。

「何をなされた」

「力の補充。誇りが傷つくとか言わないでくれよ。緊急事態なんだから」

雪雅は眉をひそめた。

「そんな事ができるなど、聞いた事がない……」

「水の民では時折ある。弱った者に力を分けるんだそうだ。おれは魔力を形にしてどうこうする事はできないが、こういう形でなら使えるらしい」

淡々とした口調で紫忌が言った。雪雅は前を向いた。

「闇魔族らしからぬ能力ですね」

「内緒にしてもらえると助かる。おれの評判は最初から地に落ちているようなもんだが、兄上がどうこう言われるのは耐えられん」

雪雅は口許を歪めた。

「それを言うなら、わたしのそれも地に落ちたようなものです。当主に逆らったあげく、綺羅月の君をも裏切った」

「見る目があったただけだ。兄上と叔父上じゃ、格が違いすぎる。結果としておまえは正しい方についた」

あつさりと紫忌が言った。

「兄上はおまえを処罰したりはしないさ。こうまで尽力してるんだから……っ、おい。あいつら、何してるんだ」

雪雅ははっと息を飲んだ。月牙伯爵に向かって歩いていった青雅が、

腕に抱えていた 癒し手 の姫を床に下ろしたのだ。少女はそれから、歩きだした。溶け崩れた床の上を、伯爵の方に向かい、一人で「青雅……、あいつっ！」

少女は振り返らない。よろめきながらひたすら、前を向いて歩く。彼女の周囲には目に見えない力の膜が張られ、押し寄せる炎をはじいていた。その背後で、青雅は炎に包まれている。髪が燃え上がり、美しかった顔が焼け、手足も焼け焦げて、それでも彼は立っていた。なぜそうなったのかは明白だった。彼は自分を護る事を放棄したのだ。自分を護る力を捨てて、その分を少女の周囲の結界に注いだ。少女を全力で護る為に。

「何を馬鹿な事を……、命が尽きるぞ！」

「お静まりを、白男爵。貴族の誇りがあるのなら、配下の者の戦を見届けられませ」

紫忌が血相を変え、結界の中に突っ込んで行きそうな気配を見せたので、雪雅は厳しい声でそれを止めた。

「戦だと？ これが戦なものか！」

「戦です。彼にとっては」

雪雅は言った。

「主君の前で、無様は晒せませぬ。今、あれにとって姫君を護り切る事は、誇りと忠誠をかけた戦にも等しいものとなっております。無粋な真似はおやめ下さい」

「無粋だと？ 配下を無為に失う事などおれには……、なぜ、おれがあれの主君だとわかった」

はたとなった紫忌が尋ねると、雪雅は微かに笑った。

「名を呼び捨てられました」

そう言うってから、彼は立ち上がった。紫忌の方を向かないまま。「あれにしては上出来です。わたしはあなたをあるじにするなど、ごめんですがね」

「あれの事を良く知っているような口ぶりだな」

「われらはほぼ同じ系統の血を継いでおります。お互いの考える事

はわかるのですよ。わずらわしい事に。あれに死ぬつもりはありませんから、静かにご覧いただきたい」

紫忌は眉をひそめ、雪雅を見た。次に炎の中に立つ青雅を見やる。彼は全身を炎で焼かれ、今にも崩れ落ちそうだった。どう見ても死ぬ気でやっているようにしか見えない。

「死ぬつもりはないと言っても、死なないとは限らないだろう」

「戦とは、賭かけですからね」

雪雅が言った。どこか楽しげだった。

「命を賭けて、われらは興きようじる。闇魔族とはそうしたもの。これであれが滅びたなら、それはそれだけのこと。運がなかった。ただ、姫君が危機に陥おちいるのだけは避けたい。あれも命がある内は、意地でもあの方を護るでしょうが……そういうわけですから、白男爵。力の補充をもう少ししていただけますか」

紫忌は意表をつかれた顔をして、雪雅を見た。

「力の補充を？ 自分から求めるのか。闇魔族であるおまえが」

「あれの力が尽きた時に、わたしは姫君をこちらまで引き寄せる役になを担になう」

雪雅は答えた。

「他者から力を分けてもらうなど、闇魔族としては確かに、道にもとる行い。ですがわたしの誇りは既に地に落ちている。ましてやこれは姫君の御為おんため。何をためらう事がありましょう」

紫忌は雪雅を見つめた。次に炎の中の青雅を見、伯爵に向かって歩む少女を見つめた。

「おれにできる事は今の所、これしかないからな」

息をつくと彼は、雪雅の側に寄って首筋に手を当てた。

「だが見ているだけというのは、気分の悪いものだ」

青雅は、自身の元から歩み去る小さな背中を見つめていた。両の手を前に差し伸べ、彼女を護り、彼女が傷つかぬよう、力を放ち続

ける。

彼女は振り返らない。一心に、前を向いて歩む。

それで良い、と彼は思った。炎が髪を焼き、体を焼く。闇魔族の再生能力が働いて、骨が見えるほどに焼かれた体を元に戻す。それをまた次々と焼かれ続け、今や彼は、月牙伯爵と大差ない姿となっていた。あちこちが黒く焦げ、皮膚が剥がれ、肉が溶け落ちて骨がむき出しになっている。

彼女がこの姿を見れば、歩みを止めてしまうだろう。きっとひどく、嘆く。

襲ってきた炎に腕の一本を塵に変えられ、それでも少女を護る力を止める事なく青雅は思った。彼を見る者はいつも、月牙伯爵の面影を彼の上に重ねた。青闇男爵は、甥に似た彼をことさらに貶め、配下の者の前でなぶって見せる事を好んだ。彼の能力も、人格も、彼らには何の意味もなかった。彼らにとって意味があったのは、伯爵に似た青雅の顔。それだけだったから。

違うと言ってくれたのは、姫君が初めてだった。違っている所が大事なのだと、そう言ってくれたのも。

（わたくしの忠誠は白男爵に捧げた。後悔はない）

焼かれながら青雅は微笑んだ。

（けれど今……、姫君。あなたを護りながら滅びる事ができたなら。それはそれで望外の幸福でありましょう）

彼女は月牙伯爵のもの。自分はただの騎士。だからこれで良い。これで。

ああ、だが。

（できるものなら……）

かすむ目で少女の背を見つめ、青雅は思った。

（最後に、もう一度。姫の顔を……）

足が砕け、体が崩れて落ちる。炎が激しさを増して彼を打った。それでも青雅は自分を守る事をせず、力を少女に送り返した。少女の背を見つめながら。

（わが君。わたくしの忠誠を見ていただけましたでしょうか）

眼球が崩れて塵になる。闇魔族としての感覚を働かせ、彼は少女の動きを追い、なおも力を送った。

（わたくしは……、）

意識が、暗転する。

少女は歩き出した。月牙伯爵の方に向かって。ただひたすら彼を見つめて。どろどろになった床に足を取られ、なかなか進めない。

熱い。

すさまじい熱が、少女の体にたたきつけられる。床に沈む足からは、焼けつく熱が伝わってくる。周囲では、高温の炎が荒れ狂っている。

（清雅は、ずっとこれを耐えていてくれた）

普通ならとうに死んでいるはずの炎の中で、彼女が立っていられるのは、彼が結界を張ってくれているからだ。それでも熱は遮り切れない。力の激しさも。足が火膨れを起こし、真っ赤になる。汗が吹き出してはすぐに蒸発する。体が内側から乾いてからからになる。

熱い。痛い。苦しい。

それでも行かなければ。少女はそう思い、歩を進めた。炎の中にいる伯爵の元へ。すり鉢状にへこんだ斜面にたどり着く。さらに強い熱気と炎が押し寄せる。傾斜する床に、転びそうになった。歯を食いしばって進み、炎の中の人影に呼びかける。

「ひぎよく」

声はささやくようなものしか出なかった。さらに前に進み、呼びかける。

「氷玉。しつかりして」

周囲の炎が、少し弱まった気がした。

白熱する炎の中を歩んできた少女は、彼に向かって何か言った。その姿が、その声がどこかにひっかかり、彼は顔をしかめた。何だろう。大切な事を忘れている気がする。

「……ひぎよく」

少女はそう言った。その音に彼は意識を向けた。力が弱まり、炎がゆっくりと静まっていく。この音は、気に入らない。嫌な記憶がある音だった。だが、

「氷玉。しつかりして」

少女の唇から、喉から放たれるこの音は……不快ではない。心が静まる。高揚した気分が静まってゆく。

そんな彼の心とは裏腹に、周囲で静まる事を嫌がるように炎が跳ね、それが少女を打った。少女が倒れる。その瞬間、彼は心に痛みを覚えた。いけない。彼女の体は弱く、傷つきやすいのだ。ちょっとした事でも壊れてしまう……。

『風からも嵐からも守ってみせよう』

不意に、そんな言葉が浮かんだ。誰の言葉だったか。

『荒野に咲く花のようだ。繊細で、もろくはかない。だと言つのに、吹く風に向かって顔を上げる……』

倒れた少女が顔を上げる。彼に向かって微笑みかけ、手を差し伸べる。

「大丈夫よ……」

胸が、痛い。

「わたしは、大丈夫だから。氷玉。そんな顔を、しないで」

ああ。

「……、あ、あ、あ……」

不意に、全てが現実のものとなった。炎も、力も、自分自身も。放出していた力が消え、月牙伯爵はその場に崩れ落ちた。腕も足も塵と化し、激しい痛みが全身を襲っていた。

「……め。姫。すまぬ。わたし、が。わたしが、そなたを……」

周囲で一斉に、蒸気が上がった。熱せられた大気や床が、冷えてゆく。ユーラの片腕が、だらんと垂れていた。彼女の手足は赤く腫れ上がっている。着ている衣服もあちこちが焦げていた。

「大丈夫……、大丈夫だから」

彼女は膝立ちになると、いざるようにして彼の側に来た。

「清雅がわたしの周囲に結界を張ってくれたの。ちよつと、しびれたけど。あなたは？　こんなひどい……こんなに傷ついて……」

力の暴走は収まったのに、体の崩壊が止まらない。肩が崩れ、骨が露出する。

「姫。すまぬ」

「ごめんなさい」

少女の声がふるえる。

「ごめんなさい。わたしをかばったと聞いたわ。それでこんな……こんな事に」

彼女の頬を、水の粒がつたう。手がないのが残念だった。あれば、ぬぐってあげられたのに。

「……そなたは、わが、姫ゆえ」

声帯が崩れかけている。うまく声が出せない。このまま塵になるのかと伯爵は思った。それも良い。

「名を……」

うまく出せない声で彼は言った。

「名を、呼んでくれ……姫」

『名無し』の闇魔族。父からも母からも、力の系統を示す名を与えられなかった者。その名は一族の恥と、親族全てに忌まれ、蔑まれた。氷玉という名はそれほどに価値のないもの、やくだいもないものの証だった。

だと言うのに彼女はそれを、ただの一言で価値あるものに変えた。

『綺麗な名前ね』

その一言が自分を救った。

「氷玉」

少女がささやく。ああ、と彼は思った。これは闇魔族の夢。これこそが。夢を見ることのない闇魔族が、生涯をかけて求めるもの。

最愛の者に名を呼ばれ、その手で長い生に幕を下ろしてもらう。

「わが名は……そなたの、もの」

未来永劫に。そう続けようとした彼は、それ以上喋れないことに気づいた。意識が薄れる。まるで、夜明けが近づいたかのように。

いや……、

（夜明けが……ここに）

薄れゆく意識の中で彼は思った。彼の唯一の存在、名を捧げた姫である少女の周囲に、淡く金色の光が集まりつつあった。

伯爵の姿を間近に見た時、ユーラの心にはただ痛みと悲しみがあつた。彼はひどいありさまだった。腕は落ち、足もなくなり、肉や骨が露出している。生きているのが不思議なほどだ。そうして彼の

体は、崩れ続けていた。話をしている間も、ずっと。

（死んでしまう）

闇魔族の死がどのようなものか、彼女は知らなかった。けれども今伯爵に訪れているのがそれであると、わからないはずもなかった。彼は死ぬ。このままでは。

「わが名は……そなたの、もの」

ひびわれた声でささやくように言うと、彼は笑みらしきものを浮かべた。彼女をなぐさめるかのように。どうしてこんなに優しいのだろうと少女は思った。死にかけているのに。こんなひどい状態なのに。

なおもわたしを気づかおうとする。

（歌が……）

光のやってくる気配を彼女は感じた。自らが資格を失ったはずの力が、そこにある。わかつていた。いつもそこにあることは。

憎しみと苦痛がばかりと黒い穴を開けている……。

『誇りを忘れるのではないよ』

ジーナの声がした。

『心を開き、世界を愛し、人々を守護する。それがわれらの在り方でも、ジーナ。わたしはもう愛せないの。涙を流しながらユーラは思った。あの男がわたしに憎しみを植えた。その憎しみが内からわたしを食い破り、心をからからにする。こんな荒れ果てた心では、歌を受け入れる事はできない。力を受け入れる事は。

冷たい目をした闇魔族の男。燃え上がる馬車。焼け焦げた小さな体。

『目を開いて、おまえの前にいる患者を見なさい！』

不意に、ジーナに叱りつけられた気がした。

『彼は、おまえの助けを待っている！』

ああ、とユーラは思った。ここにいるのはあの男ではない。これは氷玉。わたしをかばった為に、滅びようとしている友。

「癒し手　の神よ。聖なるエリザよ。どうか彼を……彼を助けて」

ユーラはささやいた。歌が間近に来ているのがわかった。憎悪が口を開けているのも。

「罪も憎しみも、わたしの内にある。けれどそれは彼とは関わりのないもの。光よ。わたしを器として使い、その力をここに」

光が押し寄せ、憎しみが膨れ上がった。

「その為にながしが砕けるのなら、……それでも良い」

そう言った途端、光が憎悪を押し退けた。圧倒的な力が少女に集まる。熱が生じる。力が溢れ、自身を通して広がりゆくのを少女は感じた。唇から歌が生まれるのを。

押し止めようとはせず、ただ流れに任せる。やって来るのは光。

内からあふれるのもまた光。

ただ、光。

最初の音が輪を描く。次々と音が重なり、それは美しい文様を大気に描いた。溢れる。力が。自分の全てが光に染まる……。

意識が拡大し、少女は倒れる男を、その体を構成する細胞の一つ一つまでも見た。彼の命が今にも飛び去ろうとしているのがわかった。力をなくし、崩れてゆく細胞を歌の力を注いで支え、元通りに構成し始める。急がなければならなかった。光が留まっている時間はほんのわずか。

（わたしは、愛する）

呪文のように響くその言葉。

（わたしは、守る。この世にある最も小さくされた者を）

それは聖エリザの言葉。

（今、目の前にいる者もまた）

（力よ。光よ。彼を支え、彼を生かしめよ）

現れる、奇跡。

死に向かおうとしていたエメラダに自身の力を注いでいたグウェンは、響いてきた光に顔を上げた。歌声が聞こえる。

これは、魔力？ いや、違う……。

周囲でうめいていた怪我人が、その声を止める。倒れていた者が数名、信じられぬという顔をして起き上がった。

「これは……？」

視線を落としたグウェンははっとなった。エメラダの胸の傷が消えてゆく。貴族の力で焼かれた傷が。呪詛のようにいつまでも残るそれは、じくじくと膿み、エメラダから生きる力を奪い続けていた。その傷が、消える。

血の気が失せ、白くなっていた彼女の頬に、赤みが差した。

「エメラダ」

意識が戻らないまま、彼女が低くうめき、身じろいだ。光が自分と彼女を包んだのを感じ、グウェンはそっと彼女を抱きしめた。今日は随分とたくさんの死を見た。

でも彼女は助かる。

「生きているか」

溶け崩れた床に倒れていた青雅は、かけられた声に再生したまぶたを持ち上げた。急速に大気が冷えてゆくのを感じる。蒸気が周囲で上がっていた。雪雅が気温を下けているのだろう。

新しい眼球が、相手の姿を映す。上がる蒸気に包まれた、褐色のかつしよく肌と紫の目の男。

「……何とか。申し訳……」

「なぜ詫びる」

「見苦しき、さまをお目に、かけ」

紫忌は息をつくと頭をがりがりかと掻いた。

「ここまでやった配下を叱るような主君だと思われてるわけ、おれは？ いいからとっとと再生しろ」

身を屈めると、彼はそっと青雅の頬に触れた。

「滅びるかと思ったぞ。無茶しやがって」

触れられた指先から、力が流れ込んで来るのを青雅は感じた。

「わが君……、」

「その呼びかけはナシ」

「わたくしごときに、力を使われるなど」

「文句は聞かない。おれはおれの好きにするし……ん？」

紫忌は眉をしかめた。

「妙だな。前にも同じ事を言った事があるような」

青雅は小さく微笑んだ。

「百年ほど前に。わたくしはまだ、ほんの子どもで。力を暴走させて弱っていた所を閣下に救われました」

「そうだった」

「あの時閣下は、わたくしに力を注いで助けて下さいました。滅びかけたわたくしを叱り、命を大事にするようにと諭して下さいました。あの時より、いつか閣下の役に立ちたい、お仕えしたいと」

紫忌はしばらく考えていたが、「ああ」と言った。

「あの時の子どもがおまえだったのか……って、待て。おれがあの時助けたのは確か、女の子だったぞ」

「わたくしです」

「マジ？ 何てこった、てつきり女だと……思いつきり決めたつもりだったのに、恰好つけ損じゃねえかつ！」

青雅は主君を白い目で見上げた。

そこに輝く光が届く。少女の歌が。

紫忌が顔を上げる。青雅もまた。歌は青雅の崩れかけた体を癒し、周囲でまだ渦巻いている熱を放逐した。倒れ、傷ついている半獣族の者たちをも、彼女の歌は回復させている。

歌は広がる。光もまた。やわらかく、強く。しなやかに、優しく。それは音という形を取った力であり、祈りだった。輪を描き、ゆるやかに、しかし確実に広がる……城中の至る所へ。そうして倒れ、傷ついている者を癒してゆく。

「癒し手 の力が……」

「あの娘にはこれで、三つも借りができちまった」
息をつくと紫忌は言った。

「兄上を正気に戻してもらったのと、イリリアを助けてくれたのと……回復しきるかどうかわからないが、命は助かったからな」

「後の一つは何ですか」

青雅が身を起こして尋ねると、紫忌はその頭にぼんと手を置いた。
「おまえを助けてくれた事だ。見る。再生が完了している」

さっきまで骨が見えるほどだった自分の体が、傷一つなく回復している事に青雅は気づいた。着ていた服は跡形もないが、体は完全に元に戻っている。

歌は、まだ続いている。暖かい、と青雅は思った。体中に熱と力が満ちてくる。優しく全身を包む音と光に、青雅は息をついた。まるで……、

話に聞く太陽の光のようだ。

少女のすぐ側で歌と光を注がれる伯爵は、急速に回復していた。目を閉じたまま横たわり、再生を続ける。手足が戻り、崩れていた体が戻る。それだけではない。青白かった彼の皮膚が、血色の良い色になり始めていた。まるで、人族のように。

少女は歌い続けている。

（あるべきものを）

（あるべきかたちに）

（生かしめよ。彼を……）

「そこまでだ、姫」

不意に、伯爵が目を開けてユーラの手を握った。再生した彼の手で。

「これ以上そなたの力を受けると、わたしは人族に戻ってしまう。もう良い」

「もう……良い」

ユーラは小さくつぶやいた。その髪が金に輝き、瞳が緑に変わっているのを彼は見た。

「ああ。もう良い」

半身を起こして微笑むと、少女の周囲に満ちていた光が消えた。

髪と目の色が元に戻る。歌が消え、そうして少女は目を閉じた。体がゆらりとかしく。

伯爵は手を差し伸べた。彼女を抱き留める。

癒し手　の姫はそのまま、意識を手放した。

7・終わらない夜の終わり 3（後書き）

累計アクセス1000名を超えました。びっくり。読んで下さっている方、ありがとうございます。

次回、最終話です。

そうして頭痛と吐き気はいまだ、私の中でタッグを組んで踊っています…。うつうつ。みなさまも風邪にはお気をつけて。

8・夜明け前

「蒼炎が倒されたと？」

氷刃男爵蒼華は黒珊瑚の城で報告を受け、眉をひそめた。

「役立たずめ。ここまで場を整えてやったと言うに」

「御方さまには、ご助力なさらずともよろしかったのですか」

そう言った騎士に目をやると、氷魅の姫は赤い唇を歪めた。

「たわけた事を。あの愚かな兄に一族当主を名乗らせるなど、このわたくしが許すはずもない。頃合いを見て当主を弑逆したと糾弾し、滅ぼすつもりであったわ。したが癒し手が現れたとなると……」
頬に白い纖手を当て、蒼華は物思いにふけるような顔になった。

「氷玉。あれの強運は認めよう。ひざまずいた相手が癒し手とあつては、迂闊に動けぬ。こうなつてはあの人族どもの腑抜けぶりが、口惜しい限り。姫をわが元に留め置けたならば、有利に事が運べたものを」

「御方さまを御不快にさせたあの者どもには、既に追手を放っております。じきに片がつきましょう」

「あれもその者どものように、片づけられれば良いのだがな。まあ良い。しばらくは、あの忌み子に当主を名乗らせてやろう」

冷たい笑みを浮かべると蒼華は言った。

「しばらくの間はな」

彼女に従う騎士たちが、礼を取る。

「真に月牙当主に相応しきは、御方さまのみにございます」

＊ ＊ ＊

ちりちりと肌を焦がす感覚に、夜明けが近いと氷玉ひぎょくは感じた。肌は青白さを取り戻している。闇魔族の肌だ。戦の処理はほぼ終わった。叔父である蒼炎は滅び、自分は当主の地位を確かなものとした。蒼華もしばらくは、おとなしくしているだろう。

氷玉は城内を歩いた。少女の姿を求めて。彼女はどこにいるのだろう。

そうして彼は、少女を見つけた。淡く輝く地下の庭園で、彼女は咲き乱れる月光花を眺めていた。

「やはり、この花はそなたに似合うな」

声をかけると振り向いた。栗色の髪、榛色はしはみの瞳。小さな癒し手の姫。その手と足に包帯が巻かれているのを見て、氷玉の心に痛みが走った。癒し手の力は、力を使う本人にはあまり効果が無いのだ。彼も、青雅せいがも、周囲にいた半獣族たちもみな癒されたと言うのに、彼女の手足には火傷が残った。

自分が傷つけたのだ、と彼は思った。この大切な存在を。

「またそんな顔をしているの。大した事はないと言ったでしょう？」

少女は包帯を見て顔を曇らせた伯爵を見上げ、言った。

「随分楽になったのよ。氷や水を出してもらって冷やしたし。ちょうど軟膏を持ってきたから、それをぬったわ。それに歌で痛みが和らげられたから……」

「だが、そなたは傷ついた」

「すぐに治るわ。本当よ」

微笑んだ彼女の顔に何かが加わった気がして、氷玉はまばたいた。何だろう。今までよりも穏やかだ。それでいて強く、美しくなったようだ。

蕾つぼみが、開こうとしているかのよう……。

「それより、じきに夜明けよ。眠らなくとも良いの？」

少女の言葉に、彼女に見とれていた氷玉は我に返って答えた。

「そなたに礼を言いたかった」

少女はゆるゆると首を振った。

「お礼を言わなければならないのは、わたしの方。あなたに助けてもらったもの」

「わたしがそなたを？」

「あなたを助ける事で、わたしも助けられたの。ずっと苦しかった。今も苦しい。でも大丈夫だとわかったの。あの時に。苦しみも、悲しみも、憎しみも。そのままが良い。そのままで、……光はそこにあって全てを包むわ」

氷玉はまばたいた。彼女の言う事が良くわからなかった。

「良くわからぬが」

そう言つと、少女は微笑んだ。清々しいとさえ言える笑みに、氷玉はどきりとした。

「わからなくとも良いのよ。でもわたし……、あなたにお礼を言いたい。ありがとう、氷玉。あなたが助かって良かった。生きていてくれて」

何という皮肉だろう、と彼は思った。死を願う歪んだ種族に、彼女は生きろと願う。だが、それでも。

「それがそなたの願いであれば、叶えずにはおられまいよ」

氷玉は静かに言った。滅びへの渴望は変わら^{かつほう}ずある。やって来る太陽の気配は今や、針のように全身を刺していた。彼はあの時、滅びてしまいたかった。生きている限り続く夜を、終わらせてしまいたかったのだ。そうであれば、どれほど幸福だっただろう。だが彼女は願った。彼が生きて在る事を。そうであるなら、彼女の願いを叶えないわけにはゆかない。

残酷にして優しいその願いを。

「何だかつらそうだね。大丈夫、氷玉？」

「大丈夫だ。だがそろそろ眠りに入らねばならぬ。次の夜までわたしは、世界を失う」

「闇魔族は、眠りの事をそう言うの？ 世界を失う、と」

「事実そうであるゆえな。……そなたの軟膏はまだあるのか」

「ああ、ええ。少し残っているわ。あなたの為に持ってきたのに、全然役に立たなくて。わたしの役に立ったなんて変よね。家に戻ればまだあるし、当分は大丈夫」

彼女の手になるもの。彼女の作った品。不意に氷玉は、欲しいと思った。何でも良い。彼女の手の触れたものが。

「もらえぬだろうか」

そう言うと、少女は不思議そうな顔をした。

「かまわないけれど……どうするの」

「わたしが世界を失う間、側に置いておきたい」

それだけで、眠りも苦痛ではなくなるだろう。

少女は何か言いたげな顔をしたが、何も言わずに肩から下げた袋をさぐり、軟膏を入れた小さな壺を袋から取り出した。それを差し出す。包帯で覆われた指が痛々しく、氷玉はなるべく少女の指に触れないように気をつけながら、礼を言って受け取った。

「感謝する。この礼に、何か贈りたいのだが。欲しいものはあるか？」

「一つ……あるのだけれど」

ためらいがちに、少女は言った。

「何だ」

何度かためらった後、顔を上げ、思い切るように少女は言った。

「薔薇が欲しいの。赤い薔薇が。一本で良いわ。もしあれば、いただけないかしら」

氷玉は驚いた顔になった。

「見るのがつらいのではなかったか」

「ええ。でも……今ならまっすぐ、正面から見る事ができる気がするの。だから。見なければいけないの、わたし。そうしたら……それができたら。色々な事が動き出すような気がするわ。ずっと止まっていたもの。わたしの中で冷えて固く凝り、ずっと……氷のようになつて溶けなかったものが」

その表情に見とれる。その誇り高さが愛しい。繊細で、しなやか

な強さを持つ彼の小さな花。

「では次に会う時には、最高の薔薇を贈ろう。そなたのように強く、美しい赤い薔薇を」

「ユーレイリアよ」

少女が言った。

「わたしの名前。本当は、ユーレイリアと言うの」

心臓が、はねた。

「名を……わたしに」

呆然として言うと、少女は不安げな顔になった。

「闇魔族は名前を呼び合う事はないと聞いたけれど。これは礼儀から外れているかしら？ ガイリスにも色々教えてもらったけれど、良くわからなかったの。でも確か、初めて会った時にはわたし、ユーラと名乗ったから」

「ああ。だが、あれは……」

氷玉は何と言うべきか、惑った。彼から名を明かし、明かされた者がその名を受け入れるという意味で、変則的ではあるがあの時の会話は契約の形になっていた。少女が主人であり、氷玉が従うと言う。

だが、今のこれは。

「なぜ、わたしに名を明かす？」

混乱しながら言うと、「なぜかしら」と少女は笑った。

「あなたには知っておいて欲しいと思ったの。軟膏の足しぐらいにはなるかな、とも思っただけ。あなたが眠っている間、ずっと側にはいてあげられない。でもわたしの名前を覚えていたら、寂しくないでしょう？」

激しい独占欲が沸き起こり、氷玉は息が詰まりそうになった。抱きしめたい。自分だけのものにしたい。彼女の名を呼んで。

名を、呼んで……。

手を伸ばし、壊れ物を扱うかのように少女に触れる。そのまま彼

女を腕の中に捕らえると、氷玉は彼女の肩に頭をもたせかけた。

「氷玉？　気分が悪いの？」

驚いて硬直した少女だが、彼が震えているのに気づくとそう言った。腕にそつと触れる感触がした。

「そなたは無防備すぎる、わが姫よ」

そのままの姿勢で彼は言った。

「われらは魔力を持つ種族。名を捕らえ、相手を縛る。そのような相手に直接名を告げるなど、危険極まりない」

呼びたい。呼ぶ事で縛りたい。告げられた名を使って、彼女を支配してしまいたい。

「あなたはそんな事はしないわ」

そんな声が聞こえ、氷玉は微かに笑った。自分の胸の内を彼女が知れば、どんな顔をするか。

「わたしとて揺れる事はあるのだぞ。頼むゆえ、わたしを増長させる真似は控えて欲しい。名を告げてはならぬ。わたしにも、他のどの貴族にも。あまりにも危険すぎる」

顔を上げないまま、彼は言った。ささやくように。

「さもないとわたしは、そなたの名を知った相手を一人ずつ、殺さねばならなくなる。わたし自身も含めた全てを」

* * *

月牙伯爵領に新たななる聖者——癒し手が現れたという知らせは、ほどなくして大陸中に広まった。

彼女の名は、ユーレイリア。

やがて各地から、薬師や医師が彼女の元に集まるようになる。彼らは村を作り、共に生活し、知識と知恵を、技術を磨き、そうして再び大陸中に散って行った。

後にこの時代は、夜明けの兆しと呼ばれるようになる。
それは闇魔族の衰退が始まった時代。

人が世界に向けて新たな一歩を踏み出す、兆しが現れた時代であった。

了

8・夜明け前（後書き）

終わりました。

長々とお付き合い、ありがとうございました。感想などいただけると励みになりますので、どうぞよろしく！

以下に、この小説を書く際に参考にした文献をあげておきます。絶版のものもありますが、興味があればありましたら、図書館などで探してみてください。

参考／

ジョン・キーツ（John Keats）「夜鳴鶯の賦（Ode to a Nightingale）」

「ハーブの写真図鑑」日本ヴォーグ社

「ファラオの秘薬・古代エジプト植物史」リズ・マニカ著・八坂書房

「図説イギリス手作りの生活誌・伝統ある道具と暮らし」

ジョン・セイモア著・東洋書林

「メッセゲ氏の薬草療法」モリス・メッセゲ著・自然の友社 他

それではみなさま、メリークリスマス！ あんどハッピーニューイヤー！ 良いお年をお迎え下さい（＾o＾）／

登場人物紹介&世界設定（前書き）

今さらですが。

登場人物紹介&世界設定

登場人物プロフィール

第一部終了時点での登場人物の設定です。

ユーラ（ユーレイリア）……栗色の髪と榛はしばみの瞳の癒し手の少女。歌の力によってあらゆる傷を癒す。治療師や医師とは違い、異能力による癒しを行う。人族の間では『聖者』と呼ばれる。

流れの民の中で暮らしていたが、家族であつた彼らを惨殺され、そのトラウマから能力を封じた状態になった。氷玉との出会いで癒し手としての能力を取り戻す。

長らく能力が使えない状態だったため、本人は薬師くすりしと名乗ることが多い。

氷玉（月牙伯爵）……銀の髪に紅玉の瞳、二十代後半の姿を持つ闇魔族。字は『銀月』。月牙一族の当主。年齢は三百ほどで、闇魔族としては若い。百歳そこそこの己の父親を倒し、一族当主の座に就いた。その偉業から、『銀の闇王』の称号を贈られている。

ユーラにひざまずき、自ら名乗ることで恭順の意を示した。

紫忌（白男爵）……白髪に紫の瞳、日に焼けた肌の、氷玉の異母弟。『夕闇』の字を持つ。年齢は百五十ほど。母親が人族だったため、日中も動くことができる。魔力は高いが、肉体がその魔力に耐えられないため、闇魔族としての力は使えない。半端者として、貴族の間では蔑まれていた。

瘦身である闇魔族には珍しく、たくましい体つきをしている。普段は髪を染めて、人族の傭兵をしている。人族としての名はローク。

ガイリス……ユーラが命を救った半獣族の少年。半獣族としては能力が低く、人族とほとんど変わらない。彼女に従い、身の回りの世話をしている。

イリリア……紫忌に従っていた半獣族の女性。魔力、武力共に高いランクにあった。ユーラを庇って半死の状態になり、現在も意識が戻らない。

アルシナ……紫忌に従っている半獣族の女性。武力に重きを置いているが、魔力もそこそこ高い。

グロフ……氷玉の配下の半獣族。兵士のまとめ役のような事をしている。

エメラダ……氷玉の配下の半獣族。『氷のエメラダ』の異名を持つ。

ロチエフ……氷玉の配下の半獣族。『炎のロチエフ』の異名を持つ。

アロン……氷玉の配下の水の民。図書の長。

グウエン……アロンの孫。水の民の若者。

青雅^{せいが}……闇魔族の騎士。蒼炎の配下であったが、当主に反旗を翻した主君を見限り、紫忌に忠誠を誓った。

雪雅^{せつが}（准男爵）……闇魔族の貴族。青雅とは血筋がほぼ同じ。蒼炎が乱を起こした折り、貴族の矜持から彼に味方したが、心情的には氷玉の側に立ちたいと願っていた。最終的に、我を忘れた氷玉を助ける為に尽力した。

氷玉より『六花』の字を与えられている。

蒼華（氷刃男爵）……氷玉の叔母。字は『氷魅』。当主の座を狙い、機会をうかがっている。

蒼炎（青闇男爵）……氷玉の叔父。字は『綺羅月』。氷玉に対して戦を仕掛け、倒された。

蒼牙……氷玉の父。先代月牙伯爵。氷玉に倒された。字は『禍月』。

蒼禍……氷玉の祖父。蒼炎と蒼華の父。字は『雪月』。蒼牙に倒された。詩歌を愛する妙な闇魔族であつたらしい。

彩雅（先代牙子爵）……氷玉の異母姉。字は『血醉』。氷玉が当主の座についた折り、戦を仕掛けて逆に討たれた。

紅蓮侯爵……月牙領の隣に位置する領の支配者。『紅の闇王』の異名を持つ。千年近く生きている。まだ名前のみしか出てきていない。

火影男爵……紅蓮侯爵と、先代牙子爵、彩雅との間に生まれた娘。氷玉にとっては姪に当たるが、氷玉より年上。母親に似て、残虐な性質を持つ。まだ登場していない。

世界設定

アリエントス大陸

闇魔族に支配される大陸。人族、半獣族、魔族が住む。武族はほとんどが追放、あるいは滅ぼされた。

魔族

魔力を持つ種族。頂点に立つのが闇魔族で、上位魔族と呼ばれる。攻撃的な魔力を持つ、昼の世界では生きられない種族である。高い自己修復能力も備わっており、大陸においては、ほぼ無敵である。戦う事や滅びる事を至上のものとしている。己のみを抛り所とする種族である為、家族愛などはほとんど理解できない。

闇魔族の他には、水の民、地の民、風の民、炎の民がいて、これは下位魔族と呼ばれる。意識的には人族に近く、家族愛や同胞愛などを持っている。

魔族はいずれも寿命が長く、下位の魔族は三百年ほど生きる。闇魔族は本来ならば千年以上生きることができるとは、好戦的な種族であるため、ほとんどが五百歳ほどで死亡する。

上位魔族と下位魔族では、寿命や魔力の質が違いため、互いに別の種族と認識している。

半獣族

妖獣や魔獣と融合することで、能力を得る種族。集団で生活し、強いものに従う本能を持っている。融合した妖獣や魔獣の能力によって、寿命が変化する。能力の高い者は、軽く二、三百年は生きる。

武族

守護精霊に祈願し、気の力を高める事で、驚異的な能力を発揮する種族。人族の中から派生した事を公に認めている種族でもある。半獣族や魔族とも渡り合える能力者もいた為、アリエンテス大陸においては迫害された。今ではほとんど表に出ない。

人族

全ての種族の元になった種族。何の能力も持たない為、大陸では最下層の種族とされる。

闇魔族の親子関係

闇魔族において、親子とは、殺し合いをする相手の意味合いしかない。その為、『子をなす』という言葉は、『戦う相手を育て始めた』という意味になる。また、子をなす権利を持つのは、男爵位以上の者に限られる。

他種族の者が闇魔族の子を身ごもった場合、通常は反逆を企んだと見なされる。その場合、母子共に殺される。

子を育てる事は、闇魔族の貴族にとって、この上ない趣味であり、楽しみでもある。己を倒せるよう、多くの子の能力を磨き、芸術品を作り上げるかのように磨き上げる。しかし、手間隙をかけて育てた相手であつたとしても、意に染まない育ち方をしたもの、能力の伸びなかったものは、廃棄される。何十人もの子どもを作り、その全てを廃棄した闇魔族もいる。

子どもの方も、親を倒すべく、己の力を磨く。ある程度の年齢に達すると、見どころのあつた者は、親から名を一字与えられる。与えられなかったものは淘汰される。

騎士の位は最も低い身分で、この身分を与えられた闇魔族の子どもは、己の仕える主君（親の事もある）の元で能力を磨き、戦い合つて（殺し合つて）上の位階に昇ろうとする。強い能力を示した者は身分を上げてゆく。

男爵位になると、当主に挑む資格があると見なされる。

月牙一族の場合、当主の身分が伯爵である為、『牙子爵』の位が次期当主候補、つまり当主に挑める最優先の位になる。

互いに殺し合う事でしか、己の存在意義を見いだせない種族といえる。

登場人物紹介&世界設定（後書き）

第一部に登場し、かつ、第二部以降にかかわってくるだろう人物を表記しました。こうしてみると、多いなあ…。

なお、日記と化している活動報告に、なろう登録一周年記念SSをアップしました。2009年11月19日、「リハビリ」のタイトル

作者名か、目次下にある、作者のマイページから、活動報告の所を探して下さい。

『永き夜の大陸』キャラで小話。

お遊びです。本編とは全く関係ありませんので、読みに行かれる方は、「これは別物。これは別物」と、呪文のように唱えてからお読み下さい

番外編 ある初夏の日のできごと。(前書き)

続きじゃなくてすみません。アトリエゆずはらに置いていた拍手小話です。

番外編 ある初夏の日のできごと

春分の祭りが過ぎて、初夏の緑の祭りも終わった。

「明日は、森に薬草を摘みに行くわ。畑や家のこと、頼めるかしら」

夜、ユーラはガイリスに声をかけた。

「はい、ですが……森はまだ、危ないのじゃ？」

「そんなに奥には入らないわ。日の当たる所じゃないと、見つからないものが多いもの。」

スミレはまだ咲いているかしら。うつぼ草を結構使ってしまったから、あれば良いけど……」

「ご主人さま。何だったら、一日のんびりして来て下さい。春先に村で流行り病があつて、その後も体調を崩した村人に、薬を作り続けていたでしょう。」

ずっと働きづめでしたし……ちよつとしたお弁当を作りますよ」

「でも……」

「大丈夫ですよ。俺もちよつとは、薬草に詳しくなりました。誰か来ても、間違えずに渡せます」

ユーラはガイリスを見つめ、ほほ笑んだ。

「そうね。がんばってたものね、ガイリス。わかったわ。昼過ぎまで、のんびりさせてもらう」

* * *

「シダと、うつぼ草と……あ、いちご！」

ぱつと顔を輝かせ、ユーラは赤い実をつまんだ。

「ふふ、美味しい」

「で、俺たち何をしてるのよ……」

少し離れた所では、紫忌がその様子を眺めていた。

「決まっています。見守っているんです」

樹の影に隠れながら、ガイリスがきつぱりと言う。

「こんなことするんなら、堂々と一緒に行きやあ良かったらうに」

「それだとご主人さまが、気を使ってしまされるじゃないですか…

…あ、笑った。自然な笑顔！ すばらしい！」

「主人バカ……いや、従者バカか、この場合」

げんなりした顔で紫忌が言う。たまたま訪ねたところをとっつか
まっつて、問答無用で連れて来られた。あれ、俺って確か、この小僧
より高位じゃなかったっけ？

ちなみにユーラの家では今、アルシナが留守番をしている。

薬をもらいに来た村人はみな、半獣族の女戦士にぎろりと睨まれ、
おびえながら逃げ帰った。

「おかわいらしいです、ご主人さま……！」

いちごを食べるユーラに、ガイリスが悶えている。

「俺が来る意味あるのか？」

「妖獣が出たらお願いします」

「あゝ、おまえじゃ役に立たないしな……まあ良いけど」

そう言いざま、紫忌は短剣を投げた。怪しげな動きをしていた茂みが沈黙する。

「さすがです、男爵さま」

「おまえに言われても、うれしくねえよ」

むつつりしながら、抜いた剣を一閃する。忍び寄ろうとしていた妖獣が、半分になってどさりと落ちた。

「妖獣よけの香は持たせてるんだよな？」

「はい、一応」

「それでも寄って来るって何なのよ。お嬢ちゃんの力増してねえ？
それ嗅ぎつけてんじゃないの、こいつら？」

どさ。がす。ぼくつ。

最後のぼくつ、は、手で殴った音だ。

「伯爵さまとの事があってから、能力が強くなったみたいです」

「そうかよ……、向こうに行ってくるわ」

ざんざか妖獣を倒しつつ、紫忌はユーラの安全を律儀に守った。

* * *

「ほう。そのような休みが取れたのか」

夜、やってきた氷玉は、ユーラから話を聞いて微笑んだ。

「のんびりできたわ。ガイリスのお弁当も美味しかったし」

うれしげに話すユーラ。

「妖獣が最近、出るって聞いていたから、緊張はしたのだけれど」

「あゝ、当分は安全よ。あの森」

紫忌が言った。

「そうなの？」

「そうですね。妖獣よけの香もありますし」

ガイリスが言う。

「あ、わたし、やらなきゃならない作業があるの。昼間のんびりしちゃったから……」

「良い。そろそろ退出しよう」

そう言つと氷玉は紫忌を連れ、ユーラの家を辞した。

「……で？」

「ちゃんと退治しました。しまくりました。くたびれましたよ、俺は」

外に出てから目線で詳しく話せと言われた紫忌は、肩をすくめて答えた。

「あの辺り一帯のそれらしい巢は、念の為全部つぶしときましたよ」
「わたしが昼間、動けるのならば、姫の為に働けたのだから」

どこか残念そうな顔をして、氷玉が言う。紫忌は息をついた。

「兄上の代わりは、俺がちゃんととききましたから。にしても、小僧が使えない、使えない。

お嬢ちゃんが笑つたーとか何とか言つて、ひたすら見てるだけで

「……」
「笑つた？」

ひやり。

なぜか周囲の気温が下がった。

「え、あ、ええ、兄上。のんびりできたみたいで、楽しそうに笑っ

「……」

「そのほつら、その笑顔を見たのか……？」

「え、」

「くつろいでいる姫の、貴重な笑顔を……そのほつら、見た、のか？」

「じいじいじい」

何かが氷玉の背後から嘖き上がっている。

「や、見たと言つかですね？ 俺は、その、退治をしていますが？」

「見たのだな。わたしは、昼間は動けない。

くつろいでいる姫の姿など、見たくとも見れないと言つのに……」

「いやだから兄上……うをえ！？ こ、凍ってます凍ってますいんなものが、お、俺を見ないでええええええええええ！？」

翌日。

家の周囲になぜか雪や氷が積もっているのに、首をかしげるユーラがいた。

「変ね？ また寒さがぶり返したのかしら」

「あ……」

優れた聴力で、昨夜の騒ぎに気づいていたガイリスは、遠いまなざしになった。

「男爵さまが何とか逃げられて、良かったですよ」

「紫忌が？ ああ。半分は人間ですもの、寒いと困るわよね。氷玉はどうだったのかしら」

「伯爵さまなら大丈夫です」

「そう？」

* * *

「うおおおお、凍りつくかと思ったああああ」

「ご無事で何よりです、わが君。すばらしい逃げ足でした」

「ちょ、青雅！ もうちょっといたわってくれよ！ 俺は兄上のために、がんばって森の獣退治したんだぞ。」

「なのにひどくないか、この仕打ち！」

「われらは独占欲の強い種族にございますれば。わが君のうかつな言動が、全ての原因かと」

「がんばったのに。俺、がんばったのに！」

紫忌が一人で気の毒だった、という日常のひとつまでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5929f/>

永き夜の大陸 ～光の姫 闇の王～

2011年7月17日11時41分発行